早乙女貢
権謀
下
文春文庫

文春文庫

権謀

(下)

早乙女貢

権謀(下)

早乙女貢

文庫

文春文庫

権謀

(下)

早乙女貢

文藝春秋

権謀（下）

公方討ち

誰が言いだした言葉か。

その後、五畿内にこの言葉が流れた。

公方討ち——。

その後とは、この永禄八年のもっとも歴史的な夜の雨に洛中が閉ざされて以後のことである。

松永弾正と北ノ方が、白昼の快楽にうつつとなってより十日ほど経って、もうすっかり梅雨に入っていた。

五月十九日の夕刻——

このところ降りみ降らずみだった雨が、朝から洛外洛中、けむるように空に舞い、竹藪の色あざやかに濡らしていた。

この山崎の野を蓑笠に身を包んだ武士が、三人五人と連れだって北へのぼっていた。

幾通りもの道を、菰包みの刀や槍をかかえ、あるいは騎馬で、あるいは徒士でのぼってゆく。

ばらばらにゆくから目立たない。

雨も幸いした。時にはげしく降りしぶくと、一町先は白霞の中に消える。

朝方から三々五々、京へ入ってきた武士たちの一部が、新御所を訪れたのは、午を一刻ほどまわったころである。

「訴願がございまする」

取り次ぎの者に申し出た。

新御所は、この雨中にも、工匠が入って、出来るかぎりに作事を進めている。

その手斧をつかう音、槌の音などがひびき、工匠らの大きな声で話し合う声がそこここでし、なんとなくざわめいていた。

「訴願だと」

義輝の近習、進士美作守が眉をひそめた。

「はい、三好御家中の」

「誰だ」

「林久太夫どのとか」

「林？」

聞いたような記憶がある。が、顔は思いだせない。

ともあれ、三好家の重臣とあれば、応接しないわけにはゆかない。義輝はそのとき室内で小弓遊びに戯れていた。

弦が一尺ばかりの小さなものだ。矢もまた、それにふさわしく短い。矢尻には鈴がついている。

壁代に的をかけて、坐ったまま射るのである。

「的に当たらぬ者は舞いを舞わねばならぬぞ」

と、義輝が興がって、

「女は男舞い、男は女舞いをするのじゃ」

小姓たちは頭を抱えて、

「女舞いは御用捨を」

「ならぬ。しっかり狙え」

と、上機嫌だった。

こんなときに、取り次いでも、一蹴されるだけだ。

（ともかく、受けとって）

と、美作守は表へ出ていった。

林久太夫は腹巻きをつけ、陣羽織姿で、控えていた。

「願いの儀あって参上仕りました」

と久太夫は言い、訴状をとり出した。

「詳しくしたためてござりまするが、先般、御下命の課役、御宥免願い上げたく……」

その話の間に、武士たちが御所へ入ってくる。

林久太夫は幾通りもの訴状を持参していた。

これが時間稼ぎの巧妙な方法だった。

昼間から申し出て、夜に至る。夜陰になって内と外から一せいに鬨をあげようというのだ。

こうした襲撃の方法には二タ通りある。

大軍でもって、一気に押し寄せるか、ばらばらに散開、前後して接近し、時刻を合わせて、どっと乱入するか、である。

最初の策をとるには、三好方はまとまりが悪い。

三好家の勢力は、山城、摂津、河内、和泉、大和、四国の阿淡讃にまたがっている。
これを一カ所に集めるとすればいやでも目立つ。
三人衆と松永弾正と四者の本城だけでも、大和の多聞城に弾正がおり、摂津の芥川城には三好日向守が、淀の城には岩成主税助、三好下野守政康は大坂の中島城にいた。
その他被官大名小名豪族らは五畿内にちらばっている。これが一時に京へ目ざしてくれば、いやでも目立つ。
だから北上するにしても、その居所から、北へはむかわず、東あるいは西へゆくと見せて、
「備中へまいる」
「美濃伊勢で戦さがある」
などと、聞かれれば答え、あるいは辻などで、聞こえよがしに話して、注意を京からそらした。
万一に備えて、
〃耳〃
の組織はできているし、注進して恩賞にあずかろうとする者も多い。
そうした情報網には細心の注意を払わねばならなかった。
こうして三々五々、京へ入ってきたのだ。京には、大名らの控え屋敷がある。そこへ入る者、旅宿に休息する者、二条新御所に近いあたりを徘徊して〃時刻〃を待つ者。
小雨も幸いしたし、新御所はまだ造営半ばで塀など完璧ではないし、建材などが仮屋や道ばたに山盛りされている。そのかげへ入るだけでも数人ずつ、身を隠せる。
公事だというので進士美作守が応接してみると、林久太夫は身分を名乗って、
「新御所の造営、進捗の様子にて恐悦至極に存じまする。いつごろ竣工に相成りまするか」

「左様、あと半月もあればと思うが」
「それは祝着。新御所にて月見の宴となればさぞかしでございましょう。秋まで待たでも、栗名月には……」
「うむ」
進士美作守はいらいらしていた。
(早く用件をいわぬか。何しに来たのだ)
「不足の用材でもあれば御申し付け下され、先般領内にて榎の瘤多きおもしろきものを見つけましたるが、いずこにかお使いなされば、一段と興あり……」
「訴願の件は」
美作守は眉をよせて促した。
「おお、これは御無礼を。われらより献上の種々は御役に立てばと念願いたしておるのでござるが、領民どもが」
「……」
「領民どもが、ちと……」
林久太夫は思い入れをした。
深刻らしく、首をかしげ、その実、戸外の雨の音に耳を傾け、日暮れの早さを祈っていた。
「領民がなんとなされた」
進士美作守はいらだちを、こらえて、故意に粘い声で言った。
「棟別銭のことか」
相手がそう言いだすのを待っていたのだ。

林久太夫は眼をあげて、
「左様……」と、眉をしかめてみせた。
「困ったことでござる」
「なんとした？　申されよ」
「棟別銭は負いかねる、なんせ、数年来の不作で、麦もろくに食えぬ有様ゆえ、戸別に金二歩はとてもに……」
「いまさら、左様なことを！」
「庄屋どもより歎願して参ったので、何度かはねつけましたるが」
林久太夫は訴状をずいと差し出して、
「御被見下さりましょう。公方にもよしなに御取り次ぎ下されて、何分の御沙汰を待ちまする」
そんなことは、大名たちが配慮し裁決すればよいことだ。一々、将軍のところへ持ってこられてはたまらない。
とはいうものの、こうして、ちゃんと公事訴訟の形式を踏んでこられては、無下に突っかえすこともできない。
言下に、
「ともかく、拝見する」
（どうせ突っ返すのだ）
と、匂わせて、美作守は、訴状というより歎願状だが、受け取って奥へ入った。
村々の村役肝煎から庄屋の連署で、歎願の趣意がめんめんとつづってある。
さっと眼を通してから、美作守は将軍の御座所へ来た。

さかんに笑い声が聞こえる。侍女たちが、きゃっきゃっと嬌声をあげて、座敷弓に興じているのだ。
美作守は意を通じて、訴願に参った者がというと、
「後にせよ」
と、義輝は振りかえりもせずに言った。
「さ、それが、三好殿の家中にてあれば、何分の」
「三好の？」
うるさげに、義輝は漸くふりかえって、
「何を申してきたのだ」
「賦課金のことにござる」
と、美作守は訴状を前へ出した。
義輝は手にとろうともしない。
「何だと申すのだ」
「連年の不作にて、とてもに……」
みんなまで聞かずに、
「要るものは、要るのだ。集めさせよ」
「――そのように申し伝えます」
引き退るしかなかった。回廊へ出てしばし、美作守は立ち止まり、雨の庭を眺めやった。
断わるにしても、あまりに早すぎると思ったのである。
その庭樹のかなたに、何やら動いたような気がした。

(はて、あれは?……)

庭樹のかなたで、動いた影がある。進士美作守は凝っと眼をこらしたが、その影らしく感じたのは、それきりで、あと何も見えない。

(眼のあやまりか……)

造営半ばの新御所だ。

庭にも寝殿の周辺にも、まだ片付けきらぬものがある。雨がそぼ降っていて、もののかたちをあいまいにぼかしている。

(どうかしている)

進士美作守は落ち着きを失っている自分を嗤った。訴願者と公方義輝の間に立って、まごまごしている自分の立場が妙なものに思えた。

(ただ取り次げばいいのだ、おれが苦慮することはない)

事務的に扱えばいい。

そう思いながら、訴状を義輝が読んだにふさわしい時間を、回廊に突ったったまま稼いでいるのが、馬鹿馬鹿しくなった。

(なんのために、おれがこんなことまで考えねばならんのか)

訴願状を持参した林久太夫なる者が三好家の侍であり、足利公方家とは、単に主従という関係で割り切れない微妙なものがある。

その現状を維持するための苦衷だろうか。

訴状を瞥見もせぬ義輝の傲慢な態度を、近習である自分が、糊塗しようとしている。

(御家のためを思うてか)

義輝はそこまで、見透してくれるだろうか。

義輝の態度をそのまま、三好家に伝えたところで、自分が落度とされることはない。三好一族との仲が不仲になったとしても、それは義輝が招いたことではないか。

そう割り切ることが出来ぬ自分がうとましかった。

(もう、よかろう)

美作守は表へ出ていった。

林久太夫らは具足姿で胡坐していたが、坐りなおした。

「公方の御機嫌は如何に」

「訴願はお聞き届けにならぬ」

言い難いだけに、ずばりと言った。

すると、意外にも林久太夫はあっさりとうなずいている。

「左様でござるか、それは怨めしい。領民どもが、さぞ泣くことであろう」

「……………」

「棟別銭の件はやむを得ぬわけでござるのう」

「御上納を奨めてもらわねば」

「左様に庄屋どもに申し聞かせましょう」

これで用件は済んだはずだった。

が、林久太夫は腰をあげようとしない。郎党らもそうだった。林は突っ返されたものをおさめると、また別の訴状をとり出した。

「賦課金のことは承知いたしました。ついては、課役の件でござるが、このほうも、御下命通り

には人数差し出し困難ということで、訴願仕るよう、この通りに……」

（なんじゃ、またか）

進士美作守は言葉が出なかった。

もう、戸外は大分黄昏れていた。

（なぜ、一緒に差し出さなかったのか）

賦課金宥免を願い出て、それが却下されると、こんどは課役御宥免を、と提出する。

一度に出してくれれば、

（断わるのも一度で済むものを）

進士美作守は鼻白んだ。

いやな思いを二度くりかえさせる愚かなやりかただ。

（気が利かぬ……）

いなか侍め、と思った。

それがかれらの目的だとは気のつかぬ美作守であった。もう大分時間が経っている。また、義輝にお伺いにゆかねばならぬ。これとても、一蹴されるのはわかっていた。が、だからといって、義輝の耳に入れずに、一存で突っ返すわけにはいかない。

（伺いをたてたようなふりをして、突っ返すか……）

それも出来ない、おのれの性格に、美作守は腹立たしい気持だった。

表から奥へゆく間に、ふと、異様なことに気がついた。

表のあたり、馬寄せや供待ちのあたりに、小具足の武士たちの姿が、ばかに目だつ。

林の家来たちだろうか。軒下にいる者、簑笠をつけて、行ったり来たりしている者。さっきから思うと数えたわけではないが、妙に増えている感じだった。

造営半ばだからといって、門番がいないわけではない。

その目の前を、

「三好家のものでござる」

といっては、三人五人と入ってゆく。

入ったと思うと、所用があって、と、出てゆく者がある。暫くしてその男らしい侍が足早にもどってゆく。

また出てゆく。馬寄せのところで下人どもを叱りつけたり指図したり、出たり入ったりで、一体、何人入ったのか何人出ていったのかわからない。

十人入って二、三人出てゆく。また五、六人入ってくる、という按配で、その間に、門番も交替したり、やがて、退出の時刻になって御所侍も、旧御所や町屋住いの者は帰ってゆく。化粧した女や、肩こらぬ酒がわが家には待っているのだ。

御所侍たちのうちで、この新御所内に仮屋を給わっている者、宿直の者など、残っている侍の数は二、三十人にすぎない。小者や下人などが、ほぼ同じくらい。

あとは義輝の一族と女たち。

庭前を徘徊する侍たちの姿は、遠目に御所侍か三好衆かの区別もつき難くなっている。

雨と黄昏と――。

それはまた、別の侵入者にも幸いしたのである。

進士美作守が、

（影が？）

と感じた築山の樹々の重なりに身をひそめた者がある。
眼のあやまりではなかったのだ。
二人。
「早よ暗くならんと、仕事がやり辛いねや」
ぼやいた声は、伊予海賊の団六。草の間から城之介も顔を出した。
城之介は眼を光らした。
（ここに、夕月がいるのか？）
予想したことはある。が、それが現実となると、耳を疑った。
（将軍の想い女になっているなんて……そんなことがあるだろうか）
小侍従が嘘を吐いているのではないかと思った。人違いではないか、とまで考えた。
が、深草辺で拾ったといい、日数もあうし、夕月という名前まで揃えば、もう、疑う余地はなかった。
（夕月が……）
あの美貌なら、そんなこともあるかもしれない。
とすると、
〈城之介なる者……〉
と捜索は、むしろ将軍の好意からでたものではなかったか。
高札や、役人の態度を思い起こすと、そのような気もしてくる。
（おれは誤解していたらしい）
逃げだすことはなかったのだ。

だが、今となっては——。
あの連行の役人たちを団六の一味が斬ってしまった。名実ともに追われる身になっている。団六らの仕わざといっても通らない。
連累にされてしまったわけだ。
（しかたがない）
団六と小侍従の交渉を、城之介は利用しようと思いついたのである。
「夕月を殺してくれれば、砂金をもっとあげます」
と、小侍従は言った。
団六は喜んで引き受けたのだ。
城之介も表面、賛同したような顔で新御所に忍びこんできたのである。
むろんかれらには、三好衆の野望と行動はわからない。ただ、入る前も、入ってきてからも、
（案外侍が多いわいの、こりゃ、チトやり難いぞなもし）
団六が快活な顔をしかめた。
ざわついている。このざわざわしているのを利用するのも一法であろうが、
（ひとつ間違うと、首がとぶぞな、なんせ、公方の想い女じゃ）
そういいながら、砂金には食指が動いている。
城之介のほうは、夕月をさらって逃げるつもりだから、砂金などどうでもいい。
団六にも、いざというときまで素知らぬふりをしているつもりだった。
「——夕月は、どこにいるだろうか」
そう言って、ひやりとした。

せいぜい冷たく言ったつもりだが、語感から、親しみを感じられるかもしれない。
だが、鈍い団六はそこまで気がまわらなかったらしく、
「想い女なら、寝所にきまっているぞな」
「……」
「公方がなもし、がいに惚れちょるちゅうけん。夜毎、舐めるように可愛がって……」
「やめろ」
聞くに耐えなかった。城之介の語気はあまりにもはげしく、団六は口をあけたまま、ぽかんとした。
あわてて、城之介は言った。
「済まぬ。おれは、そんな話はきらいだ。さあ、ゆくか」

梅雨の季節を待っていたわけではない。時勢の変化が偶然、その季に、クライマックスを齎したといえる。
松永弾正の生涯から眺めれば、
〝ついていた〟
といえよう。
なが雨は夜を早め、時刻の錯覚を起こさせるのだ。
御所を閉ざすのは酉ノ刻(后六時)である。訴訟など公事は本来、申ノ刻(后四時)までにしまう。
その半刻後には、屋形侍は退出する。
ぐずぐずと訴願を長引かせているうちに、梅雨空は早く昏くなり、暮六つにならぬうちに、人

の顔もわからぬほどになっていた。
篝火を焚いても、雨がいたずらに松脂の臭いと煙をたなびかせるばかりで、勢いよく燃えあがらない。
あぶら松明が幾つもかけられ、新御所の闇を少しでもうすめようとしているころ——。
二条の通りを、百ばかりの騎馬が黒い一陣の風のように走っていた。
すでに暮六つ——酉ノ刻に近い。
そのころには、京の三方から侵入していた軍勢が、大路小路の要衝をひしひしと固めていた。
すなわち、三本木東洞院に三好康長が四百五十の士卒をもって布陣し、西は西大路に三百五十を率いて三好政康、腹帯の地蔵堂を背にして守る。北は室町辺に岩成主税助が兵を布いた。勘解由(かげゆ)小路、桜馬場一円におびただしい人馬が群れた。
そして、松永弾正の持ち場は南であった。烏丸春日表に五百の兵がいまやおそしと、合図を待っている。
林久太夫とその郎党らが御所から退出したのは、暮六ツの鐘の音を聞いてからである。
一行が御所から出る。ほとんど同時に、四方から鬨の声があがった。どろどろと馬蹄のひびきが、四方に潮騒を巻き起こし、大津波の崩れ寄せるほど地鳴りがした。
わーっ、
わーっ、
どよめきが殺気をこめて、新御所に向かって雪崩れてゆく。
その凄まじい人馬の声と地ひびきは、洛中を突如として、地獄の惨劇にひきこんだのだ。
「謀叛だ!」

「得物をとれ、侍どもを呼び集めよ」
御所内は騒然となった。
そのときまで、まだ義輝は弓遊びに興じていたのである。
「何ごとじゃ」
と眉根を寄せて、
「工匠どもが、いさかいでも起こしてか、叱りおけ」
小姓の大館岩千代が拝跪して出た。
とたんに、だだだっと夜気をひき裂いて、銃声が轟いた。
その鉄砲が、南蛮屋十兵衛が平戸から買ってきた、れいの舶載品百挺だとは、誰も知らぬ。
松永弾正だけが得意の絶頂にあった。
凄絶というか、天地も崩れんばかりの轟音は、かれをして、
〝天下人〟
へ押し上げる地神の歓呼だった。
新御所の前面に押し寄せるや、一せい射撃の弾丸をぶち込んだのである。
それは、邸内に隠れひそんだ連中の呼応を促すものであった。
材木の蔭や、樹蔭、あるいは仮屋の背後、縁ノ下などにひそんでいた武士たちが、簑笠をはねのけ、槍や長巻をひねって立ち上った。
「人非人公方を討て」
「暴戻の将軍を殺せ」
口々に喚きたて、屋形におどりこんだ。

そうした叫びには、どれほどの意味も真実もなかった。そのことはかれら自身がもっともよく知っていた。
おのれの属する集団の目的に従って、刀槍をふるうための、昂奮剤であり、勇気の欠如を補うためであり、かすかに残されている人間性を自らむしりとり、捨て去るための咆哮にすぎなかった。
銃声や馬蹄のひびきや鯨波は、そうした野獣の血をかきたてるためにはもっともふさわしく、また個々の誇張した言葉が、集合されると、血を呼ぶ腥気の渦となり、洛中洛外、凄切たる飈風の席捲するところとなった。
「殺せ、殺せ！」
「将軍もくそもあるか」
「次は三好の天下だ」
「御所を焼いてしまえ、屋形侍はみな殺しだ」
誰もが、牛殺しの眼になっていた。
歯を剝き、臭い息を吐き、眼をぎらつかせ、雪崩れこんでいった。
この突然の、仕組まれた叛乱の火の手に、足利御所の驚愕はいうまでもない。
天地が崩壊したかとばかりの驚きが、
「素破ッ、謀叛ぞ」
「太刀をとれ、弓をもて」
当番の面々は、一色淡路守、同又三郎秋成、有馬源次郎、上野兵部少輔輝清、同与八郎、結城主膳正、高伊予守師宣などであった。ただちに打物とって走り出る。
義輝も、くだらない遊びに飽きがきているところであった。

(児戯に類したことよな)
そのものうく疲れた眼が、夕月をとらえ、
(まだ、心がひらかぬか……)
いっそ力ずくでも抱いてしまったほうが、夕月のような女は喜ぶのではないか。
今宵こそは――そう思った矢先きの遠潮騒と、それにつづく天地をゆるがした銃声であった。
「――三好の軍勢が……」
十五歳の岩千代が真っ蒼になって、口をふるわせた。
「謀叛か？」
義輝は思わず盃をとり落とした。
義輝は、すばやく屋形侍の数を思った。
(三十人余り……男手は小姓老人加えても百にたりぬか)
鳩尾が氷のように冷えた。
三好衆が謀叛といえば、千や二千の軍勢は動員したにちがいない。
「計られました、公事にかこつけて、彼奴ら……」
と、進士美作守もいまさらのように、林久太夫の訴願のしようが、巧妙な順序で行なわれたことに地団駄踏む思いであった。
そのあいだにもう、表のほうではげしい太刀打ちがはじまっていた。
屋形侍たちは、具足をつけるひまもなかったのである。
さすがに、義輝は、数瞬の動揺の後に、落ち着きをとりもどしていた。
「見苦しき死にざますまいぞ」

死を覚悟した。最後まで立派に闘おう。
ただの殿上人将軍とは違うところを見せてくれる。
女たちが重代の鎧を持ちだした。酔いはさめていた。鎧を身にまとう義輝の手さばきにひるみも、昂ぶりもない。
かれの支度の時をかせぐために、屋形侍の多くは、平服のままで奇襲の軍勢を邀え討っている。
「女子供は足手まといじゃ、逃げよ」
と、義輝は言った。
侍女ばかりではない。母の慶寿院はじめ、北ノ方など上﨟とそれに仕える女たち、若くも老いた者もいる。
泣く者、叫ぶ者、気が狂ったかと思われる狼狽と恐怖のなかで、落ち着きを見せているのは、北ノ方と、夕月だった。
北ノ方のくそ落ち着いた態度は、ふと義輝の胸に疑心を沸かしたようである。
「――そちの思い通りになったようじゃの」
睨み据えて言った。
松永弾正との陰謀は知らない。ただ、北ノ方が、義輝への憎しみから、将軍の座を追われれば小気味よい、などと放言していたのが腰元から同朋衆に伝わり、耳に入っていたからだ。
北ノ方は、凝っと白い能面のような顔を向けたまま、低く澄んだ声で、これに応じた。
「御出陣を……お祈り申し上げまする」
「笑わぬのか」
「………」

「余のむくろを見てから笑うか。それもよかろう、余に一つの心残りがあるとすれば」
「……」
「そもじの肌が、雑兵どもに辱しめられるのを、見られぬことだ」
上様、と、板戸の外で声がした。
ふりかえると、夕月が袖の中に幾振りかの刀を抱えて坐っていた。
「いつぞやの山犬よりも、こたびの山犬どもは具足しておりまするほどに……」
刃こぼれを案じての思いつきであった。
「おお、よう気がついた」
義輝は心の底から喜びの声を洩らした。
幾振りもの刀を袖包みにして抱えてきた夕月を見ると、義輝の胸は感動でふるえた。
(あの夜の折りの、余の言葉をちゃんとおぼえていてくれたのだ)
冷たい妻とは、何というちがいだろう。
五摂家の筆頭、近衛稙家の姫に生まれた情のうすい北ノ方にくらべて、夕月は肌のまじわりもしていないのに、この危急の際に、義輝の身を思ってくれた。
百にたらぬ小勢を奇襲した十倍二十倍の敵の怒濤のような攻撃のさなかである。
所詮、逃れることがかなわねば、
(兵法将軍らしく……)
天っ晴れの働きに最期をお飾りなされませ、という気持であろう。
ほかの女たちが恐怖で気が転倒し、なすすべもなく、おろおろしているなかで気丈な、心の優しさを見せてくれた夕月に、

「忝ないぞ」
将軍たる身で、はじめてその言葉を洩らしている。
「来世であおう」
「はい……」
「もしも、いのちあらば、そもじを妻にしたい。夢じゃな、だが、この夢を抱いて、余は死ねる。余の死土産じゃ、夕月そもじだけは生き延びよ、なんとしてでも生き延びよ」
「いいえ、上様とともに」
「おう、腕のかぎり、太刀の折れるまで、切りまくってくれるわ」
莞爾として、大股に出てゆこうとした。
が、ふと思いなおしたように、
「筆墨を」
と命じ、下袖をひき切り、
「辞世をしたためる」
もう、刃を打ち合う音や、怒号が中門の外まで迫っていた。だが家にくつろいだばかりの屋形侍たちも何人かは馳せもどってきたのであろう。
「一色どの討死、結城主膳どの深傷にて落命なされてござる」
次々に報告がくるなかで、義輝は筆をとるや、
　さみだれは露か涙か時鳥(ほととぎす)
　　わが名をあげよ雲の上まで
と走り書きした。

「形見とせよ」
夕月へ渡すと、佩いた大太刀をぎらりと抜いた。
そのとき、意外なほど間近で銃声がし、中門を押さえていた下人たち数人が悲鳴をあげてのけぞるのが見えた。
槍や薙刀で突いていたのでは、埒あかぬと見たのであろう。乱射の効果があったと見るや、数人が、どっと体当たりをくれた。
一度、二度、三度――。
めりめりっと凄い音とともに破れ、勢いあまった武者が二人、転げこんだ。
ぱっと開いた屋形侍が、それに長槍を突きだす。俵を刺すように――穂先きがすべる。兜がはずれる。その首へ、拝み討ちの刀がひらめく――。
「ふえっ、とうとう中へ入りよったぞな」
これは杉の梢で高見の見物していた団六である。
（こりゃ大変なことになったぞなもし）
団六と城之介は、突如として襲いかかった三好の大軍に、出鼻をくじかれた恰好で、
「砂金どころかいな」
「夕月はどこだ」
「夕月どころかいな。まごまごしよったら、こっちゃの首が危ないけん」
「いや、尚更だ、夕月を……」
「夕月どころやないちゅうに」
団六は城之介の真意がわからない。

砂金だけが目的だから、夕月を殺すことなどどうでもよくなる。
「考えても見さらせやい、この新御所が襲われたのなら、前の御所のほうにも、軍勢が行っとるで」
「……」
「おとろしや、無理しよって、夕月殺してもよ、小侍従のところへ砂金もらいに去んでもよ、どがいなことになるかいな、おらも首にされるぞな」
団六の猪首が素ッ飛ぼうとかまわない。夕月を助けなければならぬ。
「飛んで火に入る夏の虫や、ともかく、按配を見とくこっちゃ。これで公方も終わりじゃろかい、ごむしんな（気の毒な）こっちゃけんど」
団六は引きとめる。様子を見るのと、巻き添えを食わぬために杉の木にのぼったのだ。
中門から雪崩れこんだ三好勢へ、義輝のまわりにいた侍たちが、
「理不尽者、退れ」
「推参なる下郎かな」
彦部雅楽頭清直、同弟孫四郎、高木右近将監などといういずれも名流名家の筋目の者たち、あるいは薙刀をふりまわし、あるいは打太刀ひっかついで立ち向かった。
二千という大軍と、新式武器たる鉄砲と――それだけでも屋形侍の度胆をぬいている。
あとからあとからと、新御所に押し寄せる軍勢は、もはや前衛のように濠に飛びこみ、塀をよじのぼる必要はなかった。
御所の門という門は打ち破られ雪崩れこむ軍勢をさえぎる者はいない。
むしろ、松永弾正など、
「控えよ、控えよ」

と、数をたのむあまり、寄手の同士討ちの危険さえ慮って、
「公方を逃さぬことだけ心せい、四方を固め、蟻一匹這いださせまいぞ」
寄手の一党は竹の葉を腰に差して合印にしている。夜だし、三好一族の寄せ集めでお互いに顔も知らぬ者が多い。
まことに、新御所にしてみれば、これは、雲霞のごとき大軍だったのである。
小林左京亮や河端左近大夫など武士らは大槍をふるって、叩きつけ、突き伏せ、ここを先途とふせいでいる。小姓の大館岩千代、畠山九郎らも十四、十五という若輩だったが、ともかく武士の端くれ、平時には、義輝の寵を容色で競っても、ことここに至れば、細腕に太刀握って、
「御馬前にこそ死にまする」
と、けなげに叫んでいる。
小姓のなかでも殊に美濃屋小四郎という少年などは、若いし優美な容姿が、女に見まほしい。
「やつして落ちよ」
と、義輝は女装して脱出することを奨めたが、
「いやです、死出の旅にお供を」
と、泣かんばかりにすがった。
岩千代や九郎には、その仰せがないというのは、依怙の沙汰だという気持である。
平生の寵愛にこたえることは、ともに戦い、ともに冥途をゆくしかない。洛中小川通りの商家の生まれだが、小四郎の心ばえは武門のものであった。
「死ぬるか、小四郎」
義輝は夕月をふりかえって、

「太刀を並べていよ、その太刀にみな血ぬらしてくれようほどに。九郎、ほかの太刀もこれへ持て」
そう命じて、石段をおりた。
怒号と悲鳴と叫喚の渦巻きであった。矢が飛び交い、小雨の中に異様な矢羽の音が走っては、そこらに突き立った。
「来い！　義輝の太刀さばきを受けてみるか」
ぶるんと、素振りをくれた。三尺四寸の大太刀を、義輝は片手で楽々とふりまわす。
「公方、見参！」
いましも、武田信景を突き伏せた大槍をしごいて、一人の壮漢がはせよってきた。
「われこそは、三好下野守が家臣にて小栗……」
みんなまで言わせず、
「下郎、猪口才」
義輝はずいと出た。その胸元めがけて、さっと突き出す。巨体にも似ず、軽く身をひらいてたぐりこむ前に、ぐいと千段巻きをつかむ。同時に、丈一ぱい片腕をのばして無造作なまでの片手斬り。
小栗某はこれを辛うじて避けた。飛び退って抜こうとした。抜いた。半ば抜きかけた真っ向額から、義輝の太刀はおちた。
すさまじい血の霧からおもてをそむけて、義輝は次の敵へ向かっている。
びゅんと薙刀が腰車を割りに来た。ガッと、鍔ぎわで受けた。厚重ねの太刀が折れたかと思った。

手がしびれ、取りおとす。
「得たりや」
薙刀が逆巻いた。その手もとにおどりこむや脇差の抜き打ちに、片腕を斬り放っていた。
義輝は薙刀を拾うや、脇差を捨てた。
石突ちかくを摑んで、おがらのように軽々とふりまわして、当るを幸い薙ぎ倒す。
武士も足軽も、数人が吹っ飛んだ。
その間に屋根によじ登った鉄砲足軽が、狙い撃ちしようとしているのを見るや、
「公方を飛び道具で撃つか」
大喝した。
まだ飛道具は卑怯とされた時代である。鉄砲への侮蔑感は拭えない。義輝の意識がそうであり、鉄砲足軽自身にそのコンプレックスが禍いした。
ひるんだところに、義輝が反動つけて投げた薙刀が飛んできた。ざくっと、偃月なりの刃が、足軽の胴に食いこみ、あらぬ方角に鉛玉を飛ばせ、もんどりうって転がり落ちている。
「太刀！」
叫びながら、義輝はひきかえした。
心得た小四郎が鮫皮巻き三尺にはきれるが、厚重ねの粟田口国綱、を差し出す。
柄をつかんで引き抜く。そのまま一転して、むらがり寄る敵襲の中へ——。
死を覚悟した義輝である。巨軀にまとった大鎧はなまなかな腕では刃が立たぬ。
むらがる敵勢におどりこみ、斬り、突き、薙ぎ、叩きつける。
（われこそ公方の首を）

と、目ざして次から次と飛びかかってくる敵勢であった。
将もいれば、卒もいた。
白昼の下の、たとえば川中島の戦いのような場合には、槍隊や騎馬隊の順序があり、将兵の使いわけ如何で、勝敗がきまりもする。
将と将との刃交ぜには、足軽らはわきから手を出さぬことを、武辺のしきたりとする美徳が、まだ多少は残っていた。
だが、奇襲の、それも夜と雨のなかである。
これは、いうなれば、武辺の闘いではなかった。闇討ちにひとしい。
相手が位人臣をきわめた征夷大将軍であるだけに、すでにして松永弾正や三好三人衆には、武辺の堂々たる戦さを仕掛ける気持ではなく、
ただ、
〈義輝の首を〉
それさえあれば、事たりる。
この奇襲の目的のすべてであった。
だから、襲撃者たちも、将士の別なく、好運の神が自分のこうべに宿ることを念じて、
「公方はどこぞ」
「雑魚にかまうな」
「義輝に一太刀、一太刀千金じゃぞ」
と、出世欲名誉欲に眼を血走らせて、新屋形の中を走りまわっていた。
義輝の側近たちのうち、老体の細川宮内少輔隆是、治郎三郎左衛門や杉原兵庫助晴盛などは、

義輝が太刀を二振とりかえぬうちに斬死し、同朋衆の福阿弥や輪阿弥は治郎の弟たちだが、しっ腰なく逃げまどって突き伏せられ、台阿弥、松阿弥などは女中衆の小袖をひっかついで混乱の中をぬけようとしたのを、

「御所の女を舐めばや」

と、好色な足軽に抱きすくめられ、顔を見られて、

「ええい、ムサイ女であることよ」

と、よってたかって、なぶり殺しにされている。

勇ましく斬り合いの末の討死には武辺としての尊敬もはらい、時に敵の菩提をとむらいもするが、卑怯な者には、憐れみをかけるよりも憎しみが先に立つ。武門に関わる者の異常な心理だ。おのれの心の一隅にひそむ怯懦(きょうだ)への裏返しであろう。

ほかにも、側近に武者はいた。

沼田上野介、朝日新三郎、谷田民部丞、疋田弥四郎、粟津甚三郎などという面々が、

「公方とともに斬りまくるこそ、われらの光栄ぞ」

と斬って出ている。

哀れをとどめたのは、進士美作守晴舎(はるいえ)である。

〝訴願の取り次ぎ〟という巧みな寄手の作戦にうまうまと乗せられて、まるで手引きしたようなかたちになってしまっている。

(いまさら、申し開きも詮なし)

松永弾正か三好三人衆のうちいずれかの首でもあげぬ限りは、

(身の証のたてようはない)

歯ぎしりする思いだった。

自分の不明を、愚かさを、怨んだ。

悔んでも、怨んでも、もはやとりかえしはつかないのだ。

「公方家に進士美作ありとまで言われたこの身が、寄手を手引きしたと、かりにも噂たてられては末代までの恥辱」

その激怒で斬りまくる刃風すさまじく、手当たりしだいに寄手を斬りまくって、敵の本陣を衝こうとこころみたが、この雲霞のごとき大軍では、不可能とさとると、

「せめては、公方のお疑いのみはらさでは、死んでも死にきれぬ」

返り血か、おのれの血か。そのどちらでもあったろう、全身血まみれになったまま、美作守は奥殿へ転がるように駈け戻ってきたのである。

「上様、上様！」

「おお、美作か」

「お許し下さりましょう」

叫びざまに、小手返しに背後の一人を斬ってすて、

「この謀叛に気づかざったは、美作一代の不覚、弾正めが詐略にうまうまとたばかられたのでござる」

「弾正が計りごとか」

義輝は斬り結びながら、

「弾正めが……」

「かような企みは、弾正ならではのこと。ささ、いずれにしても、上様へのお詫び仕まつらいで

は、美作、地獄の門はくぐれませぬ」
　進士美作守は、おのれが斬り伏せた雑兵の上に、どっかと腰をおろして、
「上様、天地八百万の神々も照覧あれ、美作が赤心、いまここで、腹たち割って！」
　脇差しで腹十文字に切るや、咽喉に鋩子をあててどうっと、前へ倒れた。
　もとどりが切れてざんばら髪の後頭部へ、貫いた先が、ぬっと出た。
「美作、潔白はよくわかったぞ」
　義輝は何本目かの太刀を、ササラのように刃こぼれしたのを、敵に投げつけるや、とってかえして小四郎から新身の太刀を受けとり、
「蔵をひらいて、黄白を撒け、財を投げ与えて、その隙に女どもを逃がせ」
と、口早やに言い捨て、また敵の中へひきかえす。
「義輝の刃に伏したき者は、かかってまいれ」
　言下に、
「現参！」
と、短槍がのびる。
「下郎、推参」
　かわしもせずに、片手打ちに斬り下げ、
「小四郎早く！」と促した。
　もはや義輝は、生き延びれるとは思っていない。むしろ、卜伝仕込みの腕をふるって、斬り伏せ薙ぎ伏せることの楽しさを、死花のように感じていたのである。
　それだからこそ、

（女どもは……）
　逃がしてやりたい、と思った。
　あれほど憎みあった北ノ方のことさえ、しだいにその憎悪の翳りがうすれて、
（落ちよ）
　まさか、上﨟女房には、雑兵どもも手を出すまい。
　三好衆が天下をとるようになれば、公卿との関係は一層、密になる、朝廷とのつながりなくしては天下はとれない。朝廷を掌握することによって、武門が、名誉を付帯し得るのだ。
　そうでないかぎり、いかに勢力があっても、土豪であり、地侍であり、野盗でしかなかった。
　それが本朝に於いて四道将軍の時代からの姿であり、源平藤橘の武門の興隆も、その箔捺しによって存在し、栄えてきたのである。
　北ノ方が、五摂家の筆頭、近衛の姫であることは、下郎といえども知っている――。
（知っているはずだ、大事あるまい）
　北ノ方の身を案じる気持になっている自分が、
（仏に近くなっているのか）
と思った。
　高貴の身が、匹夫下郎と刃交ぜする。卜伝に就いて剣法を習ったときに、この運命はすでに定まっていたのか。
「公方、お覚悟あれ」
　名前は知らず、ただ顔だけ記憶のある武者が、大太刀をひっ担いで走り寄ってきた。
　担がねばならぬほどの長さ、重さである。よほどの力がなければ普通の刀のようには扱えない。

義輝は破顔した。

「みごとなる太刀かな」

「……」

「その太刀の前には、南蛮鉄の兜も無用であろう」

むしりとるように、兜をかなぐり捨てた。

いや、捨てたのではない。叩きつけたのだ。その武者の顔面に。

思わず、身をかわす。面をふって、刀の鍔で打ち払おうとした。

その体の乱れに義輝は斬り下げている。頸すじが裂け、ぱっと血が噴き出るのが見えた。

義輝の足利十三代将軍という肩書きよりも、武者として、すぐれた剣の使い手としての名声は、後世まで聞こえたが、〈応仁後記〉には、このときの武者ぶりを、こう書いてある。

前述した辞世の歌を女の袖に書きとめたあと――、

――其ヨリ公方ハ名刀数多抜置レ取替々々テ切テ出サセ給ケル――公方ノ御手ニ掛給テ切伏セ給者幾等ト云フ数シラ子ハ（知らねば）敵徒皆懼レテ近著モノモ無シ……

こうした記述は天皇崩御に上下こぞって悲しみ式の誇張が多いが、義輝の奮戦が事実だったことは、その死ざまでわかる。

天下の将軍、ことに剣法将軍と称された武者である。蒐集した刀剣は多い。武士なら誰でも刀剣への愛着が深い。

その上、金にあかせての蒐集だ。〝数多の名刀〟は誇張ではない。

鎌倉期の名工らをはじめとして数十本はあったろう。

名刀といわれるもの――今日の現代的鑑賞眼とは違う。気品もさりながら、乱世には実用品だ。

切れねば意味がない。

折れたり曲ったり――実戦上のそうした銘柄は安くなる。位がおちる。その評判の上での名声にささえられた名刀だから、まことにすさまじい切れ味のが揃っている。

そうした名刀でも、鎧武者五、六人を切れば刃こぼれするのはさけられない。

したがって、とり代えとり代えして、むらがり寄る敵を斬りまくったというのだ。

寵童小四郎が、回廊の石階に名刀を並べた。

泣き叫び逃げまどう女たちのなかで、夕月だけは、小四郎に手伝って刀を並べたが、

「鞘を……」

とり払っておくことにした。

それだけ義輝の働きがスムーズにゆく。

紅顔に汗さえ浮かべて、一所懸命な小四郎を見ると、夕月は、

（とうとう、肌を合わすことなくこうなってしまった）

義輝の思いやりがむしろ怨めしい。

深い愛情は、暴力で思いをとげようとしなかった。夕月のうちに自然と愛が芽生えるのを待った。

壮軀の血のたぎりは、夕月へのいや増す思いに苦しんだにちがいない。

あるいは、それを寵童がなぐさめたか。男の生理の二面性が不思議でもあり、いまわしくもあるが、自分の頑くなさも、呪わしい。

（城之介さま……）

もしも城之介と知り合わなかったら、流れにまかせて、夕月は義輝に抱かれていたろう。南蛮

屋十兵衛にも、そして松永弾正にも。肌のちぎりを交した者のみが示す親愛の情をあらわにして小四郎が、義輝を見まもっているのを見ると、夕月は、
「お水を」
と、促した。
「え？」
「刀の柄に」
目釘が飛ばぬように、という配慮だった。小四郎はあわてて、水差しのところに飛んでいった。
いうまでもなく、混乱の中なのだ。
夕月はこの渦巻の中にあって自分が冷静なのが嬉しかった。
（公方が討死なされるのなら、お詫びに、私も……）
後を追って――。
と思った。宝石をちりばめた懐剣をとりあげた。ほかの女たちのように逃げることは考えていなかった。
わーっと、そのとき、雑兵らが喚声をあげ、雪崩れた。
おびただしい宝物である。
丁銀、銀粒から砂金の包みなどを女たちが撒き散らしたのだ。
寄手の団結と猛攻をみだすためであった。
貨幣ばかりではない。金銀作りの調度、什器、名刀の鞘もどんどん投げた。
雑兵らは眼の色を変えた。
「やあ、宝物じゃ」

「さ、砂金じゃぞう」
義輝の首をとれば、そんなものは問題にならぬ。莫大な恩賞と将来が待っているわけだが、名刀をとり代え、ひき代え、縦横無尽に斬りまくる義輝のまわりに屍の山が築かれてゆくし、自信のない連中にとっては、目先の財物のほうが、文字通り手っ取り早い。
「やい、おれが先きじゃ」
「おれが摑んだのじゃわい」
黄金作りの太刀鞘をとりあう者、銀の粒を拾う者、つまずいて倒れる者、唐櫃の小さいのへ、拾っては投げこみ、ついでに女の小袖をひき剝いては押しこみ、泣き叫ぶ女の姿に欲情しては抱きすくめ――まるで野盗の劫掠だ。
この混乱は、完全に寝殿を狂躁の渦に巻きこんだ。
火を放たれて、ぱちぱちと燃えはぜる音が、女たちの嬌声をあおり右往左往する女たちの姿が、その火に映えて、野獣の血をかきたてる。
暴虐の手は北ノ方にも、夕月にも及んできた。義輝の寵童でもっとも若い摂津糸千代丸が、細い手に小薙刀を持ってきた。
「夕月どの、これを」
十三歳の美少年である。
凝っと熱っぽい眼で見た。夕月は前々からこの少年が、そうした眼をむけていることには気がついていたが、十三歳という若さ、幼童といってよい少年の思慕を、まともには受けとれない。
いままで、思いをこめて物蔭から見つめるだけで、殆ど口もきいたことがない。
いよいよ、討死ということになって、はじめて、勇を鼓舞して来たのであろうか、

「忝なく思います」
と、夕月は受けとった。
「やあ、美い女ごじゃ」
髭のむさい雑兵が、駈け寄ってきた。
その前面に、しゃっと、えん月なりの穂先をひらめかして、
「切られたいか」
と、夕月は睨んだ。
凄艶というか、さっそうたる女武者の感じである。襷もせず、鉢巻きもしていない。小袖姿だ。
それだけに、艶めかしく、数人の侍たちが、瞠目して、
「あれが北ノ方か」
と、言った。
「北ノ方かな、近衛の姫ぞ」
「捕えたら恩賞じゃ」
「おりゃ、恩賞よりも、抱きたいわい」
さっと、小薙刀が一閃し、力自慢で大掛矢をひっさげてきた男の胸を裂いた。
「や、凄い、やっぱり北ノ方じゃ」
寄手はどよめいた。
その声は、北ノ方とその周囲をかためた女たちの耳に入っている。
「その女は北ノ方ではありませぬぞよ」
侍女たちは、ムキになって叫んだ。

「北ノ方はこちらに在す、間違えるではない。その女は、賤しいものじゃ」
北ノ方にお付の女房たちにしてみれば、夕月を北ノ方と錯覚されては、たまらない。
近衛家の姫君という出自は三好衆も無視出来ないはずだ。たとえ夫である将軍義輝の首を奪うことに血眼になっている雑兵たちでも、北ノ方には指一本だすまい。
それが老女や女房はした女たちに至るまで、いのちの保証であった。
こうした戦さの混乱には、婦女子の凌辱は常識だった。そこから逃れることだけが、彼女らの願いであった。
この騒ぎを梢の上から見まもっていた城之介は、
「あっ、夕月！」
と、彼女の姿をみとめた。
薙刀の一颯に敵を倒した姿が、火に映えて、艶めかしくもさっそうたるものに見えたのである。
「あの女け」
団六梢から乗りだして、
「砂金を仰山もらわんと」
「砂金なら、あそこにある。拾ったほうが早い」
と、城之介は顎をしゃくって、
「あいつらと一緒に拾ったらどうだ」
「な、なにを言いだすのや」
「夕月はおれがもらった」
「おぬし……」

「夕月には手をかけさせぬ」
「そら、話が違う」
「おれのほうは、はじめから、そのつもりだったのだ。それとも、団六、おれを斬ってから、夕月を殺すか」
城之介の手に刀が閃いた。
一瞬おびえが、団六のまるい顔に走った。
城之介は身を翻している。刀を口に咥えて、梢から飛びおりた。
混乱の屋形の中に駈けこんだのである。
「夕月！　夕月！」
絶叫した。その声も凄じい叫喚や罵声、悲鳴、数百の軍勢の走り回る音、物を打ち毀す音、棟が焼け崩れる音など、騒然たるなかで、かき消されてしまう。
城之介は、はじめ寄手にならって、
(笹ノ合印を)
と、思っていた。笹の葉を背中にさしているのが三好衆の合印で、同士討ちを避けるためだった。
寄手の方が数十倍の多さだからそのほうが得だ。死体からぬきとるだけでよい。
そのつもりだったが、混乱の場へ飛び出すと、もうそのことは忘れてしまって、
「夕月、おれだ、城之介だ」
と走り寄ろうとした。
「なんじゃい、汝は」

雑兵らが眼をむいて、
「御所侍とは違うような」
「野伏せりの戦さ場荒しか」
そんな手合いにかまってはいられなかった。
「うぬ、邪魔ひろぐな」
城之介は焦った。
雑兵らを斬り伏せて石階（きざはし）から駈け上る。
「夕月！」
「ああ、城之介さま」
火と雄叫びと混乱の、地獄図絵の中であった。
運命の皮肉は、このめぐりあいにも寸刻の余裕すら与えようとはしない。非情なのは乱世に生をうけた男女の甘受せねばならない宿命であろうか。
「夕月、救けに来たぞ」
「嬉しい」
薙刀を捨てて、夕月はすがりついてきた。
気丈な一面も、城之介の顔を見ると、もろく崩れて、泣きすがりたい女心があらわに出たのだ。
「大丈夫だ、夕月」
と、左手で抱きしめると、
「死なばもろともだ」
「あい」

懐剣を逆手に握る。
「裏門のほうへ」
と走りだす。
その背後から、
「やらねえ」
雑兵が追いすがってきた。
これを城之介が斬り払う。鏘然と刃が火花を吹いた。
武者ぶりついてくる男を突きのける拍子にぴりっと袖がさけた。
が、かまわずに、夕月は、懐剣を顔へ走らせる。返り血が霧のようにしぶいて頬を濡らす。
「若僧が」
咽喉を鳴らして、横合から斬りこんできた奴がある。これに空を打たせて、とび退る。夕月と離れた。その間に、槍が入った。必殺に切り下げた。千段巻の下にがっと入ったが、角度が悪かったか、音を立てて、刃は半ばから折れとんだ。
「しまった」
脇差しに手をかける。
その面前に、にたりと笑って巨漢が立ちはだかった。やけに濃い眉、濁ったぎょろりとした眼が嗜虐の光りを放った。
頭上に落ちた必殺の刃が、途中で力を失った。城之介は鞘走らせた脇差しがとどかぬ前に、その男の眼から、一瞬、殺意が失われたのを見ている。
容易に、脇差しは、その咽喉笛を裂いて走った。

巨体が、前へのめった。かれの刃がふれる前に、背中から致命的な義輝の一刀を浴びていたのである。
義輝がにこりとして、
「城之介とはそちか」
「………」
「夕月を頼むぞ」
その男を斬った太刀を握らせた。
「夕月が惚れた男とは、そちか。面を見せい」
「………」
「なるほど、凜々しげな男ぶりじゃ、夕月が余の意にしたがわなかったのも、当然か。将軍たる余を振り捨てた女は、夕月がはじめてじゃ」
「上様！」
悲痛に夕月が叫んだ。
「行け！　汝らを逃すことが、せめてもの、余のはなむけじゃ」
将軍義輝の返り血にまみれた顔に、城之介は男の崇高さを見た。
夕月と城之介が炎の新御所から逃れ出ることが出来たのも、義輝の決死の行為があったからである。
所詮、討死するなら、夕月を逃してやりたい。
この炎の中に飛びこんできた若者の熱情も、義輝の決意にこたえるものといえた。
（いい若者だ）

一目で、義輝はそう感じた。
この若者が、命を賭して助けにくるほどの夕月であることを知ったとき、義輝は夕月へのおのれの愛が（それは虚しい結果には終わったが）それなりに正しかったことを知った。
愛するに足る女性であったことの証——それは、義輝自身の眼があやまりでなかったことを裏づけしたのだ。
大いなる満足感が、さらなる勇気をふるい起こした。
（夕月さえ逃せば）
男の喜びがあった。夕月の無事を、その倖せのために、一臂（いっぴ）の力をかすことの喜びである。最後の土壇場になって、義輝は、足利家の血統も、十三代将軍という肩書きも、すべてを剝ぎとった赤裸な一人の男に還っての純粋な喜びを知ったのである。
「落ちよ、落ちよ」
夕月の背に叫びながら、義輝は、むらがり寄る敵を切り払った。
こうして義輝の刃にかかった者は数十人に及んでいる。
近侍の武士らも、同朋衆まで含めて、ここを先途と立ち働いたので、寄手の死者は二百余人を数えられる。
近侍の男という男は、みんな討死したことになっているが、二人だけ脱出している。小姓の美濃屋小四郎と摂津糸千代丸である。
二人とも美少年で、糸千代丸は十三歳だったから、女形（にょぎょう）できる。
小四郎の方は義輝に頼まれて、北山へ向かったという。
北山鹿苑院には、義輝の末弟が喝食（かっしき）している。

その身の護りに派遣されたという。
ともあれ、義輝の奮戦は目ざましく、あれだけ功にはやる三好衆も恐れおののいて、近寄る者もなく、遠巻きにして、やあやあ声をかけているばかりだった。
さすがに、疲労が、義輝のからだを弛緩させ、太刀も重く感じられてきたが、
「腑甲斐なき奴ばらかな、公方の首をとる勇気はないか」
笑いつつ、斬りこもうとしたとき、たまぎるような叫びが聞こえた。
「御方さまが！」
ひとかたまりになった女たちである。いましも、北ノ方の懐剣を叩きおとし、袖に手をかけた雑兵がいた。
思わず、そちらを見たとき、隙を窺っていた小兵の若武者が、大槍をふりかぶって、たたっと、背後に駈け寄った。
足音を聞いたのである。義輝はふりかえりざまに太刀をふり払った。
が、瞬間、雨気をさいてふりおろされた槍がガッと、双脚を薙いだ。
太刀は虚しく、空を切った。
義輝はその一瞬に、絶望の炎を見た。激しい痛みが脛に走り、両脛が折れたかと思い、巨体がどっと前へのめった。
重い鎧をまとっていたのである。
こうした将軍など高貴の身分の鎧は実戦用ではない。敵を威圧し味方の士気を鼓舞するものだ。したがって、金銀を多く用い、紐でも凝っている。総体に重量がある。
義輝の健康な体軀は、よくそれに耐え、なまくら刀など、はねつけたが、双脚を大槍で薙ぎ払

われて倒れては、かえって、その重さが禍いした。飛びおきようとしたが、鎧が百貫の巨岩に圧えられたように重く感じられ、
「卑怯！」
と、口走った。
わーっという喚声は、この猛虎の将軍の転倒した姿を見て、思わず寄手の間にあがった喜びのどよめきである。
この卑怯なうしろ槍をふるったのは、池田丹後守の子、池田主殿だった。
まともに斬り合い、突き合っては十に一つの勝ち目もない。卑劣な心は、隙を狙うことがうまい。
うつ伏せに転がったところへ突きかけるのさえ、かれにはできなかった。
そこらに倒れていた障子（衝立）や切羽や屏風などを手当たりしだいに、義輝の上に投げかけ、重ねかけ、
「おれが一番槍、おれが一番、公方を倒したは池田主殿じゃぞう」
顔中口にして喚きながら、めったやたらに、それらの上から、槍を突き刺した。
もはや、狂乱したのではないかと思われた。
卑劣な小心者ほど、望外の成功には、驚喜する。現実に、槍先が義輝の肉体に突き刺さる手ごたえがあるまで、主殿には、おのれの行為がどんなものか、何をしているのか、自分でも惑乱していてわからなかった。
虎や狼に恐怖した者は、それらが死んだあとまでも、恐怖と憎しみをおのれの体内から吐き出

し消し去るためにも、こうした真似をすることがある。
めった突きになりながら、それでも義輝は、よろよろと、身を起こしている。
わっと、仰天して、主殿は尻餅をついた。生きかえった——不死身の凄まじさに、動顚したのだ。
が、一度きりで、義輝はまたがっくり、となった。
もう、主殿はしかしそれ以上、槍をつけられず、痴呆のように、
「やった、おれがやった、公方は池田主殿が討ち取った」
と、お題目のようにくりかえしているばかりだった。
ひとたび身を起こした義輝が力つきて、がっくりとなるのを見るや、まわりの連中たちは喚声をあげて殺到した。
槍や薙刀で、叩く、突く、主殿ばかりでなくみんな狂ったかと思われた。
誰かが叫んだ。
「首だ、御首をあげろ」
「御首を！」
一人が叫んだ。
池田主殿ではない。主殿は呆然としているだけだ。他の者がそれと気づいた。
あたかも、阿修羅のような義輝の働きに、幻術をかけられたように、狂いたっていたのが、その声で正気にかえった。
「そうだ、首だ」
槍をつけた者と、首をとった者とは、別人でもかまわない。それぞれの軍功になるのが、しき

たりであった。

「首、首！」

という叫びは、主殿を虚脱状態から目ざめさせたようである。

「おれのだ、公方の首はおれのものだ」

と、みんなをかきわけて、飛びこもうとした。

障子や屏風をとりのけようとしていたのだ。その障子の折れた桟が、主殿の眼に突き刺さった。

義輝を討ったタタリとはいわない。はずみだ。本人のあせりもある。

わっと、両眼を圧えてのけぞるのを、左右の奴が突きとばして、ざんばら髪の義輝の頭へ、餓狼のように襲いかかっている。

主殿は、しかし、そのために助かったようなものだった。

血まみれの顔を手で蔽って、

「眼が見えない、眼が見えない、真っ赤じゃ、何もかも真赤じゃァ」

泣くように叫びながら、そこらを転げまわっていた。

義輝にたかって首の奪い合いをしていた者たちの頭上に、ぐらぐらっと、柱が折れ、御殿が崩れかかったのである。

炎に包まれた寝殿のひらたい屋根は、棟も柱も、真っ赤に焼けて、巨大な炎地獄となって一瞬に、かれらを呑みこんでしまった。

「危ない！　屋根が崩れるぞう」

恐怖の叫びも、この奇襲戦第一の功の前には、耳に入らなかったのだろう。

義輝の死体と、十数人の寄手は、火炎の底で見わけもつかぬ舎利になってしまったのである。

ある意味では、

「誰にもこの首は渡したくない」

と思った義輝の意気に、神が嘉し給うたのかもしれぬ。

義輝の首級は、将軍ながら兵法者らしく、梟首などの恥を曝すことなく、一片の黒煙と化して昇華したのだ。

池田主殿は、この火炎地獄からはね飛ばされたように、両手で顔を蔽い、

「ああ、真っ赤だ、何もかも、業火だ、地獄だ」

叫び喚き、泣きながら転がっているうちに、池へおちこんだ。

すでに死体や何かが浮いていたのが幸いした。御所の炎にも焼かれなかったのは、そのせいである。

足利十三代将軍の二条の新御所は、義輝の痛恨のうちに此の世ならぬ火炎に包まれ、洛中洛外を驚愕させながら、烏有に帰したのである。

余燼

義輝が死んだことで、すべてが終わったのではなかった。

松永弾正や三好三人衆にしてみれば、目的は達したわけだが、戦功を争い、血と炎に昂奮した雑兵らは、

「財宝を得なば」

「女どもを抱かにゃの」

「戦さのけじめがつかぬわい」

色と欲をむきだしにして、野良犬のように、そこらをかぎまわる。

逃げ損ねた女をとらえて、物蔭で凌辱している奴もいる。

夜の底に白い脚がもがき、恐怖に歪んだ顔が見えたりした。

血臭と重傷者の呻きや死体や地獄火は、そうした行為を日常化してしまうのだ。

北ノ方は野獣の爪の中にいた。侍女たち数人とともに、せいぜい高貴の出らしく振舞おうとしていたが、袖には火がつき、裂けたり破れたり汚れた姿では、

「わらわは近衛家のものじゃ、触れるではない」

などと言っても、強がりとしか聞こえない。

「近衛も一条もあるかい、汝は女じゃ、さ、こっちへこう」

と、抱きつき、曳きずってゆこうとする。

雑兵たちにしてみれば、御所の女といえば、たとえ水仕(みずし)のはしために至るまで、涎(よだれ)の出る存在なのだ。

この御所攻めには、はじめから〝御所女〟も目的に入っていた。

異常なほどの熱意が、かれらを動かしたのだ。

戦さには掠奪がつきものだ。奪うのは、〝金品〟とばかりはかぎらない。物には、女も入る。

表むき、禁止した武将もいるが、あくまでも世評への慮りにすぎない。

雑兵らの楽しみがそれだとすれば、強姦も博奕も禁じてしまっては戦力が衰える。

だから、大目に見ることになるのだ。

北ノ方や女房などの上臈衆も、あわや、雑兵たちの毒牙にかからんとしていたとき、馬をあおって乗りこんできた者がある。

「それにおわすは、近衛殿がゆかりの方か」

その武士の姿が、女たちには地獄で仏に見えたろう。

「左様でござります。御台所でござりますぞ」

「前(さき)の太政大臣近衛公稙家さまが姫御前」

口々に訴えるのだ。

「汝ら、手を放せ」

烈しい声である。

雑兵らは、それでも、不満顔だったが、そこらを未練気に、調度などを拾いまわっていたり、死体の鎧を剝いだり、肌付金を盗んだりしていた連中が、さっと両側にひらいた。

　多勢の小姓、近習らをしたがえた武将が悠然と馬を進めてきた。

「上様だ」

「上様だ……」

　その囁きは、どんなにこころよく耳にひびいたろう。松永弾正の生涯にこれほど輝かしい日があったろうか。

　上様……。

　うえさま。

　なんという、こころよいひびきを持った言葉だろう。

　たとえ、それが、この戦さの直接的な指導者であり、首謀者と感覚的に察して、自ら発された言葉であったとしても。

　これまで、松永弾正は、

「御代官」

とか、

「御領主」

とか、

「殿様」

とかいうふうにしか呼ばれなかった。三好家の執事として、老職、家老の身分は同じでも、漸く実権を掌握してからの敬称である。

　いまだに、三好一族の筆頭、三好長慶の生存を信じているむきは、将軍をほろぼした以上、長慶こそ、上様と呼ばるべきだという明確な地位の判別はあっても、事実上の執権への尊敬は、自然に口をついて出るのである。

　松永弾正は背が高い。

　痩せてはいたが、黒縅の具足に、鹿皮萌葱の陣羽織。金糸銀糸で青海波文様を描いてあるそれは、血しぶきに汚れていた。狂ったように本陣に斬り込んできた町住いの御所侍を斬り伏せた際のものである。

　金の采配を前帯に差して、馬からおりると、弾正は、北ノ方の前に進んだ。

「弾正が参りましたれば、御安堵なされるよう」

「おう、弾正か、嬉しく思います」

「御方さまに卒爾なきよう、計らわせまする」

　心利いた者をつけさせた。武士に足軽二十人ほど与えられて、北ノ方はじめほっと愁眉をひらいた。

「恩に着まする」

「この通りでございます」

　北ノ方は、みっともないほど、すがりつく表情をしたし、老女や女房たちは手を合わさんばかりだ。

　いま、義輝が死んだばかりなのに——。

　当面の敵であるはずの、松永弾正は憎い敵であるはずなのに、手を合わせて命拾いを感謝する。

（女というやつは……）

あまりに現世的すぎる。

狡猾で策士であることを恥じぬ弾正ですら、女心の頼りなさ、その節操のなさには唖然とさせられた。

討ち捕まった者を門前に青竹を並べて梟けさせ、朝廷には、〈暴戻なる将軍を討ち参らせるは天下万民を安んぜんがために候えば云々〉と、こうした場合の常套話を並べて奉らせた。

すでに謀叛を考えたときから、こうした後始末に就いての腹案は充分練られていたのである。

松永弾正の老獪さは、こうしたことに手ぬかりのないことであった。

てきぱきと指図する弾正の前で勝利に酔いながらも、何の方策もないままに、後手後手にまわっている日向守や下野守など三好三人衆は、弾正の手ぎわのよさに呆れたり感心したりしていた。

（かなわぬ、恐ろしい男だ……）

口には出さぬまでも、感じていた。

この得意の絶頂にあって、松永弾正の胸に、時折り、電光のように掠めるのは、夕月の面影であった。

（うまく逃げたのか）

夕月がこの新御所に義輝の想いものになっていると聞いたときは驚愕した。

夕月のことが気がかりでなかったといえば嘘になる。いまの弾正にとっては、その比重はあまりにも違いすぎた。

（天下をこの手に!!）

そのために、数十年の苦心の歳月があった。

いまこそ好機。この天下を握り得る機会など、めったにあるものではない。一生のうち、一度か二度の機会なのだ。

天の時と地の利と、人の和と。

三好三人衆が、自分を内心きらいながらも、才能に抗し難く手を結んでいることも、充分知っていた。したがって、この同盟が破れるのも、時間の問題であることも、見越していた。

それだけに、

（長慶の名が利用できるいま）

この期をはずさず、こちらは三好の勢力を利用するのだ。

長慶の嗣子左京大夫義継は十四歳だし、まだ、自分の陰謀にも気がつかない。

この、すべての条件が整った好機など、おそらく二度とこない。

松永弾正久秀――そのすべてをあげて、目的に邁進する時であった。この時、一人の女人への想いは、忘れるしかない。

忘れたつもりが、勝利ときまったとき、北ノ方を見て、思い出されたのである。

（雑兵どもに乱暴されたか、逃げたか……）

弾正は夕月の安否を知りたい思いを圧しころした。

（無事に逃げたのなら、また探し出す方便もある）

それよりは、この戦さのあと始末だった。

この〝公方討ち〟の名目は三好長慶であり、長慶こそが、今日から〝上様〟と呼ばれる身になる。

将士、こぞって、弾正にその称を奉ったのは、長慶の死の秘密を知らぬ連中にも、自ら、弾正の態度に、権勢の移行を感じたのにほかならなかった。

「事は成った」
と、三好日向守が言った。
「ただちに新公方を立てねばならぬの」
「阿波へは急使を遣った」
と、三好下野守が答えた。
「十四代足利将軍は義栄公……」
その会話を、弾正は黙って聞いていた。わざと口を差しはさまず側近を見まわした。
「室町の御所の方は、どうなっておる」
「わしの手の者が参った」
と、岩成主税助が、ぬかりはないと、鼻をうごめかして、
「南都へも、すでにおさえの人数まいっている」
南都奈良には一条院に義輝のすぐの弟がいた。その次の弟は京の北山にいる。
兄を討たれた、仇討ち――復讐の〝とむらい合戦〟は、こうした時代の習いである。
三好長慶自身、父のとむらい合戦によって、ここまでのし上っている。
義輝を討たれた弟たちが、その軍を起こすことは目に見えていた。
「早く芽を刈りとることじゃ」
と、弾正は言った。
「首を……」
「いや、それはよくない」
三好日向守は年長者らしく、否んで、

「公方を討ったのは、万民至福のため、という名分がある。これなくては、ただの叛逆じゃ。それではならぬ。三好家の名分が立つまい」
「如何にも、日向どのが意見にわしも同じじゃ」
と、下野守が和した。
「たかが一人の若僧、邪魔なときは、下人でも首を一ひねりすればよい。いまは生かしておいた方が三好家のおんためよ」
弾正は固執しなかった。
「将来のことを考えたまででござる。生かしておくがよいと思召されたならば、それでよい。して、いま一人の血すじは如何に」
「同じことよ、次弟を生かしておいて末弟を殺す意味がない」
日向守と下野守の言葉は、弾正のような謀略家から見れば、
(楽天的すぎる！)のだ。
次弟は「覚慶得業」という名で一条院の門跡になっている。
もはや立派な青年だが、末弟のほうは、「周高」という名で、北山鹿苑院――金閣寺――で喝食をしている。
喝食というのは飯の支度や給仕をする、坊主の見習い小僧のようなもので、童形であり、時には稚児として、好色の対象にさせられたりした。
周高の年齢はわからないが、十歳そこそこであったろう。
覚慶のもとに軍勢が押しかけたのは、その夜が明けぬうちで一条院の出入りは固く封じられた。
覚慶が、京の異変を知ったときは、すでに、義輝が討死していたのである。

その討手が、池田丹後守の伜主殿（とのも）と聞いたときも、覚慶は表情を変えなかった。
黙って、使者の前を離れ、暗い部屋にこもると、剃刀をとり出して、丁ッと、おのがふとももを刺した。
「兄上、無念！」
血の流れるにまかせ、呪詛を洩らした。
この覚慶が後の義秋。足利十五代将軍義昭になるのである。
むろん、臥薪嘗胆のあげくのことだが、この兄にくらべると、末弟の周高は哀れだった。幼なかったせいもある。
三好方より差し向けられたのは平田和泉守という剛の者だったが、北山へ向かう直前、弾正に呼ばれている。
「御苦労だな」と、ねぎらって、
「ときに和泉、その方、蜂ノ子飯を食うたことがあるか？」
「蜂ノ子飯を？」
平田和泉守は髭面をゆがめた。
弾正の真意を解しかねたのである。
三好日向守の命令で、北山鹿苑院に、義輝の末弟周高喝食をおさえにゆこうとする矢先きである。
「蜂ノ子飯というと、蜂の巣より白いサナギの蜂ノ子をとりだして飯に焚きこんだ、あれでござるか」
「ほかにあるか」

「いや、そ、その蜂ノ子飯なら、食うたことがござるが」
「美味であったろうな」
「はあ……」
一体、何を言いだすのだ？
「あのように美味い蜂ノ子も、大きゅうなれば、蜂になる」
あたりまえだ。
「蜂の針はよく人を刺す」
「……」
「大豪の者も蜂に刺されてはかなわぬ。刺しどころが悪いと、一命にかかわる」
「……」
「であろうが？　蜂ノ子を可愛いとか、害がないとか思うていると、後禍を残すぞ」
弾正の眼は、意味あり気な光で、妖しく光った。
「はあ……なるほど」
「わかったならば、ゆけ」
平田和泉守は一礼した。
従者は三人。足軽と小者である。
この小人数であることが、寺僧たちを必要以上に警戒させなかった。
「三好衆か」
と、はじめは仰天した。すでに新御所の火災により、夜討ちの様子は知れている。義輝が討死したであろうことも、みんな囁きあっていた。

「騒ぐまい。御為をはかり参らせんがため、われらが派遣されたのじゃ」
まことしやかに、和泉守は言った。
「公方を討ちまいらせたのは、政治向き如何の聞こえありしが為じゃ、されば、三好家の者ども談合申して、こなた様を還俗して、新公方に迎え参らせんと」
「将軍に！」
「左様、足利十四代将軍家とならせられ給うことじゃ」
これは少し考えてみれば、不審な点に気付くはずだった。
周高は末弟だ。兄がいる。南都一条院の門跡覚慶。
それをさしおいて、新公方に推戴するなどというのは、おかしい。
寺僧の中にも、疑惑を感じた者もないではなかったが、和泉守はあっさりと、
「御門跡には、辞退なされた」
と、言ってのけた。
「何やら、お考えあってのことであろう」
そう言われると、敢て南都へ問い合わせるわけにもいかない。
一日たりとも公方なしでは、政治に差しつかえるから、ただちに京へ出でさせ給い、禁中へも——などと促されては、時間を稼ぐわけにもいかない。
早速、着衣をあらためただけで鹿苑院を出立したのだが、寺僧たち数人が供についてきた。
権力への執着であろうか。
この時代の人の心は現代人には計り難い。
おのれの兄を殺した集団から、「天下の権を、あなたに差し上げるために殺した」

といわれて、ホイホイとその言葉に乗っている。
仏門に入って修業した甲斐がない。仏門は一時の仮住いで、地椅子が用意されさえすれば、未練気もなく、裟婆へもどる。
節操の無さもさりながら、宗教心など、まるでない。なげかわしい。
如何に下剋上の世で、心が荒んでいるかわかる。父子兄弟も、政権のためには血で血を洗う争闘をくりかえして、恥じないのだ。
周高喝食の幼な心にも、天下の将軍の権威とはれがましさが、前途の不安を感じぬほど、魅力的に誘引していたのであろうか。
一行は、あたかも炎上する新御所の炎に惹かれる夏の虫の如くに、夜道を急いだ。
夜はやや明けかけていて、東山の空が澄んだ紫色にうすれ、爽やかな風が吹いていた。
雨がやんだあとのすがすがしいような風であった。
風には緑の匂いがある。
義輝の小姓の美濃屋小四郎は、そのころ、逆に北山へ向かって急いでいた。
(周高喝食の御身を……)
場合によっては鷹ヶ峰かどこかへ匿まわねばなるまい。
小四郎は洛中小川通りの商家の子である。美貌と利発ゆえに、義輝に見出されて、寵愛を受けた。
十三歳のときからだから、三年になる。
夷川のほとりまで来たときだ。川向こうに騎馬と従者らしい人影が見えた。十人あまりに見えた。馬は二頭である。

御所とか、公方とか、三好家とか話しているのが聞こえる。

今は草木の囁きにもおびえる身だ。

（寄手か？……）

小四郎は凝っと物蔭に隠れて見ていると、

「これを渡り候え」

橋は寄手が切り落としていて、小舟の渡しになっている。ほんのひとまたぎであるが、橋がないからしかたがない。

周高喝食は、寺僧に手をとられて、舟へ乗る。そのあとから、平田和泉守が乗る。

「もうすぐでござるぞ」

と、和泉守は囁いて、

「将軍におなりになる心持ちは如何なものかな」

と、うすら笑いをしている。

少年はそういわれても実感のわきようがない。金閣寺の中での生活しか知らない。

「何やら、そら恐ろしいような」

と、首をすくめるのを、

「ははは、そのようなことでどうなさる。しゃんと胸を張りなされ、うなじを立てて」

和泉守は刀の柄に手をかけた。

このような少年を瞞すくらい、平田和泉守にしてみれば、文字通り赤子の手をひねるようなものだったろう。

うなじをのばせ、とは何というむごい言葉だったか。

少年が、それを率直な忠告と聞いたのは、哀れすぎる。

舟は川中へ出ていた。

和泉守の手にさっと、白刃が閃いた。

あまりにも早く、あまりにも、冷酷な事実だった。

物蔭で見まもっていた小四郎もあっと思った瞬間だった。

それは、その小さな影が、いま逢いに行こうとしている喝食周高だということに気がついたのとほぼひとしかったのである。

白刃の閃きは、永遠に、この少年同士をひき裂いた。

悲鳴すらも周高はあげるひまがなかったのである。

首はころりと前へ落ちた。

小舟の中である。

「捨てろ」

和泉守は、血刀を寺僧に突きつけて言った。

「え……」

「この胴体を捨てるのだ」

「……」

「早くせい、胴体に用はない」

さかんに夜空を焦がしている炎の下には、おそらく、数百人の死体がうごめいているのだ。その血刀がこんどはこちらの首を落とさぬという保証はない。

その僧は真っ蒼になって、少年の首のない死体を、夷川へひきずり落とした。

「それでよし」
和泉守の輩下らは、むろん、承知していたことである。
鹿苑院の者たちを威すように抜刀したり、槍を突きつけている。
平田和泉守は舟がつくと、少年の首を高々とあげて見せた。
喝食は、多く有髪である。周高も艶やかな髪を貯えていた。
それをつかんで得々と、和泉守は対岸へ振ってみせ、
「この通りじゃ、早ようまいれ」
その高々とかかげた右腕が、次の瞬間、ぎえっと骨を泣かせて、肩のつけねから、離れ飛んだ。
生首の髪をつかんだまま——。
怒りの太刀は、物蔭から飛び出した美濃屋小四郎であった。
「不埒者！」
片腕を斬られて、重心を失い、きりきりっと和泉守のからだは回転した。その胸へ血刀が、突き刺さった。
和泉守の顔面は天を仰いで、何やら叫びたそうに口を動かしたまま、夷川へもんどりうって、落ちた。
「美濃屋小四郎、慮外者を討ったぞ」
と、大音声に叫び、周高の首を抱えて走り出した。
対岸の郎党らが、仰天して舟を漕ぎ渡ってきたときは、小四郎の姿はそこらになかった。
この一件は当時、洛中の評判になり、落首が白壁に書かれた。

クルブシモ濡レヌ小川ノ
　　ミノ（美濃）亀ニ

泉（和泉守）ハ命取ラレヌル哉

悲惨だったのは、周高喝食だけではない。かつての寵妃小侍従ノ局もまた、庇護者を失った女の道を歩んでいる。
岩成主税助の手の者三十人ばかりが、旧御所を襲ったのだ。
潮騒のように聞こえてくる鯨波に、小侍従は、
（夜討ち！）
と知った。
「用意を早く」
長押の薙刀をとって、毛鞘を払う。
侍女たちが鎧櫃の蓋をあけ、小具足をとりだす。
緋縅のみごとなものだ。が、小侍従はそれを着用することが出来なかった。
腹巻を身につけぬうちに、表と裏から軍兵が雪崩れこんできたのである。
ダダッと、妻戸に矢が突き刺さる音がし、弓弦を鳴らせて、応戦した味方も、十人あまりのことで、たちまち射竦められ、浮足立つや、槍攻めで突き立てられて崩れた。
「ほう、いるぞいるぞ」
血槍を片手に飛びこんできた男が顎をなでた。
「弁天様ぞろいじゃ」
「浦島になったような気がするぞい」
「わしゃ、上臈から頂くわな」

にたにたしながら、飛びかかって来た。

お局と知っての狼藉なのだ。それでも、小侍従が刃物を捨て、哀れを乞うていたなら、事態はどう変化していたかしれない。

勝気なだけに、ムサイ雑兵のふるまいが我慢ならなかった。

「推参なり、下郎」

高びしゃに、金属的な声を奔らせ、ぴゅっ、ぴゅっと、薙刀をうちふった。

気性が強いだけに、手練である。一人が、ふとももを骨まで裂かれ、一人が肘から腕を落とされ、一人は鼻を削がれて、ふがふが声で、

「狐め、狐め」

と、喚き、刀を投げた。

これは当たらなかった。かつん、と、叩き落とした。が、その一瞬の隙に、吼えて、男たちが左右から飛びつき、抱きすくめたのである。

小侍従は、

「無礼者！　わらわの軀に」

と、叫び、もがいたが、男の手は裾をひんめくり、容赦なく、花芯にふれていた。

馴れているのだ。手を圧える者、黒髪をつかむ者。襟はおしひろげられて両の乳房が恥ずかしい顔を出し、あさましくも大の字に引き裂かれんばかりにひろげられた下肢のあいだに、草摺を投げ捨てただけで雑兵が身を倒してきた。

灼けた火箸に軀の芯を貫かれるような、屈辱の痛みと悲しみが小侍従を襲った。

「許さぬ、許しませぬ、あ、あ、無礼者！　ああ……」

その悲鳴とも、叱咤ともつかぬ〃お局さま〃の惑乱ぶりは、野獣たちの血をあおるものでしかなかったのである。

「ひひ、泣け、わめけ、わしゃ公方の想い女(もの)を、抱いとるのじゃ、ひひひ」

女の涙は、よく男の鉄の心をとろかす。が、時に、その紅涙は、男の野獣性をあおりたてるという逆の作用も起こすのである。

もともと涙というものは、相手に、涙があってこそ、効果を発揮するものだ。血も涙もない野獣には、激情をおしとどめる力はない。

むしろ、嗜虐的な快感をあおった。

「好えぞ、好えぞ」

顔中を、快感にゆがめて、この世の極楽に魂をふきとばしていた。

「て、天下人の、抱いた女を、わしも、わしも抱いとるのじゃ。ああ、なんちゅう果報か」

うだうだと涎を流さんばかりであった。

その男が、早くに放ち果てると、あと始末もせぬうちに、

「こんどはわしじゃ」

と、手をおさえていた男が、袴を脱いだ。

草摺はどうしても邪魔になるから、はずしたが、袴は全部脱ぐのが面倒だったのであろう。紐をほどいてずり下げただけのあさましい姿で、おおいかぶさってきた。

「放して、わらわを、何と心得ているのじゃ、無礼な……あ、あ、ぶれい……」

声は悲鳴に変わり、小侍従は、泣き、呻いた。

小侍従がかつて知らなかった男たちであった。

情け、というもののかたちがあまりに違った。かれらには、上品な貴族趣味の、歌も会話も、駆け引きも必要なかった。

ただ、男と女の肉だけだった。

野獣の狂宴には、限りがなかった。

二人が済んで、それで放免かと思うと、

「汝らだけが、甘肌舐めるこたァねい」

と、三人目が襲いかかった。

三十ばかりの眼の濁った男だった。臭い息を吐いて、あえいだ。

その両眼を、小侍従はまるで病い犬だと思った。

何ということだろう。これほどかれらを軽蔑し、わが身の不幸をなげきながら、小侍従は軀の芯が燃え、暖かい雲に包まれたように、五体が浮き上り、四肢まで痺れて、歓喜の声を洩らしていたのである。

その眼は光りを失い、とろりとなって、五彩の雲を見ていた。

もう、いまわしさや、汚ならしいという感覚はなく、ただ、快感だけが、彼女をとらえている。

場所もなく、時間もなかった。

雲間を、何かの影が走るように何人かの男たちが、飽くことを知らぬように、次から次と変わった。

もう官能の疼きを通り越して、腰は萎え、無感覚に近く、多勢の男たちが、ただの影が前を通り過ぎるように過ぎてゆくだけだった。

「公方の女を、わしも……一生の思い出じゃて」

公方の女……公方の女……。

そんな言葉も自分のことかどうかすら、もうわからなくなっていた。三十人ばかりの男たちが、征服感を満喫して立ち去ったあと、血まみれの、ぼろ布のようになった女の、息は絶えていた。

小侍従の死に就いては異説がある。混乱の中を弾正に救われたという、が、信じられる史書には出ていない。

〈続応仁後記〉には次の記事が見える。

――公方御寵愛有シ小侍従殿ト申セシ局ハ雑兵等情無クモ討殺シ捨タリケリ、角テ御所ヲハ焼払テ寄手各々帰陣シケルカ末世ト云ヘ共不思議也ハ……

世にいわゆる戦国時代の下剋上は、珍しくもなかったが、世上やはり末世の相に感じたのであろう。

その小侍従の死首を、弾正は床几に腰かけて、見た。

あたりはおびただしい首、首、首……である。

まだ御所を焼く火があたりを明るくして、ぱらぱらと火の粉が落ちてくる中であった。

三好下野守は火が洛中を舐めつくすのを怖れて、足軽らを督励して、逃げまどう市民を呼び集め、消火に当たっていた。

狡猾な弾正は、火がどこに及ぼうと、かれらにまかせきりで、次の権力への足がかりを作ることしか考えていない。

その痩軀を泰然と床几によらして、功名帳に眼を走らしたり、部将らの報告に耳をかしたり、言葉短かに、命令を下したりしている姿は、如何にも、天下はおれのものだというふうであった。

三好日向守なども、不遜と感じながら、咎めだてする方法を失っていた。

「――これが、小侍従か」
弾正は、意外な顔をした。
むしろ、疑いを持ったといってよい。女首をささげてきた者たちへ、じろりと凄い視線を走らして、
「討ったのは、誰じゃ」
「はあ、てまえで」
卑しい顔をした雑兵である。
（こやつが、さんざんになぶったあげくに、殺したか）
弾正は不快になった。
かれが知っていた小侍従のおもかげはまるで無くなっている。いくら死顔とはいえ、こうも痴呆と、苦痛に、気抜けたような表情になっているというのは、死ぬ前に、彼女の人生のすべてをくつがえすばかりの甚大な衝撃があったことを物語っている。
天下の将軍の寵妃を犯すという優越感で、かわるがわる、凌辱したであろうことは、聞くまでもなく、わかっていた。
そうしたことを止める意志はむろんなかった。
（これほどまでに……）
女の顔が変わるものか？
卑しい雑兵らが、この女のからだに加えた仕打ちを想像するだけでも、胸が悪くなるようであった。
「よい、下れ」

「へえ……あの、恩賞は」
「たわけめ、女一人を辱しめて首あげて、何の恩賞じゃ、見苦しい、下れ」
かっと弾正は唾を飛ばした。
そこへ、取り次ぎの者が、北山へ参じたる者、立ち帰りました、と告げた。
「和泉が戻ったか」
「いいえ、討たれてござる」
「和泉は何とした」
弾正は眉をしかめた。
戻ってきたのは平田和泉守の郎党らである。
「殺られたそうな」
と、岩成主税助が無念げに言った。
「要らざる真似をしおって、周高喝食を討ったそうじゃ」
「ふむ……」
「討たずに連れてまいるようにと言うたのだが、焦ったのであろう、ま、討ったものはしかたがないとして、気を抜いたところを、斬られたという。若い奴じゃったそうな」
弾正はあいまいな表情をしていたが、肚裡の中でほくそ笑んだ。
（一つ、片付いたな）
できれば、南都一条院の門跡覚慶も抹殺して後顧の憂いを無くしたかった。
（いずれ、そのうちに）
三好三人衆が反対するのを、無理押しするのもまずい。

弾正は決してあせらぬ。あせれば九仞の功を一簣に虧くことになる。時期を狙って待っていて、ここぞと思うとき、一気に辣腕をふるう。弾正のその行動は常に正確でソツがなかった。

打つ手はちゃんと打って、妄動はしない。

陣所に戻ると、

「北ノ方は如何している」

と、伜の右衛門佐久通へ聞いた。

伜といっても右衛門佐は三十半ばになっている。弾正の性格の強烈さの蔭に隠れて、目立たない男だった。

愚鈍というのではない。普通の父の子に生まれたなら、右衛門佐もそれほど見劣りはしなかったろう。

凡庸には色がない、といわれる。

愚鈍な者と並べれば光って見えるが、逆の場合には、くすんでしまう。

弾正ほどの男を父に持ったのが右衛門佐の不幸ともいえる。

「――化粧をしています」

ぶすっと言い、右衛門佐は盃を口に含んだ。

「女というやつは、いっこうにわからぬ。生命が助かっただけでも喜ぶべきに、化粧など」

侍女たちが走りまわって化粧の道具を集めてきたという。

「それが女じゃ」

と、弾正は満足げにうなずいた。

「女の可愛いところよ」

「はあ」

「何やら不服顔じゃの」

「てまえは生得、ああいう女は好きませぬな、高慢で、男を男と思わぬ……」

「右衛門佐、女というものはの、一面だけ見ては見そこなうぞ」

弾正はうすく笑った。

陣幕のうちに敷物を敷いて北ノ方は端然と坐っていた。

侍女が髪を梳き、周囲を守っている姿も、将軍家御台所の威厳を取り戻したようであった。

小姓が幕をあけてのぞいた。

「――上様のお越しじゃ」

女たちはあわてて居ずまいをなおした。北ノ方の頬にぽっと喜色がのぼった。

「北ノ方は何処じゃ」

「われらの手で圧えねば、功をさらわれてしまうぞ」

北ノ方が弾正の控え屋敷にともなわれた直後、三好三人衆の間で、

という話が交わされた。

北ノ方が近衛家の姫である以上、情けをかけて近衛に送りとどけることで、朝廷にも発言権が増えると考えたのであろう。

その考えはしかし遅かったのだ。

三人衆が、眼がさめたような心持ちで、弾正の陣所に乗りこんで来たときは、すでに姿はなく、

「控え屋敷のほうじゃ、弾正め一人に甘味を吸わせてなろうや」

「刀にかけても」
と、軍勢を引き連れて押しかけてくると、門前に大篝火を焚きつらね、新式鉄砲隊が、ずらりと並んでいた。
火縄を腕に巻き、弾丸ごめして折敷いた鉄砲隊である。
百挺の銃口がずらりと並んだところは壮観だった。
三好三人衆とその軍勢は勢いこんできたものの、出鼻を挫かれて、立ちすくんだ。
「これは、日向どの、下野どのもか、何れへ参られる」
と、右衛門佐が、とぼけた顔で出てきた。
「こりゃ、味方の衆じゃ、鉄砲をおろせ」
左右を見まわして、そう命じたものの、足軽らはあらかじめ言い含められているから、銃口を下へむけただけで、緊張をとこうとはしない。
「右衛門佐、北ノ方はいずれにあるぞ」
「北ノ方とは」
「知れたこと、公方、いや前（さき）ノ公方の御台所よ」
噛みつくように岩成主税助が詰めよる。
「ははあ、近衛家の姫か。気分悪しきとて、寝んでおる。方々の御気遣い無用」
「じゃが……」
「気分が悪いのじゃ、方々が騒ぎたてては、もしものことがあれば何となさる」
そう言われては、三好三人衆は言葉がない。
「それよりも残党詮議が肝要でござろう、持ち場を大事になされることじゃ」

右衛門佐は、鉄砲隊をふりかえった。まるで、それが合図のように、足軽らは、ぽんと火縄の灰を払って、じわりと銃口をあげようとする。
「やむを得ぬ」
「引き上げるか」
ぶつぶつ言っているところへ、轍（わだち）の音を鳴らせて数台の牛車がやってくるのが見えた。
松明をともして、一台に二、三十人の軍兵が護衛に当たり、やってくるのだ。
「近衛家より姫をお迎えに参上」
そんな声が聞こえた。三好勢が道をひらくと、牛車は門前まで来て公卿がおり立って来た。
「姫の迎えじゃな」
その使者たちは弾正の控え屋敷を訪れるのに、まるで将軍の御所を訪うような敬虔な態度だったのである。三人衆らは、またため息をついた。

城之介と夕月が、地獄火から逃れて、その夜を過ごしたのは、五条坂の空屋敷だった。

戦乱を何度も受けて、半焼したり、その家の者が残らず死に絶えたりして、半ば朽ちたまま、野良犬の棲家になっているようなところが随所にある。

野盗たちにとっても恰好の隠れ家でもあるので、洛中、中心部あたりでは、すっかり片付けたり、持ち主を捜したり、ちゃんと屋敷を建てたりして整理がついていたが、郊外にゆくと、まだ倒壊寸前のまま、放置された廃屋がそのままに残されていたのである。

（あれから、どのくらい経ったろう……）

城之介には、この間のめまぐるしく、危難の月日が、二年にも三年にも感じられた。

その思いは夕月にしても同じだったのである。

埃っぽい床の上で、城之介に抱かれたとき、ふと、あの伏見の深草の堂内を思い出している。

あの夜、結ばれようとして、野伏せりたちの邪魔が入り、そのあげくが、二人を非情にも、離れ離れにしてしまったのだ。

「公方に救われて……」

義輝に救われたことが、よかったか悪かったか。

義輝の最期のときは、とうとう肌を合わせることなく、御所暮らしを過ごしてしまった我儘を、申し訳ないものに思ったものだが、こうして城之介の若い軀の匂いにくるまれ、お互いの汗に濡れあってみると、

（あれでよかった……）

と、思えてくる。

女の狡さだろうか……

いや、城之介への愛ではないのか。

平戸を出て以来のことだ。あれから、ずっと、夕月の肌は男を知らない。

まる、二カ月ほどになる。毎夜、いや、多いときは一夜に何人もの男に抱かれた軀が、運命の変化から、男を拒んできたのだが、城之介に抱かれてみると、いかに、この二カ月が熟れた肌には長かったかを、あらためて、知らされたのだった。

義輝の深い愛情にほだされて、時には進んで身を投げようかと思ったこともあった——それも、理性では拒みながらも、男に狎れた肉体が、もとめたものではないだろうか。

「うれしい、もっと強く、もっと強く抱いて！」

若い男のいのちが、夕月のなかで躍り、荒れた。嵐の中で揺すぶられる嫩木（わかぎ）のようにおののき、むせびながら、夕月には、かわいた砂が、慈雨を吸いこむように、若者の生気に満ちたいのちの潮をむさぼった。

廃屋の埃りも、蜘蛛の巣も、そして二人の狂ったような動きで、みしみし軋む床板の頼りなさすら、気にならなかった。

雨気で流れこんでくる屋内の闇は夕月を大胆にし、一度ならず若者の狂熱に溶かされながら、城之介の名を呼びつづけていた——。

（木偶が要る）

弾正久秀は考えた。

（おれの思い通りになる木偶が要るな……）

世間は、将軍義輝の弑逆後、弾正を将軍に据えるほど甘くはない。

国は力で奪れるが、官職を得るのは、まだ容易ではなかった。

血統がものを言ったし、武家でも源平藤橘の族であることを必要としたのだ。そのために、この後になるが豊臣秀吉など、随分無理をしている。

弾正がしかし欲しかったのは、空疎な肩書きではなく、実権であろう。

将軍職は、尊氏以来〝足利〟でなければならないような習慣が出来上ってしまっている。

応仁の乱以後の争いも、その頂点が将軍職であると見るなら、足利家に於ける同族間のもので実権者である管領争いに巻きこまれたわけだ。

したがって、世間では、

〈第十三代義輝公の死〉

のあと、第十四代には、やはり〝足利〟の何某かが立つであろうということには、疑いを持たない。

むろん、三好三人衆はじめ、義輝を討つ、と決めたときには、向後のことを考えていた。

いや、そのために、行動に出たといってもよい。

松永弾正久秀の思惑は違うが、三好三人衆の気持には、

（平島公方を……）

という気持があった。

阿波公方、ともいわれる。十一代将軍義澄の子で、義稙の養子になった義冬の子、義親（のちに義栄）のことだ。

義稙ははじめ義材、のち義尹と改名したりしているので、わかりにくいかもしれないが、義稙は十代将軍だった。

九代義尚の後を嗣いだのだが、細川政元らのために廃立されて、大内義興を頼り、復職したが、間に義澄が十一代を宣していたので十二代となった。

だが歴史学の数え方ではこれを十二代に数えず、かれが細川高国の専横を避けて淡路に走ったあと、将軍職を継いだ義晴（義澄の長子）を十二代数とする。代数を人数に合わせるならそういうことになる。

義稙が〝島公方〟と世に言われるのはそうした事情からだが、この義稙に養われた義冬には、

（是が非でも将軍職を）

という悲願があった。

義輝と三好氏との間が、長い間、敵対関係にあったのは、そうした裏の事情が存在したのである。

義冬は阿波の平島に移ってから平島公方という名で呼ばれた。また阿波公方とも、世間は呼んだ。

この義冬の悲願が、

(わしが駄目なら、せめて、わが子を)

という気持になったのも当然だが、この義親を奉戴して将軍に据えることが、保護者である三好一族にとって好都合だったのである。

将軍職へ悲願の炎を燃えたたせる者と、実権を握りたい者と――

この公武の欲望の合致が強力な連携をなしたのが、このたびの、

〈公方討ち〉

だった。だが、松永弾正の気持は違う。

(平島公方は三人衆と結びつきが深すぎる……)

三人衆はともかく、三好一族だ。

どこかで長慶と血がつながっている。弾正は権勢があるとはいえ、長慶の家老の身分にすぎない。

したがって、筋目からいえば、長慶亡きあと(事実上は死んでいるのだが)三好家は長慶の養子義継が継ぐが、これは、弾正久秀の自由になる。

ところが、平島公方義親が将軍になれば、弾正の地位はずいぶんと下ることになる。

義輝の場合よりも悪くなるかもしれない。義輝と長慶は和睦して仲良くなっていたから、弾正も陪臣ながら、検断職として、かなりの権力を握れたが、平島公方は三人衆と仲がよい。

三好家の本貫の地たる阿波淡路を出て、長慶と弾正の本拠は大和に移ってから、久しい。

平島の義親との親しみはないから、三人衆は新公方の直接家来になっても、弾正は依然として陪臣の域を出ない。

これでは、何のために、謀略に謀略を重ねて地位を固め、義輝を斬るまでしたのかわからなくなる。

(やつらの思い通りにさせるものか)

弾正久秀は、賛意を表しながら、表面はあくまで、〈三好修理大夫(長慶)おんために!〉

というスローガンの徹底化を計った。

実は長慶は死んでいるのだから嗣子の義継の為に、ということである。

つまり、三人衆に対して、あくまでも、三好の正統は長慶――義継であることを認識させ、平島公方のもとに勢力結集しようとする三人衆の思惑を砕こうとした。

もともと、弾正には統率力があるし、やりかたも強引で、それは充分な計算と、長年の政治的駆け引きの巧みさによるものだが、その辣腕ぶりについては、イエズス会士のルイス・アルメイダもこういっている。

――城主弾正殿は、才智を有していて、三好殿や公方殿の臣下でありながら、服従するかに見せて、おのれの思い通りのことをやらせているのである――と。この四月に多聞城に伺候したときの報告書で、かなり的を射た見聞記である。

外来の異人にこう見えたぐらいだから、三人衆はとっくにその点を憂慮していたに違いない。

平島公方の擁立とおのれらの権力把握にとって、弾正と義継の結びつきは、最も障害と見えた。

「切り離さねばならんな」

日向守と下野守は相談した。

「弾正はのさばりすぎておる」

弾正久秀のほうでも、それを感じていた。

(義継の気持を、おれに引きつけておかねば……)

義継は長慶の弟十河一存の子である。凡庸の育ちで、長慶は実子筑前守義興の死後世嗣として子にしたのだが、その凡才に失望して、すっかり世をはかなんでいたといわれる。

これを進言したのも久秀で、充分計算の上のことだった。

したがって、久秀は義継にべったりで、父親のようにふるまい、しばしば、心あるものの眉をひそめさせはしたが、人情という点になると、世間の眼は甘くなるから、

「弾正どのは、まことに忠臣のかぎりなり。よしおつくしなされる」

という評判が立って、その悪心を糊塗することにすらなっていた。

弾正の謀略は、常に、人心収攬の巧みさにある。

長慶の死を知る者も、知らぬ者も、弾正の義継への態度を〝情厚し〟と見た。

皮相的に見ても〝忠臣〟の姿だし、十代の義継にしてみれば、

（慈しんでくれる）

頼母しい存在だった。

義継は四国の讃岐で育った。二年前大和に来て、この飯盛山の城に入った。本土へ渡るのも生まれて初めてなら、父を失い、母とも離れたのも初めてのことで、いかに伯父とはいえ、馴染がうすく、孤独の寂しさは、少なくなかった。

弾正はこれを慰めたのだ。義継がなつかぬはずがない。

その義継も満で数えれば十四歳、当時は〝数え〟だから十五歳。

京での公方討ちは、その耳には入れなかったが、気配は察して、

「戦さか」

と弾正に聞いている。

「さしたることはございませぬ」

と、優しく弾正は笑って、

「ちと、公方さまに席を譲って頂こうと思いましてな」

そんな大人の言いまわしが義継にはわからない。

凡庸な者は、ある意味で始末が悪い。納得させるのに手間がかかる。義継の〝義〟の字はいうまでもなく、左京大夫に任官するに際して、将軍義輝にもらったものだから将軍が憎くはない。

「何ごとも、そもじさまのおんためでござる」

「……」

「この弾正めは、朝な夕な、ひたすらに、そもじさまが、健やかに御成長のみぎり、天下をその御手に握られることをのみ、念願しておるのでござりまする」

両手をひしと摑んで、涙を流さんばかりに言われると、少年の義継は、そんなものか、と思って、

「爺、うれしや」

と、破顔した。

父一存が巨軀だったから、義継も十五歳とは見えぬ、立派な体格だが、頭は幼い。

弾正久秀のような狡智の塊りから見れば赤子の手をひねるようなものだ。

がらは大きくても、幼な顔が残っている。頭があまりよくないだけに、顔にきびしさがない。

淋しいかげりは、年増女につけこまれそうな弱さになる。

義継のそんな姿は、

（おもちゃさえ与えておけばいいのだ）

と、弾正久秀に甘く見させた。

洛中の猛火も漸く治まった三日目、久秀は大和飯盛山城に戦勝を告げるべく戻っていった。

(三人衆はなんのかんのと理由をこしらえて行こうとせぬが……それならそれでよいわさ)

いまは三人衆それぞれに地盤を作るのに忙しい。長慶がすでに死んでいると知っているだけに、世間をとりつくろうために飯盛山城へ行くのは阿呆らしいという気持。とともに、

(公方を討ったのだ、もう恐いものはない)という思い上り。

弾正久秀は馬を走らせながらうすく笑っていた。

(そうはさせぬぞ)

術(て)はある。

(まず……新公方に立たせぬことじゃナ)

天文九年生まれの平島公方義親は数えで二十六歳になる。義輝は義藤といった十一歳のとき、将軍に任じられたのだから、年齢に不足はない。むしろ遅いくらいだ。

義冬と義親の焦りもわかる。

だが――

(阻んで見せるわ)

〝長慶〟を利用するのだ。

義親の公方宣言は、京に出なければ意味をなさぬ。そこには、三好長慶が姿をあらわさないでは世人の疑惑を招く。

よくも悪くも、長慶は、現在、天下第一の実力者なのだ。

桶狭間で東海の太守今川義元が信長の奇襲にあって首をとられたのが、まだ四年前、武田信玄や上杉謙信も、川中島の戦いをくりかえしているころだし、中国すじでは、さしもの大内氏の勢力が崩壊して毛利元就がのし上ってきたところだ。

群雄漸く、各地に興るといったふうで、決定的な天下人の出現を見ない。

実力でもあり、地ノ理からいっても、門地からいっても、

〈三好修理大夫長慶〉

の存在は大きかった。

この大物が〝生きているにもかかわらず〟姿をあらわさないでは、三好三人衆の庇護を受けて立つ足利義親の将軍宣言は価値をもたない。

(よし、いつまでも長慶の遺体を隠しておくことだ。庶人に喪を知らせぬ、そして時間を稼ぐ)

それが、どれくらいつづくか、やってみねばわからぬ。

が、弾正久秀の自信を強めたのは、

(彼奴を利用すれば!)

ということだった。

(――果心居士の幻術が役に立つ……)

そう思ってにんまりした。利用できるものは馬の尿(いばり)でも利用する。それが弾正久秀だった。

「勝ったか」

義継の耳には、早馬で戦勝は報じられている。

「弾正は戦さに強い」

義継は喜んで、待ちあぐねていた。

がらが大きいだけに、早熟で、侍女などにはよく手を出した。

それもいささか、分裂症気味なところがあり、突発的だった。
目にあまる行状なので、医者が診たが、とりたてて狂気の風もない。女を与えると、幾夜も床を同じくしても手をつけない。そのくせ、ふっとその気になると、家臣と謁見中でも、食事中でも、かまわぬ。
夜昼わきまえず、ところきらわず、その場に女を押し倒す。
そんなところを見ると、義継には狂気と呼べる脳の異常があるのではないかと思うのだが、日ごろの振舞には、別段のことはない。
強いていえば、突発的な色情狂なのか。
いまもそうだった。
弓を引いていた。雨があがって雲の流れが早く、爽やかな緑の匂いがあたりにこめていた。
義継は垜に向かって弓弦を高々と鳴らした。
少年とはいえない弓勢である。
「角に入りましてございます」
控えた小姓がいう。
矢筒を膝に立てている。一本ずつ手渡すのだ。
ひょうッと、矢羽が風を切って飛ぶ。ぶつッと的に突き刺さる。爽快である。
義継はうすく汗ばんでいた。
初夏だ。雨があがって陽がさすと蒸し暑くなるだろう。
また矢をつがえ、きりきりと引きしぼった。
そのとき、雲が破れて、かっと光った。鏡に陽を映したような、強烈な眩しさだった。

義継は手をゆるめ、顔をそむけた。その視界に、塀ぎわに控えた侍女の姿が入った。
三人の侍女が、慎ましく、坐って控えている。老女と乳母は讃岐から供してきた旧臣である。
若い女は先ごろお目見得したばかり。義継はろくに名もおぼえていない。
乱雲を破った陽が、仏画にあるように、斜めに光りの束をおとし、木ノ間洩れに幾筋もの斜光がさしかけて、その中に、娘の顔が照り映えて見えた。
「……」
義継の手から弓が落ちた。
陽光の中の娘の顔が、姿態が、この若者の色情に敏い部分を突然、刺激したのであろうか。
娘が、何かをしたわけではなかった。少年から青年への成長期にある若者の、未成熟な部分と、異常に発達した肉体の部分とが、摩擦を生じて、情欲の呻きをあげたように――義継は紅唇をふるわし、何やらぶつぶつ呟いて、侍女の方へ真っ直ぐ歩いて行った。
顔には冷たいあぶら汗が浮き、眼が異様に光った。狂人のそれである。
侍女たちは何か御用かと思い、平伏した。
柔らかい肩を、ふいに摑まれた。
そのときはまだ義継がどんな病的な状態になっていたか、仕えたばかりの娘の知らないことだった。
「おたわむれを」
我儘な主人の、気まぐれな行為くらいにしか思わず、
頰を赧らめてふり仰いだ。
そうした羞じらいは、しかし、かえって義継の兇暴な発作的欲情をあおっただけである。

「よいぞ」
と、義継は言った。
言いざまに、その場へ押し倒し、
「あっ、何をなさいます」
娘も仰天したが、老女たちもそのときになって、はっと気づいた。
（またいつもの狂気が！）
と思った。
老女と乳母はおろおろして立ち上った。
「いいぞ、よいぞ」
義継は女にのしかかり、両手をおさえようとする。
「いけませぬ。何をなされます」
真っ蒼になって、娘はあばれた。
恐怖で顔がひきつった。
十四や五の少年と思っていたので、まさか、その行為が大人の性衝動を意味していたとは思いがけなかったのだ。
その抵抗に義継は怒るよりも、おどろいたようであった。
「許す」
と、言った。
義継のような育ちかたをした者には、侍女が抵抗するというようなことは、意外すぎて、不思議なほどだったのであろう。

抵抗しないでもよい、と教えてやったのだ。
性的なこの道徳規準が、義継にはなかった。思いのままになった。もっとも、この時代、道徳は乱れ、後世ほど、秩序のための一夫一婦制は、それほどきびしくはない。あったとしても、小地域の、たとえば村単位、町単位の秩序、大家族制からくるそれにすぎない。
したがって、三好一族の権勢のもとに、我儘に育った義継には〝欲望に耐える〟という訓練がされていない。
おのれに従わないのは、許されていない、という錯覚による抵抗、というふうにしか受けとれない。
おめでたい男というしかない。もっとも、若い。
がらが大きくて力があるから始末に悪いのだ。
「許す、許す」
連呼しつつ、女を押さえこむ。馬鹿力で、四肢の自由が利かぬようにし、下腹部をまさぐろうとする。
女は悲鳴をあげた。殺されるような声をあげた。耳をつんざくようなかん高い声である。
「あの声は」
渡り廊下へせかせかと歩いてきていた傅佐（お守役）の中込藤左衛門が、足をとめた。
そこへ、老女と乳母が転がるように駆け寄ってきて、
「あ、中込さま、和子さまが、大変でございます」
「なんとしたぞ」
「萩乃へ乱暴を……」

「またか、悪い虫が出たか」
はげしい舌打ちを聞かせて、藤左衛門は、
「虫じゃ、虫のせいじゃ、困ったことよ」
「如何いたしましょうか」
「わしがお諫めする」
そう言ってまた舌打ちした。
いま、弾正久秀が戦時の報告に戻ってくると、先触れの使者が来たところなのだ。もうその馬の足音が聞こえるほど近くまで来ている。
三好一族の興亡を賭けた大事の戦さの間に、お世嗣ぎの義継が侍女を犯そうとしていたなど、(いかに病癖とはいえ)お守役たる自分の立場がなくなる。
讃岐にいるころから、名医をもとめていたのだが、これは単に病気ではなく、気質からきた性癖というほうが近い。
藤左衛門が駆けつけると、もう義継は、萩乃の裾をかきわけて、膝をこじあけようとしていた。
「和子(わこ)!」
嗄れ声で藤左衛門は怒鳴りつけた。
「和子!　何をなさる、和子!」
帯に手をかけると、強引に引きおこした。
「放せ」
「なりませぬ」

「放せっ」
「松永どのが、参りまする」
この言葉は効目があった。
「なに、弾正が?」
「はい」
「弾正が……弾正が……」
硬直したように、義継は身を固くし、その手から萩乃が脱け出したのも気がつかないようだった。
瞠目していた眼を、はげしくまたたきし、藤左衛門を振り返ると、
「——何をしている?」
いぶかしげに見つめた。
まるで、眠りからさめたときのような眼つきであり、表情だった。
萩乃が泣きながら、走り去るのも無感動に見送っている。
「和子……」
さめたのだ。藤左衛門はほっとした。弾正やその他の者に、自分が傅育した和子の狂態を見せたくなかった。
むろん弾正は知っている。目のあたり、見たこともある。が、このふた月ばかり、その症状は出なかった。
藤左衛門は、もう治癒したのだと、弾正を言いくるめていた矢先きだったのである。
ほっと老いの胸をなでおろさんばかりで、
「和子、松永弾正どの、ただいま参上、京にての公方討ち、戦さの模様を」

「おお、待ち兼ねた」
義継は破顔した。すっかり、もとに返っていた。
「では、まず着替えをなされて」
「弾正は首を幾つあげたかな」
子供っぽい表情に還っていた。
弾正はしかし、その日の狂気を老女から聞いている。老女には手を回してある。
(女か……なんとかせねばなるまい)
(病気といっても、あの発作は、色情狂のそれだ)
松永弾正は義継の若さを思った。
(あれだけ、何人もの女を抱きながら、一人の女に熱中できないのは、どの女にも満足できなかったからにちがいない)
その女を与えてやることが義継を完全につなぎとめることになる。
(それには、あの女しかない!)
夕月を捜しだすのだ。
弾正は義継に一応の報告を済ますと、長慶の名による感状や引出物などの下賜の手配その他要用をてきぱきと指図した。
長慶は去年死んでいる。したがってその後の長慶の署名による古文書はみんな偽書ということになる。
(夕月を捜せ)
弾正は指令を発した。

洛中洛外はむろん、畿内五ヵ国の要所には厳命を伝えさせた。街道に木戸を設け、町衆から村は庄屋や河川の舟着き場など要所をおさえておけば、抜け出せない。
むろん、
〈前公方の寵妾〉
としての追捕令だ。
前公方を悪虐非道と罪名をかぶせた以上、それは不思議ではないが、北ノ方は無事実家に帰しているのだから、筋が通らない。
ところが、こうした場合、北ノ方は近衛家の姫という出自が、罪を免れさせている。随分いい加減なものだ。
(こんどこそは捕えてくれるぞ)
弾正はほくそ笑んだ。
夕月への想いは、目的のためにきれいにすり替えられている。
追捕への執念は、目的を換えただけで、強化されたのである。
弾正の狡智は、
(毒を以て毒を……)
制することだ。
卑劣な手段を執るに吝かでなかった。
(卑劣という誹(そしり)は、弱小者の愚かな遠吠えにすぎぬわ)
と、笑いとばした。
(みみずのたわごとだな)

とも言った。
強い、ことが正義であり、したがって勝ちさえすれば、それが正しい証明だとして疑わなかった。
(乱れた世に、なんの神も仏もあろうぞ、勝つことだ、人間の棲むところ、常に争いはある。そのたたかいに勝つことだ)
虚言も瞞着も、勝つための手段であり、敗者はおのれの弱さを糊塗するために卑劣だとか不正だとか、罵るにすぎない。
(おれは勝った!)
弾正はうそぶいた。
(さらに、勝つ!)
天下を、この手に握る。名実ともに、だ。そのためにも、当分は義継を自家薬籠中のものとなす。
夕月という女は、絶対必要だった。

「儲け損なったぞな」
美沙は口惜しそうな顔をした。
夕月追捕の高札を見、団六から小侍従の一件を聞いてからである。
団六も思いだすと、口惜しくてしかたがないから、夕月のことを話したのだ。
すべて、罪は城之介にかぶせた。
(夕月を殺せば砂金を持ちきれないほど進ぜましょう)

と言った小侍従の言葉は、むろん伏せた。死人に口なしだ。城之介があらわれた時は、口をひらかせずに殺す。
御所討ちの騒ぎにまぎれて、夕月をもう少しでモノにするところだった、というふうに、脚色したのである。
「御前も顔を見たら、おぼえておろうがの、あの南蛮屋の梵天丸にいた女ぞなもし」
「ふうん、あの……」
悪口が出かけたが、公平なところ容色では勝てない。女の自分の眼から見ても、夕月の美しさは、引き下げようがない。
「城之介をつかまえたら、夕月も居るのやな」
「さよで」
「夕月のところに城之介が居るのかえ」
「そういうわけで」
「ほなら、何をぐずぐずしとるんじゃ、早よう捜しに行きな」
伊予御前といわれる美沙は、城之介に逃げられて、
(よくも、私を馬鹿にしたな、どうしてやるか、おぼえておいで)
無念の歯がみをしていた。
女が男に逃げられるなど、どう見ても恰好がよくない。子分たちのてまえもある。しめしがつかない。淫蕩な女首領という事実はしかたがないとして、惚れた男に逃げられるなど、(それもただの一度も抱かないうちに)美沙に魅力がないことを意味するではないか。
女にとってこれ以上の屈辱はない。

いわんや、村上水軍の流れを汲む女首領として荒くれ男たちの羨望を一身に集め、君臨してきた美沙である。

（草の根をかきわけても）

城之介を引きずって来て、みんなの前で、犯してやる。それからなぶり殺しにする。

（そうだ、それがいい）

美沙はその思いつきに、にたりとした。淫靡で残忍な思いつきだった。

（まず、夕月を矢太か団六になぶらせるのや、誰でもいい、みんなの前で、それを城之介に見せつける。その次に、私が城之介を押さえつけて、夕月の前で、散々、楽しんでやる……）

そのさまを思うと、ぞくぞくしてきた。嗜虐の快感であり、美沙のように男に馴れた肌は、他人目があるほうが燃える。

（そのあとで、城之介を殺す。夕月の前で、指を一本一本切り落とし眼玉をえぐり、首をノコギリ引きにしてやる！）

美貌の若者を弄んで、未練なく惨殺すれば、子分たちの喝采と心服は疑いない。

美沙は貪婪だった。

色にも欲にも、人一倍、希求度が高い。

所詮、人間の本能に根ざした欲望には限りがない。色に溺れれば外的制約か、内的には克己心がないかぎり、止むことがない。

社会の密度の濃さが、人間にはおのずと限界を与えているがゆえに、ほどよく日常生活を圧えているにすぎないから、乱世にあって、奔放な盗賊の暮らしをほしいままにしている女にとって、制約するものは何もない。

役人の襲撃と、子分の裏切りと、その二つさえなければ、夜昼問わず何時間でも何日でも、体力気力がつづくかぎり、性行為を楽しめるのだ。

新御所炎上の日から、かれらは洛北声聞師(しょうもじ)村をひき払い、八坂神社に近いある屋敷に移った。そこは前から目をつけていたのだが、御所侍の結城なにがしが女を囲っていたところで、あの夜のどさくさまぎれに、結城と女を殺し、加茂川に投げこんで隠れ家とした。

瓶割り宇平という力自慢だった。御所に火の手があがったのを合図に、

「御所からの使いでござります」

と、宇平が門前で呼ばわって女と抱き寝していた結城を叩き起こした。

帯しろ裸で飛びだしてきた奴を掛矢で一打ちに頭を割り、飛びこんで、女と召使いを打ち殺した。

盗賊にとって、世間の混乱騒擾くらい都合のいいものはない。

この夜も、かれらの収穫は莫大だった。声聞師村の蓆小屋では盗品の隠し場所がなかったのである。

この屋敷は裏が加茂川に望んでいるし、五条大橋や三条の橋ものぞめるから、いざという場合、役人などの襲来がわかる。それに、盗品を川で運べるという利点もある。

美沙がいま抱いているのは、義輝の寵童、摂津糸千代丸だった。

劫火と血臭の地獄から女形して脱出した糸千代丸には、その美々しく生まれついた少年の乱世に於ける宿命のように、闇の大路小路に、牙が待ちかまえていた。

乱世では、身分ある者、資力に富んだ者にいくぶんの道徳性が残されるだけだ。

弱者を襲うのは野盗のたぐいばかりではない。農民も町人も、日ごろ生活苦をかこっている者

は、こぞって、加害者にまわる。
　もしも糸千代丸が、洛外に逃げたとしても、堺までもたどりつけば別だが、田野をうろうろしていれば、その若さと美貌は、所詮飢えた淫獣の爪をかけるところとなったろう。たとえ、その気がなくとも、
（金になる）
　価値があると見れば、手籠めにされるのは必定だった。
　糸千代丸にとって、美沙の一団に襲われたのは、むしろ幸いだったかもしれない。
　かれらほど〝売り値〟を知っている者はないからだ。それに美沙の妖艶さも捨てたものではない。
「糸千代……」
　甘い声で呼ぶ。
「はい」
「愛しい！」
　うつつに言いながら、美沙は少年の唇を吸った。
　糸千代ははじめからさからわなかった。荒くれ男たちに捕まり、
「やあ、こやつ男じゃ」
「稚児だの、うふっ、愛らしげな顔をしちょる」
　被衣を引き剝かれて抱きすくめられると、糸千代丸はもう眼にいっぱいの涙を浮かべて、花のようにふるえていた。むしろ男に生まれてくるよりも、女に生まれるべきだったかもしれない。
　荒くれた連中の間で、暫く糸千代丸の取り合いで争いがあったほどだ。

「なかま割れするより、いっそ、おかしらの土産にせいや」
と、仲裁する者があって、美沙に献上されたというわけだ。
「男かえ」
　はじめ、美沙は眼を瞠った。
　それから、すぐ引き寄せた。
　糸千代丸という名は、義輝よりも、北ノ方が命名したというのだが、まことに繊細な美童にふさわしい。
　同じ寵童でも、美濃屋の小四郎には凜々しさがあるが、糸千代丸は容姿といい、動作といい嫋嫋として、男の庇護心をかきたてる。
　美沙のような、男の強さを持った女首領には、興味をかきたてられる少年だった。
　美しいものを摘む——その残忍な征服欲、優越感である。
　糸千代丸は、女体を知っているとも思えないのに、美沙と肌を合わせると、結構、男のつとめも果たした。
　羞恥心で全身を真っ赤にしながら美沙のするままになり、情感を盛りあげるだけの技巧を心得ていた。
　それは普通の女にしてみれば、かなり嫌味な面にちがいなかったが、美沙の淫欲な淫情を満足させてくれるものだった。
（夕月どの……）
　糸千代丸は、豊満な女体に翻弄されながら、
　すがるように、その面影を瞼のうちに描きだしていた。

（ああ、嫌！　こんな女……でも夕月どのだったら、ああ、どんなにいいかしら……）
ひたすらに夕月の顔を思い出し、優美な姿態を想い、そこに没入しようとした。
美沙の分厚い肉感的な唇が、呼吸もできないほど、唇をふさぎ、動物的な逞しい舌が、かれの感情を無視して、歯をこじあけ、ぬめりとすべりこんでくると、現実の官能の疼きに、思わず声をあげた。
糸千代の想念はかき消され、現実の感覚の中で、ひしと美沙の肌にしがみついている。
「どうだえ、いいだろう、え？　どう、どう」
口と口は粘液の糸をひき、美沙もたかまる歓びに、声が嗄がれていた。

旅路

夕月追捕の布告に、もっとも驚いたのは、南蛮屋十兵衛だった。
「夕月が……どうして、追われる身になったのか」
生きていたことを知ったのは、命からがら堺へもどってきたときだったが、十兵衛には南蛮屋の経営と梵天丸を失ったことの損失の穴埋めや、何かと重大問題が山積していた。
あの鳴門の潮流に巻きこまれかけて、漸く助かったのだ。八丁徳も九死に一生を得ている。
南蛮屋にとっては、莫大な損失だ。が、
「なァに、すぐ儲けるわさ」
と、十兵衛の意気は衰えなかった。
「命さえあれば、梵天丸の一艘や二艘どういうことはない」
豪語した。
十兵衛の場合、そうした言葉は大言壮語ではない。かれの今日までの経歴がそれを示している。
また今日の生還も、
「やっぱり南蛮屋はんや」

「よう生きて戻んなはった」
「叩き殺しても死なへんわな、ルソン沖でも何度も死に損なったちゅう話を聞いたことがあるわ」
十兵衛の不死身さは、堺でも信じる人々が多かった。
だから、やはり！　と思わせた。
足に傷を負っていたが、日増しに快方に向かっているし、再起は時間の問題だった。
特に十兵衛に朗報だったのは、
〝新式舶来鉄砲百挺の代金〟
を、松永弾正が払ってくれたことである。
「ともかく半金」
は、十兵衛の生死にかかわらず南蛮屋に届けてくれた。
これには感謝せざるを得ない。
それだけ弾正には必要な鉄砲だった——ことは、読者のすでに知るところだ。
あの鉄砲が足利将軍と御所侍らを畏怖させ、奇襲を完全な成功に導き、望外のことではあったが、
（三人衆をも驚かせたのは疑いない）
主導権を奪うことが出来たのも鉄砲のおかげだ。
十兵衛の生還を知ると、弾正は即座に後半金を届けさせている。
これは、
〝地獄からの生還〟

を祝福する意味にも、十兵衛には感じられ、再起への力強い贈り物といえた。
その松永弾正が、
（夕月を追っている！）
深い事情はわからないが、
（弾正が惚れているようじゃな）
とは感じた。
堺に於ける夕月と城之介のことは、手代や、町衆などから聞いている。
京に於ける、義輝の討死の報も夜のうちに堺の納屋衆に知れわたっていた。
納屋衆たちは早速、寄合いして祝賀に何人かが参上する。実際には足利将軍の権威といっても堺にまでは殆ど及んでいない。
間に三好一族というものがクッションの役をしている。松永弾正がその代表的な存在で、堺の利益の代弁者でもあったのだ。
「これからは弾正さまの世の中になる」
十兵衛にとってこの戦勝はさいさきよかった。
南蛮屋の発展にも悪かろうはずはない。
だが、一つ——心中に矛盾を感じていた。
（夕月が公方の寵妾になっていたとは知らなかった……それだけの理由にしては、弾正は執こすぎるな……そんなに欲しいものなら、おれの手から渡してやろう）
夕月に会いたかったのも事実である。
夕月の軀は、平戸で十兵衛が買いとっている。そのことをいまさら、とやかく言う気持は、十

兵衛にはなかった。が、感情的にはやはり、しこりが残っている。
　このまま、弾正に渡してしまうのは残念だった。
　といって、弾正の怒りを買うような真似はしたくない。
（おれの手で、夕月を捜索をする。事前に弾正の耳に入れば献上するために捜していたといえばよい）
　弾正は、夕月と十兵衛の仲は知らないはずだ。
　同じ梵天丸で来たよしみくらいにしか考えまい。
「夕月と城之介を捜せ」
　南蛮屋の手代たちから出入りの者など、手わけして捜させた。
　洛中から逃亡して何処へ行くか。堺に戻ってくるとはかぎらない。が、公方の寵妾と知れれば洛中にいられまい。
　城之介と夕月が堺に舞い戻ってくることは、考えられないことではなかった。
　二カ所の橋木戸と舟着場に張り込ませた。
　その網にひっかかった女がいる。
　九州の肥前から来た船の客だった。
　夕月が乗っているはずがないが、ともかく他国者の出入りの検査が厳しくなったので、ひっかかった。
「何処へ行く？」「この町に知り人があるか？」
などと問われて、
「城之介という人を尋ねて来ました」

　その女は言った。
　まだ少女の域を出ない。肥前長崎の者で、おつる。同行はずんぐりむっくりした五十がらみの法体で、
「この娘との続柄を申そうなら、左様、父親がわりというところかの」
「御坊の年齢なら、祖父がわりちゅうところや」
「何を吐かす。五人力じゃぞ。わいらのようなへなの細首ぐらい、片手でねじきってくれるわ」
　和尚は赤樫の握り太な八角棒をびゅっと一振りした。
「えらい坊主が来よった」
「城之介の知り人ちゅうて。南蛮屋に誰か知らせろやい」
　ひとまず浜の小屋にとどめて、南蛮屋に注進すると、十兵衛はぎろりと眼をむいて、
「おつる……城之介をたずねて来ただと？」
「おつるという娘が、肥前から、はるばるたずねて来たそうだが、徳、お前はそんな娘のことを聞いたことがあるか」
「ええと……おつる、おつると、へい、聞いてま。長崎でっしゃろ、なんや死にかけたところを助けられたちゅうことでんね」
　そんな仲なら、知らぬふりもできない。それに利用のしかたによっては、城之介をおびき寄せることが出来よう。
「連れてこい」
　と、南蛮屋十兵衛は言った。
「丁重にするんだ。城之介の女として扱ってやるがいい」

「へえ、あの娘はいいですがね、へえ」
「どうした」
「うるせえ坊主がついていますのや」
「坊主ぐらい、どうということはないやないか」
「へ、それが尋常の坊主やおまへんねん、大入道の、力の強そうなやつで。あン坊主め、精進どころか、山犬の肉喰うて般若湯(酒)かっ喰うとるに違いね」
「まあええ、人のことやないか」
「ほうやけんど、あきまへんね、あの娘に手ェ出せしまへんね」
「阿呆、そないことを考えるやつがあるか、阿呆ンだらめ、早よ行てこい」
「畏って候」

一行がくる間、十兵衛は考えた。

はるばると九州は肥前の長崎からこの泉州堺までやってくるところを見ると、落ち合う約束があったに違いない。

(可愛い娘だというから、城之介の女だろうな)

十兵衛がにやりと独り笑いを洩らしたのは、夕月のことを思いだしたからだ。

(城之介はこれで夕月にべったりという工合にはいかなくなるな)

梵天丸の爆発以来、かれらと別れ別れになってしまったのは運命の皮肉だった。堺へ戻ってくるまで、城之介と夕月が生きているとは思っていなかったのである。

生存を知ったときは、喜んだ。

が、すぐに不信がきざした。

(なぜ、堺から姿を消したのだ。おれが生還すると聞いたからではないか……)

そう疑い出すと、想像は悪い方へとばかりひろがる。

夕月の船中での態度から見ても、城之介との仲は、ほんものらしい。

鳴門の渦潮に巻きこまれないで九死に一生を得た思いが、二人をますます固く結びつけたことは想像に難くない。

(まあ、そんなところだろう)

南蛮屋十兵衛らしく、豪放に笑って忘れてしまえばいいことだった。それくらいの器量はあるつもりだ。

平戸での夕月の身請けの銀子などケチなことは言わない。

(女など、どうせ、その程度のものだ。男は銭の生る木としか思うとらへん。そらァええわい、承知の上や。あかんのは、城之介や)

(男は女と違う……)

南蛮屋十兵衛のように、大海原を乗りまわし、板子一枚下は地獄へまっしぐらの稼業に、男の生甲斐を感じている者には、

(男というものは)

という特別の感情が強く働いている。

それが、誇りでもあるのだ。

如何なる場合でも、男は男らしくなければならなかった。また、それが、この乱世に生きる、唯一の方法であり、絶対的な価値だった。

男にとって愧ずべきは、卑劣さ、怯懦、そして逡巡躊躇など決断力のなさだ。

殊に〝裏切り〟は許せない。
たとえ、以前はどんな仲であろうとも、夕月の身柄は十兵衛が買いとったことは百も承知の城之介が、夕月をさらって逃げるなどは許し難い。
(おれが生きて帰ってくることを知っていたとすれば、尚更だ。弾正とおれを敵にまわせば、どんなに恐ろしいか)
若気のあやまちと笑って見すごしてやるには、事が大きくなっている。
足利将軍を討った三好一族の家宰だ。三好三人衆に匹敵するだけの力を持っている松永弾正久秀である。
その久秀が近畿一円に城之介と夕月の捜索を命じているのだ。
十兵衛との三角関係では、もはやなかった。
(城之介は、あのことをまだ知らぬようだな。弾正の方でもそうだ。とすると、おれにとっては、最も好都合というわけや)
鉄砲百挺で弾正に恩は売ってある。
こんどの公方討ちの成功が、
(あの鉄砲のおかげや)
ということは、誰もが認めるところだ。げんに、三好三人衆の一人、岩成主税助が、わざわざ堺に来て、
(能うかぎり新式鉄砲を買いたいが、舶載のものがあるか)
と、言い、
(前金でもよいぞ)

とまで頼みこんだほどだ。
(かれらの野心が失せぬ限り、おれの商売は繁盛するというわけだ)
堺の発展も、そのおかげだ。
だから、堺の納屋衆は、特定の武将のものにはならない。長い間の関係から、三好家とは深い関係があるが、それすらも、儲けしだいでは、どっちにでもつく。
(わてらは商い人やさかい)
この自由市としての商人の立場も、巧妙に両天秤をかける方法がある。
とつおいつ考えているところに、おつると和尚が、若い者に伴われてやってきた。
(……ほう、これは美い女になるぞ)
十兵衛は一目見て思った。
まだ青い。
垢抜けしていないが、からだつきも目鼻立ちも悪くない。
(城之介め、まだ手はつけていないな)
案外だ、と思った。
「おぬしが南蛮屋どのか」
割れ鐘のような和尚の声である。
「十兵衛どのかい、世話になる」
舟人の大声は胴間声という。潮風の中で怒鳴りあうから、自然、咽喉がふとくなる。
が、その胴間声に馴れた南蛮屋連中も驚く大声であった。
(この和尚の寺の鐘はとっくにヒビが入っているじゃろうな)

十兵衛は呆れるような心持ちで、二人を迎え入れた。
「城之介の知り人ならわしにも知り人じゃ、どうぞ、気楽にしとくなはれ」
城之介の安否をたずねられると急に笑顔を消して、十兵衛は首をひねってみせた。
「わしも手を尽くしているのだが行方が知れん。実は、いまや天下人ほどえらい松永弾正というお方が、布令を出してさがしていなさる」
「まあ、城之介さまを」
「うむ、城之介と、そのある女をな」
「……」
「わしもよくはわからんのじゃ、実は船が沈んでな。ま、その話はゆるりとするが、何処にいるかかいもく見当もつかぬ」
おつるの顔にあきらかに失望と不安の色が浮かび上った。
そのおとめの動揺は、十兵衛の胸にあるこころよい刺激となって訴えてきた。
鋼(はがね)のような強靭な十兵衛の〝男〟には、こうしたもろい女の姿に、敏感な反応を示すのである。
ある種の庇護心であろうが、ぐっと抱きしめてやりたい気持の中には、あらあらしいけものの血がうごめいていることも、否定できない。
少女の肌が、まだ蕾の可憐さで、不透明な蒼さには、葱のようないたいたしさと、むさぼってみたい魅力がある。
考えてみると、十兵衛は、平戸を出て以来、女のからだには触れていないのだった。
おつるが、堺に来ているなど、京の城之介は知る由もない。ひたすらに、夕月の肌に溺れていた。

数えて見ても、そう日数は経っていないのだが、苦しみが少なくなかっただけに、年余も、それ以上も経っているような気がした。
夕月の肌は、飽きるということがなかった。男を飽きさせない。
男の欲望というものが、どんなものか、よく知っている。肌を売る商売は、いつの間にか、それを会得させていたのであろう。
哀しき習性ともいえるかもしれない。
が、そうした過去のことは忘れ、いまは、ただ、城之介との愛のるつぼに没入する。
男と女の生理は、こうして、心がひとつに結ばれて、愛欲に溺れながら、習性が頭を出すのは否みようがなかった。
夕月は、遊女の〝技巧〟を用いまいとしながら、ふっと、そうしたことをしている自分に、慄然とすることがあった。

「——城之介と女を探しだせば、恩賞がもらえるよ」
と、美沙は、男どもを集めて言った。
「みんな一生懸命にやるんだ、戦さのあとはみんな怠けていけない」
「そやかて、大分儲かったよってに」
と、矢太が口をとがらした。
「なにも、これ以上、あくせくせんかて、な」
「へえ、当分、食えるで」
と、団六も相槌を打ったが、美沙の一睨みで、眼をしょぼしょぼさせて、みんなのうしろにか

くれた。
　なんといっても、夜討ちの際の失敗は、大きい。これまでの一党の中での地位が一ぺんに下落してしまって、新参の輩下からも、蔑みの眼でみられるようになっている。
「ああ、そうかい、食えるわな。当分食えさえすりゃ、そのあとはどないなってもかめへんのか」
「……」
「儲けるときは、どないでも、儲ける。これが盗人のやりかたや。お扶持もらえる身分と思うたら大間違いや」
「──そらそうやけんどよ」
「お布令を見たろ」
「へえ……」
「この京の、洛中洛外、あたしたちくらい、城之介を知っとる者は居らんのやで」
「そらそうや」
　多勢が合点した。
「まるで摑みどりや、あたしたちのために、恩賞金が用意されているようなもンや」
「ほうやな」
　年長の玄内も頷いた。
「探すべか」
「女も一緒や、二人とも、あたしたちが捕えて」と、美沙はそこで、にこっと白い歯を見せた。
「この勝負はやな、ただ、恩賞金にありつくだけやない。もそっと好えことがある」

「へ？　どないことやね」
と、みんな乗りだした。現金な連中だ。
「松永弾正を利用できるようになる。あの堺での失敗の、詫びがかなうわけや」
　美沙は、あの取り引きが失敗したことで、大いに弱った。
　南蛮屋十兵衛のように〝海の商人〟と大きな顔をしていても、実体は、自分たちとそう変わらない。
　一歩譲って、現在は、海賊と商人の違いがあっても、昔は、同じなのだ。南蛮屋、東シナ海へ出れば、強いが勝ちの時代だ。大差はない。
　いまの身分の違いは、美沙たちに信用がなく、十兵衛にはそれがある、というだけだ。
　ちゃんとした取り引きが各大名らと出来るようになれば、美沙も、商人として、大手をふって歩けるのである。
　出自でも違えばとにかく、松永弾正も、生い立ちはわからないし、世間というものはその肩書きや名誉だけで、人を評価する。美沙も気儘を楽しむ海賊稼業から、まともな社会に腰を据えたくなっていた。
　悪の組織には、常識では考えられない力がある。
　その組織を構成する人間たちが上も下も、非常識な連中によって占められているからであろう。
　たとえば、夜は眠るもの、という世間の常識は、かれらには、お笑い草でしかない。
　男女の悦楽はよいとしても、夜は盗みの時であり、殺しの時であり、すなわち、起きて活動する時間になる。すでにして、世間の判断を狂わせる。
　こんなふうだから、一度、悪の道に踏みこんだ者は、なかなか脱け出ることができない。

悪いなかまは、常に分裂しては個となるが、水銀が、あるいは離れ、あるいは吸引し合って同化するように、この夜の生物たちは異質である健康人の側にまわることはない。
したがって、また、見ず知らずであった連中同士でも、悪の匂いを嗅ぎ合うや否や、同化するのも早い。
伊予海賊の美沙のなかまは増えていた。
意識的に、増やしたのである。
洛中洛外、浮浪の徒は多く、その中で、目はしの利いている者たちを集めた。
矢太や団六らは、したがって、譜代としての格が上った。
「お前ら、ちゃっと働かんと、ぶっ殺すぞな」
と、せいぜい威して、
「ええか、お前らが危ねいときはいつでも、わしらが助けたるで、安心して働けやい」
そうは言明したが、どうせその場かぎりのことだ。なかま同士でさえ、安心はできない仲だ。
美沙にしたって、かれらが忠誠をつくすとは思っていない。人数さえ多ければ、一つの勢力になる。目的をはたすまでの場つなぎの勢力であった。
こうすれば、城之介と夕月の捜索に全面的に力を投入することが出来る。
目的ができると、美沙はあの淫ら女が、冷水をあびたように、しゃんとなっていた。
美沙という女には、その外貌にいつも冷たいものと、熱いものとの二つの――それは、どちらも感情の極限を表わすものであったが――激しいものが棲んで見えた。
あるときは、淫奔さに狂うようになり、あるときは、さながら飢えた者の、性的不能な者の、ひたすらなる物欲の権化となる。

この一見、相反したように見えるものも、彼女のうちにあっては、燃えさかっている、女のいのちの炎が、たまたま、どちらかに噴出するにすぎない。
どちらの面も、美沙であり、その激しさの異常さという点でも、美沙という女の特殊な気質と行動を裏付けるものであった。
「大変だ」
銀三という男が駈けこんできて、
「弾正の軍勢がこちらにきよるで、隠れ家が見つかったのや」
「ふえっ、えらいこっちゃ」
みんな総立ちになったなかで美沙は、静かにせんかえ、と、落ち着いていた。
美沙の顔は、白い。蒼く冴えていた。
「矢太よ」
と、ふりかえって、
「洛中は、虱つぶしに捜したいうが、捜し残しはないかえ」
「へえ、川すじの内側には、居やしまへんね」
「とすると……」
「あとは、ここから東、南……居るとすりゃ、三条から七条の末までの東山のうちちゅうことになりま」
「一日あれば」
「へい、一日ありゃ、草の根ェしがみついていたかて、見つけ出しまさね」
「しっかり頼むわえ」

美沙は念を押すと、立ち上って身仕度にかかった。
そのあいだも、男たちは、刀をとりなおしたり、槍をかいこんで、
「さあ、河原へ逃げようで」
「三手にわかれるのや、一手は、河原へ、一手は殿して鉄砲を……」
それを止めたのは美沙である。
「戦うんやない」
「え!?」
「逃げることもない」
みんな顔色を変えた。
「弾正の手なら、恐れることはあらへんで。もう遅い。手向かいしたら損や」
「そやかて、捕まったら、みんな首が飛ぶがな」
「まかしとき」
美沙はよほど自信があるらしく刀をとろうともせず、式台へ出た。
「さ、みんな、坐るのや、刀に手ェかけたらあかんで」
半信半疑の連中は、顔を見合わしながら、腰をおとした。悪事ばかりしてきた連中にしてみれば、追ってくる軍勢の足音は、地獄からの迎えの使者に思えてしかたがなかったろう。
「——大丈夫けえ」
「あかんようだったら斬りまくるがな」
「そないなって間にあうか」
「しょないやないか、逃げるなっちゅうんや。斬ってもあかん、逃げてもあかん……」

「覚悟を決めといたほうが、よさそうやで」
「阿呆言いな、わいは、まだ諦めのつくほどに、女遊びしてへんがな」
びくびくしながらも、命じられた通りに、槍や刀双を投げ出し、鉄砲の火縄もはずしたが、しかし火まで消そうとしなかったのは、イザといえば、すぐに応戦する気がまえだ。
美沙は内心どこまで平気なのか唇もとには微笑をたたえ、眼には媚を見せて、この弾正の軍勢を迎えた。
(野盗の群れじゃ、手向こうてくるぞ)
(手向こうやつは片端から斬り倒せ、どうせウジ虫のような奴らだ)
矢をつがえ、鉄砲に玉をこめ、腰がまえして近づいてきたが、一矢も一弾も飛んでこない。
「どうしたのじゃ」
「さては、風を喰って逃げたか」
「いや、そんなはずはない」
「これは、ようお出でなされました」
美沙は満面に笑みを浮かべて、軍勢を迎えた。
殺気立った連中である。鉄砲の火をくすぶらせ、槍や刀をかまえて近づいた松永弾正の軍勢は、意外な応対に、拍子抜けして、
「——おあらためじゃ」
と、肩を張って言ったが、やはり、どこか間の抜けたものになった。
「お尋ね者が、当家に隠れているという噂ゆえ、参った。男女ともこれへ出い」

「仰せに従いまする」

「名前と生国を明らかにするのじゃ」

美沙には、その意味がわかった。

やはり、城之介と夕月だけが目的で、野盗狩りではない。

松永弾正や三好三人衆にしてみれば政権を握ったいまの課題は、治安よりも、反対勢力の擡頭を押さえることにあり、そこらの小さな野盗に留意しているひまはない。

むしろ、小さな望みの邪魔をしないことで、かれらにも貸しを作る。野盗の群れは、利用しだいで、意外なほどの戦力になることを弾正は知っていた。

自分たちが狙いではないと知ると、美沙は益々、胆がふとくなった。

「お捜しの人物は」と、言って出た。「城之介と申す若者と、夕月とやら、前ノ公方が想い女でございますね」

「それじゃ、ここに匿もうていたら重い罪科に……」

「ほほほほ、ここにいたならば、とっくに縛って突き出していたものを」美沙は嫣然と笑って、

「その男女、ちと心当たりがございます」

「まことか」

疑い深い眼で、武将は美沙を見た。

口から出まかせではない。矢太の話からも、虱つぶしの捜索が、かれらをやがて発見できるものと信じていた。

「この美沙は」と、彼女は自らの名を誇らしげに口にした。「嘘と坊主の髪をゆうたことはござりませぬわえ」

「上様にそのように申し上げるが、よいか」

「はい、どうぞそのように、両三日中には伊予の美沙が……」言いさして、急に気がついたように、

「いっそ、弾正さまにお目にかかって、わたくしの口から申し上げては如何でございましょう」

「なんと、そなたが」

これには、驚いたらしい。いまや松永弾正の権勢は、新公方が得るほどのものがある。

「そう出来れば、此方も好都合だが、上様が、お目通り許されるかどうか」

「伊予の美沙と申す女船長、かように申し上ぐれば御存知にございます。堺にては二度ほど、お目通りを」

足軽頭は、やっと得心がいったらしい。

「参れ、同道する」

「はい、ではこれより」と、美沙は立ち上って、矢太をふりかえった。間違いなく、二人を捕えろ、という意味を眼にこめた。

美沙としては、これは一種の賭けであった。

（ひょっとして……斬られるかもしれない）

松永弾正という男の底知れぬ恐ろしさは、こちらの予断を許さぬことだ。

言葉遣い一つで、どう変わるかわからない。短気とか、小心とかいうものではない。

頭の構造が違うのだろう。一つの色が徐々に変化してゆくというのではなく、赤から黒にさっと変わる。短慮の人はしばしば〝逆上〟するということがある。似ているが違う。逆上や直情径行とは違った。

常人は赤から黒になることがあっても、ふたたび、赤にもどるということはなかなかできない。徐々に、変色していって時間がかかる。弾正は黒から赤へもどるのも早い。

感情と見えて、感情的な変色ではない。素早い頭の回転が、そのことの得失を計る。感情に流されることがないのである。黒から赤へ戻るとき、かれには一点の逡巡もない。戻らねばならないから戻る。それだけである。事理の判断が明快であり、自他への割り切りが早い。

単純とは違う。懐疑しないのではない。懐疑と熟考が、感情に優先するのだ。

こうした頭脳を持つ者は、古来必ず頭角をあらわしている。

多くの常人が、感情に支配される以上、こうした剃刀のような切れ味を持つ男は、いやでもぬきん出てくる。

弾正には、人生の目的が一つしかない。

わき目もふらぬ人物くらい、恐ろしいものはない。すでにして異常である。

美沙は、たいていの男は怖れないが、弾正だけは、無気味だった。

(何もでけへん)

海の上だけで、威をふるっておれる時代ではなくなる。可能なかぎり、地上でも、地盤を築いてゆかねばならぬ。

だからといって逃げていては、

(当たるのや、あのときのことやて美沙が悪いのやない。弾正さまは、わかってくれはるやろ、あの眼で見通されとるはずやし)

当たって砕けろだ。

美沙は、弾正の城に連れてゆかれると、家来たちの待遇がそれほど悪くなかったことで、

(助かった)

と、思った。

弾正に目通りを許されたのは茶室である。

この大和の多聞城は、松永弾正久秀の手になる城として、信貴山城とともに、後世に名高い。すなわち、中世山砦より山城へ移行し、さらに近世城郭の規模を持つに至った数々の要素を見ることが出来るからである。

たとえばはじめて塁上に長屋造りを設けた。弾正の創案になるものといわれている。この種の城郭建築を「多聞造り」と称するのも、これにはじまる。

「生きていたか」

開口一番、弾正は言った。

美沙はぎくりとした。

が、この一言が、かえって、彼女の恐れをとりのぞいた。微笑でこたえる余裕を与えたのである。

「死にかけました」

「それでも生きておる」

「悪運が強いのでございましょう」

あなたさまと同じように、と言外に意味をこめて、美沙は凝っと見た。

弾正はにこりともせぬ。ゆっくりと茶筅を動かしている。

彼女を客と見て、馳走するのではなかった。

茶はおのれが飲むのである。

それだけの会話が済むと、もはや、美沙の存在すら忘れたように表情も動かさず、弾正は茶を

飲んだ。
　それから、はじめて、こちらを向いた。
「城之介がおまえの巣に隠れているという噂は、根も葉もないことと、申し開きにまいったのか」
「――根はございます」
　正直に言った。
　この弾正の眼力の前では、なまじっかな嘘は通用しない。正直に答えるにかぎる。
「城之介はいました」
「……」
「御所の夜討ちの日まで」
「ふむ」
「あの夜から、消えましてございます」
　嘘を言っている様子はない。
　弾正はむしろ城之介よりも、かれと一緒にいるであろう夕月が狙いなのだから、
（この女なら）
と、思った。
（夕月を匿うようなことはするまい……）
　色気と物欲が同居した逞しい成熟した女には、表現のしようもないほど、生気があふれている。
　脂肪の匂いが、むんむんするようであった。生気というよりも、性の気力といおうか、美沙は、女という動物感覚そのままに生きている。
　そこに弾正は、ふと、おのれの失ったものを見たような気がした。

　あるいは、異性であったがゆえにそれが見えたともいえる。
　弾正の性的欲望は前に述べたように、少ない。少ないという表現は、妥当でないかもしれない。が、少なくとも名誉と権勢を追う烈しさに比べて、比重は軽かった。
　馬車馬のように、ひたすら目的へ向かって進む、弾正の人生行路には、性を愉しむゆとりがなかったともいえる。ほとんどが、排泄作用の域を出なかった。
　美沙はそれに比べて、少なくとも、生活の半分を、性行為が占めている。
　弾正のような男の嗅覚には、したがって、そのサカリの熟れた匂いが強烈に感じられたのではないか。
「聞けば、城之介の居所がわかっているとな」
「いいえ、手がかりがあるというだけでございますが、両三日のうちには」
「――夕月も捕えたいが」
　弾正は核心に触れた。
「多分……」と、美沙は控え目に言った。「城之介と一緒に居ることでございましょう」
「……」
「あの夜、城之介が連れて逃げたとか。手下の団六と申す者が見ておりますので」
「美沙」
と、弾正の声音は変わっていた。
「鉄砲では儲けそこねたな」
　あっと、息を呑んだ。
　いつ弾正がそれを言いだすか、そのことだけが、不安だったのである。

南蛮屋十兵衛の梵天丸を襲い、舶載の新式鉄砲百挺を奪った美沙は、それを何食わぬ顔で、松永弾正に売りつけようとしたのだ。

このことは、弾正の忍者の野望によって、妙なほうにそれてしまい、美沙は〝面目を失った〟かたちで、弾正の前に顔を出せなくなっていた。

弾正のような合理主義者にしてみれば、どちらから買うのも同じだった。

美沙のほうは、どうせ盗品だから安く値切れる。それだけの違いだ。

だから、大いなる目的の前には入手経路など問題ではなかった。

非合法であろうとも、早く役に立つ。そのことのほうが、弾正を益する。事実、益した。極論すれば、あの百挺が、義輝を将軍の地位から永遠に葬り去ったといえる。

南蛮屋十兵衛が帰宅したと知って、弾正は当初の約束通りの金額を完済した。

美沙だけが、この三者の中でくたびれ儲けというわけだ。

もっとも南蛮屋は梵天丸を爆破されてしまったので、その損失は莫大ではあったが。

「そのほうの申し出た値は、ちと高かったな。あくどい儲けをしようとすると、あんな目にあう」

「申しわけございません」

「はははは、天は、そのほうに味方せなんだ」

「……」

「それだけのことだ」

人間の行動には、善も悪もない。そんな色わけは、弾正の好むところではない。

勝つか負けるか、瞞すか瞞されるか、その行為と、そして、結果だけだ。理非善悪の判断は、

ただ世間の眼に対する斟酌だけである。

「あんな間抜けたことをすれば、命がいくつあっても足りぬぞ」

「はい」

と、しおらしい。ここは、しおらしく見せるほかはない。

「南蛮屋の前に姿はあらわさぬことだな。十兵衛め、そのほうを捕えたら、文字通り木ッ端微塵にせずば、腹が癒えまい」

「——おお恐い」

「笑い事ではないぞ、焔硝をそのからだに縛りつけてな、鉄砲玉を喰わせるか、左様さ、火矢を射るかなあ」

「そのときは、上様。上様のお力で、なんとか」

「阿呆ぬかせ、おりゃ知らぬぞ。いさぎよく、吹っ飛ばされろ」

いかに男まさりの、女海賊の首領でも、

(火薬で吹っ飛ばされろ)

といわれては、落ち着けない。

冷酷な松永弾正だ。

「おりゃ知らぬぞ」と、突っぱねて、「ゆっくりと、そのときは見物させてもらうとしよう。はははは」

「上様、そんな……むごい」

「むごい? 阿呆ぬかせ。そんな言葉は、親兄弟か、義理ある仲で申すことだ。そのほう、この弾正のために何をした」

「……」

「なんぞ、役に立ったことがあるか」

「——ありませぬ。でも」

「で、あろう。おれは、義は忘れぬさ」

しゃァしゃァと弾正は言った。

「おれのために、何ぞ役に立ったことでもあれば、一臂の力を貸さぬでもないからの」

「はい。そのために、あたし」

「城之介を、いや、夕月を捕えることだ」

「必ず……」

と、力をこめながら、美沙は、麾下の者たちの手腕に祈りたい気持になった。

「上様の御手に天下が入りますように」

美沙としては、ごく率直に言ったのである。

だが、弾正の顔面にはげしく動くものがあった。

「——たわけたことを申すまい」

他に誰もいない。

が、あきらかに弾正は、他聞を憚かった。

「両三日、左様に申したな」

「はい」

「ならば、それまで、当城にとどまれ」

人質という意味か。

やむを得ない、というあきらめもあった。否定すれば、できたかもしれない。が、美沙は弾正にとり入りたい気持が強く、

「仰せの通りにいたします」

と、殊勝げに手をつかえた。

別室を与えられてから、食事を出されたが、緊張のために、空腹感はなかった。

「すすみませぬゆえ」

と、辞退した。

給仕の女は困ったように、

「お口にあいませぬか。何にてもお好きなものがあれば、調達しますが」

そういわれると、美沙は、我儘を言いたくなって、

「御酒を少々」

「かしこまりました」

酒なら、どんな場合でも飲めて、活力源になった。

商い船を襲うときでも、海賊同士で戦うときでも、美沙は、酒を飲む。ほとんど食べないで、飲む。

当時、清酒ではない。濁り酒。だから、米の飯を食べるようなもので、酒を飲む、というより〝食べる〟と言うのも、そのあたりからきている。

美沙の女だてらの酒豪ぶりは、したがって、二合や三合は、〝食べ〟たうちに入らない。その膳部を運んでくる足音を聞きながら美沙は舌なめずりした。

可能性は五分五分であった。が、二日、三日という区切りには、絶対的なものがある。その間

に城之介と夕月を発見できねば、
（どうなされるか……）
弾正久秀は、仮借しまい。
（そのときはそのとき）
と、美沙は腹を据えた。
度胸はいい。板子一枚下は地獄の荒仕事だ。荒くれ男たちを顎で使って、血風の中を走りまわるだけに、神経は図太い。
美沙は自分を理解してくれるのには、やはり弾正のような、桁はずれなところのある人物でなければ、と思っている。
毎日を、ただ大過なく、小心に保身だけを考えているような男には、自分のような女は理解してもらえない。
その意味でも、美沙のほうでは弾正に畏敬の念を抱いていた。
美沙のような女には、男というものが、極端なかたちでしか存在しない。
平凡な男は、彼女には用がなかった。
彼女を屈伏させるだけの強い男か、まるきり、彼女のペットになるような、弱く美しい少年。
そのどちらかでなければ、彼女は満足しない。常に死と一重のところにいる女は、情事もまた極端でなければ快感を味わえないのだ。
弾正とか十兵衛のような強い男、または、武将が寵愛するような美童がほしい。
城之介はそのどちらでもなかったが、まだどこやらに美童に属する稚い部分が、美沙には見えたのであろう。

酔いは、彼女を陶然とさせた。
段々、気が大きくなると、熟れた肉体が芯から熱くうずいて、誰かに強い力でぐっと抱きしめられたくなる。
目の前で給仕する女の存在が、わずらわしく感じられて、
「退っていて下さい」
と、突っかかるような調子になっていた。
女はおどろいて、瓶子を置くと退出した。
酔いに火照った肌は、動物的な喘ぎに呻くようであった。こうして、独りになるということも、美沙の生活には珍しい。誰かしら、まわりに男がいた。男の臭いに取り囲まれていた。
その慣れが、贅沢をいうようになっていたのであろう。
（誰か、この城の侍を……）
ぎらぎらする欲望で思った。
強く、たけだけしい男、自分を殴りつけ、圧えつけ、抵抗をものともせず犯してくれるような男。
そんな野獣の力がほしいと思った——。
そのころ、多聞山城の南の野を一人の老人が歩いていた。
城に向かった道である。小川に道は添っていた。夕暮で、あたりは陽のおちたあとのうす闇に蔽われている。その中を老人が歩いてゆく。
小川では、夕餉の支度なのか、一人の若い女が、菜を洗っていた。
女のからげた裾から、白い脛が見える。ふとももの半ばまで見えた。老人は、それを見ると、

足を止めた。
　その老人は、ぴたりと足をとめた。
　凝っと女の脚を眺めている。宵闇の中で、おぼろに浮いている女の白い脚には、妙にそそるものがある。
　満目、たそがれの色に包まれ、夜を迎えようとしているなかで、その白い脚だけが、生き生きとして、官能的であった。
　老人は蛇杖を突いている。
　柿色の広袖の衣と蛇杖——これだけで、賢明な読者には、誰であるか、おわかりであろう。
　果心居士。
　女を凝っと見つめていたと思うと、口をほそめて、ひょう、と口笛を吹いた。
　風がその音をくるめ、奇妙な声となって、女の耳にからみついた。
　口笛とは思えない。囁きかけるような、威嚇するような、妖しい声である。
「はい……」
と、女は無意識にこたえて、ふりかえった。
　このとき、すでに、女の心は摑まれている。
　妖気が女をとらえた。温かい雲がまわりに満ち、その中でもうろうとして、意識がうすれ、ふらふらと土手をのぼっている。
　果心居士のほうへ、泳ぐように近よってくるのだ。
「これへ、これへ……」
　蛇杖が動く。

　女は、何を見ているのか、うつろな眼で、ふらふら近づいてゆくのだ。蛇杖に異常な魔力がひめられているように、その指示には逆えぬもののようであった。
　うつろな眼には、しかし、空虚というより、喜悦への期待がある。むしろ恍惚感であった。
　果心居士の前までくると、
「ああ、うれしゅうございます」
　うつつに、そう言い、帯を解くのであった。
　まるで、恋しい男に招かれたかのように。女はこのあたりの農婦であろうが、娘のようであった。脚の白さ、腰のしまり工合も、男なら、たしかに迷うものがある。この年齢もさだかならぬ果心居士にして、迷ったのか。
　腰には、しびらを巻いていたのだが、むろん、これをはずしている。帯をとき、布子を脱ぐと、宵闇の中に白い肌があらわれた。
　そこが、野原の中であることも女は忘れたように、いや、自分のしていることが、意識にないのであろう。ただ、愉悦だけで、娘をわななかさせている。
　腰布もはらりと落とした。全裸である。
「お上人（しょうにん）さま……」
　うつつにこう言い、女は崩れるように、草むらに膝をつき、腰をつき、それからゆるやかに身を倒した。
　全裸のからだで草むらに仰臥したのである。
　初夏の宵の栗の花がどこやらで匂うなかに、若い熟れた娘の肌の香が、たちのぼった。
　男を迎えるように、娘は横たわり、下肢をひろげている。

はた目には、きわめて自然な姿であり、原始的な、素朴な性交の姿勢だった。初夏の宵の野原の草の上。娘の姿態は、媚をすら見せて、期待におののいている。

「よい娘じゃ」

おのれの術に完全にとりこめられて、横たわった肌に、果心居士は、はじめて快心の呟きをもらしている。

そこに横たわる肌を見おろしている眼は、あの灰色の無気味さのなかに、淫靡な炎を宿すかと思われた。

果心居士の心にきざした淫の思いは、きわめて偶発的なものだった。

果心居士は、つとかがみこむと女の肌に手をふれた。

額から、鼻すじ、唇――するりと撫でる。

女はすでに恍惚となっている。指先が、頤からのどにふれたとき、ひくっと、動いた。何やら、声が洩れた。耐えられぬ快感に突き動かされたように、腰をゆらめかして、うねった。

果心居士の手は、のどから胸へ隆みへとすべってゆく。

乳房は仰臥して横へくずれない。張りを持ち、処女らしく生硬で、乳首は仄赤らんで宵闇の底で息づいていた。

「むすめか、なるほど」

果心居士は乳首をつまんだ。

その手をさらにさげてゆく。蜂のようにくびれた胴から、下腹部へ――下肢のつけねのあたりにふれてから、おのれも、その場にうずくまった。

柿色の衣をひらく。

枯木の如き老軀である。添寝するような恰好になった。

が、それだけであった。

処女の生気を一息吸っただけで身を起こした。

きっと、城山のほうを見た。たとえば、猫が、風の匂いに魚の在りかを知るように。

果心居士は立ち上った。

裸身に一瞥もくれぬ。すたすたと歩きだしている。宵風と闇が、その軽やかな影をとらえ、たちまち、かき消した。

多聞山城ではそのころ、美沙が酔いに火照った肌をもてあましていた――。

「ああ、誰か……」

男がほしい。男の強い力がほしい。

烈しい気性は、性に対しても、欲求度がはげしいのだ。

燃えてくると、衣紋をみだして、われと、わが肌を愛撫して狂いださんばかりの美沙だった。

その甘肌の香を、果心居士が遠隔の地で嗅いだとすれば、異常である。常識では考えられない。

果心居士の幻術そのものが、この〝常識〟を超えている。かれの嗅覚は、よく里余を間余に縮めるのか。

飲むほどに酔うほどに、美沙の五体はきらびやかに彩られた暖雲に包まれ、もうろうとしてきた視界に、奇妙に、老人の姿を見ている。

「だれ？……」

美沙の声には酔いが隠せない。

かなりの量を過ごしても、ろれつがまわらなくなるということはない。

目の前に、忽然とあらわれた老人の影に、あやしむように、
「おまえさまは……だれ？」
と、眉をひそめた。
その手に酒盃を持ったままだ。
「わしか、そなたの望んでいる男じゃ」
「おとこ？」
「男じゃ」
なおも、はっきり見るために、美沙はまばたきした。
そのとき、すでに帯が解けかけている。感覚はなかった。帯はずるずると解け、前をはだけた。
美沙の眼に、もう果心居士の姿はない。
（おとこ……）
漠然とした男の姿が、網膜に写っている。
美沙のあこがれのイメージが、幻影化されている。美沙はすでに果心居士の術中にいた。
帯が解け、着物が次々と脱がされてゆくあいだも、茫漠として、快感への階段をのぼっていた。
果心居士は、やがて、熟れた肌を抱いている。豊潤な女ざかりの肌であった。
（おんなじゃな、まさしく……）
小川の畔で、仰臥した女は、処女の匂いを放っていた。果心居士の老軀には、処女の肌は意味をなさないのか。生気を得て、枯木が甦えるには、ただ、生体の気力だけでなく、淫欲の横溢を必要としたかのごとくであった。
女にあれ、男にあれ、淫にたけるときこそ、もっともその生気を充たしているといえる。生きる欲求度の如何であろう。

まことに、この美沙ほど、生きることに逞しい女はいない。欲望の権化といってよかった。その淫気が、里余の地にまで風に乗り、果心居士の欲求に反応したものである。
美沙は快楽の園にいた。
（ああ、あたし……どうしたのかしら）
ふわふわとからだが飛翔しているようであった。ひとりではない。男の腕に抱かれ、花芯に与えられる刺激はこれまで、美沙が味わったどんな快感よりも、微細に官能に訴え、美沙を狂わせてゆくのであった。
その刺激は、むろん果心居士によって与えられている。
ただ、それが男と女の常態の行為ではなかった。
老人というよりは翁（おきな）というにふさわしい果心居士の肉体は、男性としての機能をとっくに衰退させている。かれが肌の接触より生気を吸うために、施している技巧は、きわめて非情なものであった。
老翁に必要な生気の供給源として、美沙は官能の淵に遊ばされているにすぎないのだ。
美沙の柔肌を抱きしめたまま、果心居士は眠っているもののように眼をとじ、腕だけを動かしている。その常時携行の蛇杖が、美沙を狂喜させる具に使われていようとは……。

通常、性愛の時間というものは長くて一刻(とき)——眠りをさまたげず、明日に差しつかえないのを程度とする。

淫乱の症といってしまえば、それまでだが、美沙の欲望は、火に油をそそぐように、限(き)りがない。

果心居士としては、まことにふさわしい相手を得たというべきであった。

女体が淫ノ気に充ち、狂乱すればするほど、果心の老体は生気を甦らす。

(陰陽合シテ生ソノ所ヲ得ル……天地万生ノ理じゃて)

美沙を狂喜させつつ、その目口より溢れる涙滴を、唾液を吸いたて、裸身を抱きしめて、皮膚から皮膚へと生気を吸収してゆくのだ。

その狂態は、鬼気迫るものがある。刻は流れ、若木と老木の絡みは、いつ解けるともしれなかった——。

老翁を若返らせるがために、美沙をとらえている淫の渦は、その果てが無い。果てしない、喜悦は、動物的に逞しい女体をも、チーズを絞るように凋めてゆくのだ。

老翁果心にとって、美沙は祭壇の小羊の如き、いけにえであった。

時も同じく——。

そのいけにえの一人が、この多聞山城に運びこまれている。

夜明け前であった。暁闇の野に馬蹄の音をひびかせてその一行が近づいたとき、弾正久秀は眼をさましている。

「来たか」

予感がした。

(夕月じゃな……)

夕月であった。京は東山の五条坂の隠れ屋敷を矢太らによって突きとめられ、拉致(らち)されたのである。

城之介が買物に出た留守であった。

(彼奴をぶった斬るのは、あとまわしにするぞな)

矢太は物蔭で隙をうかがっていて、囁いている。

(裏切り者は成敗せなあかんがな、いまは夕月の方が先きや)

天下人松永弾正の鼻息を窺う方が先きだ。女首領の美沙の身も案じられた。

どうせ人質にとられたということは推測がつく。それだけに、夕月を一刻も早く、差し出さねばならなかった。

城之介が出ていったあと、夕月は突然、闖入してきた連中に捕えられた。懐剣を鞘走らせるひまもなかったのである。

「好えとこへ連れて行って進ぜるによって、暴れんほうがええぞな」

にやにやしている男たちであった。
その場から引きたてられて、京の陣屋へ。
陣屋は、弾正によって、京の《政所》と名づけられていた。僭越極まるそうした施政も、もはや異をたてる力のある者はいない。
その《政所》を預かっていたのは部将の竹内下総守秀勝である。
「なるほど、正しく夕月にちがいない」
と、首肯して、多聞城の城へ届けるべく、足軽の一隊をさいた。
足軽二十人に騎馬の武士五人。それに矢太、銀三、年長の玄内ほか新参四人――これだけの仰仰しい人数で、夕月ひとりを護り、多聞山の城へ乗りこんできたのだ。
ただちに庭前へ通された。
「上様には、お待ちかねじゃ」
大手門を預かる侍は、夕月の顔や腰のあたりを、無遠慮にじろじろ眺めながら、
「奥庭へ案内せい」
と、輩下に顎をしゃくった。
それから、卑猥な笑いに髭面を歪めた。
「上様のお目は高い」
家来たちが、夕月追捕の理由を弾正の好色の対象と理解したのは無理ではない。
夕月自身もそう思っていた。城之介もそうである。
(弾正にしてみれば、おれは邪魔者だ。夕月にまつわりついているうるさい小童……おれを斬って、夕月を奪る心算にちがいない)

この脅えが、つきまとっていたのだ。
もっとも、そうした二人の共通の不安は、若い男女を一層、緊密に結びつける作用があったことも否めない。
逆境は若者を強くする。ましてや、苦難を超えて結ばれたいま、
(どんなことがあっても)
(離れない！)
二人は、飽くなき契りのたびに、愛をたしかめあった。
この男女を引き離す、むごい運命は何に由来するのか。
夕月は、とらえられて運ばれる途中、
(死のう……)
何度思ったかしれない。
あの狂熱の時を得ただけでも、生きてきた甲斐があると思った。
が、矢太がこれを阻んだ。
そして、口に布を押しこみ、猿轡をかけてしまった。
「変な気ィおこしたらあかんぜ、元も子もなくなるぞな」
「好えか、男は、城之介ひとりやない。わしも男や。いひひ、まあわしなんぞ男のうちに入らんかもしれんがのう、男はほかにも沢山いるがな」
それを知らない処女ではない。娼婦としての辛さもなめ、男もかなり知っている。知った上での、城之介への愛であった。
松永弾正に対しては、ある感情も抱いたことがある。だが、その時間を過ぎてみると、何もな

かったことが、かえってよかったと思った。
　平戸の遊女屋から、南蛮屋十兵衛に身請けされて以来、城之介への想いに生きてきた。
　きびしい追捕の手を逃れてつかの間の逢瀬だけに、その喜びも一入だった。城之介との一刻の喜びは、常態では一年にも匹敵しよう。
（――もう駄目……でも、いいの、城之介さんのことを思っていればどんなに苦しくても……）
　生きてゆける、と思った。猿轡を邪魔に感じ、ううう、と顔をふった。
「――この女、苦しがっている。はずしてやれ」
　松永弾正は足音でわかった。大股に廊下を踏み鳴らしてきた。これほどの城であるにもかかわらず、いや、これほど細心に構築されているがゆえに、廊下の忍び歩きは難い。猫が通っても音をたてる。
（ああ、弾正が……）
　夕月は眼を閉じた。
　覚悟はきめていても、いざとなると、仮借ない弾正の仕打ちがそら恐ろしく、身がふるえる。
　足音は傍へ来て、止まった。
　雷が落ちるような大喝を――。
　だが、いつまで経っても、落雷はなかった。
「……」
　弾正は無言で、睨みつけていたが、やがて、膝を折り、ゆったりと脇息に身をよせた。
　おそるおそる、夕月は眼をあけた。
　弾正は盃にも手をのばさず、真っ直ぐに視線を放っていた。

「久しいな、夕月」
　相好を崩した。
「生きていたか」
　皮肉だ。笑いをたたえたまま、夕月の胸の中を見通しているように、
「めぐり逢ったことが、うれしいぞ、夕月」
　その言葉ほどの感情はこもっていない。冷たさが、語尾に漂っている。
「そちゃ嬉しくないのか」
「恐れながら……」
　思いきって、夕月はにじり寄った。
「堺ではあたくし……」
「申すな」
「いいえ、お詫びは致さねばなりませぬ。御恩になりながら、無断で政所を逃散いたしましたのは」
「わかっておる」
「決して、悪意あってのことではございませぬ、ただ……」
「城之介恋しか」
「……」
「その城之介との仲も、これまでじゃな」
「弾正さま！」
「どうせ、たっぷりと楽しんだことであろう。よいではないか、別の男との伏し寝も悪いもので

はない」
弾正自身の好色が言わせた言葉だと聞いたのは無理ではない。
が、違ったようである。弾正が彼女を眺める目つきは、熱っぽくはあったが、それは、おのれの欲望のほとばしりではなく、美しいものへの憧憬を秘めた——美術品を鑑賞するようなそれだったことである。
「夕月」
と、弾正の声音は変わった。
「そちのためにもなることじゃ、聞けい」
「……」
「城之介はこれまでにも罪を犯している。一々はあげぬが、たとえば、前ノ公方が室町第に忍びこんで、盗みをはたらき、剰え、小侍従を犯したこと」
「え、そのようなことを」
愕然とした夕月にかぶせて、
「生証人がある」
「まさか」
夕月は蒼白になった。
夕月は、口もきけなかった。
怒りと、おそれと不信の感情が錯綜し、千々に乱れて、頭の中がかっと熱くなり、わなわなと顫えた。
「そんな、そんなはずが……そんなはずはありませぬ」
咽喉からふり絞るようにして叫んだ言葉も、軽くいなされた。
「あるのじゃな、それが」
「嘘！」
「嘘か、な」
余裕を口辺にたたえた弾正である。
故意に焦らしているような態度であり、微笑であった。そのうすい笑いには、皮肉と蔑みが露わで、
「矢太、説いてやれ」
と、細い顎をしゃくった。
矢太はさっきから、大柱のかげに四角に坐っていた。緊張した顔で、にこりともせず、弾正と夕月の会話を聞いていたのである。
「はあ、団六のことでござりまするかの」
「小侍従のことだ」
「へえ、その小侍従を城之介と団六が襲いよりまして、へえ、がいに好え女ぞな」
「……」
「城之介は、小侍従を裸にして、そらもう、さんざん楽しみよったちゅうことで」
「嘘です！」
「ほんまやで、団六からちゃっと聞いた話ぞな」
「それは……その団六さんが嘘を吐いているにちがいありません」
「何言うてけつかる、団六とおらは十年前からの友だちがな、団六はあげえな男でも嘘つきやな

いで。おまえが城之介にだまくらかされとるのや」
「いいえ、城之介さんは……」
反駁しかけて、夕月は絶句した。
どっと涙がはふり落ちた。
弾正は矢太に、去れ、と顎をしゃくった。これ以上、女心をいたぶっては、せっかく捕えたのが元も子もなくなる。
かれが夕月に期待したのは、一時的な肉欲の対象ではなかった。
いまの弾正はそうした慰めや快感を望むどころではない。生涯の最も大事な時機に差しかかっているのだ。
(夕月の美しい肌を……)
最大限に利用する。
もともと弾正は、利用できるものは、利用する才にたけていた。
夕月が前ノ公方義輝の想い女として御所住まいしたことは、いわば〝貸し〟を持った弾正には幸いなことだった。
堺の政所から逃げられた〝禍〟を転じて〝福〟とする。むしろ、〈塞翁が馬〉で、結果的にはよかったといえる。
(それも、実際に役立ってからのことだ)
泣きじゃくる夕月を、凝っと弾正は見ていた。
以前も美しかったが、御所暮らしの日々が挙措をしとやかにしていた上に、城之介との交情は、しっとりと肌に潤いを持たせて、色香を濃密なものにしているのだった。

泣きじゃくる夕月の姿を、美術品でも眺めるように見まもりながら松永弾正は、
(あまり、刻が移らぬうちに)
と、思った。
布石の間隔を埋めてゆかねばならぬ。着実に一石一石、無駄のない石を置いてゆく。
「泣くことはあるまいぞ、夕月」
と、優しく、弾正は言った。
「男は城之介ひとりではない」
「……」
「まだ、けがれを知らぬ男もこの世にはいるものじゃ」
「……」
「と申しても、わしのことではない、案ずるな、はははは」
この笑いにも、夕月は気軽くのれなかった。
「そちによい若者を引き合わせてやる。女子ならば、誰でもあこがれる男じゃ」
「……」
なぜだろう。
そのとき、夕月は、私には城之介がいます！　そう叫ぼうとしながら、声が出なかったのだ。
何がその必死の叫びを阻んだのか。
矢太や団六などの証言を信ずるにたりないと否みながらも、やはり影響されたのか。
叫びが虚しく胸の中で分裂するのを、夕月は敗北の中で知った。坂を転がってゆく自分の姿に、
運命の抗い難い強さを感じながら、

（許して、城之介さん……夕月はもう駄目……）

おのれの弱さに歯がみする思いで、弾正の声を聞いていた。熱い涙がほとばしり、頬をぬるぬると流れるのを意識すると、その涙が、何もかも、過去も、そして現在すらも、押し流してくるような気がした。

「——洗うてやれ」

弾正の命令で、夕月は湯殿へ伴われた。

むろん、女たちが多勢付き添って、世話をやくのである。

もう、夕月はさからわなかった。

女たちにとり囲まれるようにして、着物を脱いだ。湯殿は特別に許されて、

「上様のお湯浴みなされるところでございますよ」

有難く思って、粗相のないように、と、語気を強めて老女が言った。

特別待遇である。したがって女たちの態度は、慇懃無礼だ。

裸にした夕月の肌の美しさに、驚きの眼を見はりながらも、眼と眼を見合わして、何やら、うなずき交したり、故意に、下肢をひろげさせたりして、

「仰せですから、念入りに洗わねばなりませぬ」

同性とはいえ、羞ずかしさで、夕月が、顔を背向けるのを、

「おや、おまえさまは、ここのところは、いつも洗わないのでございますか」

「ほほほほ、そりゃムサイことよのう」

「ほんに、前ノ公方さまが想い女とあれば、日に三度四度も、沈香の水できよめているものと思うたに」

意地悪く、ねちっこいざわめきである。夕月は耳を蔽いたかった。

御所の暮らしでも、かなり同性にいじめられた。京女は、大きな声はたてず、言葉も柔らかいが、小意地が悪い。

夕月も京生まれだが、貧しい七条辺の紙漉き小屋に生まれていて、いうなれば下町育ちだ。気性も明るく、人にも好かれた。

御所や公卿屋敷の女たちが、姿かたちはきらびやかで、お人形のように美しいが、心は冷たく、いやな連中が多いという話は、昔から聞いていた。

そのいやな女たちのいい例が、北ノ方だった。近衛家の姫君というのを鼻にかけての、専横は、苦々しいものだった。

この城中の女たちは、どこの生まれかしらないが、騒々しく、慇懃無礼で、くそ意地の悪いことをする。

「ほんにおきれいな」

「磨きたてて、鏡のようにしてあげましょうぞ」

皮が剥けるほど、へちまでこすったり、足の裏をくすぐったりする。

湯浴みの世話をする、という大義名分を利用しての行為だけに、怒りもならないのだ。

この女たちにしてみれば、夕月の美しさが気に食わないのだろう。城主の弾正久秀の特別のお声がかりというのも、癪にさわるのかもしれない。

弾正には正室がある。長慶の姫である。信貴山の城に置いてある。

政略結婚というより、弾正の出世の手段であり、長慶としても、信頼のくさびとしての婚姻だから夫婦の間に〝愛〟はなかった。

子供もあったが、あくまでも松永弾正にとっては、おのれの勢力扶植の一環にすぎず、父親としての愛情は持たぬ。

弾正の正室はよく出来た女で、義輝の北ノ方のように、わがまま姫ではなかった。父の長慶の言いなりに、弾正に嫁した。まさか、弾正が父を殺したとは思っていない。

ただ戦国時代の武将の娘としての運命に甘んじている。そういうひとであった。

その正室の人柄が、この女たちに反映して、

(正室さまがよいお人なのに)

(この女狐が)

(上様をたぶらかす)

というふうに反感となったのかもしれない。

肌を洗い、髪を洗い、それこそ爪の中から襞の中まで、舐めあげたように洗われて、夕月は、別人になったような気がしたまま、弾正のもとへ連れてゆかれた。

弾正はすでに寝衣に着替えていた。

褥は二つ敷かれていて、夕月は一方を与えられたのである。

短檠の灯が、豪華な寝所を仄明るく照らし、一炷の香煙がゆるやかにたちのぼっていた。

「——きれいになったな」

弾正は言った。

「それに寝よ」

「——はい」

観念するしかなかった。夕月は静かに横になり、枕へ頭をつけた。

長い髪は乱れ箱へばっさりと打ち投げるのが習わしである。

弾正は彼女の帯へ手をのばした。

「帯を……」

と、弾正は言った。

もう夕月は抵抗をなくしている。黙って身を起こすと、帯に手をかけた。

娼婦のころの気持は、すっかり清算しているつもりでも、こう頭から命じられると、逆らえぬものが、命令にしたがわせてしまう。

乱世は男の時代である。横暴な男の厳命にしたがうように習慣づけられている、多くの女たちが、その運命に甘んじた。その中で、せめてもの倖せをつかまねばならないのである。

夕月は帯を解いただけである。それ以上は、おのれの手ではできなかった。

「……」

弾正の眼が光った。

骨ばった手が、襟をひらいた。こうしたとき、男の欲望は火に油をそそいだように、狂暴にすらなる。

夕月の過去はそうしたことをあまりによく知っていた。知りすぎていた。

眼を閉じたのは、それ以上、弾正の醜悪な表情を見たくなかったからである。

(城之介さま……)

かれの顔を瞼のうちに思い浮かべた。せめてもの浄化作用であった。おのれのからだに加えられるであろう辱しめを、意識の外に置こうとしたのだ。

運命の非情さが、彼女を娼家に閉じこめたときも、そうやっておのれを殺した。

世間の波風から、身を守るすべを動物でも植物でも本能的に会得しているように、意識をそらすことによって、肉体の屈辱感を失おうとする。暴風雨の爪痕は免れないとしても、その渦中に在る間の苦悩は忘れられる。
(城之介さま、許して……)
死んだ気になって、弾正に抱かれよう。
そう思いながらも、夕月は肌に夜気を感じると、奇妙に羞恥と官能の虫に全身を這いまわられているようで、身じろぎした。
弾正の手が——
肌に触れ、花芯を目ざしてくると思った。
「………」
どうしたのか。
その不安で待つ手が伸びてこないのだ。
(どうしたのかしら、どうして、どうして……)
いっそ早く、その地獄の手が早く犯してくれることを希った。嵐の前ぶれの戦慄は短いほどよい。たとえ、その嵐がいかほど凄まじいものであろうとも。
だが、弾正は、寝衣をひらき腰のものを剝いだだけで、それ以上、一指もふれようとしないのだった。
凝っと見ている。眺めている。その眼は楽しんでいるのではなかった。
むしろ、美術品を鑑賞するきびしさがある。
「——これならよい……さぞ、喜ぶことであろう」

弾正は呟いた。
「よい肌じゃ……献上するのは勿体ないがな」
これは、おのれの欲望への掣肘のつぶやきであった。
弾正は、うすく笑った。
目の前に、全裸をさらけて横たわった夕月を眺めていながら、手を出さぬのは、すでに老体とはいえ、苦しい。
実際には、まだ体力がある。現に、こうやって、美しい肌に涎も垂れんほどで、下腹部に充実の緊張を感じているのだ。
(目的のために……)
一時の欲望には負けぬ。
如何に女体が悶えようとも、弾正は誘惑には負けぬ。いま、目下にある、白い肌は、かれにとって、温かい血も、柔らかい絹の感触を持つ肌でもなかった。
(美しい……美しいがゆえに、役に立つ)
そうした弾正の心中は、夕月にはわからない。
(犯すなら、早く……どうなりとなされませ!)
そう、叫んでやりたい思いで、苛立ちを感じるのだった。
そのとき、香煙が、ふいに、ゆらいで低く流れた。
すーっと、どこやらから、風が流れてきたようであった。夕月は肌に寒さを感じた。その風に撫でられた部分が、鳥肌立つような。
しかし、その感覚は一瞬であった。ふいに、目の前に霞がかかったような気がし、頭が重くな

って、夕月は奈落へおちこんでゆく自分を意識したのを最後に、何もわからなくなった。
隙間風は、弾正も感じたのである。
(はて?)
かれがふりむいたのは、深い意味がある。
この弾正の寝所は、特別に出来ている。
外界と一切、遮断されていた。堅牢な砦であり、密室を構成したところは、逆に見れば檻でもあった。
すべて外界とは、一本の紐を引いて、意を伝え、外からの返事も床の間の鈴と鳴子が伝えた。
板戸にはのぞき窓が作られ、それも角度を考えて、万に一つ、その窓の戸を破られても、弾正の寝姿は見えないし、長槍も届かず、鉄砲や弓をもってしても、この角度では目的を果せない。
天井も格天井であったが、ネズミ一匹、天井裏には入れない。床も普通の三倍の厚さがある。
僅かに空気を通す口はあるが、人間の通れる大きさではなく、これも曲って通じている。
ここに居るかぎり、弾正は安全であった。安んじて眠りをむさぼれた。
かれは、おのれ以外の誰も信用していない。信じないことが、かれを今日の地位に押し上げたのである。
その密室――
隙間風が吹きこむはずはなかった。
風だけではない。黒い影が炭塵を吹きこむように、流れこみ、屛風の蔭にひそりとうずくまったのである。
「だ、誰だ?」

黒い粉塵は、けむりのように見えながら、眼を凝らす弾正の前で一つの影をなしてきた。
「おお……」
弾正は叫びかけた声を、口の中で嚙みころした。
「果心!」
幻妖な果心居士。
にやりと片頰を歪めて、老翁は弾正から夕月の裸身に視線を移した。
「よい肌じゃの」
「……」
「なるほどのぅ」
「な、なにが、なるほどじゃ」
「よい貢物じゃて。おぬしが手をつけぬところを見ると、これは献上物じゃろ」
「……」
「よかろう」
果心居士は鬚をしごいて、頷いた。
「義継どのか」
「うむ……」
意図をずばりと見抜かれて、弾正は、いささかの腹だたしさをおぼえた。
「おぬし、どこから入った?」
「ほほほ、果心には壁というものはない」
「……」

「何を怖れる。いずれ、わしの力を有難く思うときがこようぞ」
「うむ、そのときは」
「松永弾正という悪が天下を奪るの日、この果心が必要になる」
「悪か……いまの乱れた世は、わしのような男を必要としている。わしがおぬしを必要とするが如くにな」
弾正は、夕月の肌を覆った。
この美しい肌を、他の眼にふれさせたくなかった。たとえ果心居士でも。
果心居士は夕月を知っている。
九州の平戸ですでに逢っている。
だが、かれのような老翁には、懐旧の情とか、感傷なぞというつまらない厄介なものは、爪の先きほどもないのであろう。
死人を見るのと変わりない眼つきであり、表情であった。
「ほほほほ、その必要なときまでそこらに棲んでいるとしようかの」
果心居士は正体のない夕月を見おろして、
「おお、左様じゃ、弾正。あの女のう、美沙という女」
「美沙が」
「両三日はあのままにしておいてやることじゃな」
「……」
「死んでおる」
「なに」

「いや、眠っておる。死んだも同然だがの、つまり、仮死の状態じゃでの、そのままにしておけば、やがてに回復する」
「両三日？」
「まずな。それくらいは」
それから又、ほほほ、と例の笑いを洩らした。
「わしが生気を吸うた。美沙の淫は凄まじいでの、これでこの爺も暫くは、この世に在るわ」
「生気を吸うたと!!」
愕然として弾正が果心を見直そうと眼を凝らしたとき、ふーっと霞がかかった。
夕月が飯盛山の城へ運ばれていったのは、翌日のことだった。
それは、全く運ばれていったというにふさわしかった。
髪には香油を塗り、練絹の白小袖に檜扇という姿で、手輿に乗った。護衛の騎馬と足軽がついて、ものものしい行列は、大名の姫君か、側室という仰々しさであった。
飯盛山の城から、迎えの武士も途中までやってきた。
あらかじめ、弾正の方から先触れがいっていたからであろう。
武士の態度は丁重であった。
「夕月さまか」
迎えの口上をのべると、かれが先きへ立った。
すでに城門は八文字にひらかれ、三好家の家臣たちが出迎えるなかを夕月を乗せたまま手輿は、静々と進んだ。

これは破格の待遇であった。
　城主はいうまでもなく三好長慶であるが、その死去は知らされず、長恵ということになっている。
　したがって、伜の義継はいまだ、
〈御世嗣〉
であった。
　この十河一存の実子である義継は、今年十五歳だが、一存が膂力十人力といわれた巨漢であっただけに、上背はあり、十八、九といっても通る青髭の青年武将であった。
（このお方の……）
　覚悟してきたとはいえ、城之介とあまりの違いに失望した。大きいだけで、智恵の足りなそうな、魯鈍な眼の色だった。
「そちが公方の、いや、前ノ公方の想い女か」
のっけからこう言う。
　夕月は相手が年下だと思うと、幾らか気安さをおぼえ、
「夕月と申しまする。よしなにお引き回し下さりませ」
と、そらした。
「公方は女性好きと聞いていたがどうだ？」
と、若いくせに執こく、
「夜な夜な、召されたか」
「前ノ公方は、そのような御方ではございませぬ」

「ほ。ではどのように夜伽を命じたぞ」
「……」
　夕月は反撥したいのを、ぐっとこらえた。この若者が、三好家の御曹子というぬくぬくした立場で言いたいことを言う。人間的にも城之介とは大きな違いだった。
「夜な夜なでなくば、一夜おきかそれとも二夜おきか？」
「いいえ」
「違う？　すりゃ反対か。夜も昼も、ほ。夜も昼も、そちを」
　一層、粘っこい眼つきになった。舐めるように、夕月の胸もとや腰や、ふともなどに視線を這わせる。十五歳といっても、それは壮者の淫らな眼であり、夕月は掌でさわられ、撫でまわされているような感触に、思わず、身が竦んだ。無意識に膝を固く合わせ、襟もとをかき合わせている。
　そして、顔をふり、叫ぶように言っていた。
「違います、違います、義輝さまは、そんな卑しい御方ではありませぬ」
（斬られてもいい……）
　夕月は覚悟した。
（たとえ斬られても）義輝の弁護をしなければならない。死者に鞭うつという言葉があるが、義輝謀殺を、正当化しようとして、人格まで悪しざまに言うのか。
　十五歳の義継には、そこまでの深謀はあるまい。弾正や三好三人衆に吹きこまれているだけのことであろうが、そう信じこまれては義輝が可哀相だ。
「そんな御方ではありませぬ」

夕月はむきになって言った。
「義輝さまはお優しい、思いやりのあるお方でした。深草の里で、お救け下されて、御所では……」
「御所では？」
「――いやらしいことは、何一つなさいませんでした」
義継は、眼を剝いた。そんな、ばかな、という表情である。単純な若者の驚きと疑いの表情を、臆せずに夕月は見上げた。
「ほんとうでございます」
「たばかるか、こやつ」
「いいえ、たとえ、お手討ちになろうとも、ほんとうのことは、左様に申し上げるほかございませぬ」
「この義継を、こけだと思うか」
「いいえ、世間の噂が、でたらめだというだけのこと。義輝さまはわたくしの心を……わたくしがその気になるまで、待つと仰せられて」
「………」
「そのまま、そのまま、あの夜まで、とうとう」
「何もなかったと申すか」
噂だ、とはもう義継は吼えなかった。
ある感動が十五歳の胸を浸していたのは事実である。ほしいものは意のままに手にできる身分に生まれて、人の心の奥をおもんぱかったことのない義継だった。

男と女のことは、性衝動のままに、愉悦をほしいままにできる境遇が、人間的なきずなの根元とまでは考えさせなかった。
一つには長慶が、この甥に期待をかけず、老いこんでいったことであり、さらには、弾正の意図が、義継を暗君に育てることにあったからだ。
弾正の〈天下〉への野望のために、義継は暗君でなければならなかった。
そのように育てられ、世間を見る眼をふさがれた義継にも、しかし、人間の真実は通じるのか。必死になって、我を忘れた夕月の真情は、そくばくの感動を与えたようである。
暫く黙っていた。
言葉を探しているふうであった。
（言いすぎた）
と、夕月はおもった。うすく涙さえにじんでいた。
（斬られるかもしれない。でも、それでもいい、ほんとうに、義輝さまは、私にとって、思いやりの深い御方だったのだから……）
何もなかったからこそ、城之介に抱かれることにも抵抗をおぼえなかったのだ。
「夕月……」ややあって、義継は言った。「おれは若い、前ノ公方よりも若い。半分の歳だ。耐えることはできぬ。夕月、おれはそちを抱きたい」

女の城

夜が明けて——。
多聞山の城で松永弾正は書状と小筥を受けとった。
早馬で届けられたもので、両方とも厳重に封蠟がしてあり、その男は、取り次ぎの者にも渡さず、奥庭にうずくまった。
「首尾は如何であったか」
「これに」
と、男は差し出した。
むろん、弾正の手の者である。細作として、飯盛山の城に入れてある者、十人にとどまらない。三好長慶の城であり、三人衆にとっても、松永弾正にしても三好一党の主峰でありながら、戦国の習いとして、いつ分裂するかわからない。
弾正はおのれの腹心を配して、情報を集めさせていた。寸刻の油断もできないのが、乱世である。
漸く捕えた夕月を、義継の側妾として送りこんだのだが、

（うまくゆくか……）
案じられたのだ。
夕月の美しさに義継が魅されるのは自明だが、はたして夕月がこたえるかどうか。
それが慮（おもんぱか）られたのである。
早馬で来た男の持参した密書には、
〝御配慮の白鷺、昨夜、鳥と睦びしこと、相違これ無く〟
うんぬんとあって、
〝仔細は蒔絵筥中に御座候〟
証拠は筥に在る、というのだ。鍵がぽろりとおちた。
小さな二段筥であった。一面が五寸ほどで、手文庫よりも小さい。黒塗りで花鳥が金蒔絵してあり、鍵までかかるようになっている。
鍵は指先ほどの精巧なものであった。
わざわざ別封したのも、万一を考えてのことであろう。
それほどまでにする筥の中身は何なのか。弾正は鍵をさしこんでひらいた。
異臭がした。
あの臭いであった。栗の花が放つ異常に淫猥なあの臭いが、小筥の中にこもっていた。
そして、うす絹の小布が入っていた。
白い絹地には、鮮烈に血がついている。僅かではあったが、それは血にちがいなかった。そして黄ばんだ粘液が——糊を固めたあとのように、べっとりと付着していた。
弾正は呻いた。

(——成った——)

正しく、それは、男と女の睦びを証拠だてるものであった。

義継と夕月の閨房から、細作は盗み出してきたのであろう。

あるいは、闇の〝眼〟となってまぐわいの態を見守っていたのかもしれない。

どちらにせよ、義継の意に夕月が従ったことを意味する。それは、弾正の計画が、滞りなく進行したことを示すものであった。

「これでよし……」

弾正は、庭前にうずくまった男に、火を熾せ、と命じた。目の前で、これらの品々は焼き捨てるのである。遺す必要はなかった。弾正は義継をこうして、二重三重にとらえたのだ。

義継は若い。年よりもからだは大きい。巨軀にして剛力で鳴らした十河一存の倅だから、体力に於て、だれにもひけはとらない。

〝夕月〟という美しい花を得て、欣喜した。

その甘肌に溺れた。

溺れた、という形容がぴったりする、寵愛ぶりであった。

(前ノ公方の想い女……)

その評判が箔をつけたのは事実である。

想い女ではあったが、からだは許さなかったという。夕月の心の中までは、若い義継にはわからない。どういう理由にせよ、足利十三代将軍義輝に許さなかった美しい肌を、

(おれには許した)

その感激は少なくなかった。

期待を裏切らぬ美しい肌であったし、男を悦ばせる充分な反応を示したのである。

夕月が、

(あたしの心は城之介さまのものだから……)

そう誓い、そう思っていたにもかかわらず、肉体は心を裏切って、快感をもたらした。

義継に抱かせはしても、心では城之介を想い、せめてもの抵抗をしていたのも、三日が限度であった。三夜のはかない抗(あらが)いの果てに、夕月は声をあげた。

義継の若さと逞しさは、彼女の我儘を許さなかったのである。

あれほど、

(死のう)

と思い、城之介のために、他の男の手に触れさせまいとした肌も、弾正の意外な態度が、抵抗の張りを失わせたといえる。

出鼻を挫かれたというか、弾正の手に捕われたとき、死のう、と思ったのは、弾正の側女(そばめ)になりたくない、という気持である。

だが、弾正は手を出さなかった。

そのことが、まず、拍子抜けさせた。

女心とは不思議なものだ。ひょっとしたはずみが、運命を変える。

三好一族の首長たる地位を継ぐ義継と対面したとき、その若さにある救いを感じている。

女の狡智だろうか。

もともと年少のうちにあっては、同年配では女性の方が精神年齢では長(た)けている。

義継は十五歳。歳下である。

そのことが安心感を持たせた。悪くいえば、舐めさせた。たかをくくった。
(寝るだけなら……)
からだは預けよう。
死なないで、生きてさえいればまた城之介に逢うこともできよう。
そのときを楽しみに、辛くとも耐えていこう。
そう思ってまかせたからであった。
義継の行為に格別きわだった手くだがあるわけではない。だが、体力にまかせて夕月の肌をむさぼる。
嵐の過ぎ去るのを待つように、ただ凝っとからだをまかせているつもりが、芯から吹きあげてくるような快感に耐えられず、夕月ははしたない声を奔らせていた。

松永弾正久秀の野望は天下をおのれのものにすることにある。
三好家の執事として擡頭し権勢を得てくるにしたがい、主家をしのいでその名は畿内はもとより、近隣諸国に喧伝された。
名が挙がれば、強きにつく小名豪族らを誘引する力ができる。
所詮、戦国時代は力の時代である。他国を侵蝕するのに、口実は必要としない。口実をかまえるのは他への聞こえのためである。
数カ村あるいは一郡一城を持つ小城主たちにしてみれば、強大な勢力の傘下に入ることは保身のための方法だった。
盃をもらって弟分あるいは臣下の礼をとる。後世やくざの世界と大して違わない。

むろん産物を貢進する。こうして庇護下に入る。進物の多寡や領地の大小によって、朝廷から位官をもらうにも、大大名が顔を利かせるかどうかで大いに違ってくる。
こうして被官大名になるのだ。
これは直接の家臣というわけではないが、勢力になる。イザというとき動員をかけることが出来る。
小名や豪族たちは、常に大名たちの勢力の上下均衡度をおしはかっていること、政界の色合いの変化を気にしている地方議員にひとしい。
こういう手合いは、したがって管領や大大名の権勢度に凄く敏感だ。落ち目になったと見るや、素早く掌を覆えす。
節操などない。態度豹変の大義名分は、
(家の為)
であり、
(領民の為)
だ。
したがって、こういう潜在勢力をおのれの〝軍勢〟と呼べるだけの手足にするには老獪な政治力を必要とする。
時に威し、時にすかし、吸いあげるだけでは駄目で、利を与え心を把(つか)む。人心収攬である。
この政治力の如何で、権勢は左右されるのだ。
将軍義輝を討ちとったのは三好長慶とその一党、ということに表向きはなっているが、実は弾正の采配だとうすうす感じさせることで、

(弾正さまには逆らえぬ)
と、畏怖させた。
それは又、
(弾正さまの被官になっていれば出頭が早い)
と、思わせることにもなった。
信義よりも力なのだ。
こうして弾正の勢力は日増しにふえていった。信貴山城や多聞山の城に参向する者が多くなったのはしかたがない。
戦後のワンマン総理吉田茂が権勢をほしいままにしたころは、大磯の邸宅に出入りする者がひきもきらず、ために〝大磯詣で〟という言葉さえ生まれたほどだ。
弾正のこうした権勢の増大を、三人衆はにがにがしい思いで見ていた。
「彼奴、ちかごろの専横の振舞い、何と思召さる」
三好下野守がある日、岩成主税助を訪れて言った。
「——何とかせねばなるまい」
主税助は沈痛に腕をこまぬいて、
「もはや、彼奴の眼中には、三好家は存在せぬものの如くじゃ」
「左京大夫は、如何に思うてであろう」
「何せ、お若い。弾正の魂胆には気付くまい」
左京大夫は義継である。体力は衆にぬきんでていても、凡庸の人だ。
それに、弾正の巧妙さは、夕月という美女を与えて、専横ぶりなど、全く見せぬ。

義継にしてみれば、
(弾正は無二の忠臣)
であり、
(義父の信頼した宿老)
という気持が絶対的なものになっている。
弾正のような老獪な男から見れば義継を暗君にして、おのれの存在を唯一無二のものに思いこませるなど、易々たるものだ。
(義継だけ、つかんでおれば)
三人衆がいくら喚いても大丈夫、という気がある。
その弾正のやり方は、もう三人衆にもおよそわかってきていた。
あまりにも巧みなるがゆえに、下手にあげつらえば、逆ネジを喰う。
言い出しっ屁という、あれである。言うからには、証拠をつかんでいなければならぬ。
その証拠を摑ませないことにかけても弾正は天才的であり、三人衆は歯が立たない。
「左京大夫をこの方の手に奪うて弾正と切り放す……これが第一の方策じゃな」
「できれば、だ」
「まず難しい」
義継が弾正を信頼している以上、難しかった。
三つや四つの幼君なら、無理矢理ひっさらってきて、理由はあとから何とでもつけられるが、青年の域に達している若殿だ、よほどの理由がなければ、城を捨てて走るということはない。城を移るというからには、世間に対しても、それ相当な理由が必要なのである。

城を捨てるということは、この弱肉強食の時代にあっては、敗北を意味する。発展的転居でなければならなかった。

「飯盛山の城には、弾正の腹心が多くいます。これらの眼を掠めることはまず出来ますまい」

「——大殿が存命ならば、な」

下野守は愚痴った。

三好長慶さえ永らえていれば、いかに老ぼれてはいても、弾正の専横を抑える重石にはなる。

三好一族の結束も容易である。

(あの他国者が)

三好一党の中には、弾正に対して、排他的な気持を抱く者が多かった。

(いずれ、彼奴は三好家にとって癌になる)

その杞憂が現実となったのだ。

またそうした気持の蔓延が、弾正を発奮させ、野望を固めさせたであろうことも想像に難くない。

「彼奴を亡ぼすには三つの手しかない」

こう言ったのは、二人に招かれて後から来た日向守である。

年長者らしい、したり顔を、二人は、凝っと見まもった。

三好三人衆といわれる三人のなかで日向守が一番年長者だ。その意見には、下野守も主税助も教えられることが多い。

「まず一つは……」

と、松永弾正の擡頭をおさえ、出来れば、放逐してしまおうとする考えを示した。

「力押しに攻める」

「信貴山の城をか?」

「多聞山もな」

そう言った言葉には、しかし力がない。成算が少ないことは、誰よりも日向守自身がよく知っていた。

「二つには、左京大夫を切り離す。弾正を孤立させることじゃ」

それも難しい、と言ったばかりだから、主税助は頭を振って、

「上策中策が難事となると、下策しかあるまい」

「下策は……」

と、日向守は言葉を切った。胸のうちで反芻してみた。

「——反間じゃ」

「出来るか」

「やらねば……」

「たとえば、だ。夕月という女を左京大夫の側女に入れたということを……」

「なるほど」下野守はうなずいた。

「利用する」

「逆用だな。弾正の逆手をとるというのも一興じゃ」

三人の眼は、はじめてのようにひたと合った。

日向守は年長だけに、裏の道に通じていた。ただちに行動を開始したのである。伊賀へ人を派して忍びノ者を招いた。

忍びのワザを持って生業（なりわい）とする伊賀の地侍たちは、したがって特定の主人を持たぬ。どこからでも、

（一仕事幾ら）

という労銀による請負いである。

たとえそれが〝盗み〟であろうと、〝殺し〟であろうと、ワリに合う額ならば引き受ける。

むろん、難事だと思われる場合には断わりもするし、労銀の額をつりあげもする。また、同じ伊賀ノ者でも、それぞれに得意の分野がある。

人間にそれぞれ得手不得手があるように、同じ伊賀者の中でも、部落によって違いがある。

日向守の城へ来た忍者は、茜染めの頭巾をかぶり、眼ばかり出していた。

あらわれたのは深夜である。日向守はそのとき、刀の手入れをしていた。

あの夜、御所から分捕ってきた宝刀である。

鎌倉期の名工の鍛えたものらしく、無銘ではあるが、丁字乱れもあざやかで、反りが深く日向守は魅入られたように見守っていた。

その刀身の中に、うっすらと人影が浮かんだ。

「おぬし!?」

ぎょっとふりかえった。

〈伊賀ノ者にござる〉

影は一揖（いちゆう）した。

茜染めの頭巾と、同じ色染めのたっつけ、くくり袴である。

〈——仰せによって、まかり越しましてござる〉

声はしわがれて老人のようである。が、忍びノ者は七体八声といい、その組み合わせによって三十二通りに変じるともいわれる。

したがって、声だけではわからない。

その動作は若々しく、弾みがある。からだつきから判じれば二十代も半ばであろうか。

漸く、われにかえって、日向守は大様に言い、刀を拭いおさめた。

「伊賀ノ者か」

「名は？」

〈その儀は……〉

「おお、まだ名乗らぬわけじゃな、まあ、よい。ところで仕事じゃが」

〈当城より未だ御恩を受けていませねば〉

恩だと吐かしよる。と、日向守は肚裡でせせら笑った。

何が恩だ。恩など考える輩か。一文の銭をくれるやつに〝御恩〟などと、見えすいたことを吐かす。

〈仕事の取り引き、相済みましたればその折〉

「わかった、頼むと頼まれるとは仕事の成功と報酬でつながる。左様であろうが」

〈如何にも〉

「では頼もう、伊賀ノ人」

やや皮肉をこめて、日向守は言った。

「仔細と申すは、反間じゃ」

〈……〉

「毒をな、用いよ」

〈殺しを……〉

「いや、殺すのではない。毒を投じればよい」

〈それだけ?〉

「うむ。ある女の仕業に見せる。それだけでよい」

〈場所は?〉

「――飯盛山の城内」

〈相手は?〉

「左京大夫義継」

〈ある女とは?……〉

「夕月という側室じゃ」

それだけで充分だったようである。茜染めの頭巾は一揖してそのまま、するすると一隅へ退っていった。

「待て、報酬を……」

値段も聞かずに働くような手合いではない。にやりとしたような返事があった。

〈――頂きましたわい〉

反射的に日向守は手文庫を見た。

二階棚である。いつの間にひらかれたか、筥の蓋があいていた。

「あっ!」

あわてて中を見た。

丁銀と砂金の包みが入れてあったはず。咄嗟には、どれぐらい減っているか、見当がつかなかった。

〈充分に……〉

と、伊賀者の声は言った。

それきりであった。日向守が手文庫の銭勘定しているうちに、壁の闇に吸いこまれるように消えた。

日向守には伊賀者を指嗾するについての腹づもりはあった。

あとから勘定してみると、思ったより安かった。

(弾正を失脚させるには、安い)

下野守と主税助には高く吹きかけてやろう、と思った。

どうせ忍びノ者を使うのなら、いっそ、弾正を殺させたほうがよい。〝反間〟の下策を示したとき、主税助は不審げに言っている。

「できれば、な」

日向守は黒い唇をまげた。自嘲的な笑いが、口辺に浮かんで消えた。

「弾正めが、左様なぬかりがあろうか」

「だが、忍びノ者なら」

「彼奴のまわりには、その忍びにたけた奴らで鉄の壁が出来ているわな」

「そうじゃ」

と、下野守もうなずいた。

「前々からの一族の異様な死にざま、弾正の手にちがいない。あれほどの手を使う奴じゃ、とて

もに隙はあるまい」
「一つ間違うと、われわれの方が危ない」
「なるほどな……」
「弾正めは、こちらが鉄砲一発ぶっ放せば、十発の返し撃ちしてくる男よ」
「なるほどな」
と、また主税助は、おのれのくびすじを撫でた。
寝首を掻かれることを想って、ぞっとした。
「気ぶりを見せぬことじゃ、それにお互い、用心が肝要じゃぞ、お互いにな」
自分たちが三人がかりで弾正一人に対抗せざるを得ない現実を哀しく思うよりも、その魔手から如何にして逃れるかを考えるほうが先だった。
三人は、特に信頼し合った一族というわけではない。
団結することによって、一つの勢力を得る。それは、ばらばらになってしまえば、きわめて弱い力だということを、お互いによく知っているからだった。
信頼や義によっての結びつきではなかった。共同の目標、共通の利益のための方便でしかなかった。
こうした時代だ。いつ裏切りが出るかわからない。
人間的な結びつきよりも、共通の利益のための結束というほうがかえって確実といえないこともない。
名門の生まれによくあるように、三人ともが、
（われらは三好家の……）

と、三好一族であることに誇りを感じ、その名声に身を寄せることで、繁栄を信じている。
すでに斜陽の名流の悲哀は、それにすがる者たちにとって、太陽の色の褪せざまが見えぬことである。
かれらが頼みとする、
（名門三好家）
なるものは、長慶の老衰とともに崩壊しはじめたことに気がついていない。
（弾正を倒しさえすれば）
三好家の復活があると、安易に信じている。
そういう考え自体が、すでに現実的ではなかった。名声の残滓などというものは、当事者の考えているよりも、ずっと稀薄で、あえかなものなのだ。
弾正が主家を乗っ取ろうとする態度を見せてきたことは、客観的にも三好家の凋落を意味しているのではないか。
慎重な男が行動するとき、すでに計算上でも、成算がある。
一つの強大な勢力が没落するには多くの場合、屋台骨は大きく張っていても、幹が腐っている。空洞があることに本人は気づいていない。周囲の者も、それに気づかないがゆえに、結果が悲惨に終わる。
秘められた長慶の死は、その空洞を意味している。
義継という年少の凡庸な若殿では、その空洞を埋めることが出来ないことを、誰よりも、長慶自身が知っていたのではないか。
三人衆の誰をも、

（三好家の旗頭に）

と、推さなかったことは、かれらの実力に失望していたからともいえる。

晩年の長慶が〝呆けた〟といわれるのも、この希望を失った者の失意の表情が、周囲にそう思われたにちがいない。

有能な手足を次々と失い、最愛のわが子義興まで失って――それらは弾正の魔剣に仆されたのだが――生き残った一族には、期待を持てなくなったのだ。

逆の見方をすれば、

（無能な奴ら）

だからこそ、弾正が暗殺しなかったともいえる。

生き残ったことは、無能凡庸である証明だ。

三人はそうは思わない。誰でもおのれを卑小には見たくない。もしも、冷静に客観視できたならば敢えて弾正に敵対せぬか、又は、節を屈して、弾正と結ぶ、という方法もあった。

それは三好一族として、かなりに屈辱的なものではあったが、滅亡するよりはいい。

三人は〝力〟という場合には、三好一家眷族を合算した力を考える。

（これだけの勢力があるのだ）

と、安心する。

（弾正ひとりに優にまさる。負けるものか）

その力押しをするには、しかし左京大夫義継の存在が邪魔だった。

力押しでゆけば、狡智な弾正は、義継の陰に隠れよう。

（三人衆は主家を攻めた）

と、言いふらすだろう。

そして、義継の名で、三人衆を叛逆者と呼び、結束を崩してくる。

そうした狡さが見えるだけに、〝闇の手〟反間の策を用いるしかない。

さて――。

摂津の芥川城（三人衆の一人、三好日向守の居城）を出た影は、夏のなま温かい夜気の中を南へ飛んだ。

飯盛山城へ向かうのではないらしい。方向が違う。南だ。

黒影は一陣の黒風となって、南へ走る。

大坂を通りすぎた。下野守の中島城へ寄るのではなかった。石山寺の城も通り過ぎた。

道は堺へ通じている。

伊賀の忍び――芥川城から夜気の中を風のように走った、その影は、堺の街に入ってきていた。

もう木戸は閉っている。熟達した忍びノ者には、木戸や小さな濠などものの役には立たない。

大路小路が整然としている堺の街を、馴れた様子で影は走ってゆく。

夜回りの者が龕燈（がんどう）提灯をかかげて通った。当時まだ珍しい。この堺なればこそであろう。

やもりのように塀に張りついて、これを見送った影は、さっと道を越えた。

小路の裏通りを幾曲りかして、辿りついた裏店。

その家の目だたない作りには、城之介なら記憶があるにちがいない。

赤目ノ木鼠の〝巣〟の一つ、湯女上りのお孝の家だ。

影は、音もなく柴垣を越した。入ろうとして戸の合わせ目に耳をあてた。

「……」

話し声が聞こえてくる。

かれの知るところでは、お孝は木鼠の死後、どこかへ働きに出ている。

男が出来た様子はなかった。

(誰が来ているのか?)

伊賀者のなかまでは、その縁辺の動静まで、常に眼にとめられている。いま、この男がお孝を突然訪れたのも、木鼠のおんな、だったからにほかならない。

お孝が木鼠の援助によって生活していたことを、なかまは知っていた。

中から聞こえてくる声は、意外にも女のものだ。

暫くの後、この忍びノ者は天井の節穴から見おろしていた。

中には、女二人。

お孝と、そして、いま一人は忍者は知らなかったが、おつるだった。

堺の浜で検問にひっかかり、南蛮屋十兵衛の好意で寄宿している。

愚門禅師とはるばる九州の長崎から城之介を尋ねてきたのだ。

と、お孝が年上らしい眼で、都会ずれのしていない娘を見て、

「――でも、あて、うれしい、おつるちゃん」

「おまえのような、ええ娘と友達になれて。あての亭主はこの春に死によったさかい」

「まあ、お可哀相に。で、病気は何だったの」

「病気、ええ、なんやしらん、その、胸を……」

弾正に胸を刺された、とはいえない。その脇差しをお孝は必死の思いで抜き取ったのであるまだ、その手に血が滲みているようであった。

「まだ、老齢やなかったさかいにね」と、ごまかして、「運が悪かったんとちゃうか、しゃァない」「わかります」と、おつるは同情して、うっすらと眼に涙をためて、

「あたしだって、好きな人と離れているのは辛いもの。夫婦になっていたら、尚更……あたしなら、生きていられない」

「あても、そない思うてん、せやけど……なかなか死ねるもんやない」

忍者は女たちの話がどれくらいつづくのかと、気になった。

(まさか、泊まってゆく気ではあるまいが……)

忍者は、節穴から見下して、女たちの長話に、うんざりしてきた。

いつまでたっても切れ目がない。煎茶をのみながら、金米糖をつまんでの語らいである。

「人間の縁ちゅうもんは不思議やないか」

と、お孝がしみじみとした調子で言う。

「あてが、うちの人が死なへなんだら、南蛮屋へ働きにゆくことせなんだし、おつるちゃんがその城之介はんを探しに来なんだら、あてと知り合うこともできなんだ」

「ええ、ほんとうに」

「それに、城之介はんはここで、うちの人の最期を看とってくれはった……」

「きっと、神さまのお引き合わせね」

「好え若衆や」

「――どこにいるのかしら……」

「お布令が出ているよってに、そのうちにわかるやろ」

わかったときは、しかし、命が危ないのではないか。

おつるは、城之介がどんな理由で松永弾正という権力者に追われているのか知らない。
長崎でも城之介は追われていた。それを偶然救ったことが、知り合うきっかけであった。権力者に追われているというだけで、悪人だと思う世間に、おつるは、精一杯に叫んでやりたい。
（城之介さんは悪い人じゃない）
お孝が城之介を理解していたことも、彼女には嬉しかった。
（あいたい……）
思慕のおもいに駈られると、こうして、お孝を訪れては、城之介の話に浸るのだ。
が、お孝の方では、実は城之介のことはよく知らない。
時間的な意味では、おつるも同じだった。人間の感情のふしぎさは、その交際の長短にかかわらず、合うものと合わないものとある。長年月、交際しているからといって、心が通じるものではないのだ。
短い間でも、逆境の中でも、心の深いところで触れあう場合、それは運命的な感動を与える。
おつるのそんな感情に、小さなねたみすら感じながらも、お孝は、
（美しい仲だこと……）
と、思った。
満足したように、おつるが帰っていったあと、独り寝の床をのべながら、
（あてと、あのひととは……一体、何ちゅう仲やったろ）
あらためて考えてみると、われながら呆れるような生活だった。
それでも、木鼠はちゃんと生活に不自由ないだけのことはしてくれた。それに甘んじて、さして疑いも容れずに過ごしてきたのだ。

（あの人、戻ってくれれば、あてを喜ばしてくれはった……）
お孝は木鼠のおもかげを追っている。手はいつか、無意識に自分の胸のふくらみを愛撫していた。
忍びノ者の特異な生き方は、その心がまえも、また特異ならざるを得ない。常に〝死〟が隣りにあった。
今日の命は、明日につながるという保証がない。乱世では、一般人にもそれは言えることに違いなかったが、他動的にその恐怖が与えられることはあっても、危険をさけることは出来る。
忍者は常に、自らを危険に飛びこませねばならないのだ。自分の死体がむざんに荒野に横たわり、餓狼にばりばり食われている夢を見ることすらある。そしてそれは決して、あり得ない悪夢ではなかった。
だから、生を貪ることにかけては、常人の想像外のものがある。
お孝の家に来たときは、ひたすら女肌に溺れた。
時には一日中、離さないこともあった。
枕元に水や食物を並べ、へとへとになるまで、愛欲に溺れた。水を飲み、ものを食べてはまたはじめる。口移しで飲ませたり、一つものを口でわけあったり、そんな児戯めいたことがまたあらたな情感をかきたてる。
木鼠が死んだあと、お孝は、ほかの男をふりむく気にはならなかった。
あまりに強烈だっただけに、ほかの男の誰も、それに代わる者などいるはずがないと思われたのだ。
おつるが帰ってから、ひとりになるとお孝は忘れていた情感に誘われて、おのれの手で、慰め

はじめたのである。

はじめは無意識だった。寝ようとおもいながら、眠れぬままにもじもじしているうちに、手がいつか胸にふれ、ふと、その手を他人のものに感じた。木鼠の愛撫は執拗でこまかく動いた。いつか、その思い出のままに手は動いている。指は乳首をつまみ、乳房の重みをはかるようにやわやわと揉みしだいて、官能をたかめてゆくのだ。

木鼠のからだは柔軟で、手と口だけではなく、足も用いた。背骨が折れるのではないかと思われるような姿態になって、女体を責め、それはお孝を、この世ならぬ極楽に導いてくれた。

両の手で乳首を愛撫しながら、しだいにお孝は鼻息をあらげてくると、もう、それだけではものたりなくなって、大きく波に揺られるように、身悶えした。

（もっと手があったら……）

手が二本しかないのが、歯がゆい。

腰をくねらせて、悶えてるうちに、そのおもいがかなえられたかのようであった。

まるで、おのれがもう一本の手を持っているように――狎れた蛇がするすると入りこんでくるような妖しい快感であった。

お孝は眼をあけていられずに、固く閉じて呻いた。自分がどんなはしたない姿勢をしているか。漠然とながら、気にかかっていた。

（灯を消さなければ……）

うつつのうちに、おもった。

その灯がなぜか、ひとりでにまたたき、ふっと消えた――。

灯が消えた……。

まるで彼女の悶えに応えたように。

乳首を固くして、お孝は声を奔らせている。からだの芯からとろけるような快感がこみあげて男をうけ入れた部分に熱いものが噴きあふれた。

「ああ……」お孝は、木鼠の顔を思い浮かべようとした。

なぜだろう？

木鼠の顔をまるですっかり忘れたように、脳裡に出てこないのだ。

この快美な感覚は、木鼠によって与えられたものとは違った。

その違いの微妙さは、いまのお孝には判然としない。ただいえることは、木鼠には、お孝の肌に溺れようとして、ときに子供のように無邪気な面を見せ、その赤裸々な行為が、お孝をも巻きこんでしまったものだが……。

いまのこの妖しい戦慄をもたらしているものには、その心のふれあいにも似た喜びがなかった。

女体のもつ快感に、しっとりしたものがなかったのである。

もしも連夜のいとなみだったらそのどこか冷たくかわいたまぐわいは、お孝をして、こうも取り乱させることはなかったろう。

拒否するものがあったにちがいない。哀しいことに、あれ以来、女体はかわききっていた。そのかわきが、おぞましくも反応したにすぎない。

その快感のなかで、お孝が木鼠の顔を思い浮かべようとしたのは、やはり、木鼠によって味わわされたものと比べて、なんとはない違いが、強いたものかもしれない。

混沌が、彼女をとらえた。

おのれの手で、おのれを慰めているような、どこかうしろめたいものが、意識を惑乱させてい

た。

　その渦の中に、どこやらからひびいてくる声があった。

（木鼠にあいたいな）

「え？……」

（木鼠とは幼馴染であった……）

「……」

（お前も知っているはずだ）

「……」

（木鼠とは、よく酒を飲み、遊んだ仲ではないか……）

「あ……」お孝は誘われたように、声を洩らしている。半眼をあけた。カスミがかったように、昏い。その昏いなかに、男の顔が浮かびあがっている。

　まだ――快感はつづいているのである。潮に揺られるように、温かいうねりが、押し寄せては返し、ずずっと引いては、またゆるやかに盛りあがってくる。

　かわきを満たされた幸福感が、神示のように、その言葉を受け入れ、その顔を記憶の襞にきざみこもうとする。

（おれだ、おぼえているだろう、名張ノ銅七だ）

「あ……名張の」

（銅七だ）

「名張ノ銅七……名張ノ銅七」

　うつつである。うつつに何度も何度も、その名をくりかえしている。角張って眉毛のうすいそ

の顔がお孝の襞にきざまれてゆくのだ。

　一種の催眠術であろう。

　忍ノ術は、今日の科学的な眼で見ても、かなり納得がいく。

　心理学の応用もある。いわゆる目くらましなども、心理学と、灯火の昏さや、無知からくる人人の錯覚、幻覚を利用したものだ。

　むろん、そこに習練から来た、超人的なワザが活きてくるのだが。

　お孝は、淫夢のうちに、男の顔を見、耳に吹きこまれて、すっかり、記憶の襞に焼きつけられた。

　赤目ノ木鼠の友人。

　名張ノ銅七――。

　その顔と、その名前と。まるで古い日記帳に、むりに書き込むようなものだ。

　銅七のやりかたは、いささか、むりがあった。が、お孝は渇いていたのだ。これは成功している。

　淫らな夢からさめたとき、お孝はその夢の中の出来事を忘れていた。

　つまり、日記帳は、ちゃんと伏せられ、蔵われていた。そして余白に、何の不自然さもなく、銅七のことが書き込まれていた、というわけである。

　翌日――。

　銅七は南蛮屋十兵衛の店を訪れている。

「お孝さんは、お出かな」

　身なりもきちんとして、どこにも怪しいけぶりはなかった。

「おお、これはお久しぶり、私じゃ、名張ノ銅七じゃ」
「ああ、お前さまは、たしかに以前……」
「そうじゃ、お逢いしましたな。いや、商いの用事で、堺へ来たついでに、立ち寄ったまでじゃが」
お孝もよく知っているらしい様子に、おつるも悪意は持たない。
銅七は気前がよかった。南蛮屋の見世棚にある珍しい白檀の細工物や、香炉や笛や、かなり買いこんで、
「ちょいと一人では持てぬな。おつるさんといったな、お前、半分持って宿まで届けて下さらぬか」
いいお客だから手代の万兵衛も嫌な顔はせずに、
「行ってきなはれ、大事なお客さんやで」
と、送り出した。
宿へ入ると、
「お孝さんからもいろいろ聞いたが、苦労しているそうやな」
と、おつるを上へあげて、親切に身の上話を聞いてくれた。
「その城之介という名前は聞いたことがある」
「え、ほんとうに」
「うむ、京でなあ……城之介を探すのなら、こないところにいても駄目やな」
「では、どこで」
「よいところがある。飯盛城じゃ、いま、この畿内では第一の御領主さまのお城じゃ、お前なら

器量もよいし、私が口を利いてあげるが、お城奉公するがいい」
おつるにしてみれば、一日でも早く、城之介にあいたい。
そのためには、どんなことでもいとわない。それに、手代の万兵衛がいやらしい眼つきをするのがわずらわしく感じているところだった。
「おねがいします、そのお城へ、連れていって下さいまし」
おつるは、銅七に頼んだ。この男を伊賀の忍びノ者とは知らず、その黒い腕にどんな考えを蔵しているかもしらない。
ただの親切で言ってくれているのだと思っている。
純粋な若さは、他人というものが見返りなしの親切というものはあり得ないのだということが、わからない。
手代の万兵衛のことをちょっと洩らすと、銅七は、したり顔に言った。
「そらあかん。そない男のいるところは、一日も早よ、出た方がいいで」
「ええ……」
「それに、あとから城之介と逢うたとき、疑われたら大変や。痛くもない腹をさぐられることになるでの」
「……」
「つまり……お前と、万兵衛との間に何かあったような」
「そんなことは」
おつるは、赧くなった。それから蒼くなった。
「城之介さんは、そんなことを思うような人では」

「じゃが、男だからな。男は、好きな女のことには、必要以上に猜疑ぶかくなるし、それが当たり前じゃ、惚れりゃ誰でもそうなる」
「……」
「それに、火のないところに煙は立たぬということも」
おつるの胸の波立ちが銅七にはわかる。
もう一攻めだと思った。
「お前は何もしなくても、万兵衛が、いつ何をするかわからない」
「まさか、そんなことは」
「あの南蛮屋は、南蛮モノを扱っているから、眠り薬というようなものもあるじゃろ、そないなものを知らぬうちに飲まされて、いたずらされて見なされ」
「……」
「その、きれいな肌がとりかえしのつかないことになる」
おつるは、恥ずかしさと恐ろしさで眼があげられない。
「城之介のためにも、一日も早く、そないところは出るこっちゃな」
「はい」
「いっそ、これからすぐ行こかの」
「え、それはあんまり……」
急すぎた。おつるは銅七を見た。いかにも好人物というように、銅七はにこにこ笑っているのだ。
「そら、私は、十日先きでん、かまへんけどな。一寸先きは闇ちゅうからな。人間は先きがわか

らんよってに」
そう言われると、おつるは、言葉を失ってしまうのだ。
「でも、南蛮屋さんに挨拶をしてゆかないと」
「そないこと、わてが代わりにしといてあげるがな。万兵衛のことも上手に角が立たんようにな。一ぺん戻って、出るなんちゅうと、何のかんのというと、邪魔しくさるに違いない。そういう顔じゃったな、わてにはようわかる」
所詮、おつるのような初心な娘は、こんな手合いにかかると、赤児の手をねじられるにも似ていた。

大奥の女――。
男子禁制の奥女中たち、といえば、妖しいまでの女たちの体臭がムンムンする淫猥な部屋、を想像する読者が多いだろう。
だが、それは江戸時代の将軍家や大大名の大奥のことで、万事に大様な戦国時代は、そうした男女関係にあまり目くじらをたてない。
明日の命もわからぬ乱世に、男女の情事に一々、道徳をうんぬんしている意味はない。
畿内五カ国から隣国数カ国にまたがる大勢力の三好家の主城たる飯盛山城は、その規模の大きさと要害を誇っていた。
おつるがこの城へ奉公にあがってから、十日ほど経つ。
名張ノ銅七はどういう手だてで押し込んだのか。あの巧みな忍びのワザは、人心収攬にもたけているから、堺の納屋衆たちの名声を利用するのに、造作はなかったのであろう。

この時代の大名は、ことに三好衆は堺の財力をバックにしている。納屋衆の意志を一蹴できない立場にある。
「大名方での奉公の要領はな、あまり、ものを言わぬことじゃ」
銅七は教えた。
「口数少なく、控え目でな、立居振舞いをしとやかにする」
「はい」
「それさえ、心得ておけば、大過はない」
「それで、城之介さまのことは」
「お前からは、口にせぬことじゃ」
「でも……」
「そのうちに、わかるようになるからな」
銅七の目的は、弾正の勢力を削ぐために、弾正の息のかかった夕月をおとしいれることだ。
(夕月をおとしいれる……)
この目的さえ達成すれば、御用済みだ。
おつるがどうなろうと知ったことではない。
銅七が一つ杞憂したのは、おつるが夕月と親しくなることだ。
城之介を恋する二人……。
この恋の激しさに於ては、敵であるはずの女たち。
(ひょっとして、仲良しになられたら、どないもならん)
もっとも、夕月と城之介の仲を憎ませるには、おつるは恰好の手先きになるかもしれない。

銅七は、すでに夕月と城之介の関係もさぐりだしている。考えてみれば南蛮屋十兵衛といい、木鼠とその情婦のお孝といい、そしておつるも……運命のあやしい手におどらされているかの如くに情欲の中でからみあい、愛憎の波に弄ばれている。
(死ぬ者貧乏じゃな……)
木鼠をふと思った。
(おれは死なぬ。おれのワザを銭に代える。生きるためだ)
いまの銅七には、弾正を憎む気持はさしてない。忍びのなかまの感情は、常人のそれよりもかわいていた。
おつるは疑うことを知らぬ純真な長崎の女である。お城奉公に上って何もかも珍しく、おどおどしていた……。
十日ほど——名張ノ銅七はそう言った。
その十日目、忽然とあらわれている。
おつるが台所に来たときだった。
干物でも売りに来たらしい様子の男が、すっと近寄ってきた。
「あっ……」
思わず、おつるはあたりを見回した。
銅七のそんな姿が、異様であり、明らかにそれは人目を忍んでのやつしだったからだ。
「お前さま……」
言いかけたおつるを、
(叱ッ)

と、目で圧えて、銅七は懐中から、何やら包みをとりだした。
「これをな、夕月どのへ差し上げるのじゃ」
「…………」
「かように口上してな。南蛮渡りの秘薬でござれば、若殿の御食膳へ奉りますようにと」
突然なのである。おつるは、まごまごした。
「わかったか」
と、銅七は油断なく視線をあたりに走らして、
「わかったな」
「あの……これを、どうするのでございます」
「ちィ……」と、舌打ちが洩れて、
「夕月どのへ差し上げるのだ」
「はい、お薬?」
「そうじゃ、薬じゃ、南蛮渡りの秘薬」
噛んで含めるように、銅七は言った。
「南蛮渡りの……」
「不老長寿の薬じゃ。壮健になる薬」
おつるは、渡されたものを、まじまじと見ている。
「若殿の食膳へ奉りませ、とこういうのだ。つまり、夕月どのの手から、若殿の食膳へ奉らせることじゃ」
「わかりました。お薬ですね」

「そうだ。わしの名は出さぬことじゃ」
「どうして?」
と、無邪気に首をかしげるのへ、
「ともかくじゃ、頼むぞ」
「はい……」
たたみこむような勢いに呑まれて受けとった。
女の声がした。あわてて銅七は立ち去った。
伊賀甲賀の忍びノ者といえば、通常、風のように入り、密室にさえ影のように忍びこむとされている。
そのワザを、銅七が持たないのではない。
銅七は狡猾だった。狡いのだ。
自ら危険には近よらない。かれは〝術〟を用いたのだ。これは手である。
おつるを指嗾する。自らを変装させるのではないが、これは忍びノ術だ。すなわち〝くノ一〟である。
おつるの純真さを利用する。おつるの手からもらうものなら、観音様の賜わり物と同じく、人は信じるだろう。
そうだ、夕月も。
その日、夕月は、おつるから、この〝秘薬〟を受けとっている。
夕月はその〝秘薬〟を受けとるとき、何の疑いも抱かなかった。
「長生きのお薬ですか」

「はい……」
「それは、有難う、さだめし、若様もお喜びだと思います」
おつるは黙ってそこを去ろうとした。
そのときまで、夕月はおつるに大して気をとめていなかったのである。
「これは、何という名かえ」
「……」
そういう質問をされるとは思っていなかったのだ。
おつるは、急に言葉が出なかった。嘘が吐ける女ではない。せいぜい黙っているだけだ。
その無言で、苦しんでいるさまを、思い出せないのだろうと、解釈した。
「そうねえ、南蛮の言葉は覚えにくい」
「はい」
「舌を嚙みそうになります。ほほほ……」
夕月が爽やかな声で笑ったのでおつるはほっとした。助かった、と思った。腋の下にじっとりと汗を感じた。
「そなたの名は、たしか、おつるといいましたね」
「はい……よろしくお引き回しのほどを」
「頼みますえ。何かとわからぬこともあろうけれど、もしも困ったことがあったら、私に言うがいい」
「はい、お願いいたします」
「このお薬は、どうやって飲むのかしら」

「御膳部に……お酒に混ぜると、よく効くとか……」
「ああ、ではそうしましょう、若様は御酒がお好きだから」
おつるは、その間、落ち着きなく眼を動かしていた。
嘘を吐くことの苦しさが、胸を波だてている。
食事の時間が来た。台所方がその日の食事を作ると、まず、お毒見役が、毒見をする。
城主の膳部には、この毒見役が必ず試食する。近習や小姓などは、そうした役目を兼ねていたのである。
そのあとで、はじめて、城主が箸をとるのだ。
飯盛山城の城主は依然として三好長慶ではあるが、すでに実体はない。ふしぎなもので、何のかんのと、とりつくろってはいても長慶の死はうすうす、家臣や領民たちも感づいてきている。
だから、自然、嗣子の義継への扱いが城主に対するものと同じようになってくる。
今日の夫婦生活のように、食事をともにするということは少ない。
城主などの身の回りは小姓などがしたもので、後の腰元なども、城主の使用人ではなく、夫人や側室や姫君付きの女たちなのである。
だがこの日は、夕月が給仕を申し出た。義継は喜び、
「そちも一緒に食せい」
と、言った。
酒にまぜると、効目が早い。
名張ノ銅七はそう教えたのである。それがどこまで本当かは、おつるにはわからない。
が、夕月に渡してしまってからなぜか、胸がどきどきしてきた。

（あれは、効くのかしら）

薬――。

薬は、一つ間違うと毒になる。

世に秘薬と称されるものには、多分に、その危険性がある。

おつるは、その南蛮渡来と称する〝薬〟が、毒薬だとは知らない。

毒を、夕月に盛らすことによって義継を怒らせ、夕月につながる松永弾正を失脚させようという、三好三人衆の姑息な方法なぞ、おつるには夢にも考えられない。

ただ、南蛮への恐れがある。

今日のわれわれの西洋に対するそれとは違う。怪奇で神秘的でまた珍妙であった。

そうした不可解な国からの舶載物である。

不老長寿に利くかもしれないがひょっとすると、髪が赤くなり、眼玉が青くなるかもしれない。

（ああ、どうしよう）

心配で、居ても立ってもいられなくなった。

おつるは、銅七が憎くなった。

こんなに苦しませる男を、

（ひどい！）

と、思った。

そんなに立派な秘薬ならば、なにも、こっそりと酒にまぜさせたりしないでもいいではないか。

（何かある……）

なんとはなしにそう思った。おつるの純真な心を翳らせる何かがあった。

おつるは夕月の前へ出ていった。

丁度、夕月が庖丁人の整えた膳部に指示しているところだった。

「あの、お話があります」

恐る恐るおつるは言った。

「何かえ？」

「あの、さっきのお薬を」

「――え？……ああ、あの南蛮の秘薬とやら」

夕月は薬包みをとりだした。

「あの、それを……」

おつるは薬包みを受けとると、掌にこぼして、そっと舐めた。

「おつる、そなた毒見を？」

「南蛮モノですから」

ほとんど、味はなかった。おつるの舌が、緊張で熱っぽくなっていたのかもしれない。

舐めてみたのは、一包みの三分の一にも充たぬ量である。

が、苦しみは早く来た。薬でも毒でも、その効果は、体質や体力によって個人差があるのか。

おつるは、胸の痛みを訴え、苦しみ出した。

「これ、どうしました？」

夕月は驚いた。

真っ蒼になって、たらたらとあぶら汗を流し、七転八倒の苦悶だった。

「お医者さまを、早く」

その間に、おつるの苦悶はひどくなり、あえぎも絶え絶えになっている。
「おつる、しっかりして、しっかり！」
身代わりになったのだ。夕月はおろおろしながら、おつるを抱きしめた。

死神が笑う

おつるの善意は、陰惨な謀略と冷酷な行為の中で生きてきた忍びノ者には、まったく計算外のことだった。
（ちィッ、人の善すぎるとは、阿呆ちゅうことじゃわい）
名張ノ銅七は地団駄踏んで口惜しがった。
純真さを利用しようとして、はからずも裏をかかれたことになったのだ。
（——口をふさがねば）
そのことが、まず、銅七の課題になった。
なまじ、たかをくくって本名を教えてしまったのが、悔やまれた。
城中異変——。
の噂は、早くも三人衆の耳に入っていた。
「——失敗したな、彼奴」
日向守はすぐに察した。
それぞれに情報網は張りめぐらしてある。噂を運んでくるのは、行商人であったり、農民であ

ったり、放下師などの大道芸人であったりした。
新聞やテレビのない時代、しかも、早く正確に、近国の動きはキャッチせねばならぬ時代。
情報は絶対必要であり、その権力者の必要度を充たすのには庶民は躊躇しない。商才というものは、必要に弾かれて、生み出されてくるものだ。
噂を、右から左へ伝えるだけでは、危険はない。危険のないだけに、報酬は安い。
どこの城でも、乞食にくれてやるような、小銭で、
〈噂を買う〉
のだ。
それから、手を伸ばす。噂の裏付けを買うのだ。
〈事実を知る〉
これまでは、比較的容易であった。
だが、この段階で、行動を起こすことは、軽業の誹は免れない。
この事実を判断しては、
〈真実を摑む〉
のだ。
むろん判断には、見聞と思考との綜合的結論を必要とする。城中の異変の様相を、名張ノ銅七に頼むほど愚かではない。
銅七と功利的なつながりのなかは、第三者の眼と耳が正確な〝真相〟を伝えてくれる。
(おつるという女が、毒をのんで苦悶の末、やっと助かったという……)
義継に上る食膳の毒見をしたせいらしい、という。

「やはり、銅七めが失敗したのだ」
日向守は下野守と主税助を呼びよせ、
「われらのほうに弾正の怒りがむいてこぬうちに、こちらから旗をあげてはどうじゃ」
と、相談をもちかけた。
銅七のような拙劣な忍びノ者に大任を押しつけたのが、失敗のもとだが、そんなことを責任の転嫁でもめていてもはじまらない。
それより、どんな対策をとるかだ。
三人が額を集めて相談しているころ、銅七は城内に忍びこんでいた。
(おつるの口をふさがねば……)
秘薬の出どころは、
(名張ノ銅七……)
おつるが、そう口にするのはわかっていた。
そして、その名を聞けば、たいていの者が、
「忍びノ者か」
と、頷く。名張とは、伊賀のくににしかない地名である。
「名張ノ銅七という忍びノ者が、〝くノ一〟使いにしくじった」
こういう無責任で他人には面白い話くらい、本人にとって迷惑なことはない。
事実だからしかたはないが、銅七の〝忍びノ者〟たる評価がガタ落ちするのは明白。
かれらにとって、それはすべてであった。忍びノ者は〝忍びのワザ〟を売るのである。品物なら売れねば、値を下げることもある。値さえ下げれば、売れる。

が、忍者の技術は、拙劣だから、安くします、といって誰が買うか。
忍びノ者を雇うときは、万一の寝返り、返り忠をも、雇い主側で用心していなければならぬ。雇われていながら、金額次第では、いつ寝返るかもしれぬのだ。
所詮は、そういう存在だった。
だから、この世界くらい、非情で、したがって、ワザが高く売れるところはない。仕事の難事というだけではない、両刃の剣にひとしい、人間の〝情〟とは無縁のところに、忍者は居た。
(銅七のくノ一は使いものにならぬ)
この一言で、かれのこれまで鍛えあげ、苦しみに耐えてきた二十年の忍びノ修業は無に帰してしまう。
失敗が銅七の生活にかかわるだけではない。
忍びノ者の絶対的な条件を破って、
(指嗾者は三好三人衆……)
と、洩れたらどうなるか。
三人衆に今度は銅七が狙われる立場になる。
伊賀者と一口に言っても、四十九流といわれ、小豪族、小集団がひしめきあっている。同国の同じ忍びノ者の身の上にも、他に頼まれて、口をふさぐくらいは平気である。
よしんば難しい場合、山一つ越した北には甲賀がある。
この甲賀には五十三家といわれる、忍者の群れがいる。三人衆の立場としては、銅七を消して、証拠湮滅をはかるしかない。
星の運行が、定められた軌道をそれると、他の星にぶつかり、さらに、他の星を軌道から押し

出して、第二の爆発を惹起するように、悪循環をおこす。
そのもとを絶ち切ることだ。
(おつるの口をふさぐ)
銅七は必死になっていた。
おつるのような、身分の低い女のところに忍びこむのは、きわめて容易だ。
城内の足軽小者でも忍びこめる。左様、銅七は影を見咎められてもいいように、足軽の恰好になっていた。
万一、誰かに見咎められても、足軽の恰好をしていれば、たいてい、そのままに済む。
これまでの経験が、忍者銅七を大胆にしていた。
そして、その大胆な行動のほうが、人の注意を引かないことも知っていた。
槍をかいこみ、夜回りのような顔をして、建物に近づいてゆく。たとえば、突然、誰かとぶつかったとしても、銅七は平然として、
「変わった様子はない」
などと気軽く言って通りすぎるだろう。
おつるの部屋に入ったとき、銅七は槍を捨て、刀を捨てていた。
脇差しでも、かれには長すぎる。極端に言えば、針一本でもよかった。いや拇指の一圧しで咽喉笛を砕ける。
おつるは、他の女中たち五人と一緒の大部屋だった。
誰か一人が鼾をかいているのが、耳ざわりだったが、これは侵入者にとっては幸いだった。足音が消せるのだ。

もっとも銅七は足音を聞かれるようなへまはしない。
鎧通しを抜き放った。
おつるのやすらかな寝顔も、銅七にしてみれば憎い。
(この小娘が……)
愛らしいのが、なまじ許せない。
銅七の鎧通しは、おつるの咽喉を貫ぬこうとした。
と——
ふっと、そのおつるの顔が靄がかかったように、曇った。
「?……」
銅七は鎧通しを握りなおした。
どうしたことだ。おつるの顔はその靄の中に溶けたように見えなくなった。
眼がどうかしたのかと思った。緊張のあまり、視神経がまいったのかと思った。
気をとりなおした。
そのとき、
〈あたしを刺すのかえ〉
おつるの声が聞こえたような気がした。
声は背後でした、と、思った。
銅七はふりかえった。
おのれを信じる場合は、そんな動揺はない。すでにして、銅七は何ものかの〝術〟にはまっている。

〈ここだよ……〉
声は、ずっと離れたところにある。
銅七は身を翻した。
おつるの声だろうか。おつるの声はそんな声だったろうか。その判断もつかなくなっているのだ。
銅七の目の前に、白い影が浮かんだ。
(おつるだ)
いつの間に、そこへ来たのか。
白い影。もやもやと、人影をなしているが、おつるのようでもあり、そうでないようでもあった。
銅七は逆上している。
忍びノ者にとって最大の敵は逆上であった。常に冷静沈着でなければ、習練の秘術も駆使できない。
「生かしておけぬ」
口走り、鎧通しをさっと突き刺した。
手ごたえがなかった。
「やや!……」
銅七は飛びすさった。
おつるの白い裸身と見たのは、幻影か。
目の前が灰色の靄に覆われ、気がついてみると四方八方、すべて、厚い層の灰色に包まれてい

たではないか。
「どうしたことだ？　これは、どうしたことだ」
狼狽した。まだ、かれはおのれが幻妖な術にとりこめられているとは気がつかなかった。
四方八方の厚い灰色の靄は、温かく——温かいだけに無気味な動きを見せて、渦巻き、流れている。
その渦巻きが、奇妙に変化して、おつるの死体をうつし出すのだ。
「くそ！」
銅七は、四囲にむかって、鎧通しを突き刺した。
四囲に出没するおつるの裸身にむかって——いや、おつるの幻影に、というほうが正確であろう。
銅七は狂乱した。刺しても刺しても、おつるは倒れない。血も出ない。第一、手ごたえがなかった。
人体と見えたのは、気体であり空であった。
銅七の狂奔は、ますますはげしくなった。
「くそ、迷ったか、亡霊め、くそッ、くたばれ」
すーっと、おつるの影は遠去かってゆく。前後の見さかいもなく、銅七は、そのあとを追った。
靄は眼前で、しだいにうすらぎ、そこにおつるの影が——。
「や、なんと！」
おつるではない。
異様な老人の姿が浮かび上ったではないか。

銅七は驚愕した。
本来、忍びノ者としての応変のワザを備えていれば、この瞬間、咄嗟に対応の転身を見せることができるはずである。忍びノ者ほど臨機応変に行動する者はない。
が、銅七はさながら、痴呆の如くに、唖然として見守っていた。
奇怪な術に完全に呑まれてしまったのだ。
もうろうたる影は、あの枯木の空洞を吹き抜ける風のような笑い声を洩らしている。
〈どうした、伊賀の猿よ〉
「う、うぬ……」
「………」
〈おつるの息の根を止めようと思うても、そうはならぬな。去んで三人衆に申すがよい〉
〈松永弾正には、妙な死神がついているとな〉
「し、死神じゃと！」
眼を凝らそうとすると、その影は、陰々たる笑いだけを闇にひびかせて消えていった。
「死神……」
まさしく、そうかもしれぬ。銅七は胸の動悸がまだおさまらなかった。忍びのワザなら、いかなる練達の者でも、破るワザはある。正体が不明というのは闘いようがなかった。奇怪な術に翻弄されて銅七は、城から走りだした。命があっただけが目っけもの。
その醜態を見送っていたのはいうまでもなく、果心居士であった。
数万の軍勢を呼集して、三好三人衆が飯盛山の城に押し寄せたのは、その数日後である。
情報は二日前から入っていた。

大軍を動かすには、シンパの大名小名を動員する。広範にわたるから、秘密は保ちようがない。

「日向守よりの使者が某城に入りましたぞ」

「下野守の郎党が村々にて兵糧集めをはじめてござる」

頻々として、集まってくる情報は三人衆の動きを的確に伝えた。

およその動員数も推測できるのだ。

「まず、二万はかたい……」

弾正久秀は、おのれの勢力を勘定した。

紀州衆、根来衆、それに甥の孫六郎が丹後八上城におり、前の守護職だった畠山の残党たちの野に隠れているのを、金銀で誘った。

「三好家の当主、御相伴衆たる修理大夫長慶どの父子へ一族の者ども叛逆の弓を引き候えば」

この時代、大義名分はまだ重みがある。

むろん、それに功利性がともなうわけだ。

飯盛山城へ参集した与力大名の軍勢は、少ないのは二、三十人から多くも五、六百人で、総勢、一万あまり。

これらのことも、むろん、三人衆へは筒抜けだ。

圧倒的多数で、北河内の飯盛山城へ押し寄せてきた。

しかし日向守も下野守も、戦さを仕掛けるという態度には出ない。

「管領たらん野望を抱く松永弾正を斥け給え」

「修理大夫が意志を伝え奉らん、若殿よ、出でさえ給え」

「阿波御所よりの教書これにあり、若殿にもの申す。若殿にもの申す」

阿波御所義栄のことは前に述べた。

将軍義輝を討って、次の段階には義栄を立てる黙契ができていたのだ。ところが、松永弾正としては、口実にすぎなかった。義栄と弾正とは、懇親がない。義冬、義栄は三人衆にべったりで、弾正ははじめから新将軍擁立など念頭になかったのだ。

義輝を討った直後にもその布告をするはずが、

(残党どもを片付け、京に治安をもたらすまでは)

などと口実をもうけて、ずるずるに引き伸ばした。

いよいよ、その意志なしと見て、

(弾正を倒さずば)

と、三人衆は蹶起したのだ。

倒す必要は、当面、弾正だけだった。義継を敵に回したくはなかった。長慶が死んだ以上、義継は三好一党の盟主の立場にある。三人衆の行動は、当主への叛逆になる。

(なんとかして、義継を弾正から切り離さねば)

かれらの考えは、弾正に手にとるようにわかる。

(義継はおれにとって守り本尊)

と、ほくそ笑んで、

「絶対、放すものか」

義継には弓矢をむけないはずであった。

〈もう一つあるぞ、守り本尊が〉

その奇怪な声に、弾正はもう馴れている。

「果心居士か」
と、探そうともせず、独りごちるように言った。
「もう一つの守り本尊は……」
〈死人じゃ〉
「……」
〈長慶じゃ……わしが丹精して、面貌をささえてきておる。安心して、任せい〉
「とっくに任せているわ」
弾正はかわいた声で笑った。故意に余裕を見せたのである。
「おぬしの幻妖の術なくば、わしに勝目はない」
気弱ではない。おだてているのだ。
果心居士の返事はなかった。
そのまま消えた。
（おかしな奴だ）
いまもって、弾正には、この奇怪な老妖の気持がわからぬ。何をおもっているのか。目的は奈辺にあるのか。一切が不明であった。
（とにかく、いまのおれには、役に立つ……）
役に立つものなら藁シベでも粗末にしない弾正である。目先きのことから、てきぱきと処理してゆくのだ。そうやって、一介の戦国牢人から、ここまでのし上ってきたのだ。
「和子の御用意はできたか」
弾正は床几から立ち上って、幔幕の外に控えた侍に言った。

「お急ぎのほどを、と申せ」
あたふたと駈けあがってくる黄母衣（きほろ）が見えたのだ。使番である。
「――もはや、敵勢が四条畷まで押し寄せました」
「何処の手じゃ、旗印は」
「岩成主税助が軍勢と見えまする。金銀二色の幣は岩成が大馬印、また金幣付きの銀扇は小馬印。およその人数三百」
「ふむ。それくらいなれば、孫次郎の手に合うであろう」
弾正は采配とって、幕外へ出て行った。近習、小姓、馬回りなど、旗本が、そのうしろに従う。
この飯盛山の城は北河内の生駒連峰の西端。北条、守口、寝屋川を足下に踏まえる要衝であった。
晴天には遠く吹田のあたりまで望遠し淀の長流が陽光を反射して光るのが見えた。
京より南下して、河内、和泉、大坂へ出るには、まず、ここを屠（ほふ）らなければ、背後を突かれることになる。
高さは生駒の主峰の半分しかないが、浪速の平原を眼下にする三百二十メートルばかりの高さは、この時代の戦法にはまことに適している。攻めるに難く、守るに易い、要害の城であった。
裏山から真っ直ぐ大和へ東漸すれば、奈良北方の木津へ出るし、艮（丑寅）へ斜めに走れば山城へも近く、京とは距離を感じさせない。
山城の要点は、突兀（とっこつ）としながら、背面側面にひろくゆるやかで三方を濠に囲まれるを良しとする。
包囲には大軍を以てせねばならないからだ。

「一気に蹴散らしてくれる」

弾正はおもった。

先鋒が少数だったことが、気丈にした。

兵を吝しむというか、小当たりの戦法は、いたずらに消耗を重ねるだけなのだ。三百の兵を出して五百の敵を受けるよりは、千の兵をはじめから押し出して、互角にいどむほうがよい。

松永弾正の戦法はしたがって、はぎれがよく、これが、勝因につながった例が少なくない。

西麓の仕寄りにひたひたと押し寄せる軍勢は、先鋒はたしかに三百くらいだが、そのすぐ二ノ手に七百ほどの槍隊、騎馬隊が控え、いつでも、とび出せる体勢を整えていた。

「あれは、下野守か」

大股に急いできた義継が、金の采配をあげていった。

弾正はじろりと見て、

「左様に示される場合は、杖か、さなくば、采配の柄をもってなさるがよい」

「あ、そうか」

「おん大将の采配の動きには、侍大将ども、常に気をとめておりまする」

「そうであったな」

義継は采配を前帯にはさんで、

「そちの鉄砲百人衆、彼奴らに威力のほどを見せてやれい」

「もとより。されど、いざという場合に用いましょう。紀州の弓隊が、一せいに放ちはじめましたぞ」

矢まぜが、相互の手はじめだった。つむじ風に舞うあられのように彼我の矢羽がうなりを生じて飛び交い、弦の音がうわーんと、重いひびきとなって山肌にこだました。

そのあとに足軽の先鋒が、長槍をそろえて、どっと走りだす。

矢まぜ槍合わせである。この戦法はかなり古い。同じ三好一党のことで、手の内は知っている。奇襲よりは正攻法で闘おうというのか。この足軽らの槍合わせを望遠した上で味方の騎馬が本格的な武士の戦いをはじめる。武士と足軽の差である。如何な戦いも足軽だけの槍合わせでは、勝敗は決しない。

足軽は所詮、手先きで、武士ではない。厳密に主従の黙契すらもない。一時的に、銭で雇われることが多いからだ。

この騎馬隊が走り出したのは、三人衆の方が早かった。

いささか劣勢に見えたのであろう。太鼓の音がとうとうと鳴りひびいたと思うと、どどっと地響きさせて、騎馬隊が走りだした。

濛々たる砂塵が数丈もあがって戦場の一角を蔽った。

味方も走りだしている。高畠衆の鉄騎は黒ずくめに旗差物の柄が朱塗り、槍が朱塗りなので、高畠の二本朱といわれている。

壮観であった。彼我の騎馬武者が突き進むと、足軽らは、あとずさりに槍をひきながら、さっと、わかれて道をあけるのだ。

わーっ！

わーっ！

鬨の声が馬蹄のひびきとともに双方から巻き起こり、段落のついた田野で衝突した。

凄絶な合戦であった。馬蹄の乱れと怒号と叫喚と、そして太鼓の音が狂躁的な音響となって田

野を埋めた。
ほぼ均衡を保って戦闘はつづけられたが、業を煮やしたように、陣鉦の早打ちが聞こえ、後備えの軍勢が、どっと繰り出してきた。
それを見ると、城方の和泉衆が、
「中備えを」
応援の騎馬が走り出る。
同時に左翼の鉄砲隊が、ずずずと前へ出た。
と、それを待っていたかのように、寝屋川の畔に折敷いていた日向守の鉄砲隊が、出鼻を挫くように、ドドドと発砲した。
まさか、撃ってこようとは思っていなかったのである。
鉄砲隊の半数近くが、この不意撃ちを喰って、ばたばた倒れた。
「撃て、撃ちかえせ！」
鉄砲頭が怒号する。
辛うじて残った者が筒口を揃えて撃ちかえす。
騎馬隊の激戦はまだつづいていたのである。鉄砲がこうした場合に撃ち合うのはありえないことだった。流弾の危険があるからだ。
が、戦さの手順は狂うのが当たりまえかもしれない。番狂わせをすることで、少数も多数に抗戦できるし、勝利の機もある。
混乱が野を包んだ。
こうなっては戦法も何もなかった。左右の足軽たちが、槍をふりかぶって走り出る。

槍は突くばかりが能ではない。その長さを利用して、叩く、薙ぐ、はねる——さまざまに使うのだ。
集団で、真っ直ぐに走る場合は腰だめにしていってもいいが、群れた場合には、味方同士が傷つけることもあり、進退の自由が利かなくなる。
混戦のときは、したがって、ふりかぶったり、肩にかついだりして走る。
敵勢に激突すれば、そのまま叩きつけ、殴り飛ばせばいいのだ。
太鼓の音や陣鉦が、進退を指示しようとしても、こうなってはもう、誰にも聞こえない。敵か味方かまでわからないほどの混乱になる。
だがそうなると、平原の戦いは多勢に分がある。
三人衆ほか三好山城守康長、同備中守、篠原右京之進長房など、それぞれの軍勢が、進撃すると、城方はまるで押し包まれるようなかたちになって、浮き足立った。
戦さは、機のものだ。数人が逃げだせば勝敗は決まるという。怖気はたちまちに伝染するものだ。
数分たたぬうちに、はっきりとしてきた。
武将の制止にもかかわらず、どんどん逃げ出して、三ノ丸へ逃げこむ。
「それ、追え、今じゃ、追うて城へ突っ込め」
漁夫の利を狙うように、それまで北条辺でじっと待機していた池田筑後守勝政の軍勢が、横合いから流れだした。
もしも、ばらばらになって味方とまじっていたなら、城へ入られてしまったろう。
池田筑後守は豪勇で知られている。信義の厚いことでも珍しい。

その軍勢は鉄砲隊こそなかったが、馬上の弓を使うこつでは、特色をなしていた。両足とふとももで自在に馬首を向けかえ、緩急思いのままに馬を走らせつつ弓をひきしぼり、矢を切って放つのである。

どこの大名でも、家臣の馬術は習得させているが、このワザを百五十人もの武者に完璧ならしめているのはいない。

「海内一の弓取り」という話もあるように、武士の表芸は一に槍、二に弓であった。

しかし、この著聞な弓隊も、鉄砲にはかなわなかった。

味方が雪崩れを打って敗走してきたのへ、この騎馬が弓弦ひびかせつつ、追走してくるのを見ると、三ノ丸の塀ぎわに陣どって成行きを静観していた松永弾正自慢の百人隊が、筒先をあげた。

「撃て、あの弓ざむらいをはたき落とせ」

一せいに火蓋を切った。

矢をつがえた弓をひきしぼったまま、あるいは、あらぬ彼方へ矢を飛ばし、あるいは、弓とりおとして、もんどり打って落ち、狂奔した馬が、蹄にかけて走った。

これは、著名な弾正の〝救い鉄砲〟だ。

これがなかったら、城方は、敗走も難しかったろう。

この精巧、正確な鉄砲にけんせいされるうちに、城兵は命からがら逃げ戻った。このとき数百人が倒されている。

勝ちに乗じて、仕寄りまで押し寄せた三人衆は、大声の者を選んで、口上役とした。

「城中へもの申す。城中へもの申す、修理大夫どのすでに亡きものなれば、弾正にたぶらかされ城取らる前に、開城なされぬか」

大音声に呼ばわった。

むろん、人心攪乱だ。内部から紛糾させようというのだ。

「なんだ、狂人が、何を吐く」

弾正はかっとして、顎をしゃくった。

心得た狙撃手が、この大声男を一発で仕止めている。

が、この声は、寄手にも城内にも聞こえたのだ。

「なんと、お殿さまが死んでいると」

「そんな馬鹿な」

「だが、もはや長い御病気じゃ」

「長すぎる、あるいは……」

「うむ、あるいは、な」

死んでいるとすれば、弾正が瞞していたことになるのだ。

この卑劣な三人衆の、最後の切札は、それなりの価値はあった。

義継の耳にもすぐ入った。

天守までは大声も聞こえないが、注進する者があったのである。弾正の手の者が、これを撃ち倒したと聞くと、義継の顔色が変わった。

義継ほどの暗愚な男にも、その意味はわかった。

「弾正を呼べ。いや、おれがゆく」

激昂して弾正の陣幕に入ってきたのを、あの微笑が悠然と迎えた。

「大軍でござりますな、敵は。こうなっては、修理様(長慶)のお出ましを願わねばなりませぬ

な」

この時は、義継は気がつかなかったが、後日、傍にいた小姓がこう語っている。

「――お気づきになりませなんだか、弾正どのの背後に、この影のような……うす気味悪い老人が立っていたようでしたが」

弾正は激昂した義継をたくみになだめた。

「修理さまにお出まし頂かねば」

その言葉は、誰が聞いても修理大夫長慶が陣頭指揮を、という意味でしかない。

だが、長慶は死んでいるはずだ。

三人衆は死体を確認している。死体を損傷しないよう、弾正とも額を集めて考えた。そして、とうとう腐りかけたとき、弾正はどういう手段でか（実は果心居士の外法によって）現状のままにとどめることを得たのである。

いうまでもなく、長慶の死を発表すれば人心が離れ、三好一族の勢力が落ちるからだ。

長慶の養子義継（実は十河一存の子）と弾正の仲を裂くために三人衆は、三好一門としての不利を承知の上で、飯盛山城全軍に聞こえるように、大音声で暴露したのだ。

日本の戦史で、こんな暴露のしかたはかつてない。いや、このあともない。

通俗的に知られた物語では鳥居強右衛門の話が知られているが、あれは、裏切りの可能性をはじめから秘めていた。

が、三好一族の、この暴露はいうなれば、おのれの首をしめるようなものだ。

株主総会で、長男の社長を辞職させるために、弟が粉飾決算をばらすようなものだ。

たしかに、城方の士気はぐらついた。第一に、義継がぐらついた。

「弾正、かれらの言っていることは本当か。義父上はどこじゃ、会わせい」

「お鎮まりなされ、おん大将たるものが、敵の謀略にかかって狼狽するなど、見よい図ではない」

「だが、修理大夫どのはすでに死んだと聞けば……」

「御懸念、無用！」

弾正はきっぱりと言った。

「ゆるゆると御覧じられませ、唯今、お出ましになりますぞ」

黄塵は一層、黄いろみを増した。陽が傾き、平原を埋める軍馬と兜の群れが蹴立てる砂埃りが濛々と地表を蔽い、その間を縫って砲火が飛び交い、白羽黒羽の矢羽が、さわやかに、走った。

弾正は、黄母衣（使番）を集め、全軍に、

（修理大夫さま御出陣）

を触れさせた。

それだけでなく、近習たち小姓たちに命じて、雑兵にまぎれこませ、大声で触れ、あるいは小声で囁き、敵の暴露戦術に対抗させた。

むろん、長慶が出陣せねば、逆効果になる。一か八かであった。

（長慶出陣）

の声は、三人衆にも聞こえ、

「馬鹿な、死んだ者が生きかえるか」

その声が消えぬうちに前線の方がわーっとどよめきが起こった。

生きかえった？

三人衆は愕然とした。敵も味方も驚いたにちがいないが、かれらはもともと又聞きにすぎない。

三人衆はずいぶん前に長慶の死を見たのである。死人の枕元で善後策を講じたのである。

「生きかえるなんて、そんな、馬鹿なことが……」

後備えの者も前へ出たがった。

三人衆は馬を駈った。軍兵は少しでも高いところへ登ろうとし、隊形まで乱れ、それを制止する声は、力が弱かった。

見よ。

濛々たる砂塵の中に、数百の手勢を率いて、一頭の逞しい黒馬にまたがった武者が、長慶の馬印を誇らしげにかかげ、りょうりょうたる法螺貝のひびきのうちに、肩輿がしずしずと進んでくるのが見えた。

その輿の中央に具足櫃を据え、がっしと両脚を踏んばった武将がいる。

わざと兜はわきの騎馬に捧げさせ、おのれは、白髪のまじった髪に茜染めの鉢巻をし、大薙刀を抱えこんでいる。

その紺糸縅の鎧には、三好家筆頭の修理大夫たるおのれの誇りが満ち満ち、傲然として、寄手を叱咤しているように見えた。

「生きている！」

「正しく修理大夫さま」

「死んだとは、流言ではないか」

「生きている、生きている！」

陽は落ちたばかりであった。が、残照はまだ、余光を空にのせて、地表を明るくしている。

長慶の輿は山麓から押し出すようにして来、平原の彼我の中央の地点あたりまででてきたところ、漸く、黄昏の色が、あたりを犯しはじめていた。

敵勢動揺がはっきりわかると、その分だけ、味方の士気は盛りかえしていくのが、小高い台上より見わたす弾正の眼にもはっきりとした。

何よりも、義継が、喜んだことである。

「おお、在せられた、在せられた」

小躍りして喜んだ。欣喜雀躍という表現そのものだったようである。

これは純粋な感情であろう。

長慶が亡子を懐しむあまり、この弟の子に対して、愛情を抱かなかったことは前に述べた。したがって、又、子のほうも、この伯父であり養父となった天下の有名武将に尊敬以上のものは感じなかった。

心のつながり、双方の感情の奇妙な一致点により、断たれていたのである。

だが、三人衆の大軍に圧されているいま、百万の援軍よりも強い長慶の存在は、さながら闇夜に突然光った満月の如くに、皓々たる輝きで、敵勢に動揺をもたらしたのだ。

「いまじゃ、進め、総触れをかけよ」

弾正の大喝は法螺と陣鼓によって前衛軍に伝わり、わーっと全山を揺がす鯨波をあげて、左右両翼の軍勢が寄手へ怒濤のように襲いかかっていった。

戦史にあっては逆転勝ちは珍しくはない。

が、裏切りとか、援軍とかではなしに、意識の差でもって、これほどの逆転劇を見せたことは稀有である。

「死せる孔明、生ける仲達を走らす、じゃな……」

弾正は口髭をなでなで、何度もこの言葉を洩らした。
〈そうではないぞ、弾正〉
大勝利の祝酒に酔った耳に、果心居士の声が聞こえてきたのは、その夜である。
〈長慶は死んではおらぬ〉
「なんと！」
〈戦場では、動いた。首が動き、耳が動き、眼が動いた。長慶は生きておる〉
「……」
〈長慶が生きておればこそ、三人衆は引き下がらざるを得なんだわけじゃ〉
「そ、そうじゃ、生き延びながらえさせてくれい」
〈死人をか？〉
「だが、生きておると……」
〈弾正らしゅうもない、たわごと申すまい〉
果心居士は笑ったようだ。
〈死体を左様に見せただけ、目くらましじゃ〉
「……」
〈目くらましは、所詮一時のもの、たとえにも目くらまし七日と申すからの〉
「では、どうすればいいのじゃ」
弾正は狼狽した。
せっかく長慶を〝生体〟に見せても、腐りかけた死体だとわかれば逆効果になってしまう。
ふふふふ、胆を冷やさんばかりの陰気な笑いだった。

〈――手はある〉
「……」
〈長慶を殺す〉
「なんと！」
〈死体を殺す、ふふふふ、よい手であろうが〉
「なるほど、だが……」
〈あとの自信がないのかの〉
「いや、そういうわけではないが同じ、二度死ぬるならば、生かし方がある。そうじゃとも、使い方がある。役に立つ殺し方がの」
弾正の心の中を、とっくに果心居士は見ぬいていた。
〈三人衆に殺させる、そうであろう〉
三人衆が当主長慶を殺したとなれば、三好一門はもとより、被官大名小名らの信頼も失われる。自ら墓穴を掘ることになるのだ。
「そうだ、果心、又たのむぞ」
頷くと、居士の影はかき消すように消えた。
ただちに弾正は軍を起こした。
被官大名らに動員をかけ、呼集した。
人心の功利性は笑止なほどである。三人衆が飯盛山城攻めに失敗したとなると、中立を守っていた者は、双手をあげて馳せ参じ、敵対した者は、中立を守ることをそれとなく伝えて来た。
開戦となれば、この動きはかなり大きな格差となってあらわれるはずであった。

三人衆の主城の一つを襲えば必ず他の二人も軍勢を率いて駈けつける。

すでに弾正は三城の縄張り図面も手に入れている。

味方にも心を許さぬかれは、今日あることを以前から考えていたのだ。

そのために、味方と思って安心しているのにつけこんで、図面を手に入れたり、抜け穴を探したりしていた。

(芥川城がいいな)

と、目標を決めた。

芥川城はもともと三好長慶が大改築して縄張りをひろげたものだ。三好日向守が入っているのだが、これは、南北朝のころの芥川城とは違う。

少し北方にある、現在三好山と呼ばれている二百メートルたらずの山城がそれだ。

三好長慶のころには、むろん松永弾正も手を入れていたのだが、日向守の代になってから、かなり変えられている。

これくらいの手ごろな山はどうにでもなる。

濠が掘られたり、矢はざまが隠されたり、あらたに道がついていて城内へ誘いこまれ、行ってみると袋小路で、頭上から石が降ってきたり、濠に落ちこんでしまう、というような城作りは、当時どこでも作った。

まだ、後のように造形美術建築ではない。

実戦のための城だから、いろんな手をつかえるのだ。

こうして弾正は腹心たちに動員をかけ、当初大坂中島城に向かうと見せて、突然、北へ鋒先をむけた。

芥川城へ向かったのである。

中島城から出ていた使番やサグリの細作は、

「たしか修理大夫長慶どの、総指針にござりました」

と、報告している。

弾正が故意に、中島城へ当初向かわせたのは、それが計算に入っていたのであろう。

芥川城では、

「修理大夫出陣」

と聞いて、ただちに戦闘準備をしたものの、

「アツカイ(和議)を入れられないものか」

というふうに考えた。

長慶の生存を信じたのだ。

たしかに日向守は見たのだ。死んでいるはずの長慶が動くのを。

手をあげ、眼が動き、その采配にしたがって、軍勢は動いた。

それが果心居士のおそるべき、
(目くらまし)
とは、知らぬ。
三人衆は長慶に反抗する気持はないのだから、なんとかして和睦したい。
日向守は、下野守を岩成主税助へ密使を派して、
「戦わぬように」
と、言い遣った。
「弾正を引き離して、殺ることだ。間違えてはならぬ」
その長慶をおしたてて、三好松永軍は芥川城へ方向を変えたと聞いて、日向守は低く呻いた。
「籠城するしかない」
長慶の生存を養嗣子の義継が喜んだことは前に述べた。
「逢いたい」
と、おもった。
「お話を伺いたい」
血のつながりでは伯父なのだ。三好家を今日あらしめた偉大な伯父である。
重病というので、遠ざかったままになっている。生きているのなら、いろいろと指図してもらいたいことが、幾らもあった。
第一、三人衆をこんどはこちらから攻めるのだから、陣法や城攻めの段取りなど、聞きたいことが山ほどもある。
軍勢の配置やすべての指揮は長慶がとるのだが、

「御屋形さまの采配を」弾正がみんなに伝える、という。
つまり、弾正を通してでなければ、長慶に逢えないのだ。
「ばかなことを」
かりにも世嗣のおれが、なぜ逢っていけないのだ。
「御病体ゆえに」
その一言がいつも阻んだ。
「三好家にとって最も重大なときでござるぞ、お心なされませい」
そのために、夕月を与えているではないか、という弾正の肚裡である。
それとこれとは違う。女の肌で権勢欲は満足しない。楽しみは一時のものだが、権勢は長い。
義継も日増しにその欲望が貪婪な蛇のように、頭をもたげてくるのに気がついている。
「出陣前にお逢いしたいのだ」
と、やってきたとき、弾正は陣幕を閉ざして、凱陣のときに、と、言っている。
「なに、それまで待てと申すのか」
「三人衆の一城でも陥せば、結束が乱れましょう、それまででござる。すでに弱ったおからだゆえ、少しでも安静に保たねば」
「危ないのなら、尚更だ。是非とも生前に……」
「女々しいことを仰せられるかな。御屋形さまのお心であるのは、三好家が一本となって大地に根を張り、天下を梢の下に包みこむこと。されば、次の主たる、あなたさまが心おきのう政治なさるよう、病苦をおしての出陣じゃ」
「……」

「おわかりか。凱陣の暁は、この弾正が必ずや、お引き合わせを」

「頼んだぞ」

と、ひきさがるしかなかったのだ。

だから、芥川城へ軍勢を進める中陣に、肩輿の上に傲然と床几に倚った三好長慶の姿をちらちら遠くから眺めながら、

（父上は、おれに一番乗りさせてくれぬのか）

一番乗りでなくて一番槍はつけたいとおもった。初陣ではないが、初陣にも似た昂奮はなぜだろうか。

いまほど、長慶を父と意識したことはなかった。

芥川城が近くなり、士気の熱度がわーっとあがるのを感じると、義継の若さは、緋縅の華やかすぎるほどの鎧姿を人目にさらして馬首をむけかえさせていた。

「若殿、どちらへ」

「罷り通る！」

義継は大喝した。

足軽たちをかきわけて、馬を進めた。狂ったような飛ばしかたである。そのあとに小姓らがつづいた。

軍勢がどどっと雪崩れるように道をひらくと、義継は馬をあおって一気に進みよった。

「御屋形！」

と、肩輿に手をかけた。

すぐあとには、弾正が白馬をうたせてきていたのである。

「あ、何をなさる」

あわてて止めに入ろうとしたがその前に義継は肩輿へ飛び上っていた。

老衰してから、長慶が作らせた赤漆に赤銅の金具を要所にはめ、金星を散らした豪華なものである。

むろん、戦場に使うつもりはなく、領内の巡視や、又は京や堺での行列に華美と威勢を誇るつもりだった。

それが出来上ってから、急に長慶の老衰は強まり、とうとう一度も乗ることがなかったのである。

こうしたかたちで戦場へ出ようとは、長慶自身？も考えなかったのではないか。

いや、長慶の亡霊も、というべきであろう。

肩輿に躍りあがった義継が、

「こたびの戦さには、一番槍仕りたい、御下知を」

と、長慶の膝に手をかけた。

紺糸縅の鎧を着て、前立に半月打った栄螺兜（さざえかぶと）を目深にかぶり、あざらしで作った髭を半鉄面の鼻下につけた三好修理大夫長慶である。猪首に着用した鎧も明珍作として名高いものだ。

この前の戦いには、長慶は兜も半鉄面もなく、顔を剥きだしにしていた。

長慶を一度でも見たことのある者には、本人であることが一目でわかるためであった。

果心居士は、その秘術のありったけを尽くした。〝目くらまし〟たる幻法の枠をもってしたのであろう。

敵も味方も数万の軍勢が長慶の生存を認めた。

幻法といい幻術といい、それは施術者のおそるべき気力に支えられている。
果心居士が、長慶を〝生かした〟のは、かれに於ける最大の傑作だったかもしれない。
いま——、
ふたたび長慶の生ける姿を、衆目の前にともなうにあたり、兜を目深にかぶらせ、半鉄面をつけさせたのは、〝化姿〟をいささか楽にした。
その安易さが、あるいは、禍したか。
義継が膝に手をかけたとたん、長慶は、ぱったり采配をとりおとした。
「お控え下されい」
弾正の叫びは悲痛をきわめた。
義継の眼には何が見えたろうか、大きく足をひらいて床几に腰かをかけていた長慶のからだは、ゆらりと、ゆらめいた。
生きているはずの三好長慶は、その瞬間、まったくの物体であることを暴露してしまったのである。
一矢もかすめず一打もうけずに、鎧に身をかためた長慶は、まず采配をとり落とし、その傲然と床几に腰をおろした姿のまま、ばったりと前へ倒れた。
「や、父上！」
義継は、まだ死骸だとはおもわぬ。
あわてて、抱きとめた。
そのとたんに、兜の緒がずれた。兜が傾いた。
すさまじい腐臭が鼻をついた。

果心居士の秘薬による悪臭止めも、ひとたび術がとけては、一切空に帰したのであろう。
「……！」
ぎょっとなった義継は、次の瞬間、張りさけるほど、細い眼を瞠いた。
兜とともに、半鉄面が転がりおちたあとに、衆目の前に剝きだしになった顔——。
それは、顔といえるだろうか、腐りはて、長慶の相貌であることをわずかにとどめているだけに、一層、悲惨で、一層むごたらしいものであった。
なまじ、果心居士の秘法によって、腐敗をとどめた、そのとどめたままになっていたのである。
義継の口から、悲鳴にも似た絶叫がほとばしった。
長慶の死骸をはねのけようとした。が、その重い鎧をはねのけられず、そのまま、死骸を抱きとめた恰好で、肩輿の上から転がり落ちている。
輿を担いでいた連中も、
「わっ！　死骸じゃ！」
「お屋形は死んでござるぞ」
仰天して飛び離れた。
肩輿をほうり出してしまった。
この突然の事態にもっとも衝撃をうけたのは弾正である。
真っ蒼になった。
「果心!!」
すがりつくように叫んでいる。
果心居士の幻法が、その威力を失ったことに、気がついた。

目くらましとは、そもそも、見る眼をくらますものだ。
手を触れられては、正体がばれてしまう。
触感は、その手を鈍磨しないかぎり、真実を伝える。
（果心めは、何としたのだ）
咄嗟のことで事態の収拾も方策がなく、弾正がいつになく呆然としていたのである。
軍兵たちが右往左往し、前進どころではなく、狼狽と不信と不安で、士気を喪ってゆくのが、如実にわかった。
（負けた……）
戦わずして負けた——。
それを悟ったのが、むしろ弾正のよさかもしれない。
後の話になるが、信長の強さを知ると、さっと弾正は降伏して時を稼ぎ、反抗の準備をしている。
弾正が機を見るに敏なる眼を持っていたというべきであろう。
（軍を退くのじゃな、弾正）
どこからか、ひとごとのような果心居士の声が聞こえてきた。
「言わずとも、退くわい。もはや、もはや……」
弾正は唇を噛んだ。
惨憺たる敗戦であった。
いや、戦さというには、あまりにも、一方的だった。
天下に隠れなきおん大将、室町将軍を仆した豪勇の武将と信じていた三好長慶が、腐りはてた

死骸であったろうとは。
まるで白昼夢を見たような恐怖で、士気どころではない。戦さするどころではない。
「な、なんちゅうこった」
「死骸じゃ、お屋形が死骸じゃ」
狼狽して、大騒ぎになった。
もう武将たちが声を涸らして隊列をととのえようとしたが、混乱はおさまらなかった。
芥川城の日向守の軍勢は、大軍を前にして、ひたすら守りを固くする心算だったが、
「やや、異変だぞ」
「面妖な、何やら起こったぞ」
「今じゃ、攻めこめ！」
仔細はわからずとも、混乱に乗じるのは、戦機をつかむ心得である。
「進め、突っこむんじゃ」
日向守は鎧を着るひまもなかった。腹巻きだけ著けただけで大薙刀をかいこんでまだら鹿毛に飛び乗るや、先頭切って走りだした。
弓隊も銃隊もない。長槍隊は槍をかいこみ、徒士の者も、穂先を揃え、あるいは、打ち刀をふりかぶって、城門八文字にひらくと、凄まじい鯨波をあげて突出して来た。
「撃て、撃て」
物頭などが鉄砲隊を促したが、事態はもう、応戦するどころではなくなっていた。
軍勢は雪崩をうって敗走しはじめていた。
その背後に、銃火が奔り、鉛玉が喰いつき、矢が追いすがってくる。

弾正は義継を助けようとしたが、混乱の中では手が出せなかった。

「若殿を、若殿を」

怒鳴る声もかき消され、悲鳴と叫喚が野を埋めた。長慶の死骸はそれでも心利いた鎌田藤右衛門と堀三七が担いで馬を走らせたので、敵の手に渡ることはなかった。

ワリを食ったのは義継である。

混乱の中で足軽らに踏んづけられたり、蹴飛ばされたりして、這いずりまわり、泥まみれ、血だらけになって、そこから這い出すことが出来た。

兜が落ち、自慢の華美な緋縅も泥まみれになったことが、しかし、義継を敵の眼からそらしてくれたのは、皮肉なことである。

足軽らと一緒になって、逃げまどい、畑の段落に足をとられ、溝の中に転がり落ち、泥鰌っ子を襟の中にすべりこませたまま、ほうほうのていで、飯盛山の城へ逃げ帰った。

「――弾正、なんということじゃ、余をたばかりおって」

いきまく義継をなだめるのが、弾正久秀の課題だった。

「まず、お鎮まり下さりませ、これもひとえに、若殿の将来を案じればこその苦肉の策でござる。かくとなっては、若殿はお屋形として名乗りを上げるのが先決でございまするな。すぐにも御家督なされませい」

赤児に飴をしゃぶらせるようなものだ。義継は機嫌をなおした。

義継が受けた衝撃は大きかった。

「父上は死んでいた……弾正はおれを瞞していた！」

それが三好家のためだといわれればわからないことはない。

そして、

「三好家をお継ぎ遊ばせい」

家督をする。名実ともに三好家の長となる。

その喜びは少なくない。が、素直に義継が喜べないのは、おのれの自信のなさだった。

左京大夫という官だって、名門のゆえのもので、十五、六の少年に近畿五カ国ほか隣接数カ国を支配するという地位は、その恵みを支えることだけでも難しい。

心の用意がないところに、突然の家督だった。

自信のなさが、義継を混乱させた。

「夕月、こっちに来い」

「はい」

「おまえだけは、おれを瞞さぬな、そうであろう、おまえだけは」

「はい……」

「夕月、愛（いと）しいぞ」

盃を捨てて、女体を抱き寄せると、むさぼるように唇を吸い、胸に手を差し入れる。

そんなときの義継は、夕月の眼から見れば、まるきり子供だった。子供っぽさと、大人の逞しさと、その両方が義継のなかにあった。

名門の肩書きと虚勢を張っているときは、大人の顔を作っているが、二人きりになり、夕月の肌に溺れて、子供っぽさを剝きだしにする。

母と離れて養嗣子に来たことの淋しさもある。

何といっても、義継はまだ十五歳なのだ。

この義継の我武者羅の行為は、夕月のからだを愛するというのではなかった。
ただ、性急におのれの欲情をとげようとするだけだった。
夕月が満足しようとすまいと、そうした配慮はない。
若さは、そして権勢は、他への配慮ということは、無縁な、傲慢の育ち方をしていた。
少し足りないくせに、からだだけは大きい。
夕月など、義継の強い力で揉みひしがれ、乱暴に扱われて、いまにも、五体が、ばらばらになりそうだった。
（耐えねば……）
耐えて、この嵐の過ぎるのを待つ。
嵐の彼方に何があるか。心安らぐ世界がそのあとにあるかどうか誰も保障してはくれない。
が、夕月は、ひとり城内から月を眺める夜など、
（城之介さまと、やがて結ばれる日がくる……）
と、おもうのだ。
夢といえようか。城之介と過ごした時間は、ほんの僅かなものだったが、そこには充実があり、安らぎがあった。
あの充足が、やがて、こんどこそ、つかのまのものではなく、永久不変の愛のすがたとして二人を包みこんでくれるのだとおもった。
戦さの勝敗よりも、夕月のおもいはそれだけだった。

どんな時代になっても、要領よく生きてゆける人間と、そうでない者とがある。

それは必ずしも年齢とはかかわらない。
小西弥九郎など、さしずめ、前者の方だった。
戦さと知ると、すぐに立ちまわりはじめた。
動乱は小才の利く者には絶好の儲けどきである。
京の小川通りに〈天壺屋〉という薬種屋がある。弥九郎の父なぞ知己で、茶人としても交流があるのだが、この〈天壺屋〉に飛びこんだ。
戦さが済むと、薬種屋などは負傷者の治療だなんだかだとタダ取りされることが多いから、
「同じとられるのなら、わてに半値で売ってくれや」
と、弥九郎は申し出た。
天壺のおやじはそのまま天壺という名を茶人の号にしているくらいで太っ腹だから、
「よっしゃ」
売ったる、と胸をたたいた。
弥九郎がせっせとさらえこんだのは練膏傷薬に、腹くだし、目薬、その他、急患のものばかりで、それらをどこかへ運んでしまった。
「これで、分捕りされる心配もないちゅうわけやねん」
「阿呆」
と、天壺は弥九郎の白なまずの顔を呆れたように見て、
「そっちゃが安心でも汝れが死んだら、どないなる」
「かめへん、抜かりはない。証文書くよってに、うちの養父に払うてもらい」
「それなら安心や、死ぬなと儲けるなと、勝手にさらせ」

天壺は口は悪いが、気持はさらりとしている。
弥九郎が狙ったのは、この戦さでどちらが勝つかわからない。勝った方にとり入るためであった。
勝っても負けても、みんな傷を負う。傷を負ったら薬が要る。
貴重な薬をどう売るか。小出しにして、勿体ぶって売ることを弥九郎は知っていた。
「これこれしかあらへんよって、高うおまんね」
と、値を吊りあげて売ってしまい、二、三日して、
「堺から買うて来ましてん、運び賃が高うつきましてん」
と、また高く売る。
弥九郎のうすっぺらな顔を見ていると、少々ちゃっかりした面はあるが、大してあくどいことをするようには見えない。
おかしなところがあっても、弥九郎のとぼけた顔は、なんとなくそれをまぎらしてしまう。
弥九郎はまたたく間に小金を儲けると、すぐに手をつくして、城之介を探した。
（あいつは信用できる奴や、信じられる友達がいないと、儲かるものも儲けられんさかい）
弥九郎は天壺の知り合いの公卿の屋形を借りた。
この屋形に弥九郎は一人の若者を匿まっていた。
美濃屋小四郎という美童。
美濃屋小四郎はやはり小川通りの美濃屋という商人の伜で、美貌ゆえに見出されて、将軍義輝の寵童となっていた。
あの夜義輝の弟周高喝食を瞞して、連行してくる途中、平田和泉守がだまし討ちにした。

その平田を小四郎が討ち取った。その場を去らせず、仇討ちしたのである。
この小四郎の行為は世人の賞賛の的となって、

クルブシモ濡レヌ小川ノミノ亀ニ
　泉ハ命取ラレヌル哉

という落首が、崩れた築地などに書かれたほどだ。
三好方では、何度も役人が美濃屋に来ている。見つかれば、命がない。
弥九郎が、かれを匿まっているのは考えがあってのことだ。若いくせにぬけ目がない。
三好と松永が京を去るのを待っていたように、将軍義輝の葬礼が北山等持院に於て行なわれたのは、六月の九日である。
朝廷から御贈位御贈官があり、法名を光源院殿、一品を贈られて左相府融山大居士と崇号された。
特に七仏事の儀式を行なっている。
禅宗で行なう法要で、正式には九仏事あって、うち掛真と対霊小参とを略したものを七仏事というのだが、このとき、掛真を行なっているから八仏事になる。八仏事とはなぜか言わないようだ。
入龕、移龕、鎖龕を南禅寺禅琳長老が行ない、念誦は相国寺慶雲院建西堂で、掛真を天竜寺当住、起龕を同じく天竜寺雲居庵策彦西堂で、奠湯は建仁寺春沢和尚、奠茶は東福寺献甫和尚、秉炬は鹿苑院仁恕和尚――。
禅宗は法事も派手で仰々しい。これら洛中洛外、錚々たる高僧による法要は、いかにも前ノ将軍義輝にふさわしい。

くどくなるが、看経は相国寺雲頂庵賢中和尚で、葬主をやはり相国寺当住惟高妙安和尚がつかさどったのである。

弥九郎は、この法要の前から、近衛の屋形に出入りしていた。

義輝の北ノ方であった近衛家の姫は、あの混乱の中で松永弾正の手に捕えられたが、無事に実家へ送りとどけられている。

妾の小侍従は惨殺され、夕月は義継へいけにえにされたのを見ると、北ノ方は、幸運だったといわねばならない。

見方を変えれば、それだけ北ノ方と義輝の結びつきが、空疎であったといえる。

ほとんど、夫婦とは名ばかりであった。

命びろいしたことが、よかったかどうかわからない。

夜討ちにあって、火と煙に包まれ、漸く脱出した北ノ方はすっかり眼をいためていた。

へっついの煙も眼にしませたことのない、やんごとないお姫さまだ。眼の痛みに耐えられず、実家にもどって温かく家族に迎えられても、

「ああ、眼がつぶれる、わらわを盲にする気か、ああ痛い」

と、泣きわめいていた。

「ええ目薬がおまんのや」

小西弥九郎はたくみに売りこんだ。

天壺に買いに来ても、弥九郎が買い占めているから、そちらを紹介するしかない。

弥九郎は近衛邸に伺候すると、目薬の使用法を教えた。

目薬といっても、ちょっと刺激を与えてよく眼を洗わせる、洗眼剤にすぎない。

医療品はすべて漢法に頼っていて、粘膜のような微妙なところには、つける薬がない。

清水で洗うことが一番なのだが、それでは銭儲けにならぬ。

弥九郎は猫の和毛の小刷毛でもって、姫の両眼をなでてから、清水でもって洗った。

「如何でございます、お楽になりましたか」

「そちに洗うてもらうと、少しずつよくなるような気がします」

「弥九郎、若輩ながら堺の津にては、医療の道に明るい者、お姫さまのお役に立てば、と……」

弥九郎、殊勝な顔で、ぬけぬけと言っている。この手で、これまで人妻、娘のきらいなく、弄んできているのだ。

下々のそうした口説には、まるっきりはじめてだから、北ノ方は手もなくころりといった。

「弥九郎、いつまでも、わらわのところに来てくりゃ」

「忝なきお言葉。したが、お障りが治りますれば、われら如き」

「そうではない弥九郎、そなたがいると安心じゃ」

「姫！」

「桜子と呼んでくりゃ」

実家にもどってみれば、姫扱いだが、さすがにいまさら、姫と呼ばれるのは面映ゆい。

もはや将軍義輝が討たれて、未亡人となったのだから、北ノ方でもおかしいし、といって、姫で候というのも厚かましい。

いかに仲が悪かったとはいえ、身分ある身だけに急に誰かれのところに再婚できるものではない。

ことによると、一生、嫁げないかもしれぬ。

そのむかしの〝通い婚〟のように、男がくるのはかまわないから、性の疼きをもてあますという悲劇にはならないとしても、将軍家北ノ方という存在はもはや、望めない。
ただの女として、
「桜子と呼んでたべ」
というのは、身分を忘れて、お前も男になれ、という誘いにほかならぬ。
眼の痛みが少なくなってくると、欲情が頭をもたげてきて、
「別墅の方へ来や」
と、東山へ誘った。
静養という名目がある。
東山の別荘ではじめて弥九郎は桜子の肌を抱いた。
さらさらと清流の音が、幽谷のせせらぎを思わせる近衛家の別邸である。
桜子は弥九郎の目の前で静かに前をひらいている。
「お前の眼はよく見えるでしょうね……よく見ておくれ」
「――よく見てたも」
桜子は雪の肌を惜しげもなく弥九郎の前でひらいて、嫣然と微笑した。
自信にみちた、誇り高き肌に弥九郎は目くらみするような心持ちだった。
(この肌が……)
前将軍義輝の内室の肌が、いまわいの手の届くところにある。
(へえ、好えのか、御馳走になってかめへんのか)
輝くばかりの肌だった。

義輝の寵は受けられなかったが金には不自由はない。閑もてあましていた。朝に夕に磨きあげた肌である。長い黒髪も一本一本洗うような手の入れかたであった。
ただ一つ不足していたのは、義輝の愛であり、そのことの怒りだった。
怒りは憎しみになり、怨みとなって桜子の胸をかき乱していた。
自分でも、あのころは鏡を見ると眼が三角に吊り上って、けわしい、いやな顔をしていたとおもう。
義輝の死は、それらのすべてを御破算にした。
実家に帰ってから、急速に、桜子は恢復したのである。
(あたしはまだ若いのだ)
離婚した女の誰もが考えることを、彼女も亦、考えた。
伸び伸びと手足を伸ばし、小侍従や夕月のことを考えまいとした。
小侍従の惨死は、むしろ、勝利を感じさせたほどである。
(それ見るがよい、悪いことをしたむくい……)
桜子は、晴れ晴れとして、湯殿へおりるたびに、自分の肌が日増しに美しく、ゆたかさをとりもどしてゆくのが楽しかった。
眼の痛みもうすれてゆき、弥九郎の献身ぶりに、
(あたしを想うている)
と、おもうことは、自信となって、ますます輝きに磨きをかけたようである。
「ねえ、ほんとうに、おもうた通りをお言い」
「……」

「きれいかえ」
「は、はあ……」
「ほしくないかえ」
妖しい誘いこむような眼である。
高貴の、五摂家の筆頭たる近衛家の姫君が、なんという、妖美にみちた誘惑であろう。
弥九郎は眼玉が飛び出しそうになり、唇をからからに干割れさせ、膝でにじり寄った。
「お、お方さま」
「桜子と呼んで」
「桜子さま！」
弥九郎は、わななく手をのばした。
その手が、胸へのびた。
が、ほとんど男の手を知らぬばかりの乳房のたかみにふれることができずに、力弱く、膝のあたりに落ちただけである。
膝をおずおずとなずってにじりよったのは、弥九郎らしくもない初心（うぶ）な動作だった。
あまりの身分の差が、日ごろの自信を失わしめたのであろうか。
「弥九郎……それでもそなた、男かえ」
いかに夫の死に目に逢った寡婦とはいえ、こうまで大胆なふるまいで誘いかけるとは思わなかっただけに、小西弥九郎は、いつもの調子が出ない。
かれの情欲ははやりにはやり、猛（たけ）りたっている。
その若者の熱度は、桜子には充分わかっているはずであった。

わかっていながら、桜子は弥九郎をそれ以上に近寄らせない。前をひらいて、双のみごとな乳房のたかみをあらわにしたまま、妖しい微笑を浮かべているのだ。
「桜子どの、わたしは……」
「好きか」
男のように聞く。
妖艶な笑顔なのに、そう問いかえした言葉には優位に立った男にもひとしいものがある。
「弥九郎、わらわを好きか」
「う、うん……」
「わらわがほしいか」
「そ、そりゃァ誰だって」
「誰だって？」
きらりと桜子の眼が光って、
「光源院殿はそうではなかった」
「……」
「ホトケになったいまも、憎い。生きてあれば、殺してやりたい。わらわを女として見ざったのじゃ」
「あほな公方や」
弥九郎は息をついていった。こんな女御前にあったのははじめてだから、すっかり手はずが狂っている。
「わては、桜子さまの美しさには眼がくらみそうや、お眼を治してくれたわてが眼ェつぶれる

わ」

「ほほほほ、おかしなことを」

桜子は笑いだした。完全に優位に立った者の笑いだ。

「ほしいなら、あげる」

桜子はそっとおのれの乳房をすくうようにした。

「どうだえ、弥九郎」

「ほしい……」

弥九郎はあえいだ。

「ならば、頼むがいい。頭を下げるのじゃ、そこへ手をお突き」

「……」

「手を突いて、頼むのじゃ、桜子よ、そもじの肌が恋しゅうてならぬと……」

桜子の顔から笑みが消えていた。

いつの間にか真剣な表情になり眼がきらきらと光り、高慢そのものだった。

気品と、憎しみが、その顔を生々と照りかがやかせている。

人間の生命は、憎悪や怨恨だけでも、活力になるものだ。

桜子は義輝の侮辱を見返す日を楽しみに生きてきたのだろうか。

犬のように、自分の前にひれ伏す男——男を跪かせるという望みが、彼女の誇りの活力源だったのかもしれない。

いま、弥九郎の情欲を弄んで、跪かせようとするとき、桜子の眼には、弥九郎が義輝に見えたのかもしれなかった。

「早よう言わぬか」

誇らしげな、金属的にかん高い声であった。

「桜子よ、そもじの肌が恋しゅうてならぬ、抱かせてたべ……と」

そないこと言えるかいな、と弥九郎は反駁したい思いと、甘肌の誘惑に混乱していた。

色事師の秘訣は、押しの一手という。また、奉仕の精神ともいう。

どんな女でも、常々、男の社会に頭を圧えられているから、自分に誠実に尽くしてくれる男には、弱い。

男の風上におけないような男に結構惚れる女もいるのは、その間の消息を物語っている。

口八丁手八丁の小西弥九郎は、これまで女たちを弄ぶのに、さしたる苦労はしなかったし、かれの口にかかると、きわめて易々と女は肌をひらいた。

したがって、女の前に膝を屈するということはなかった。

それだけに桜子の驕慢な態度は、腹立たしさとともに、

(それならそれで)

相手の気に入るようにするだけだ。

ここまで運んで来てするりと身をかわされてはたまらない。

弥九郎は桜子の言いなりになった。

「好きや、好きやさかい、どないことでもするわ」

「許します、そんなに、わらわがほしいか」

自己催眠であろう。桜子の虚ろな眼は将軍家の北ノ方になりきってい、義輝からうけた侮辱が、そうした他愛ないやりとりで、うすれてゆくような気がし、女の喜びが四肢の末端まで血の流れ

こむようなこころよさで、静かに身を倒したのだった。
そのことがあってから、弥九郎は二度ほど、桜子の甘肌を御馳走になっている。
その二度とも、桜子は、
「わらわがほしいか、ほしいならば……」
と、焦がれる仕草を要求した。
あんなことは一度きり、
(征服すりゃ、こっちのものやねん)
と、たかをくくっていた弥九郎は驚き、呆れた。
(どない気やろ)
まるで空っ腹で幼時を過ごした者が長じて、生活に困らないようになっても、路傍の犬の死骸に舌を鳴らせるのと同じではないか。
いや、少し違う。食うものが食えなかったから、食いものにうらみがある、というやつだ。
男を征服する気持しか、彼女の欲情を刺激するものはないのではないか。
(親の育て方が悪かったな)
と、おもう。
義輝の寵愛の不足が、彼女をそうしたのではなく、近衛家に生まれて甘やかされた育ちが、義輝の心を容れようとせず、とけあうことがなかったのではないか。
三度、雌伏すると、弥九郎はいやになった。
(寝てしまえば、どの女でも大した変わりはないわ、五摂家の姫も三文女郎も……)
そうや、丁度好いものがある。美濃屋小四郎を思いだして、弥九郎は横手を打った。

(こないときのために、飼うとったんや)
木に竹を継いでも、しっくりとはいかない。弥九郎は桜子に選ばれたことを喜ぶには、骨がありすぎた。
(丁度いいのがいるわな)
弥九郎は、その次に美濃屋小四郎をともなってきた。
桜子の眼につくところに待たせたのである。
「おお、あの若衆は」
おぼえがある。
愛くるしい美貌の小四郎は、御所にいるときから、気をそそられたものだ。
義輝が寵愛していただけに、桜子は憎しみと憧れのいりまじった感情を抱いていたのだ。
「呼んでたも」
さりげない調子だったが、その眼の奥に熾烈なものが燃えあがるのは弥九郎にもわかり、
(やれやれ)
と、おもった。
(これで、わてはお解き放しや、あとは、そっちゃで、たんと遊ぶがええわな)
弥九郎が本当にほしかったのは、桜子の肉体ではない。
ああいう目にあった女は弱い。その弱みにつけこんで、銭と地位を得ようというのが狙いだったのだ。
近衛家は五摂家の筆頭だし、したがって公卿の間に信用を得るには恰好な足がかりだった。
小四郎を気に入れば、弥九郎へも感謝の気持がわく。

美童といっても、前述したように義輝の弟を弑逆した平田和泉を、その場を去らせず討ちとった少年である。
　ただなよなよしているのではない。
　美しさと、その勇武が凛々しいものにしている。
「——小四郎か」
「お方さまには、御機嫌うるわしゅう……」
　型通りの挨拶をするのを、
「ほほほほ、そなたに逢うて、懐しゅう思います」
「忝なきお言葉」
「平田なにがしを討ち取った話、耳にして感じ入りましたよ」
「けがの功名にござります」
「そなたのような忠義者を持った光源院さまが、憎い」
「……」
「もしも、わらわが襲われるようなことがあれば、誰が守ってくれるか」
「お方さま、不肖小四郎がお傍に居ますれば」
　稚小姓などした者は、主人の鼻息に媚びることがうまい。
　一つの生活方便であろうが、敏感に主人の心の動きを察するのだ。
　義輝が桜子を嫌って、小侍従や夕月に心をうつしていたことは、よく知っているはずだ。
　その義輝へ忠義を尽くした小四郎が桜子へ抱いた感情というものは、かなりかわいたものだったはずである。

　むしろ、夕月に惹かれている。
　夕月を女として意識し、憧れた小四郎だ。
　その意味では義輝と恋仇になるわけだから、稚小姓の感情というものは複雑だ。
　義輝も、夕月も、すでに遠く、いま小四郎は桜子の色香に犯されようとしている。
　順応性があるというのか。
「近う寄りゃ、小四郎」
　情欲をあらわにした桜子に誘われると、小四郎は、羞じらいさえ見せて、するすると近寄った。
（美しい……）
　たしかに寵童になる少年は、同性の心をそそるものを持っている。
（義輝がこの子を……）
　と思うと、妖しい想念が湧いてきて、桜子は、さらに言った。
「もっと近う」
「はい……」
　素直だ。桜子は少年の腕をつかんだ。
　引き寄せると、唇を吸った。
　ちょっと抗うような素振りを見せたのは技巧であろう。
　唇も舌も、待っていたように応じてきた。
　あらあらしい情感が桜子の四肢にみち、もの狂おしく、抱きしめ、頬ずりしたが、
「きたない！」
　言いざまに突き放している。

その瞬間の女心ほどふしぎなものはなかった。分裂症というよりも、義輝との相剋が尾を引いていると見たほうがいい。

憎い義輝の愛した少年。

(男と男で……きたない)

ありふれた感情ながら、桜子は、

(わらわという、女を持ちながら)なぜ、少年なぞを、といまさらのように怒りがこみあげてきた。

男色は当時の風習とはいえ、戦場での必要性は、男性の生理からわからないことはないから、たとえその一歩を譲ったとしても、平時まで、

(それもわらわをないがしろにして)

かっと怒りが胸を灼いた。

なまじ小四郎が美しいだけに、憎しみの炎がむらむらと、燃えあがって、

「犬のような」

と、口走っている。

「そなた、光源院どのに寵愛されたな」

「……は」

「どのようなことをしたのかえ」

「……」

「男同士のまぐわい……見せてたもらぬか」

「——お許しを。左様なことは」

「したのであろうが、せぬことを言うているのではない。したことを、この場でして見せてくれないかえ」

「……」

「なんなら、弥九郎を呼ぼうか」

ねっとりと、妖しい眼が潤み、玉虫の唇はてらてらに光って、

「弥九郎として見せるかえ」

「や、弥九郎とは、そのような仲ではありませぬ」

「当たり前じゃ」

突っ放して、

「光源院どのを、墓所から呼びかえすわけにはいかぬ」

「……」

「それゆえ、わらわが光源院どのの代わりになりましょう」

「お方さま!」

「お脱ぎ」

きびしい口調だった。

「裸におなり、光源院どのが愛撫した肌、どのようなものか、見たい」

(いじめてやりたい……)

女心は複雑だ。

美しいものへの憧れと、殆ど同等の重みを持って、それを破壊したい欲望を抱く。

桜子の心には、さらに、義輝への憎しみがある。

二重三重の屈折した女の心情は、小四郎などには、とてもわからない。
　寵童の本能的といえるばかりの媚を浮かべて、
「お方さま、小四郎は御所にいたときから……」
　などと、歯の浮くような世辞を並べはじめたが、桜子の心は夜叉じみたものになっているのだ。
「ほう、わらわに焦がれていたというのかえ」
「はい」
「証を見せてたも」
「……」
「見たい。お脱ぎ！」
　白昼である。庭のみどりの色が陽に映えて、二人を青く染めている。
　広い近衛家の別邸だから、のぞく者はいない。弥九郎は別棟で酒肴を出されているはずだ。
　燈火の不自由な時代だから、今日の感覚とはかなり違う。ことに公卿の生活は、無為徒食——昼間から男女が抱きあうのも、さほど不自然ではない。
「わらわに焦がれていたと申すのが本心ならば、見てくれましょう」
　と、桜子は執こく、
「裸におなり、裸になれば、真か嘘かわかります」
　裸になってもわかるものか。
　心の中が見透せるものではない。小四郎はさすがに、白昼のことゆえ、もじもじしていると、
「ひとたび申し出て、わらわをたばかるつもりかえ」
「いえ、そのようなことは」

「ならば、早よう……」
　嗜虐の欲望が、桜子をゆり動かしているのだ。少年が決断しかねているのを見るや、ぱっと桜子は立ち上った。
　侍女は遠ざけてある。
　長押から薙刀をとりおろす。
　とんと毛鞘を払うと、しゅっと風をきってふりおろされた。
　裾をひいて立ち上った女を、呆然と見ていた小四郎は、ぎょっとなって立ち上ろうとした。
　その肩を、ひたっと、偃月なりの刃が押さえたのだ。
「お脱ぎ」
　言いざまに、白刃が翻ると、小四郎の帯と、袴の紐を同時に切った。
「あ……」
「ほほほほ、のろいからじゃ、早ようお脱ぎ」
　狂気じみた笑い声である。桜子の声はかん高い。
　その声は、別棟の弥九郎の耳にも聞こえてきて、
「ふむ、いよいよか」
　にたりとした。
　小四郎が桜子のものになれば、弥九郎との関係は密接になる。京で弥九郎の商いの手をひろげるには公卿の力は無視できないのだ。
　小四郎は袴を脱ぎ、白い帷子（かたびら）一枚になった……。

東山の広い別荘で、白昼からくりひろげられている情痴図については、詳述する要はあるまい。読者の想像にまかせたい。
そのころ、城之介はほど遠からぬ賀茂川に臨んだ、あの伊予海賊の隠れ家にいた。
夕月が姿を消したあと、またかれらのなかまに舞い戻っていたのである。
(夕月はおれを捨てて、去ってしまった……)
そうとしか、おもえなかった。
若さは性急に結論を出す。
夕月が姿を消したあとに、強引に連れ去られた形跡がなかったのが、城之介を自嘲させたのだ。
矢太たちの手ぎわがそれだけ巧妙だったといえる。
夕月の自発的な意志で姿を消したとしか思えなかった。
(おれは捨てられたのだ)
二十歳にならぬ若者には腕に多少の自信はあっても、大人の社会での非力を思い知らされている。

その劣等感の部分が、ちょっとしたことでも、大きく作用するのだ。
あれほど愛しあった夕月に姿を消されたことは、男としての無力を嘲けられたとしか考えられなかった。
城之介は、五条坂の埃っぽい空屋敷の中で、三日三晩、飲まず食わずで、夕月の帰りをひたすらに待っていたのである。
いよいよ帰って来ないと見きわめてから、ふらつく足をひきずって、五条橋まで来た。
(死んでやる、おれの水死体が河原に上ったら、ひょっとして、夕月が見るかもしれない。いや、噂くらい聞くかもしれない。それでもいい、どうせおれは……)
おそろしいほどの孤独が、かれをとらえていた。
孤独感くらい、人間を容易に死に誘うものはないだろう。
金も地位もなく、友人もいない。
この戦乱の中に一人ぽっちの境遇は、生きる望みを失えば、肉体を一握りの土に化すことは、きわめて容易なことだった。
野良犬の死骸のように、人間の死骸が転がり、蛆が湧いても誰も手をつけず、鳥が眼玉を突っついたりしているのも、日常の風景だった。
夕月もまた孤独だったのだ。身寄りのない男女が、しっかり結びついて、この乱世を生きぬこうとした。その一方がぽろりと欠落してしまえば、残りも亦、生きてゆく力がなくなる。
城之介は、五条の大橋の上で、水面を眺めていると、キラキラ光るものが、水面にあった。
月光がかれの頸飾りの十字架に反射して、水面にうつしていたのだ。
(——母だ、この母もいない。父も……)

父を知っている、南蛮屋十兵衛の言葉を信じて、平戸からこの京へやってきたのだ。
それも夕月への愛から、南蛮屋十兵衛には顔向け出来ないようになっている。
(父と逢えるなど……夢だ)
絶望だけが城之介をとらえていた。
「何もない……」
城之介は呟いた。
「おれには、何もない……」
何もなければ死ぬしかない。女に去られたことによって、自信すら失ってしまったのだ。
腕と度胸で乱世を生きぬく者は多い。その自信を失った城之介は、ただの滓でしかなかった。
母の名をきざんだ頸飾りを、かれはひきちぎろうとした。がさすがに、それは出来なかった。
(死のう、母のところへゆくのだ)
五条の大橋から身をおどらせようと思った城之介は、そのとき、橋板を鳴らしてくる数人の足音を聞いている。
「やあ、あいつ城ノ字や」
素ッ頓狂な声がした。
「へえ、ほんまや」
「城之介やないか、何しちょるんぞな」
わらわらと寄ってきた。
伊予海賊たちだ。喧嘩別れというか、ああいう訣別をした以上、顔を見れば、斬り合いになるはずのところだ。

城之介の方には、もう戦意はなかったから、斬りかけてくれれば、甘んじて、その刃の下に身をさらしたろう。
だが、かれらは、その気ぶりも見せず、
「ひゃわ、懐しいの」
「何しちょるんぞな、銭コはあるのけ」
「飯くろうたけ」
なぞと親しみを見せて近づいて来たのだ。
ふりかえった城之介の眼に、ひょろりと背の高い矢太のにやにやした顔が見えた。
あとから考えれば、かれらの態度は解せない点があったわけだ。
が、死の一歩手前にあった城之介には、そこまで考えがまわらない。
絶望は人間を愚かにしてしまう。
「――おまえらか」
興もなげに言っている。
「おまえらとは縁を切ったのだ、用はない」
この冷たい宣言も、矢太たちには馬の耳に念仏で、
「なんや、冷たいこと言わんときいな、わしらは、なかまやないか」
「ほうや、おかしらが逢いたがっとるぞなもし」
「おかしらだけやない、なかまがみんな逢いたがっとるわな。城之介の腕前は、なんちゅうても、大したものやさかい」
口々に言い、袖をつかまんばかりだ。

こいつらの手を振り払って、
（それでも死ぬ）
といってしまえば、それっきりだったかもしれぬ。
「ま、こないなところで、ぐだぐだ言うたかて、しょうない。巣へ去んで酒でも飲もうやないか」
矢太の慰め顔の言葉が、城之介の心を動かした。
他愛ない。人間の心の弱さだ。
（酒でも飲んで……そうだ、飲みたい、今生の限りに、飲めるだけ飲んで、そして、死のう）
飲めば、その心もぐらついてくるのが、やはり人間だった。酒のあとに女が用意されていた。
酒を喰い女を抱く——欲望のままの刹那的な行為には、明日への歩みは何もなかった。
ただ、無為の時間を、遊惰に過ごす。盗賊を生業としている連中には、それしかないのか。あとは博奕だけだ。
女は、何人かいた。
美沙のほかは、なかまの女房だったり、誰のものでもなく、どこからかさらわれてきて、男たちの共有にされている。
城之介がおしつけられた女もその一人だった。
若いが痴呆的な表情には、ただ情欲だけがあった。だらりとしまりのない肉体が、奇妙な白さで酔眼にうつる。
酔いは理性を失わしめて、城之介は女体を抱いた。
おさんとか、おさよ、とか称った。名前をおぼえる気もない。

ただ、男と女の行為がそこにあるだけだった。
そんなにただれた姿を、凝っと隣室から見ている眼がある。
美沙だった。美沙は変わった。
城中で果心居士に生気を吸いとられてから、情欲というものをすっかり失ったようであった。
まるで豆腐滓のように、ばくばくとして、男を見ても、何の気も起こさなくなっている。
男への欲望の根まで——それが美沙の生の根元だったように、根こそぎされて、果心居士の奇妙なワザの糧とされたのだ。
男女のまぐわいのさまを見ても美沙は情感がわかない。
あの短時間のあいだに、性欲のすべてを出し尽くしてしまったようなものだった。
「おかしらがしっかりせえへんと動きようがない」
と、矢太たちは、その恢復を願いながら、おおっぴらに女たちを引きこんでは、ふざけている。
どれだけの効目があるかしれない。
げんに、あれだけ城之介を追いまわしながら、矢太にともなわれて戻ってきたのを見ても、さしたる興を起こさなかった。
城之介はもう、どうなとなれ、という気持だ。
「こんどはどこへ盗みに入るのだ。おれもゆくぞ、盗みは一度やるとやめられぬらしいな、おぬしらの盗みは……」
「ねや、盗み盗み言わんといてや、国を奪るのも、宝物を盗むのも大した違いはないで」
「理由はどうでもいい、おれは人を斬りたくなった」
かれらがただ一つ、警戒しているのは、夕月のことに話題を波及させぬことだった。

誰が酔っても、その点だけは厳重に口どめして用心している。
夕月をさらって、松永弾正の手の者に渡したのが矢太と数人のなかまだと知れたら、城之介がどんな行為に出るかわからない。
だが、自戒の緊張もいつかは弛むものだ。
「——夕月なら、そこらの女の三倍になるで」
矢太がそう洩らした。
博奕をしているときだった。
もとでをすっかりはたいてしまった城之介は、傍へ引き寄せている女の顔を仰向かせて、
「こいつでどうだ」
と、言ったのだ。
「銀十匁の価値はあるだろうな」
「さあ、五匁もあるやろか」
波切り銀左という男がこう笑った。
矢太は酔っていた。夕月なら美しい……と、言いだしたのだ。
「夕月なら、そこらの女の三倍にはなるで」
「夕月！」
「もう手が届かんぞな。なんせ飯盛山の城内やさかい」
「なんと！」
初耳だった。
矢太がこんなに酔うことは珍しい。酒は時とすると、異常な酔いをもたらす。酒に変わりはな

くても、からだの方が、疲労度がはげしかったり、いつになくツイて儲けが多かったりして、気分が浮わついていたのだろうか。
「夕月が……」
「もう、ええ加減にあきらめたらどうやね、夕月は、二度と帰って来やへんで」
「今ごろは飯盛山の城中で、若殿に可愛がられているわな」
「黙れ」
城之介が片膝を起こしたと見るや、がっと鍔が音を立てた。
抜き打ちの一刀が的確に矢太の肩口を胸元まで切りさげていた。
そのまま一跳して、襖を蹴破り、次の間へおどりこんでいる。
美沙はものういからだを横たえて、酒を飲んでいた。
その胸もとへ刀を擬して、
「夕月を売ったな、きさまの指図か」
「ああ……そうや」
「うぬ！」
「殺すのかえ？」
「——」
殺す、といおうとして、その言葉が出なかった。憎しみだけでも刺せる。が、それで夕月がもどってくるか。
「殺す」と、城之介は言った。
「ここでは殺さぬ。来い！」

美沙を楯にして、裏から小舟に乗った。
団六たちは矢太を殺されて地団駄踏んでいたが、女首領が人質になった以上、手が出せない。
「あとをつけて来たら、いのちがないぞ」
その一言で充分だった。
小舟が、屋敷の裏手を離れると城之介はほっとした。
警戒するのは鉄砲だけだった。
竿をつかって流れにのせた城之介を狙撃する鉄砲が物蔭にひそんでいるかもしれない。
が、むやみには発砲すまい。一発で息の根をとめるだけの自信があれば別だが、多少なりとも、城之介に息が残っていれば、美沙が斬られる。
そこまでの冒険はできないはずだった。
だが、安心するのは早かったようである。
水面や沿岸の追撃にのみ気をとられて、城之介が忘れていることがあった。
かれらが海賊だということを。
板子一枚下は地獄の瀬戸内海をおのれの庭として、自在に動きまわっていた連中である。
水練などはお手のものだ。魚よりうまい。
そのことを失念していたのである。流れに乗って大分遠ざかった、とほっとしたのは、六条から七条の末にかかったあたり。
月明にきらきらするさざ波にはなんの怪しいこともなかったが、舟は突然、浅瀬にでも乗り上げたかのように、ぐぐーっと、へさきが、そりあがり、城之介と美沙は、水中へほうり出されてしまったのだ。

まるで、突然、巨大な鯨の背にでも乗り上げてしまったかのような変異だった。
小舟はひっくりかえり、水中へ投げ出された城之介は、咄嗟のことに、がぶりと水を呑んでしまったが、
「うぬ！　彼奴らか」
と、悟った。
ぷかりぷかりと、冬瓜を浮かべたように、幾つもの頭が水面に出た。
かれらは、美沙を助けるほうが先決だったのであろう。数人が、美沙のほうへ泳ぎより、
「よし、こちらはよいぞ、奴を早く」
やっつけろ、という意味であろう。抜手を切って、数箇の影が迫ってくる。
今でこそ賀茂川はこのあたり浅いが、当時は、かなりの深さがあった。それでも、せいぜい背丈くらいで、それも水路の数間の幅だから、すぐに浅みになる。
「待ち伏せされたのか」
城之介は、濡れ鼠となって浅瀬から河原へ。石ころの河原を走りながら、抜刀した。
(斬ってやる、何人でも斬ってやる)
斬りまくって、斬り死する。
どうせ死ぬつもりだったのだ。それがせめてもの夕月へのはなむけだ。
「来い！」
足場をはかって、ふりかえりながら、城之介は刀を構えたが、一つの心遣りは、なまじ、夕月の居場所がわかったことだった。
そして、

(夕月はおれを捨てたのではなかった！)
その喜びだった。
(彼らに瞞されて……いや、力ずくでさらわれたのだ)
夕月も逃げだしたがっているにちがいない。
(助け出しにゆきたい)
不運なのは、それと知ったときには、城之介の命は、兇刃に取り囲まれていたことである。
月明のもとに、荒くれ男たち十人ばかり。命知らずの海賊らだ。陸へ上っては、夜盗に変じている。かれらの泣きどころは、いわゆる山賊ではないから、山谷の跋渉が巧みでないというだけで、船板を踏みつけた足は、奇妙に足音を立てぬように歩けるという——夜盗にうってつけだった。
いま、その足が、ごろた石の上で、不安定に——不安定なのはお互いだった。ぴたりと一剣をもって城之介は十人をむかえたのである。
一人に十人。如何に自信がある城之介でも、これだけの人数には勝ち目がなかった。
ただの武士や足軽ではない。
命知らずの荒くれ連中である。当時の本にも、剣法などというものは、戦場にて斬りおぼえにおぼえればよい、と書いてある。
道場剣術になって、剣が術になったとさえ言われているくらいで当時の戦乱の中では、肉を斬らして骨を斬る、のが当然とされていた。
したがって、斬りこみもすさまじい。おのれは無傷で、相手だけ倒そうと思う連中は遠くにはなれて、やあやあ言っているが、実際に斬るか斬られるかの戦場では、カッコよくしようなぞと

考えるゆとりはない。
からだ全部で斬りこんでくる。
殊に、味方の数が多いという安心感がある。
「やい、城之介」
と、まるっこいからだで団六が三尺ちかい、長い打ち刀をふりかぶって、
「よくも矢太を殺ってくれたぞな、代わりに死んでもらうで」
咆えて、斬りこんできた。
団六の文字通りまるいからだが飛び込んでくる前に、城之介の足は、たっと、ごろた石を蹴上げていた。
必死だ。ずーんと痛みが、爪先に走った。
生爪が剝がれたかもしれない。
が、一瞬、蹴上げられた石が（それは拳大のものだったが）団六の鼻柱を打った。
「げえっ」
出鼻を挫かれるというが、団六の鼻は潰れたかと思われた。
どっと鼻血が奔り、眼が眩んでごろた石の上に突んのめった。
斬り合いに馴れた連中だけに、団六の呼吸に合わせて、側面からも斬りこんできていたのである。
城之介は、つと身をひらいて、片膝突きざまに、これを胴割りに薙いでいる。
同時に二人を倒したことが、せめてもの活路となった。
城之介は、走りだしていた。土堤を駈け上ろうとした。

が、その前面に、土堤の上に、ずらりと並んだ人影を見て、絶望が胸を嚙んだ。
すでに五条の橋を渡って先きまわりしていた連中であった。
「刀を捨てろ、城之介」
誰かが叫んだ。
「ナマスに斬られたいか、刀を捨てろ」
捨ててどうなるか。
所詮、捕まったあと、なぶり殺しにされるだけではないか。
(それくらいなら……)
斬り死にしたほうがいい。
相手も盗賊たちなのだ。洛中でいつまでも立ち回りしてはおれない。
役人たちが聞きつけてやってくるはずであった。
「来い、覚悟は出来ている」
昂然と城之介が言ったとき、突然、鈍い音がした。銃声ではなかった。何が起こったのかわからぬ。城之介の前面で、ぼわっと、何かが炸裂し、白濁の煙が、たちまち、あたりを蔽った。
何が起こったのかわからなかった。
突然、あたりは白濁の濃煙に包まれてしまったのである。
「わっ、どないしたんや」
「なんにも見えへんでえ、団六、どこに居るのかいな」
その騒ぎの中で、城之介は囁く声を聞いている。
〈こっちだ、城之介〉

「……」
〈走れ〉
誰かが手をつかんだようである。
西も東もわからない。盲滅法に走りだした。
手を引いてくれるから、立木などにはぶつからないが、足もとがあぶない。
木の根、ごろた石——その河原を横切った。
〈舟だ、乗れ〉
声の主の姿は見えないのだ。
その男が、敵か味方かもわからない。が、いま、目前の危難から逃れられるならば、有難いと思わねばならなかった。
小舟が流れに乗って動きだすと、うしろの方で騒ぐ声が、
「や、あれではないか」
「舟で逃げるぞ、あれだ、追え」
そんな言葉が断片的に聞こえたようだが、そのあたりまだ濁煙がたゆたい、かれらの姿もさだかには見えなかった。
漸くその姿がおぼろに浮かびあがった。
「あんたは?……」
「名張から来た」
「……」
「赤目ノ木鼠のともだちさ」

「おお！」
　忍びノ者か。
　道理でさっきの濁煙も、あざやかであった。いわゆる火遁に類するものか。
「おぬしに引き合わしたい方がある。来い」
　舟足が速くなった。
　忍びノ者は武芸百般に通じているという。
　竿使いにも秘伝があるのか。船は矢のように速く、賀茂の流れを下った。
　暫く下ってから河原に着けると、
「あれだ」
　岸辺に馬が二頭つながれて草を食んでいる。
　舟を惜しげもなく捨てると、馬に飛び乗った。ちゃんと鞍を乗せてあったのである。
「何処へ？」
「いいところさ、失望はさせぬ。まあ、まかせておけや」
　危難を救われたのだ。まかせるしかない。
　馬は一路、南へ向かって走った。
　これで伊予御前たちの網の目から逃れられたという喜びとともに前途の不安が、城之介をとらえた。
　寄辺なき身には、尺寸の安住の地もない。
　深草のあたりを通ったとき、城之介は、いつぞやのことを思いだした。
　縁とは不思議なものだ。野盗たちに襲われたために、夕月は将軍義輝に救われ、その寵を受け

たことが、歴史的な動乱の渦中に巻きこまれて、それがふたたび、二人を見えさせたのだ。
　芥川の城に着いて、三人衆に引き合わされるまで、城之介は忍者の意図がわからなかった。
「夕月を助けに？」
　城之介は愕然となった。
　三好三人衆を見まわした。日向守が、その視線を受けとめて、うなずいた。
「そなたの女であったそうじゃな」
「……」
「いまは、義継どのが女じゃ」
　そそるような言い方で、
「松永弾正めがとり計ろうた」
「……」
「冷たい男じゃな、好き合うた男と女の仲を引き裂き、おのれの栄達のために、女を捧げる」
「夕月は」
　と、城之介は膝を進めて、
「おれが救いだす。おれの顔を見さえすれば」
　気負いの言葉だと自覚しながらかれは、その言葉をおのれの励ましにした。
　忍者がどんな気持で、かれを助けたかということは、もはや念頭にない。
　いうまでもなく、おつるの指嗾の失敗を、この企てで挽回しようとしているのだ。
　そうだとわかってもしかし、城之介の決意には変わりはなかったろう。
　そのことは、かれにとっても、無意味なことではなかったから。

伊賀の忍法たる〝反間〟のワザとして、これは当を得ていたといわねばならない。

（夕月を奪う）

さきには将軍義輝から奪い、このたびは三好家の世嗣たる義継から奪う――考えてみれば、奇妙なめぐりあわせだ。

翌日――。

飯盛山の城へやってきた行列がある。

「これは右大臣花山院家輔より差し仕わされた使者にござる」

一さおの長持を担いだ従者七、八人に、上使副使の一行だ。

「その長持には？」

「御下賜の布帛でござる」

あけて見せた。

錦や絖の豪華な絹物と当時珍しい木綿など、ぎっしり入っている。

この日、幸か不幸か弾正は信貴山に帰っていなかった。

義継は、公卿と聞くと、喜んで、引見する、と言った。

義父の長慶も実子義興も公卿好きだったが、義継も、三好宗家に入ってから、その気風がうつっている。

公卿は、かれらにとって朝廷そのものだし、成り上りの武将と違って、素姓がはっきりしている。

武力は持たなくても、地行はせまくても、伝統と権威がある。それが武将に不足している金箔をつけてくれるものだから、たとえ非公式な訪問でも歓迎する。

「珍らかな蜀江錦が手に入りましたるゆえに」

御簾中（夫人）に、と口上しなかったのは、こうした場合の遠慮だが、布帛を見れば愛妾たちの喜びそうなものとわかる。

義継は夕月を呼ばせた。

「まあ、美しい」

「右大臣家よりそなたにくれたものだ」

夕月は絢爛たる織物から使者たちに眼をうつして、はっとなった。

夕月は眼を疑った。

（城之介さま？）

思わず口にしそうになったとき上使と副使は、丁重な物腰で一礼している。

城之介は凝っと、彼女を見つめた。

静かに名乗っただけである。むろん、仮の名だ。演技をしながら、心の騒ぎを押さえている。

夕月は、眼があうと、飛び立つようなおもいにあふれたが、

（お懐しや）

その気持だけを、押し出すにはあまりにも羞ずかしい。

ここに連れてこられたのが、強制的であったにしても、そして巧みな弾正の説得に破れたというのが事実だとしても、城之介への裏切りであることにちがいはない。

（もう、あたしは義継の女……）

義継は城之介よりも若く、気質も高慢単純で、好きになれないが、悪人というのではない。

ひどい目にあわせるというのでもない。いたわりという面や優しさに欠けるところがあっても、

三好家の権勢を持つ若殿としては、まず普通であろう。
（出来るならば……）
城を脱けて、城之介のもとへ走りたい。
（あるいは？）
救い出しに来たのではないか。
はじめ、城之介が出世したのかと思った。が、まるきり違う名だということは、ごまかしてきているのだ。
数々の豪華な織物も眼に入らなかった。
胸がどきどきし、いかにも品物に興味を持ったように、あれこれと手にしていながら、眼は虚ろにしか動いていない。
傍で侍女たちが女らしいはしゃぎかたで、何か言っているのも耳に入らなかった。
（何をしにお出でになったのかしら、やはり、私を助け出しに？）
そうだとうれしい。こんなうれしいことはない。
が、それにこたえられる女だろうか。
前に変わらぬ城之介の愛情を嬉しく思うと同時に、自分がその愛情に応える資格がないのが哀しかった。
「花山院どのよ、気をつこうてくれる」
義継が、盃を舐めながら、大人びた口調で言った。
「ほんに、うれしゅうございまする」
と、夕月は城之介を見た。

その言葉の意味は、城之介には充分わかるはずだとおもった。夕月の眼はうるんでいる。このまま、死んでもいいとおもった。一命の危険をおかして、御所の夜討ちのときも助け出してくれたし、いまも、偽名を用い、義継を瞞着するために、これほど高価なものを揃えて乗りこんできた。
夕月には黒幕が三好三人衆だとわからない。どちらにしても、危険に変わりはないのだ。
「お方さまには」
つと、膝を動かして城之介が口をひらいた。義継がじろりと見た。夕月は胆が冷えるようだった。
上使に扮したのは伊賀忍、名張ノ銅七である。
かれはこの透破行に命をかけていた。
（こんどこそ、夕月を）
反間を成功させるのだ。
城之介の気持はしかし、そうした忍者とは違う動きを示していた。
かれはこう言った。
「お方さまには、京をお好きでございますか」
「――ええ」
「五条坂のあたりは」
その返事こそ、城之介が聞きたいものだった。
凝っと、夕月は城之介を見つめて、にっこり頷いた。
「大好きです。何処よりも……」

義継には、その意味はわからないはずだった。
だが、城之介はその一言で自信を持った。
（夕月の心は変わっていない）
義継は小用を催したらしく、立ち上って出ていった。
その隙をとらえて、上使の銅七は言った。
「お方さまには数々の衣装をお持ちでございましょうが、拝見させて頂けますれば、お手持ち以外の摺箔文様など、調進いたしまするほどに」
「……」
夕月は城之介を見た。
城之介の眼が応えた。
その眼の中に、強くたのもしいものを見て、夕月はにっこりすると、裾を曳いて立ち上った。
傍に控えた老女や侍女や、義継の近習たちにも別段怪しくは考えられなかったのである。
義継がもどってきたのはそれから小半刻ほど経ってからだった。
小半刻——約一時間も厠にいたことになる。
（なぜだ、おれは……一体、どうなったのか？）
義継自身にもわからなかった。
かれは小用を済ませて出ようとしたとき、突然、立ちくらみしてよろめいた。
目の前が真っ暗になった。
こんなことはかつて知らない。
突然のことだし、そのまま、昏倒してしまった。

戸の外の手洗鉢のところで、手拭を持って控えていた小姓も、その前に眼と鼻と口をふさがれて失神している。
だが、暫くして、近習が、屋形の簀ノ子（廊下）のところまできてみると、小姓が控えているうしろ姿が見えたので、
（まだか）
と、思い、ひきかえしている。
その小姓はすでに化身していたのだ。虚体でしかなかった。
その小姓の方が先きに気がついたのだ。
はっと正気にかえって、
「殿！　殿！」
と、呼んだ。返事がなかった。
時刻はさだかではなかったが、ずいぶん陽が傾いていた。
それで厠の戸の外から、呼んだのだ。いかに長雪隠でも、一時間とは、甚だしい。
そのころ——
花山院家の長持は、城を出て、半里ほど来ていた。
長持が城を出るのは、入るときにくらべて容易だった。
入るときは、中身をあらためて注意した門番の者も、
「ああ、お帰りか」
と、にこやかに、門を開いて、
「京まで帰るのは大変だな」

その長持と従者たちが城を出て行くのを見送っているうちに、
「はて、あの行列は京へ帰るのではないか」
「ん？　南へ行くなあ、京とは反対じゃ」
「面妖だの」
「大坂の本願寺かの、それとも、信貴山か多聞山の城か」
「なるほど、ついでに松永さまへ御挨拶という次第か」
「であろう。したが、空の長持を担いだままとは、無駄なことじゃ……」
長持の中が空かどうか見たわけではない。
そう思ったにすぎないのだ。
一方、厠で正気にかえった義継は、
「どうしたことか、おれは、ここで眠ってしもうたのか」
厠はひろい。落とし穴も深い。よく落ちなかったと思う。義継は、漆塗りの小さな鳥居のようなしがみ木につかまったまま、眠りこんでいたかのようである。
頭の芯が痛かった。
「小十郎、そちも青い顔をしておる」
「はあ、何やら、頭が重うございます」
「おれも……」
二人とも同時に、気分が悪くなるとは、どういうことか。
書院へ戻ると、花山院家の者たちは、姿がなかったから、
「どうした、かれらは」

「はい、上使副使とも、急に頭痛を訴えられまして」
「……」
「殿にはよしなに申し上げてくれるようにと」
鼻薬を利かされたらしく、近習は、好意的な口調で、
「退出いたしましてござる」
「不快じゃとのう」
と、義継は小姓をかえりみて、
「不思議なこともあるものじゃな」
「と、仰せられますと」
「わしも……不快でな」
横になりたかった。頭がぼんやりしている。眠りたい。からだがだるい。
夜具の用意をさせて、横になり医者に薬湯を煎じさせたり、按腹させたりしているうちに忘れていたことが、ふっと思いだされた。
「夕月はどうした」
「はい……たしか、お寝みに」
「やはり、頭痛か」と、医者をふりかえって、「診たか」
「いえ、何の仰せ付けもござりませぬゆえ」
「診てまいれ、手当てせねばなるまい。奇妙な病いだ」
医者が退ったが、やがて侍女とともにあわただしくやってきた。
「お姿がございませぬ」

「なに、夕月の」

「はい、どこにも……」

「すぐに後を追え」

義継は烈火のように憤った。

怒りが、あのもやもやしたものを吹き飛ばして、

「夕月は、彼奴らにさらわれたに相違ない」

ただちに、使番を八方に走らした。

一騎は京の花山院家輔の屋敷へ走り、一騎は信貴山城へ、一騎は多聞山の城へ、そして数騎は芥川城や中島城へ、三人衆の動向を看視のため馬を飛ばした。

多聞山に向かった一騎は、長持と上使副使の一行が城門へ向かうのを見ている。

「――なんと、多聞山へ！」

義継は驚いた。

（夕月を松永弾正が……）

なんということだ。あろうことか、夕月を世話したのはかれではないか。

（惜しゅうなったか！）

義継は地団駄踏んだ。

「弾正めが、おれを裏切った」

いかな清水でも疑えば、汚れを感じる。

考えられないではなかった。

長慶の死が、判然とするに及び家督とともに、贈位申請が出されている。殆ど習慣的なものだ

が、朝廷でこれをはかり、帝の名で下賜される。殆ど公卿たちで決めてしまうのだが、それが公卿たちの内職、というより本職だった。

公卿などというのは、本俸が少ない。進物で賄っているのである。

それがもたもたしている。

義継は、現在の左京大夫という官が気に食わなかった。早く、義父と同じ〝修理大夫〟になり、従四位下までは昇りたかった。

それを阻んでいるのは、松永弾正自身ではないか。

疑いだすと限度がなかった。

（獅子身中の虫というやつだ、おれが高位に就くのが面白くないのだ）

怒りが、怒りを呼んだ。押っ取り刀で、多聞山の城へ押しかけようとしたほどである。

まるで、その怒りの火に油をそそぐように、翌日、三好三人衆からの隠し文が届けられた……。

それにしても、花山院家の行列は多聞山の城へ、夕月を送り届けたのであろうか。

たしかに行列は、城門をくぐった。長持も入った。

その日、弾正はこの城には居なかったのである。信貴山の城にいた。

先日の大風で櫓の屋根が破損し、塀なども倒壊したので、工匠を集めて、その修理を急がせていた。

乱世には、こうした場合、一日の余裕も持てないのである。

常に四囲から窺われていると見て間違いない。

行列はあたかも、その留守を狙っての企てだったようである。

長持は、たしかに運びこまれた。

「花山院家よりの贈り物でござります。霜台（弾正）様、御帰城遊ばされた上は、よしなにお取り次ぎのほどを」

一行は立ち去った。弾正が、事情を知って烈火のように憤り、義継の使者とともに長持をあけてみると、小袖が一枚入っているだけだった。

戦国有情

「成功じゃ」

三好三人衆の喜びは大きかった。

が、それよりも、伊賀忍者、名張ノ銅七の歓喜は異常なばかりだった。

かれらは、おのれのワザを売って口を糊している、生業である。

失敗は、この生業を失うことを意味しているのだ。

前回の失敗をつくろって、あまりあった。

城之介と夕月は、大坂の中島の城へ匿われることになった。

ここは三人衆の一人岩成主税助の城だ。

城といっても、山城の壮大なものではない。陣屋に櫓があり、頑丈な塀と濠が、この城の特徴だった。

豊富な水を利用した濠が二重三重に囲繞して近寄る舟は、櫓から狙い撃ちにされる。

「わが家と思うて気楽にするがよい」

主税助はそう言って、若い二人に余計な気をつかわせまいとした。

むろんこのことは秘密なのだ。義継の耳に入ったら、苦心の謀略も無に帰してしまう。
城内で心利いた者をつけさせ、外部へ洩れぬようにした。
ある見方をすれば、軟禁ともいえる。
それでも、ふたたび二人きりの部屋を得たことは嬉しかった。
「何も聞かぬ」
と、城之介は夕月をいたわって言った。
「こうしているだけで、おれは倖せだ」
「わたくしも」
「何日ぶりだろう……」
乱世の濁流のなかで、離ればなれになって、またこうして、秘めやかな時間を持てることが嘘のようであった。
城之介は、利用されていることは知っていた。
三好家の権勢争い、天下の権を得る同族の争いに巻きこまれ、純粋な愛を利用されていると気がついていたが、逆に、
（こちらからも利用してやればいい）
それが夕月と二人きりの倖せをつかむ方法なら、と思った。
強大な権力の渦に巻きこまれながら、逆手をとって、小さな倖せを築くのは、容易ではない。
つかの間の倖せに身を浸す二人を、名張ノ銅七はぬすみ見してきたあと、
「今度は、左京大夫（義継）がことでござりますな」
と、主税助に言った。

「弾正への信頼は崩れたであろう。あと一押しじゃ。一押しすれば、左京大夫はわれらの陣に走ってくる」
三好三人衆にしてみれば、松永弾正の勢力をこそぎとるには、まず、弾正と義継を切り離し、三好家の執事という肩書きを有名無実のものにしなければならなかったのだ。
たしかに、不信感を植えつけるのは成功した。この数日後、義継は飯盛山の城を出て三人衆に投じている。
三好家の当主左京大夫義継を迎えた三人衆――日向守長逸、下野守政康、岩成主税助友通は、
「松永討つべし霜台（そうだい）が首を」
と、旗をあげた。
永禄九年二月のことである。
阿波公方たる足利義栄より松永討伐の教書を賜わった三人衆はただちに、被官大名を動員した。
これに応じたのは、三好一族の山城守康長、篠原右京之進長房らである。
義栄にしてみれば、義輝滅亡後、すぐにも将軍宣下するつもりだったのに、なんのかんのといって、松永弾正が阻んでいた。
将軍になる機を逸したという憎しみがある。
感情的には、義継と合わない。義継が三好家の後継者という意識を持ち、義栄が新公方への欲望がある以上、この両者は心からうちとけるはずがなかった。
権勢と血統はここで相剋するのである。
が、当面、
（松永弾正を仆さねば）

という気持に於ては合致した。
弾正の方にしてみれば、義継という傀儡を失った以上、
（力で決着をつけようぞ）
それ以外にない。摂津の野へ手勢を率いて出てきた。
当時の弾正の評判は悪い。
（――元来武勇知略有ル人ナレ共欲深キ人ニテ邪曲ノ事多キ故ニ諸人是ヲ悪（憎）ミ合フ）
と、続応仁後記にある。
義栄は阿波公方を名乗り、三人衆より朝廷に執奏して、従五位下左馬頭に任じられている。
肩書きがものを言うのだ。たしかに、役に立った。
弾正に与力したのは、畠山次郎高政とその家臣、安見・遊佐などと、紀州衆・泉州衆・根来（ねごろ）寺の大衆（坊主）にすぎず、総勢七千余騎。
それにひきかえ三人衆の方は一万三千余――二倍である。
阿波公方は当初、出陣しようとせず、義継が総大将となって高屋の城から出、摂津衆、淡路衆と合流して、凄まじい勢いとなって進んできた。
はじめ弾正らは、泉州堺の南、小野ノ辺に陣した。
それと聞いた三人衆は、裏をかいて安宅甚太郎冬宗に淡州勢を添えて摂州の布引滝山の城を攻めたてた。
何しろ、主力が出陣しての留守城だからたまらない。たちまち攻め立てられて落城に及ばんとした。
これが二月十二日で、十三日には畠山勢が河内国へ乱入したので三好勢の高屋城からは、まず

足軽を出し、鉄砲いくさばかりして相引（引きわけ）になった。
十七日には義継が一気に決せんとして乗り出してきたのである。
畠山勢は堺を出て戦い、泉州勢は家原の城より出て上芝というところで三好勢と戦ったが、多勢に無勢だし、士気がちがう。畠山勢はさんざんにやぶれて、首数をあげられること百八十三。
いい加減な数字ではない。それぞれの手へ討ちとられた侍の数だ。
この戦さは、はじめから松永方に勝目がうすかった。
人数も半分だし、彼我の気持が違った。
士気に於て劣っていたのである。
一つには、阿波公方より松永退治の教書が出たことで、たとえ、阿波にかぎられた公方ではあっても、ともかく、従五位下左馬頭の官位があるのだから、
〃公方家の御敵也〃
と、触れられたのが、大きく左右した。
したがって、戦さの前から、裏切りの機運が出ていた。
松永彦十郎、同安芸守、中村新兵衛などは、内々松永の一味と見せかけながら、三人衆、山城守の味方となって、誓詞まで書き渡して向後二心あらじと約していたのである。
こうした連中が少なくなかったのだ。勢力の強い方へつくのが、世のならいである。
弾正の猶子に孫六郎というのがいるが、丹波国八上城を預っていたところ、この乱で、弾正が手一ぱいと知って、先主の波多野与兵衛尉晴通が先亡の余類をかり集めて攻め寄せている。
八上城の長所弱点をよく知っているのだから、たまらぬ。水ノ手を知って取り切ってしまったので城兵は困窮した。

これにはアツカイが入った。仲裁である。幡州の住人別所某で、寄手に加っていたのだが、様様に勧告して、開城降伏を奨めたのだ。

松永孫六郎は、死守を断念してこれを容れ、城を開いた。

手勢とともに、尼崎浦大物の道場まで、命を助けて送りとどけられている。

以来、孫六郎は畠山家と一手になって、戦うことになったわけだが、負け戦さつづきで、

「是非ともに、御出陣を」

と、弾正の出馬を再三、願い出た。

松永弾正が旗を立ててくれれば、効果は違う。弾正は猶子のためでもあり、摂州中島郡野田というところに陣取り、ついで摂河両国のさかいめの喜連というところまで軍を進めたが、何を考えたか、堺までもどって布陣した。

三人衆の方にも与力の軍勢が続々到着し、摂津上郡下郡衆の中でも池田城主の筑後守勝政などは今度の堺表の儀一大事と聞いて、居城には留守居の侍数人を残しただけで、総勢を引き連れて駈けつけ、三人衆を感激させた。

こうして三好勢は一万五千を数えるに至ったが、松永勢は逆に六千に減っている。

五月晦日、三人衆から軍使が来た。

「近日一戦して速やかに勝負を決せん」

というのである。

「承った」

と、追い帰したが、弾正の額は暗い。

このおのれを恃むことの強い男も、火を見るよりも明らかな勢力の差は、如何ともし難いのだ。

〈――どうした弾正〉

沈鬱なかれの耳に、あの声が聞こえてきた。

あっ、と声をあげそうになった。

果心居士だ。

好きなとき出てきて、気がむかないと、影のように消える。

「無沙汰だったな」

皮肉をこめて弾正は言った。

「おれが敗れるところを見たくてあらわれたか」

〈否とよ、おぬしを救おうと思うてな〉

「……」

〈まだ、死ぬには早い〉

「死ぬものか」

〈左様、その強気が、弾正じゃ。その気が失せたときが、おぬしがこの修羅の世から去るときじゃナ〉

そうかもしれぬ、と弾正はおもった。

まだ死ねぬ。この戦さは、敗れるとしても、おれの存在はここで消されるものではない。

〈戦さは進むばかりが能ではないわの、退くことも知らねばなるまい〉

「……」

〈一たん和睦じゃな。命を全うする道を見つけることじゃ〉

「その道は……」

声のした方をふりかえった。

が、そこには影もなかった。果心居士の声はそれきり聞こえなかった。

「和睦か……」

雌伏して、ふたたび、立つ。

だが、和睦のアツカイが難しい。アツカイ人の器量がものをいうので、勢力伯仲しているときは容易だが、勝敗がはっきりしている場合、一方がいやだといえばそれまでだ。

いま、この畿内五カ国で、三好衆と松永弾正の戦さにアツカイを入れるほどの勢力家はいない。

信長が京にのぼってくるのは、この数年後である。

思案している弾正のところへ訪ねてきた者がある。

「会合衆（えごうしゅう）の南蛮屋どのがお目もじ給わりたいと」

意外だった。

南蛮屋十兵衛が来るとは。

「通せ」

弾正にはいささかの驚きがある。

いま、かれは急場の打開策として堺の会合衆の力を利用することを考えていたところなのである。

「――お困りでございますな」

十兵衛は、すでにかつての元気をとりもどしている。

九死に一生を得た直後のやつれはどこにも見出せなかった。

「如何でございましょう。ずばりと申しますが、ここは、一つ、堺の者どもに、お任せ願えませ

ぬかな」

「うむ……」

「不本意ではございましょうが」

と、言ったのは弾正のプライドを尊重したのである。

「堺の者としましても、戦さで街が火の海となり、女子供が乱暴されてはかないませぬのでな」

「――和議か」

弾正はわざと気のない声で言った。

「条件は何にてあれ、ともかく、この堺から脱け出さぬことには、御自身の戦さもよくなされますまい」

たしかにそうだ。

武将にはそれぞれ、戦さの得手不得手がある。

ある意味では、松永弾正少弼久秀という男は、古い武将の型に属するのかもしれない。

その思想や才智は武骨な戦国武将の間ではぬきんでていたが、平野での戦いには、不馴れであった。

これまでも、かなりの勝利はおさめている。が、それはかれの武将としてのいくさごころを満足させるものではなかった。

勝つことは勝っても、不本意に勝ちをおさめるということがある。

時代は漸く山城から、平城へ移行しようとしている。

にもかかわらず、松永弾正は、戦さをするならば、

「山城で」

と、おもっていた。
平野に於て、両軍が激突すれば、力の差が決する確率は高い。
裏切りなど、謀略の作用なしには、勝敗は歴然としている。
そこには武将に於ける用兵の妙はない。
山城にあって、山間幽谷の地形と、天候、季節を考察しての戦さにこそ、勝敗を争い、頭脳をしぼることの快感があり、勝利感がある。
（野に出てきたことが間違いだった……）
もっと被官大名を動員出来ると思った腹づもりが、狂ったのだ。
義継がいかに若く、いかに凡庸でも、世間は、
〈三好宗家の後継者〉
というだけで、信頼を置くのだろうか。
世間の動向に右へならえするのだろうか。
ともあれ、この堺へ雪隠詰めになってしまったのは、弾正の見通しの甘さだったのだ。
（脱出することだ、脱出して城へ帰る！）
いまはそれだけを考えねばならなかった。
南蛮屋十兵衛のアツカイの申し出は渡りに舟だったのである。
「おぬしがアツカウか」
「は、南蛮屋は使い奴でござりまする。堺の会合衆三十六人が、連署させて頂きまする」
天下の三好家と松永弾正の戦さをアツカウのだ。いかに大商人でも一人や二人では、口を差し入れることはできない。

〈三十六人の連署となれば……〉
確かに強い。
三好家でも、堺の経済力を無視することはできない。申し出を受け入れるにちがいなかった。
「もしお任せ下さりますれば、南荘・北荘筆頭の能登屋と紅屋をお目通りさせまする」
そつはなかった。商人というものは、先きを読む。成算のない勝負はしない。
弾正は一任することにした。
話がきまると、南蛮屋は緊張をゆるめてから、妙なことを言った。
「ずいぶん以前になりますが、お若いころの話を承ったことがござりましたな。何やらという洗礼名を持つ女人……左様、お秋さまとか」
なぜ、いまごろ、その話を持ちだしたのか。
弾正は渋い顔になり、
「昔の話じゃ」
と、吐き捨てるように言った。
「古い話よ、いまさら、何を」
「おぼえておりまする、マダレイナ、という洗礼名でございましたな」
「うむ、左様であった。マダレイナお秋……」
むかし別れた女の面影を追うように、弾正ともあろう男が、遠い雲間に虚ろな視線をさまよわせているのだ。
「お秋……」
その呟きには、万感のおもいがこもっている。

凝っとその表情を見まもりながら、南蛮屋十兵衛は、
「そのお秋さまに、お子が出来はしませなんだか」
「子が？」
くわッと弾正は瞠目した。
「おれの子が……」
「はい」
遠い昔だ。それに女が洩らさねば、男にはわからぬ。
「知らぬ」
「そのお子を存じておりまする」
「なに、おれの子を」
「はい。お顔も似ておりまするゆえ、一目見たときに、そう感じましたが」
「年は、年のころは」
「十七か八か……」
それなら合致する。
弾正は吐息をついた。猛々しい武将にも、ふと洩れた人間的な血の温かみであろう。
「したが、顔つきが似ているというだけで、いや歳ごろが合うというだけで、おれの子とはいえまい。お秋が生んだということもわかるまい」
十兵衛は、これに頷いている。
「左様でござりますな」
「真正、おれの子なれば、あいたいが……」

「てまえの目ちがいかもしれませぬが」
「その者、どこで見た」
「平戸でございます。平戸から連れて参った者」
「なに！」
思わず、弾正は床几を倒して立ち上っていた。
「あの城之介が？」
「はい」
「城之介が……」
はげしい混乱が、弾正をとらえていた。
あの城之介が、おれの血をわけた子か、お秋の子か？　最初逢ったときから、他人とはちがう何かを感じたのは事実である。
その何かが、漠然としていたのだ。おのれの周辺の小さな世界を省ることのなかった半生が、その真実を見ぬく眼を失わせていたのかもしれない。
人間の小さな愛情や生活から、かけ離れた権力の奪いあいだけがこれまでの弾正のすべてだった。
人間を疑うこと。
それが信条だった。
疑いの心を持っていたがゆえに生きて、生きぬいてこれたと思う。
そのために、しかし、最も人間的な、大事なものを失っていたのではないか。
「城之介が真正、おれの子なれば、哀れなことをした」

「……」
「布令などまで出したゆえ、おぬしも察してはいよう。夕月を捜しもとめるために、城之介を苦しめたようじゃ」
弾正はしみじみと述懐した。
南蛮屋十兵衛が、いまごろこういうことを言いだしたのは、深謀があってのことだ。なぜ、もっと早く言わなかったのか。
堺の会合衆の中でも十兵衛は利け者として、恐れられている。
無駄口はきかぬし、無意味な行動はしない。
かれが、動き、口をきくときは必ず、それが南蛮屋の利益となって還元されることだった。
「考えてみれば、てまえが、お心を騒がせる原因を作ったようなものでございます」
と、十兵衛は、ちょっとしょげて見せた。
「夕月も城之介も、てまえが平戸から連れてまいらねば、こういうこともなかったわけで」
「城之介がおれの子とわかれば、おぬしには、何ぼ礼をすればよいか」
礼はいらぬ、とは十兵衛はいわなかった。
「お役に立てれば、十兵衛も嬉しゅうございます」
「このたびのことといい、過分の世話になったな、借りが増えた」
「これはしたり、お武家さまと商人は車の両輪みたいなもので、どちらがというのではなく、両方ないと輿も進みませぬ。米俵も運べませぬ」
態度はへり下っていても、完全に十兵衛は主導権を握ってしまった。
堺を脱出できるかどうか、それによって、弾正の運命はきまる。

その岐路を左右するカギは、いまや南蛮屋十兵衛に握られたのである。
普通なら、ここで、夕月のことを持ちだす。
十兵衛がその欲望を自制したのは、充分な計算があってのことだ。
かれは無理をしない。女の情感なぞは、力ずくでは得られない。水の低きに流れるように、おのずから、流れおちるまで、待つしかない。
むろん、堰の戸を加減するのはこちらだ。
（おれには切札がまだ用意してある）十兵衛は、おつるのことを思った。
城之介を慕って、はるばる長崎くんだりから、やってきた少女である。夕月もその熱意と至純な心の前では、消え入りたくなるのではないか。
（そこに、この十兵衛さまの広い胸が待っているというわけさ）
政所を出ると、かれはただちに行動を起こした。
会合衆三十六人の了解は一応とってあったのである。
能登屋と紅屋が弾正のもとへ来て、条件などを話し合ってから、寄手の三人衆のところへ出かけた。
「やあ、アツカイにまいったな、駄目だぞ、弾正の首を見るまでは」
三好三人衆の中でも、岩成主税助がもっとも、荒い。
堺の会合衆代表の顔を見るなりはねつけた。
「アツカイを入れてくるからには、おぬしらであろうと、見当はつけていた」
「はい、それでまいりました」
「駄目だ。聞かぬ。どうでも弾正の首を見ねば、この戦さはおさまらぬ」

「霜台（弾正）首よりも」

と、南蛮屋十兵衛が、ひたと、おのれの猪首を打って、

「われわれ三人が、こうやって雁首そろえてまいったので、御了見ねがえませぬか」

「ははは、おぬしらの首は、千金も、万金もの値打ちがある。公方のおん敵、松永久秀の首は、われらとった上は、糞溜にたたきこむ所存よ」

三好一党の憤激ぶりはそれだけでわかる。

が、ここで引っこんでしまってはアツカイに立った意味がない。こんな場合、スゴスゴと引っ込めば、笑いもので、これまで築き上げた力が失われてしまう。ある意味では仲裁人は両刃の剣でもある。

「霜台首を御所望なのは、とやかく申しませぬ。それに、御味方の勢いの強さは、われわれの眼にもはっきりしていること、誰しもが御威勢を疑いませぬ」

と、持ち上げておいて、

「さりながら、そのお力をもって攻めたてられますれば、霜台どのとて、拱手して、首になろうとはしますまい」

「そりゃそうじゃろ、立ち向こうてくるがよいわさ」

主税助は、日向守、下野守らと顔を見合わして、笑った。

「いっそ張り合いがある。そのための戦さじゃ」

「ことわざにも、窮鼠かえって猫を噛むとか」

「噛まれるまえに、八つ裂きにしてくれるわ」

「大合戦になりまする。まず、お味方の半分は失いましょうぞ。負けるとわかり、生き延びられ

ぬとわかれば、どんな弱いやつでも、相手ののどぶえに喰いついて死にましょう」

「……」

「そのようなことになれば、他国にとっての幸い。近ごろは、美濃あたりに、織田信長とやら申す荒武将あり、京へ上らんとしてうかがい居るとのことゆえ、油断はなりませぬ」

三人衆もまるきり、周辺に耳をふさいでいるわけではなかった。

十兵衛の言葉にも一理ある。

「それに、合戦がこの地で起これば堺の南北荘、火の海となりまする。ここまで、築き上げた楽市、舶載を運び入れ、日本の品々を南蛮へ売る、この港が焼土に化してしもうては、自然、御一統さまにも、大いなる御損と存じまするが」

一々がもっともだった。三人衆の勢いがおとろえたところで、十兵衛は、やんわりと出た。

「如何でございましょう、御威勢を天下にしめすためにも、御味方が堺へ入る。木戸は開きまする。が、霜台どのはわれらの手で逃しまする。この案、呑んで下さらぬか」

人生には、山もあれば坂もある。長い下積みの生活をしてきただけに、松永弾正は、浮き沈みにこたえない強靱さを持っている。

若いうちに世間にもてはやされて、出世街道をとんとん拍手に上ったものは、ねばり強さがない。

世間を甘く見るというか、この程度で世間をごまかせるという、愚かな過信にとらわれる。

苦労した者にはそれがない。強く猛りだけでは、世渡りは速やかにゆくものではない。

ただ強いだけでは折れる。喬木ほど風当たりははげしいのである。柳枝のしなやかさは、幹の強固さに支えられたものであり、竹は空洞を持ち、節があるゆえに風に耐え得る。揺れることを

知っている竹の根は深く、したがって倒れない。

松永弾正の処世訓は、こうした強靱さを身につけていた。

少々のことには立腹しない。腹を立てても、すぐには表面にはあらわさない。その老猾さである。

直情径行ほど、弱い者はない。たとえば、若い義継など、それだ。

三好一族の、血族でがっしりと張りめぐらした蜘蛛の巣のような閥の中で、今日の地位を得るまでには、どれほどの屈辱、どれほどの忍従を強いられたかしれない。

笑顔一つでも、たとえば、正面と左右から別々に見られるような配慮が必要であった。

主の長慶には敬虔にして従順で忠義者に見える笑顔を見せながらも、長慶の一族には、愛想笑いに見えてはならない。それも長老たちと、若壮の者に、それぞれの立場から尊敬させるものがなければならないのである。

出自にも、背景にもなんの力もない一介の戦国牢人がのし上るには、些事まで気を配って、荒波を切りぬけてこなければならなかったのだ。

したがって、雌伏には馴れていたといえる。

どこで身をかがめるか、沈黙すればよいかを、殆ど、本能的なまでに知っていた。

鼠が嵐を事前に察知するように土竜(もぐら)が地震を予測するように、かれは、危険をさけるすべを心得ている。

そうでなければ、今日まで生きてこられなかったし、また地位も得られなかったはずだ。

変わり身の速さ。

(君子豹変ということにしておくか)

弾正は、自嘲する。

(とにかく、生きる。生き残る。それが大切だ)

堺の会合衆たちによるアツカイは、窮した弾正にとって、もっけの幸いであった。

「よかろう、わしは負けた」

と、明言した。

「この戦さには負けた。いさぎよく負けと認めるゆえ、逃げ道をひらかせてくれ」

弾正の首をとるには、堺を火の海にしなければなるまい。それは堺の市民と富を敵に回すことになる。寄手の三好三人衆は、渋々ながら、手を打ったのだ。

戦国時代の武将たちの争いを見ていると、城を開け渡すならば、城主の命を助ける、ということが非常に多い。

一城を陥すことの至難さもあるが、どうして、後に悔いを残すようなことをするのか、不思議なほどだ。

それだけ、城と家来が、絶対的に必要であり、哀残の武将などは、乞食牢人にひとしいという憐れみをかけられるのであろうか。

松永弾正はしかし、この取り引きで、失ったものはなかった。

兵も損じないし、おのれも傷つかぬ。

マイナス分は、武将としての名誉の失墜くらいのものだ。これに耐えさえすればいいのだ。そして、それは三人衆をいつの日か打ち負かすことが出来れば、きれいに拭い去られるものであった。

六月一日。

堺は南荘北荘の木戸が開かれ、切り落とした橋が掛けられた。

義継を先頭にして、三人衆が手勢を率い、堂々と入ってきた。

むろん、一発の弾丸も一矢も邀えぬ。

堺の町の者にしてみれば、かれらへの憎しみもなく、むしろ、貸しを作ったくらいだから、町の入口には三十六人の会合衆が出迎え、

「御敵は一人も残っておりませぬ」

と、代表が挨拶した。

三十日から一日の未明にかけ、漆黒の五月闇の中を、松永方の兵は、多くの船に分乗して、堺を去っている。

船は、和泉近辺の浜に着いてそれぞれの城へ逃げ帰った。

六月一日から三日間、堺の街は三人衆の祝歌と酔いどれた放吟であふれた。

〽松永弾正逃げ候
鼠の如くに逃げ候
三毛の猫に追われ候
ヤンレ、ヤンレ

三毛の猫とはいうまでもなく、三好三人衆をさしている。

誰がこしらえた戯れ唄か。

口から口へひろがり、寄手はいい気持で唄い、堺の市民は、それを唄うことで、歓迎の意と心得た。

その酔い痴れて、調子っぱずれの唄を松永弾正は、茶を飲みながら聞いている。

「――道に水でも撒いて追い払いましょうかな」

南蛮屋十兵衛が、気の毒そうに言うのを、

「よいわ、唄わせておけい、あのような唄が堺中に満ちれば、誰も、ここに久秀がいるとは思うまい」

「なるほど、一理ですな」

「おれは、松永弾正は、信貴山へ帰ったはず……そう思わせておけばよい」

逃げ道をあける――という条件ではあったが、三人衆の家来の中には、

(弾正だけは)

と、いう者が少なくなかった。

(帰途を擁して、討ってしまえ)

常に過激な者はいる。その情報が入ったので裏をかいて、ひとり、残った。弾正の陣羽織を着し、兜と面頬で容貌を隠して弾正に扮して去ったのは、猶子の孫六郎である。

夕月と城之助が、大坂中島の城を出たのは、その夜であった。

迎えに来たのは南蛮屋十兵衛と手代たちで、

「岩成さまの御書状はこれにございます。お二人を迎えて来いというわけで」

「堺へか」

「はい。もとより、このことは隠密に取り計らわれまするよう」

義継に知れたら、また気が変わるかもしれないのだ。

十兵衛が、夕月たちのことを知ったのは、祝酒に酔った主税助の口からだ。

夕月も城之介も、南蛮屋の顔をまともには見られない気持だった。
「ははは、元気だな、二人とも」
これが、あれ以来、再会の挨拶だった。
「……」
二人とも、何とこたえていいかしらない。
じぶんたちが倖せすぎて、一層慚愧の思いがある。
「何も言うことはないさ」
と、十兵衛は豪放に笑って、
「こうなるだろうとは、平戸でもわかっていたことさ。ただな、わしらぐらいの年齢になると、ひょっとしてと、僥倖を期待するようになる」
「……」
「所詮、成らぬ恋と知りながらな」
「──済みませぬ」
夕月は蚊の鳴くような声で言った。
「あれだけ御恩を受けながら」
「いいさ、そなたが倖せになれば十兵衛もうれしいというわけさ」
この現実的な男が、そんなことを本心から思っているはずはない。
心とは違うがゆえに、平然とこう言えるのではないか。
決して、諦めるということをしない男である。
(いまに、必ず、おれのものになる……)

目の前に、若い二人の、心の底まで許しあった姿を見ながら、尚こう、肚裡で呟いているのだ。
「──城之介さん」
「はあ……私は、詫びることをせぬ。どんなに詫びても、何もならないからだ」
「……」
「憎んで下さい、怒っておいでであろう。それが当然だ」
十兵衛は驚いたように、この若者を見た。
気骨のある若者とは思っていたが、これほどまでに、成長していようとは。
平戸を出てからの日時が、若者を逞しく、真実の生き方を教えたのだ。
口先きと心とはうらはらなのが商人だから、嘘の吐きくらべに勝つ者が成功者だと思っている南蛮屋十兵衛には、頂門の一針の感があった。
「──負けたなあ、城之介さん」
ふとい息を吐いて十兵衛は言った。
「夕月をとられたことを言っているんじゃない。人間としてだ。負けたよ。だが……おれは、南蛮商人の垢が、骨の髄まで滲みこんでいる、あんたのように正直にはなれぬなあ」
夕月の双眸に、じわりと美しい涙がにじみ出るのを、十兵衛は、眼の隅で見た。
城之介のおもても、感動で輝いている。
(それ、かかった……)
にやりと北叟笑みたい気持で、
(やはり、若い)
年をくっているだけ、その効果がなければ意味がない。

大坂中島の城から二人を連れだした南蛮屋十兵衛は堺へ向けて船を走らした。
堺には松永弾正が潜伏している。城之介を伴って、あらためて親子の対面をさせる。
これで二重にも三重にも弾正に恩を売ることになる。
一方、夕月を城之介から引き離す。城之介の心は、はるばる長崎から追ってきたおつるという娘の清純で真摯な熱情がとらえるのではないか。
堺へ着くと、十兵衛は南宗寺に近い別宅のほうへ二人を案内した。
それから、
「実は、城之介さんに是非逢わせたい人がいてな」
「誰ですか」
「それは逢うまで内緒にしておこう、逢ってからの楽しみにしておく」
小西弥九郎だろうか、と思った。
ほかに心当たりはない。
首をかしげる城之介を面白そうに見やって、
「早いほうがよいかな」
と、これは自問自答しているのだ。
「焦(じ)らさないで下さい。早いほうがいい、いつまでも奥歯にもののはさまっているような気持では」
「ははは、怒るな怒るな、あとから、さんざん私に礼を言わねばならなくなる」
翌日、城之介が案内されたのはすぐ近くの南宗寺だった。
「ここに？」

「そうだ、逢いたい人がいるはずじゃ」
塔頭(たっちゅう)の一つであった。折り悪しく小雨模様でうす暗い中を、大きな蘇鉄の庭を見ながら、庵に案内された。
暫く待った。
「誰だろう？」
弥九郎だったら、これほど、思わせぶりにはすまい。
そのほかの心当たりは、あるはずはなかったのである。
まだ暮れるには少し早い時刻だったが、外は暗くなっていた。
灯がほしそうな暗さの中に、ぽっと手燭の灯が、廊下を渡ってくるのが見えた。
若い女性と見えた。
若い。
伊予海賊の美沙ではない。とすると、ほかの女に心当たりはない。せいぜい忍者木鼠の女であったお孝くらいしか知らない。お孝とは、特別の感情の交流があったわけではないし……。
女は手燭をかかげるようにして入ってくると、板戸を閉めた。
「お懐しゅうございます。城之介さま」
手燭の灯りが、女の顔を照らした。少女といってよい顔であった。
あまりに思いがけなかったので、すぐには返事が出来なかったのである。
まるで、夢を見ているような、気持だった。
「そなたは？」
「はい、おつるでございます」

はっきりと、そう名乗られて、はじめて、感動が胸に来た。

「おう、あの、長崎で……」

「はい、御無事で、うれしゅうございます」

おつるはすがりついてきた。

長崎の浜辺で布子を着て胸を出していた少女ではない。僅かの間に、数年の成長を感じさせる変わりようだった。

利用されていると知らず、一所懸命におぼえた屋敷奉公の作法が、急速に成長させた。長崎の寒村の漁師の娘をここまでにしている。

城之介は眼を瞠る思いだった。

(美しい……)

こんなに美しかったろうか。

最初に信じ難かったのも、かすかな記憶にあるおつるは、もっと素朴で清純な感じだったのである。

屋敷での派手小袖の着付けや、濃化粧が、純朴な村娘という印象をうすれさせはしたが、その愛くるしい特徴を、むしろはっきりと、目立たせている。

「どうして、この堺に」

その疑問を発したのは、かなりの時間がたってからである。

「あんな遠い九州の肥前の、果てから……」

「平戸に行ったんです。城之介さまに逢いたくて」

「おれに？」

「はい。それで、梵天丸のことを聞いて……」

「それだけの理由でか」

城之介には、信じ難かったようである。

いうならば、ゆきずりの知りあいにすぎない。あのような異常な事態の中で、心のつながりを感じたのも事実だが、城之介には、

(いのちの恩人)

というおもいがあった。

目まぐるしい運命の渦の中で、城之介は、おのれの気持が、恩人への感謝というベールで包まれ、おつるを一人の女としての〝愛情〟で見たことはなかった。

城之介の眼には、おつるは少女の域を出なかったせいもある。

こまやかな感情を持つ女の方が、情感を知ることは早い。殊に女性が男性へ感じる愛は、多くの場合、信頼からだ。

保護者である祖父を殺され、家を焼かれたおつるが、もっとも信頼のおける慕わしい男性として、城之介の後を追ってきたのもわからないではない。

「城之介さま……」

ふるえる声があえぎ、おつるは、膝に手を置いた。

それが無垢のおとめの精一杯の愛情の表現だった。

つぶらな眸には、清い雫が浮き、すがるように、城之介を見上げている。

城之介の心にもひびくものがあった。

「それほどまでに！」

城之介が手をのばすと、おつるはすがりついてきた。

「うれしいぞ、おつる。こんなところまで、おれを……」

「お逢いしたかったの」

城之介は強く抱きしめた。

ひろい南宗寺は寂として人声一つ聞こえない。堺の街には三好三人衆の軍兵があふれて、勝利に酔い痴れ、女を擁し、濁み声をはりあげている。

その騒ぎも聞こえてこないのは、木立が深く、境内が広いからであった。ただ静かな雨の音ばかり。

手燭の灯りだけが、二人を淡く照らし出している。

若いからだが、あふれるばかりの感情にしたがうのを、妨げるものはなかった。

夕月のことが、ちらりと城之介の脳裡を掠めたが、はるばると、あとを慕ってきたおとめの想いのはげしさ、いたいたしいほどの哀れな情感が、男の心をゆさぶったのだ。

こうして抱きあっていて、おとめのからだが、羞恥と期待にこまかくふるえているのがわかった。

その戦慄には、未知へのおそれがあった。男のからだを知らない未通女の肌は、本能的に拒もうとし、焦がれる心は、ひらこうとする。その相剋が、おとめを可憐に戦(おのの)かせるのである。

柔らかい肌のふるえは、さながら花びらのそれの感触であった。

花を摘み、花びらを損う感傷が城之介の手をふるわせた。

唇を合わせると、燃えあがったいのちの炎が、唾液を熱くして、舌を溶かすように誘いこむ。

自然な男女のいとなみは、技巧を知らずに、技巧を超えた情愛の融合を行なうのである。

城之介の手が歓喜にふるえつつ、おつるの裾前をひらこうとすると、はじめて、女は唇をはなし、

「おねがい……」

と、あえいだ。

「灯を、消して下さいまし」

仄かな手燭の明りすらも、初夜の行為には耐え難かったのであろう。

城之介はこれを容れている。

雨の日は、まだ暮れるに早いのに、宵のような暗さが、室内を浸していた。

女が一生に一度、味わう、あの感動がおつるをとらえ、それはこれまでの苦難のすべてを、補ってあまりある幸福感であった。

おつるが想っていたように、城之介の心の中にも、おつるは生きていた。

その喜びである。絶望的な日々の苦しみや哀しみは、祖父の斬り死以来、重なっていたが。

城之介の手におのれを委ねた安心感と、しだいに盛り上ってくる甘美な快感で、重苦しいしこりも春の淡雪のように、ほろほろと溶けてゆくようであった。

そのころ——。

ひとり城之介の帰りを待っていた夕月のもとへ、駈けこんできた者がある。

「大変でございます。すぐに移って頂かねばなりませぬ。義継どのに嗅ぎつかれましたぞ」

三好左京大夫義継の耳に入れた者がある。

「あたしが此処にいることを」

夕月は思わず立ち上った。

偏執的なほど自我の強い義継には一面、狂暴な血がある。

(捕まったら命はない)

夕月は顔色を失った。義継としては愛をそそいだつもりであろう。それだけに、夕月がひそかに城を脱け出たのは、弁解の余地はない。

裏切りであり、さらに大きな意味では、名門三好家を家督した左京大夫への侮辱になる。

義継の激怒ぶりがわかるようであった。たとえ、真実、愛していなくとも、義継は、その誇りと名誉にかけて、夕月を探しださずにはいない。

捕えて、ナブリ殺しにするためにも。

「さあ、御案内しまする」

その男は言った。

夕月の見知らぬ男であった。かれは、岩成主税助の家臣だと名乗っている。

この南蛮屋の別宅に城之介と夕月が連れてこられたことを知る者は多くないはずだ。したがって夕月は何の疑いも抱かなかった。

「どこへ」

「安全なところでございますよ」

武士は歯ぐきをむきだして、卑しく笑った。

「金輪際、見つかりませぬ。安心して、お出で下され」

「でも、城之介さまにお知らせしないと」

「そら、わてがやりまさ」

と、貧弱な胸をたたいて、

「こない話のうちにも気が急ぎま。さ、行きまひょ」

「南蛮屋さんにも」

「そっちゃも心得てま」

促された。

小雨の降っている街は、方角の見当もつかない。夕月は、市女笠をかぶり、垂虫(うすぎぬ)を深く前で合わせて、簑を着た。

男は簑笠すがたで、先きに立ったが、この暗さでは、明りがほしい。大路の辻には篝火が焚かれ、万一を慮って、警備の者がいたが、小路に入ると、道も定かではない。

その焚火の余光が二人を照らしたのを、

「おや、米蔵さんではないか」

立ち止まり、笠をあげた法体がある。

ちらと、武士はふりかえったようだが、返事もせず、夕月を急がして、街角へ消えた。

あとを見送って、

「人違いかのう、たしか南蛮屋で見かけた米蔵さんだと思うたばってんが」

と、首をかしげたのは、破れ衣に網代笠の愚門和尚だった。

愚門和尚は、おつるを飯盛山の城から下らせて連れ戻ったのである。

名張ノ銅七の口車に乗って、城之介に逢いたい一心で、城づとめしたおつるだったが、夕月と松永弾正をおとし入れるための毒薬投入ができず、自ら毒見して死の一歩手まえまでいった。

心根の優しいおつるであった。

度胸もいいが、それだけでは堺の商人の中で、ぬきん出ることはできない。
頭だ。博識と創造性と、それに直感力だ。
三能力の何れを欠いても、度胸を十二分に生かすことにはならない。
南蛮屋十兵衛は、おのれの能力に自信を持っていた。
おつるを抱いた翌日、城之介は降りみ降らずみの空模様の下を、同じ南荘の玉連社へ出掛けた。
「もう一人逢いたい人にな、逢わせて進ぜるほどに」
おつるは夕月と城之介の仲を知らなかったし、城之介は毒薬の一件が、おつるにからんでいたことは知らない。
運命の皮肉は、掌の上で水銀を転がして合わせたり分けたりするように、かれらを弄んでいるかのようであった。
城之介は、
（もう一人とは？……）
見当がつかなかった。女ではないことは、おつるのあとで逢わせるということでも知れたのだ

が、
「その前に夕月に逢って話さねばならない」
と、足をとめた。
南蛮屋十兵衛は、はっとした。顔色が変わるのを、笑いでまぎらした。
「あちらでは、待ちかねていなさるのでね」
「だが……」
「おつるは喜んだろう、少しは南蛮屋に感謝してもらわにゃならぬ。ははは」
「恩は忘れません。それだけに、夕月のことを思うと」
「色男は辛いな。両手に花のたとえ通りだ。いや、これは冗談だが、あんたも難しい立場になった。わしとしては、おつるの気持があまりに憐れじゃったゆえ、お節介をやいたわけだが」
「……」
「夕月の心も思うとな」
十兵衛は口を噤んだ。色事は他から容喙すべきものではないと気づいたように。
たしかに、年輪を食っている者でも、こうした立場は難しい。
況や、激情にかられておつるを抱いたものの、城之介は若すぎた。
こうした問題を解決するには分別がたりなかった。
夕月に逢って何をいうつもりか。
その迷いが顔に出ている。
「どうだろう」
と、十兵衛は同情めいた顔をして言った。

「夕月の方は、わしが引き受けようか」
「話して下さるか」
城之介は単純に受けとって、飛びつくように言った。
「私の口からは、どう言ったらいいかわからぬ」
「ひき受けた」
十兵衛の笑いには、別の意味があったのを若者は気がつかない。
「あとは、ひき受けた。夕月のことなら、わしが……」
そこへ愚門和尚が通りかかったのである。
夕月を連れていった米蔵は南蛮屋に出入りの者だった。
「おつるが喜んだろ、城之介」と、愚門和尚は肩の荷がおりたという顔で、
「いまそこで米蔵に逢うたが、わしが声をかけると、返事もせずに顔をそむけてな、行ってしもうた。変な男じゃのう」
「あれは、あんな男さ」
と、南蛮屋十兵衛は、内心の狼狽をさりげなく隠して、去ろうとしたが、
「いや、日ごろは、あんなふうではなかったが、女連れのせいで、昂ぶっておったのかのう、ははは、色即是空、空即是色、ははははは」
城之介は暗いなかで頬をあからめた。おつるとの仲を言われたような気がしたのだ。
愚門はしかし夕月のことを知らず、米蔵の行動に不審を感じたにすぎない。
その足で戻った城之介は、夕月の不在を知ると、
「何処へ行ったのか、私が帰るまでは一人で出てゆくはずがないのに」

「そうだな、どうしたことか」
十兵衛もいぶかしげな表情になったが、後から考えてみると、様子がおかしかった。
この奸策は十兵衛の失敗だったようである。
「旦那、大変なことになりよってん。夕月はんを米蔵がどこぞへ連れていきよったそうや」
南蛮屋の手代たちが駈けつけてきた。
(また、こやつらが余分なことをしよる)
十兵衛は舌打ちしたい気持だった。親の心子知らずというやつだ。
「お孝が浜辺で見たちゅう話や。舟へ乗せて、漕ぎだしよって、あいつ、かどわかしよったんや」
「まさか、米蔵が……」
と、十兵衛は、まだ信じかねる口ぶりで、
「お孝がたしかに見たというのだな」
「へい、そない言うて駈けこんで来ましてん」
「浜役人にそう伝えろ、そして、手わけして探すのだ」
「私もゆく」
と、城之介も勢いこんで言った。
「なぜ」
「いや、あんたは、よしたほうがいい」
「おつるのことだけを考えてやったほうがいい」
「しかし……」

「おつるが泣くだろうな。いままで自分を抱いてくれた男が、すぐほかの女のことで血まなこになったと聞けば」

「……」

それが大人の考えなのか。

城之介には、そこまでの功利的な考えはなかった。

「ほかのこととは違うのだ。夕月の身に何か起こったとしたら、私の責任でもあるのだから」

たとえ、おつるがかれの愛情に疑惑を抱いても、この場合しかたがないではないか。夕月を魔手から救いだすのが急務だった。

「行こう、とにかく、夕月をその男の手から救け出さねば」

夕月への想いが邪恋といわないまでも、一方的で、いささか異常なはげしさであることを、南蛮屋十兵衛は、自身感じていた。

(意地もある)

男の世界に生きてきたかれには、敗れるということが耐えられなかった。

商売でも、女でも、すべて勝つ——勝つことが生甲斐だった。

そのためには、常軌を逸脱しても、目的をとげる。

米蔵に策を授けて、夕月を城之介と引き離したのも、他の者には一切、知らせていない。十兵衛は秘密は最小限におさえることを知っていた。

だが、それがかえってこのような事態を招いたのである。

「とにかく、手わけして探せ、国外へ連れ去られたら、それっきりだ」

それもしかし、派手には騒げない。左京大夫義継の耳に入ってはならないからだ。

ところが、この十兵衛の奸計は瓢箪から駒が出る結果になった。

街には松明の火が流れていた。三好の軍兵が群れている。

辻々には篝火が燃え、納屋衆の門前や、会所などでは、指樽のかがみが抜かれ、振舞酒がふんだんに出されていた。

当世具足に旗差物を差し、槍をかいこんだ軍兵の姿は、松明の火あかりでは、判別がつきにくい。

浜の会所近くで十人ばかりの軍兵が指樽を囲んで、気勢をあげていたが、

「あれは、南蛮屋やないけ」

と、一人が目ざとく見つけた。

「ん？　ほうや、十兵衛や、梵天丸の奴や」

「殺るか？」

口走った者がある。

「待て、急ぐことはあらへんで」

「ほうや、誰かあとを跟けろや、おかしらに知らしてくるわな」

これは伊予海賊の美沙の輩下だったのである。

京都での稼ぎも、一段落と区切りをつけて、堺へ戻ってきたのであろう。

戦さでも、何でも、騒乱があるところなら商売になる。小具足は拾ったのや奪ったのや、死体から引き剝いだものもあるだろうが、とにかく、三好三人衆に与力した多勢の被官大名や豪族の武士たちが入ってきているから、かれらも、大手をふって占領軍顔をしている。

むろん、そうして獲物を狙っているのだ。

多助と喜十郎が十兵衛のあとをつけ、伝八が美沙のところへ走った。
美沙は一人で酒を飲んでいた。
伊予へ戻る前にひと稼ぎと思っていたのである。
「南蛮屋には怨みがある」
眼が坐っていた。
凄艶な感じだった。手にした土器を叩きつけたのが返事だった。
「始末をつけるがいい」
「では、わっしらが」
「あたしが殺るよ……」
怨みはむしろ南蛮屋十兵衛のほうが抱いている。
美沙が怨むのは筋が通らない。彼女としては、梵天丸を爆破しただけでは、おさまらないというわけか。
九死に一生を得て生還した十兵衛は、生涯かけても、美沙に報復するにちがいない。
それなら、
(先きに手を打ってやれ)
一人だと聞いて、そう思ったのだ。
この軍兵に埋まった堺の街で、南蛮屋を襲撃することは、火薬を背負って火に飛び込むようなものだった。
南蛮屋十兵衛ほど、名声があり資産のある男は、堺の会合衆のなかでも珍しい。常に多くの手代や若い衆に取り囲まれている。

それが孤身でいるという。
(殺れる!)
と、感じたのは無理はない。
美沙は帯をしめ直した。すぐにかれらは出発した。
浜辺には喜十郎だけが残っていた。
「多助は？」
「あとを追うてまんね」
「舟で？」
「泳いで行きよった。多助は達者やさかい」
かれらが舟の交渉をしているあいだに、その多助はびしょ濡れで戻ってきた。
「沖の船や」
「どの船？」
「ここからは見えへん、さ、行こ、面白いことがおまっせ」
小舟一艘に乗ったのは七人である。あとは浜辺に残った。
舟の上で多助は、鬼の首でもとったように、
「夕月がいまっせ」
と、囁いたのだ。
美沙の眼が猫のように光った。
「ま、夕月が……」
夕月の失踪は、彼女の耳にも入っている。京で夕月をおさえ、弾正の手に渡したのが、かれら

一味である。
失踪したあとも義継は狂気のようになって夕月を探している。
弾正の城へ夕月は運ばれたことになっている。忍者銅七による〝反間〟の策謀だ。
義継は弾正を憎み、三人衆のもとへ走った。
(今でも左京大夫は夕月をもとめているはずだから)
夕月を連れてゆけば、義継から莫大な恩賞にあずかれる。
「あの船や」
多助が指さした。
船名は見えないが、五百石積みほどの船で、無人のように、しんとしずまりかえっている。
この連中が近づいたことを南蛮屋十兵衛は知らない。
夕月もそれと知らず、船室で不安にかられていた。
「――夕月、ここなら安心じゃ」
十兵衛はにこにこしながら入ってくると、
「左京大夫の手も及ぶまい。まあこれしきの船じゃが、大船に乗った気で安心しているがいい」
「城之介さまは……城之介さまへ、ここに居ることを」
夕月にはそのことが、一番心配らしかった。
「心配することはない。ちゃんと話しておくゆえ……」
南蛮屋十兵衛は、まず手はじめに引き離したことが、
(成功した)
と、おもった。

(これから、どうやって、夕月の心をもみほぐすか……)
じっくりとやらねばならなかった。
(とにかく、あせらないことじゃな。女の心を奪るには、ゆるりとゆるりと……)
まず、信頼を得る。それが先決だった。
米蔵だけが、いまのところ腹心で、店の者にも内緒のことだから、充分、注意しなければならなかった。
「――ちょっと、旦那」
戸口から、その米蔵が顔をだして、呼んだ。
「何じゃ」
「ちょっと……」
そわそわしている。
甲板へ出ると、
「何だか、変どっせ」
「何が変だ」
「変な匂いがしよりまんね」
たしかに臭った。こげ臭い。
「火だ」
「え！」
「何か燃えているぞ」
船首に近い船底の積荷がぶすぶす燻って、煙を出していた。

「や、どうしたことだ。火事になるぞ、消せ、水じゃ、水を早く」
十兵衛と米蔵は狼狽した。
船火事自体も大変だが、それよりも、港が大騒ぎになって、夕月のことがばれることの方が、問題だった。
「どないして、ここに火が」
「そんな詮議よりも、消すこっちゃ」
用意の水桶がある。
二人が狂奔しているうちに、夕月の悲鳴が聞こえてきた。
十兵衛はふりかえって数人の影を見た。
「うぬ！　きさまらは」
ぎらりと眼前に白刃が閃いた。
二人が夕月の腕をおさえて、連れだそうとしている。十兵衛を阻んだのは四本の剣である。
「梵天丸以来やで」
そう言われるまでもなく、十兵衛は気づいていたのである。
「文句はこちらにある」
十兵衛も抜刀した。片手打ちの一刀が右側の男を斬った。
さっと斬りこんできた奴を受け流して、三人目へ血刀を送りこんだが、これは狭いところを巧みに逃れている。
呼吸の間に左側から一刀が延びた。斬り合いに馴れたチーム・ワークである。十兵衛は白刃の間に、夕月が連れ去られるのを見ている。

「やらぬ！」
掬い斬りに血路をひらいて、十兵衛は走った。
「夕月！」
小舟には美沙が残っていた。
「早く」
ほとんど、投げ落とすように、乱暴に夕月を小舟に乗せると、
「伝八、早櫓だよ」
小舟は波に揺れて走りだした。
二人がかりで夕月は圧えられ、手足を縛られた。猿轡（さるぐつわ）を嚙ませられると、絶望で気を失ったように、もう、もがくことさえ、しなくなる。
美沙はそれを冷ややかに見おろすと、
「静かになりよった」
と、男のように笑った。
「背の君のところへ連れて行ってやるんやで、忝のう思わんとあかんがな」
乱れた裾から、夜目にも白い脚が、脛のあたりまで剝きだされている。
痛々しいが、またなまめかしくもある。女の眼にもそうなのだから、男たちには毒だった。
「何処を見てんのや、早ようおやり」
美沙は、輩下の好色な眼を叱りつけた。
「へいへい」船頭があわてて、腕に力を入れる。
南蛮屋十兵衛は、兇刃にさえぎられて、この小舟を無念に見送るだけだった。

店の者の眼を晦ましてまで、ようやく掌中の玉にしたと思ったとたんに、横から掠められたのだ。
胸の中は煮えくりかえるようだった。その怨みが鋩子から火を吹かせて、捨身に攻撃をかけさせた。
だが、漸く残りの敵を片付けたときは、すでに、夕月を乗せた小舟は、闇の海上を、浜の方へ漕ぎ去って、他の泊まり船の蔭に見えなくなっていたのである。
船の小火は消えていた。
かれらの気をそらすためだけのものだったから、わざと火を拡げなかったのだろう。船火事は飛火するので、港の人は特に火ノ手には眼が早い。騒ぎになっては、伊予海賊の立場は悪い。
十兵衛にしても、店の者には隠れてのことだっただけに、この失敗を招いてしまったのである。
「——だ、旦那、南蛮屋の旦那、どこにお出でか」
米蔵の苦しげな声が聞こえた。
「やられたか」
灯の消えた船内で、声をたよりに近よると、手がすがりついてきた。
そのふるえの様子ではかなりの重傷と見えた。
「な、なあに、大丈夫や、これしきでは死にまへん、血が……血を止めさえすりゃ、早く医者のところへ、連れていっとくなはれ」
医者か。連れてゆけば、店の者に知れる。城之介にも、すべてがわかってしまう。
暗い船内で、十兵衛は顔を歪め、もしもその表情が見えたら、鬼のようだったかもしれない。
「旦那……」

米蔵もふと気配を怪しく感じたらしい。その声は、しかし語尾は恐怖と苦痛の悲鳴になるしかなかった。十兵衛の血刀は、まっすぐに米蔵の左の胸を刺していた。
非情なのは、戦国という時代の必然ではある。だが、まさか、十兵衛にたのまれ夕月をかどわかした米蔵が、その十兵衛の手で、殺されようとは夢にも考えられなかったろう。
だが、この非情さと冷酷さが、十兵衛の〝顔〟であることも事実だった。
この野獣性がなければ、堺の会合衆三十六人の中でも、五本の指に入る勢力家にまで伸びることはできなかったろう。
(殺る！)
と、心に決めると、十兵衛の刀は狙い正しく、深く、米蔵を刺していた。
その次にすることは、みんなの死体を海にほうりこむことだった。
この作業は、力の強い十兵衛には大したことではない。広い船内で一人きり、船燈を点けてから順々に海へ投げこんでゆく。
眉毛一すじ動かない。邪魔な米俵でも片付けるような、無感動な表情だった。
その作業のあいだ、この男は考えている。
(どうするか、これから)
夕月の彼に対する信用は零になったのではないか。
その対策だった。伊予海賊たちは、義継のもとへ届けるだろう。
それを、とりもどす。そのことは難事かもしれないが、やって出来ないことはない。方法は幾らでも考えられる。義継や三人衆が、この堺にとどまっている間なら、可能性は大きい。
大事なのは、夕月の心をどうやってもみほぐすかであった。

ところで、小舟で拉致された夕月は意外な手に救われていたのである。
美沙のほか船頭と輩下二人。夕月を見まもりながら、浜辺へ漕いでゆくうちに、異変が起こっている。
突然、輩下の一人が立ち上ると、うわっと、大声で叫んで、海へ飛びこんだのだ。
あまりに突然だったので、なかまが止めるひまもない。
突然、狂気したとしか思えなかった。
そして、それは、一人にとどまらなかった。残りの男が、
「ひえっ、気狂いしよって」
と、あわてて、海面をのぞきこんだが、
「う、海坊主！」
一声、叫びを残して、舷(ふなばた)からもんどり打った。
美沙は、はじめて仰天した。
眼に見えない魔性のものにひき込まれたのではないか。脇差しを抜き、夕月を片手でおさえた。
そのとき、船頭が悲鳴をあげた。船頭は櫓をしっかり握りしめて、
「なんちゅう、こっちゃい、あれ、あれ、船が……」
船がまるで渦巻の中心に入ったように、ぐるぐる回りはじめたではないか。
もう浜までは、百メートルそこらという近さなのに、船頭が必死に櫓を動かしても、船は進まない。二人とも真っ蒼になった。
海には馴れた連中である。船頭が櫓をとられるなど、よほどの大波か、渦巻きでもなければ、ない。

浜辺はすぐそこだというのに一向に進まず、ぐるぐる回っているのだ。
「何さらしてけつかるねん」
美沙は眼をひき吊らして叱りつけた。
「そ、そやかて、おかしら、どないもならへん」
船頭は真っ蒼になっている。どうしていいかわからないのだ。
その間に、波間に落ちた二人の輩下はどこかへ流されて、姿も見えないし、声も聞こえない。
「さ、早よ、漕いどくれ。北の浜や」
「わかってま」
北の浜には残りの輩下が待っている。多勢の輩下に囲まれていなければ安心ならなかった。
船頭は舳(へさき)を北の浜へむけた。漕いだ。が、どんどん南の方に進んでゆくではないか。
「北や、北へ行かんと……」
「へい、へい、そのつもりでんね、せやけど、船が、流されてしまいますのや」
「阿呆、もっと力を入れんからやないか」
怒鳴りつけて、はっとした。
舟の上に、妙な影がある。
老人が一人坐っていた。
美沙は眼をこすった。幻影だろうか？　老人だ。翁といっていい。
顎鬚が胸まで垂れた老翁は、影といえば、影、現実にしては、不思議であった。
どこから来たのか。天から降ったか、海から飛び出したか。
現実とは思われなかった。

美沙は悪夢を見ているような気がした。

二人の輩下の死も、この小舟の進行の異常さも、すべては、この老翁の妖異がもたらしたことにちがいなかった。

「……？」

愕然としたのは、その老翁の姿に記憶があるような気がしてきたことだ。

お前は、と言おうとして、

「……、……」

言葉が声にならなかった。

口が痺れたように、声が出ない。美沙は瞠目した。

見たことがあるどころではない。

この奇怪な老翁こそは、多聞山の城で、彼女を術でとろかし、生気を奪った者ではないか！

あのとき、美沙は官能の波に弄ばれ、かつて知らぬ恍惚境に陶酔した。

それでいながら、老翁は一滴の精液も洩らしてはいない。

美沙を狂わせ、喜ばせて、そのいのちの泉のあふれるのを、そっくり、おのれの生気に役立てた。

その非情な存在だった。枯骨はために潤い、その幻妖の秘術は冴えわたった。

いまも、忽然とあらわれ、美沙の口を痺れさせて、にたにたしているのだ。

美沙は、怒りよりも、懐しさが湧き上ってくるのを、とどめようがなかった。

じぶんでも、あとから、淫夢の中で遊んだとしか、思えないほどの狂喜だった。

その生気を吸いとられたというのが事実としても、あれほどの喜びを与えてくれたものはない。

幻妙不可思議な術に狂わされたことも、あのあとで、暫く放心したような虚脱が――それは何年か寿命が短くなったような感じすらうけたものだが、それでも、悔いも恨みもなかった。あまりにも、快楽は大きく、何ものにも代え難かった。いのちそのものにすらも。

その奇怪な老翁――果心居士は美沙の心を知らず、おのれの術に満足したように、うすら笑いで、泰然と坐しているのだ。

幻術は、人間のみならず、あらゆる動物の心を獲る、という。

果心居士が、美沙の現在の心境を見ぬき得なかったのは、目的を遂行するに急だったためであろうか。

声を奪われ、虚となった美沙に変わって、果心の口は動いている。

〈南へ……南の浜へ〉

船頭もまた、術にかかった。

美沙は、

――北へ、

と言った。

北へ、北の浜へ、と美沙は言っている。それが果心の口をかりると、

〈南へ……南の浜へ……南の浜へ……早く、おやり……〉

果心の口から、出る言葉であったが、声は美沙のものであった。

実は虚となり、虚が実に代わる。さながら、美沙がその命令を発しているにひとしい。

この場合、少なくとも船頭の眼にも耳にも、そう見え、そう聞こえた。

船頭には、果心の姿が見えないのだ。

美沙にそれが見えるのは、あるいは、肌を接した者のみの持つ、一種の霊感にも似た感得力かもしれない。

小舟は、制禦するものがなくなって、速度を増した。

南の浜へ――。

美沙は、はっと気がついた。

(いけない!)

南の浜には輩下はいない。南蛮屋の手の者が、夕月を探しまわっているのだ。

(船頭、南へ行ったら、あかん)

必死にそう叫ぶのだが、声は出ないのだ。

果心居士の口は動いている。

美沙が熱狂すれば、するほど、その言葉は虚しく、

〈南へ、南の浜へ〉

と、変わって伝えられているではないか。

すでに、浜辺が近く、焚火のあかりに、右往左往する人影が見えた。

夕月の手足を縛って猿轡を嚙ませているのだ。南蛮屋の者に見つかれば、どうなるか。

美沙は走る船の上で立ち上った。さっと、暗い水面へ身をおどらしている。

美沙に、手足の自由が残されていたのは、果心に彼女を拘束する気持も、何もなかったことを物語る。

気随気儘に、幻妙の術を駆使して、自在に羽搏いている果心には、美沙を憎む気持はない。

美沙にかぎらず、誰に対しても、憎しみや怨みを抱くことはない。

そうした憎悪怨恨は、卑小な人間の社会でのものがきがもたらすものでしかないのだ。喜びも哀しみも、怒りや歎きの感情すらも、果心にはあるまい。

かれはただ、おのれのワザをもって、欲するままに、行動しているにすぎない。

目的はどこにあるのか、凡俗の者が推察しても、真意は遠く、知ることもできまい。

ただの術使いではない。狐でも、猫でも年古りたるものは、妖気を帯びてくる。果心居士の妖異さは、翁の年輪にもある。コケが生えている。老妖の幻術師である。その目的を推し測るよりも敬して遠ざかるほうが賢明にちがいない。

美沙が小舟の上から、海中に飛びこんだのはたしかにこの場合賢明だった。

地上よりも海中の方が彼女には自由に動けるのだ。

〈ほ、狐が逃げたか〉

ふわふわと、果心は笑った。

むろん、追おうともしない。唇は笑っているが、眼はひたと船頭をとらえている。船頭は、完全にかれの術中にある。

逃げるどころか、おのれが何処へ向けて漕いでいるかもしらぬ。

ひたすら、櫓を動かしてゆく。

南の浜へ――。

不思議なのは、浜辺の方から見ると、この小舟には、老人の姿も船頭の姿も見えず、ただ、奇妙な輝きだけが――さながら、夜光虫を集め乗せたかのように、ぼうっと、冷たい光で包まれて見えたことである。

「なんやろ、あン小舟は」

「妙なこっちゃ、漕ぎよるふうも見えへんのに、こっちゃへ進んでくるわな」
「あれ、あれ、段々、光が消えよるでェ」
舟は磯へ近づくほどに、光を失い、それにしたがって、船頭の姿も見えてきた。
そのときは、すでに、果心居士の姿はない。
櫓が砂を掻いた。
好奇の眼を輝かした連中の中に、南蛮屋の店の者が多勢まじっていたのである。
「あれ、女が一人、縛られちょるがな」
「なんやて、あ、夕月はんやないけ」
「夕月はんや、どないして、ここに……」
「なんでもええ、早よ、縄をといたれ……」
わらわらと男たちは水の中に走りこんでき、夕月を抱き起こすと、砂浜へ運び上げた。
(夕月が救けられた)
という知らせを、城之介は、岩成主税助の陣屋で聞いた。
人間の感情は、ときどき思いがけない方に動くものだ。
夕月の行方を捜索する間、城之介は他のことを忘れた。ひたすら〝米蔵という男〟を憎み、叩っ斬って、救い出そうという熱情にかられていた。
だが、その夕月が無事だったと聞くと、
(よかった……)
と思う一方、
(もう逢わない方がいいかもしれぬ)

おつるのことが思いだされた。
飽いたのではない。若いおつるの肌に惹かれたのではない。はるばると長崎から、かれを慕ってきた少女の熱情と、その倖せうすい身の上が、
(おれがついていてやらねば)
と、男心をふるいたたせたのである。
ひとり立ちできぬ少女の哀れさが、城之介を揺り動かした。
男と女の交情は、ただに性衝動だけで深くなるものではない。男性の性格気質の差が、一人の女を幸福にも不幸にもする。単純な侠気も、愛情を支える強い力となる。
薄幸ということでは、夕月も劣らない。
が、夕月には、強さがある。
泥にまみれても、自分を失わないで生きてきた強さ——それは、柳が風に弄ばれても折れないような、しなやかで強靱なものだった。
ばねのように、圧えられても、はねかえす力がある。逆境のうちに、夕月はその強さを身に備えてきたのだ。
城之介は、おつるのところへ向かった。
(許してくれ、夕月……)
おつると逢ってどこへ行くか、これからの身のふり方をきめているわけではなかった。
一方、夕月は南蛮屋へ運ばれた。信じていた十兵衛には裏切られて、夕月は落胆のあまり、ものを言う気力もなかった。
「親方もそのうちに帰ってくるよって、ゆっくり休んでいなはれ」

手代の万兵衛が猫なで声でいたわってくれた。
この男は、はじめて堺の浜へ上陸したときから、城之介と夕月に意地悪くあたって、好きになれない男だったが、心弱くなっているときは、そんな男の言葉でも効果がある。
「城之介さまは？」
「さあ、どこぞを探して歩いとるのやろ」
「逢いたい……」
「へえ、へえ、こない美女にそこまで惚れられたら、城之介はんも男冥利につきると いうもんや」
万兵衛は妬ましそうに、
「すぐ探させまっせ」
「お願いします」
「そやけど……あんまり、気ィ入れんほうが好えのと違うか」
鼠のような顔になって、
「ちくと、妙な噂を耳にしてまんね」
「どんな？」
「えへへ、言えまへん、ほんとうか嘘か、はっきりしまへんよってに、ま、時が経てばわかるこっちゃで」
万兵衛は十兵衛の手代であるが従弟にあたるという。血縁にしては、人間が違いすぎるようである。
十兵衛ほどの剛腹なところもないし、商売人としての才覚も利かない。

以前、売上代金の使いこみをしたときに風習にしたがって、沖に沈められるところを、十兵衛の寛大さで助けられている。
それだけで懲りないのが小人の浅ましさで、同業の納屋衆油屋の女房に手を出して、手首斬りの上サラシの刑に処されようとした。
このときも十兵衛が詫びを入れて、両手の小指を切って謝罪の証とすることでおさまっている。油屋としては、同業の十兵衛の顔を立てたわけだ。
したがって、十兵衛の後見がなければ、万兵衛はとっくに死んでいるか、堺を追放されているはずであった。
それだけ恩になっていながら、万兵衛にはそのことを感謝する気持がない。もっとも、こうした男は、すべてに感謝の念というものはないのだ。
夕月を見ても、十兵衛の想いなど考えない。十兵衛が惚れている女だけに、綺麗なもんや、と即物的にしか見ない。
それはもやもやと欲望の炎を噴き上らせ、
（抱き心地のよさそうな肌や）
と、舌舐めずりした。
「城之介はんのことで妙な噂を聞いたのやで」
と、意味深げな口吻りで夕月の気を引いたときは、もう、狡猾な表情があらわれていた。
疲労しきった夕月には、それを見ぬく力はない。
城之介の〝妙な噂〟というほうにひっかかっていた。
「どんな、どんなことでしょうか、城之介さまにかぎって……」

「そ、それがアテにならんのやで、あん人にかぎって安心や思うていたら、こない世の中、河童の手ェやないが尻子玉まで、引き抜かれてしまいまんがな」
「……」
「城之介はんだけは違うやろ、こない思うていやはる」
「はい」
「へえ、そら好えけどなァ」
首をふりながら、万兵衛は部屋を出ていった。
と、思うとすぐに戻ってきて、
「あきまへんねん」
声を落として言うのだ。
「城之介はんなァ、故郷から慕うて来た女ゴとしっぽり……かんにんしてや、つい本当のことを言うてしもうて」
「故郷から来た女ゴ……女の人って！　そんな」
「おつる、ちゅう名や」
「——おつるさん……」
聞いたことはなかった。おつる、おつる……夕月は口のなかで繰りかえした。鶴のようにほそい肢体の、けがれない無垢の娘の姿を思った。
「そのひと、城之介さんと同じ故郷って……幼馴染なのかしら」
男女の仲に幼馴染も、路上の触れ合いもない。
人間は所詮、いずくよりか来ていずくへか行く、漂泊者に過ぎない。

男と女が何かのきっかけで、心をひらいて結ばれれば、それが人生の真実の姿であって、幼馴染も、結ばれねばならぬ道理はないし、むしろ、生涯憎み合うことだってある。
だが、恋する女にとって、男の昔の女という存在は、見逃せない問題だ。
「故郷といえば、城之介さまは九州の五島で……」
「故郷が同じやない。おつるは肥前も長崎ちゅう話や」
「長崎のひと……」
「なんでも城之介が筏に縛りつけられてな、死にかけたところを、おつるが助けたんやそうな」
「……」
「そのせいで育ての親の爺はんは斬られるし、家は焼かれるしで、長崎にも住めへんようになって、はるばるこの泉州まで探してきたというわけや」
その女がどんな苦労をしようとも、じぶんには関係ない。
（あたしは城之介さまを愛している！　そして城之介さまも、あたしを……）
そう叫ぼうとする口を圧えるように万兵衛は奇妙な笑いかたをして、
「城之介はおつるを抱きよってん」
と、言った。
夕月の顔から血の気が引いていった。
信じられない。すべてが信じられなくなる。南蛮屋十兵衛の好意と思っていたのが、実は、男の醜い欲望から非道なことをする男と知った失望——それだけでも、かなりな衝撃だったのに、この世でただ一人信じたい城之介までが別の女に心を寄せていたろうとは。
おつるの気持も、女同士の優しい心で理解は出来ても、城之介を奪われたという現実が、彼女

を苦しませた。
（ひどいひと……）
いくら、昔の知り合いだって、いくら頼りない少女だって、その薄幸さからいえば、夕月とてもさして変わらない。
「ああ、もういっそ死んでしまいたい……」
夕月は面を蔽って、その場に泣き崩れた。
「泣きなはれ、泣くがええ、悪い男のことは、涙とともに流してしまうがええわな」
万兵衛は、夕月の背中をさも同情深げになでていたが、また立っていったと思うと、程なく戻ってきて、
「さ、行きまひょ」
と、優しく顔をのぞきこんだ。
「ええ……どこへ？」
「好えところや、死ぬことはない、好えところで、気ィはらしなはれや」
その言葉も、いまの夕月には別段の深い意味にはとれず、ただの慰めにしか聞こえない。こうしていれば、十兵衛も戻ってくる。十兵衛とは顔を合わしたくない気持だった。
「さ、行きまひょ、ウダウダしとっても、ええことおまへんで」
来たような道だ、と思ったのは暫く経ってからである。
夕月は南蛮屋の裏口から、万兵衛に誘われるように、導かれて歩きだしたとき、半ば夢遊病者のような足どりだった。
何も考えまいとした。考えれば苦しくなる。男女の愛の相も、所詮は夢ではないか。期待が大

きすぎるほど、現実に裏切られて、苦しむしかない。
信じた男に裏切られた女には、この世のすべてのことが、信じられなくなるのだ。
何かを信じようとすること、そのこと自体が虚しく、生きていることの空虚さに、身も世もなくなる。
万兵衛はその隙につけこんだといってよい。
「こっちや……」
導かれて行った先には、見おぼえがあった。
「ここは？」
思いだして、夕月は夢からさめたように、
「お孝さんの家では」
「なんや、知っとるんかいな」
と、万兵衛はちょっと鼻白んだが、
「ま、知っとるんなら、かえって都合ええわな」
お孝は南蛮屋で働いている。万兵衛には頭が上らない。えらい難儀なことでけたんや、夕月を匿わねばならんよってに、と言われると、素直に従うしかなかった。
「どうぞ、使うとくなはれ、こないむさ苦しいとこやけど」
「ほいでな」と、万兵衛は図に乗った。
「このことは秘密にせなあかん」
「……」

「おまえ、店へ行ってな、誰ぞ噂をしているかどうか、耳すまして聞いて来てや」
「へえ、そら、行ってきますけど」
お孝には、それほど万兵衛が気をつかっている意味がよくのみこめない。
「万が一、左京大夫義継の耳に入ったら、夕月のいのちが危ないのやさかい」
と、念をおされると、お孝も、それが重大なことかと気がついてきて、
「誰にも内緒でんな」
「そや、内緒やで」
にたりと万兵衛はほくそ笑んだ。
お孝が出てゆくと、
（これで、こっちのもんや）
と、夕月を見た。
お孝が敷いてくれた夜具に夕月は身を横たえている。まさか万兵衛に淫らな欲望があってのことだとまでは考えない。
万兵衛の身分を考えると、南蛮屋の手代という背景を捨ててまで理不尽な行為に及ぼうとはおもえなかった。
前にも記したように、万兵衛は、金銭的にも色欲でも、その気が起こったら、自制できない性質だ。欲望に負けてしまう。不幸は、夕月がそんな噂に興味を持たなかったことだ。
「夕月はんえ」
万兵衛は夜具に手をかけてのぞきこんだ。
「城之介に裏切られて淋しいやろなァ……」

男に裏切られた哀しさ淋しさを慰めてくれる言葉には、奇妙なこころよさがある。
夕月はうつつに、その猫なで声を聞いていた。
「——なァ夕月はん、万兵衛はこない男やが、親切者や、おまえの哀しいふりを見すごしならんのや……」
「ええ……」
「な、な、男にフられたときは、男に抱かれるのが一番の薬やで」
息が頬にかかった。万兵衛の手が夜具を引剝いで、肩を抱こうとした。夕月はそのとき、はじめて男の意図に気づいている。
はねのけて、身を起こした。
「何をするの」
「夕月、な、なんやて、わかっとるやないか、そない声出さんかてよろし」
唇の端から涎が垂れそうな、卑しく弛んだ表情が、たまらなく不潔な感じだった。
しがみついてくる手をふり払い、
「声をあげますよ」
「へえ、かめへん、どうせ男と女の痴話喧嘩や、一つ家に男と女がいりゃ、こないこと当たり前や、世間でも驚ろかへん」
意外に敏捷な動作で抱きついてきた。夕月は一たん突き飛ばしたが、裾がみだれて、よろめくところを、脚をつかまれ、ひきずり倒された。
「いけない、放して！」
「放さへん、雷さんが鳴ったかて放さへん」

「あ、あ、誰か……」

悲痛な叫びに応えるように、ぴりっとどこか裂けた。

絹の裂ける音には、悲鳴にも似た哀しさと、被虐的な快感がある。それは夕月にあきらめを強いるものだった。

両腕をおさえられ、のしかかられて、夕月が、絶望に気を失いかけたとき、ふいに、その重圧がぬけた。

「また性懲りもない」

えりがみをつかんで、引き起こした男がいる。万兵衛は蛙のように手足をばたつかせて、叩きつけられた。

「夕月、わしじゃ」

と、南蛮屋十兵衛の声がした。

「先刻は済まなんだことをした。このような奴を見ると、わしのしたことも、浅ましい。堪忍してくれ、漸く眼がさめたわ」

万兵衛が刀を抜くのが見えた。せっかくの想いを邪魔されて前後の見境いもつかなくなったのであろう。

すっぱ抜きざまに、背後から突きかかった。

「危ない」

夕月の声に、十兵衛は咄嗟に身をひねった。その脇腹を刀が掠めた。

「たわけが」

流れる腕をかかえこんで、もぎとるや、片手斬りに浴びせている。

万兵衛の左の肩先きから胸へかけてすさまじく血が噴きあがるのが見えた。夕月は面を蔽って、その場へ突っ伏してしまった。

夕映え

お孝が店へ戻ってきたことで、不審を感じた八丁徳が、理由を問い詰めたのである。
お孝には、万兵衛の野望は見ぬけなかったのだろう。
夕月の信頼を失った南蛮屋の主人十兵衛にとっては、この手代万兵衛の愚かな行為は、少なくともおのれの罪を糊塗するに恰好の偶発事件といえた。
「――夕月……」
と、近寄る十兵衛に、
「さわらないで！」
身をふるわせて、夕月は逃れた。
「案ずるな、何もせぬ。最前のことは詫びる」
「……」
「その詫びのしるしが、この仕儀じゃ。おれも万兵衛に劣らぬ犬畜生になるところじゃったわ」
「……」
「万兵衛を斬ったのは、おれの醜い心を斬ったも同然、な、安心するがよい。そなたが嫌だとい

うものを無理にとはいわぬ」
ややかすれた声で十兵衛は自嘲した。
「女にも自惚れ鏡があるように、男にもある。いや、男のほうが、ずんと激しいかもしれぬ。この十兵衛にも、それがあったればこそ、そなたに望みを捨てなんだのじゃ」
「……」
「平戸からはるばるとな……おれの心をそなたも解ってくれることがあろう、そう思うて、そう念じてきたものよ。惚れたがゆえの苦しみか。十兵衛、このような苦しみははじめてじゃ、これが恋の苦しみとすれば、いままでの女どもへの想いなど、遊びにすぎぬ」
しみじみとした声音である。鬼をもひしぐ逞しい海の男の、心からの述懐は、女心にも、強く重くひびいてきて、夕月はどう返事していいかわからなかった。
「だが、それも、所詮は夢……夢を見たとあきらめようわさ」
かわいた笑い声であった。十兵衛は血刀を死体の袖で拭い、
「悪い夢か良い夢か、いまのおれには、どっちとも言えぬがな。城之介に負けたのは事実だ」
「十兵衛さま」
涙に濡れた眸子をあげて、夕月はすがりつきたい思いで言った。
「城之介さんを憎まないで下さいまし、あたしが悪いのです。あたしが恩義を忘れて、城之介さんに惹かれたのですから」
「憎む？……そうだな、憎みも、怨みもした。それが偽わりのないところよ」
「どうぞして、それだけは」
「はははは、人の世のめぐりあいはおかしなものよ。それがいままでは、憎みもせぬ。怨みにも思

わぬ」

「……」

「哀れと思うているのさ」

十兵衛の痩我慢と聞こえた言葉だったのである。

「松永弾正さまは、そなたへ未練がある。左京大夫に肝煎なされはしてもな。その弾正さまの実の子を、夕月、そなたは二世までもと契っておる」

「え？　城之介さんが……そんなことが……そんなことがあるなんて」

「信じられまい。が、実の子らしいぞ、城之介は」

一語一語、女心のひだにめりこむように、強く十兵衛は言った。

「喜んでやっていいことかもしれぬ。城之介にとっては」

「し、信じられない……」

「信じたくはあるまい。が、そなたも見たはずだ、母御の十字架を」

「あ、あの金のクルス」

「そうじゃ、マダレイナお秋、と彫ってあったな。母の形見と申していたろう、あれが動かぬ証拠じゃ。平戸のお秋は、弾正どのの子を孕んで別れた……生まれ落ちたのが城之介よ」

マダレイナお秋！　たしかに、父子に違いない。

何ということだろう。こんな運命の皮肉があっていいものか。

義継のもとから逃げだしたことが、城之介の父弾正を苦境に落とすことになっている。

弾正が城之介を許せば、ますます、夕月の脱出には、弾正も一枚嚙んでいるとしか思われまい。

噂では、この戦さもアツカイによって和議になったそうだが、この父子関係を知れば、あらた

めて左京大夫義継は怒りを再燃させるのではないか。

(あたしが悪いの、城之介さんがそんな身だとは思わなかったばかりに……)

弾正との関係だけでも、夕月は城之介を夫と呼べぬものを感じてきていた。

弾正には野望がある。このままくじける男ではない。城之介が実の子と知れば、再起の力になるのではないか。そのために、自分の存在は何になる。ただの邪魔者でしかない。

再起には、当分、左京大夫義継の怒りを買うような真似は出来ない。夕月は、胸が詰まるような思いで、自分に問いかけていた。

(夕月は、消えればいいの)

そうだ、消えるしかない。

おつるという少女が、城之介の前にあらわれたということは、自らなる運命のみちびきではないか。

(消えればいい……黙って、身を退くのよ、夕月)

そうと決心すれば、あとはぬけ殻のような身の始末は早かった。

せめてもの、城之介への愛の行為ではなかろうか。

(いっそ、左京大夫のもとへ……そして、弾正さまが城脱けさせたのではないことを、白状しなければ)

それが最善の方法に思われた。

(たとえ、左京大夫のお手討ちにあうとしても……)

あの若く、烈しい気性を思うとそれは思いすごしとばかりは言えなかった。銀造りの佩刀の一閃に、自分の首が転がりおちるさまを想像すると、恐怖とともに、

（いっそ、そのほうがさっぱりするような……）
城之介と別れては、夕月にはもはや生甲斐は何もなかった。身をおとせば、口を糊することくらいはできよう。だが、もとの売笑の身に戻るくらいなら、生きていてもしかたはない。
思い詰めた女の表情は美しい。
人生のすべてを賭けたような、凄まじささえ感じられた。
「十兵衛さま……」
と、夕月は挑むように眼をあげていった。
「夕月のわがままをお許し下さいまし。お心のほどは嬉しく思います。でも、もう駄目なのです。女である身の業がつくづく身にしみました」
「……」
「いっそ死んでしまいたい。死んだほうが、どれだけ楽か」
「たわけたことを。生きてあればなんぼうにも面白い目が見られようものを」
「いいえ、もう生きる望みもありませぬ。ただ心残りは城之介さまのこと」
「……」
「左京大夫はじめ三好の御家中より、どのような目にあうもしれず。わたくしより、他意のないことを申し述べたいのでございます」
「左京大夫に？」
「はい」
「そりゃ危ない。首が飛ぶわい」
「かまいませぬ」

一途に思い詰めた夕月の決心はどんなことが起ころうとも、ひるがえる様子はなかった。
「左京大夫の御座所へ、連れていって下さいまし」
「よいのか、首が離れても。まず十中の八九は……」
「覚悟しております」
むしろさわやかなものが、胸を満たしていた。
城之介のために死ぬことの法悦が、夕月を酔わしているようであった。
（どこまでも悪い役回りや）
南蛮屋十兵衛は肚裡で苦笑した。
夕月の決心は固い。十兵衛は道化た役割りだと思いながらも、左京大夫の御前へ連れてゆくことにした。
街には、篝火の明りが大路や辻を照らして、行き交う人々の姿を浮き上らせている。
武者姿が多かったが、町の者たちも、漸く安心して往来しはじめていた。そのなかを、十兵衛は八丁徳ほか二名の若い衆を供にして夕月を送っていった。
左京大夫義継の陣所は政所に設けられていた。
かつて松永弾正が胡坐して政務をとったところである。いま弾正は敗れて身をひそめ、政所は三好衆の堺本陣となり、左京大夫が堺で集めた女たちを侍らして酒盃を、あげている。
「なに、南蛮屋が」
義継は盃を手にしたまま、血走った眼をむけた。
「南蛮屋が夕月を連れてまいったと！」
信じられぬもののように、暫く語尾をつがず、口を半ばあけたままだった。

「彼奴が何として……まことに夕月か」
「如何いたしましょうや」
「通せ、これに」
こう言ってから、急に、爆発するような笑い声を上げた。
「否とよ、南蛮屋だけこれへ。夕月は寝所へ入れておけ」
「どこで見つけた？」
義継の眼は狂的な光を帯びている。
「弾正の城から連れてきたか？」
まるで南蛮屋十兵衛が拐（かどわか）したかのように睨みつけて、
なかば冗談めかしてはいるが、真剣な語気だった。
「きさまが手をつけてはいまいな」
「てまえの手がらではありませぬなあ、残念ながら」
と、十兵衛はきっぱりと言った。
「本人が詫びたいと言うて、それゆえ……」
「伴のうてきたか」
義継は小姓に眼をなげ、顎をしゃくった。
「褒美じゃ、とらす」
捧げてきた高蒔絵の足つき文庫から、無造作に銀銭をつかみだして、投げた。
二十五匁のゆずり葉銀で数枚である。
「これはしたり」

と、十兵衛は銀銭をかき集めると、静かに押しかえすようにして、
「これは頂くわけにはまいりませぬ」
「なに！　少ないとか」
「いや、褒美を頂く筋ではありませぬゆえに」
不敵な面がまえである。この堺の納屋衆の誇りとでもいいたげな、逞しさであった。
「南蛮屋十兵衛は人買い商人ではござりませぬゆえ、これは頂きかねまする」
「こやつが……」
「女を連れてまいって、御褒美にあずかれば、売ったも同然」
理屈だ。小癪なことを、と義継は若いだけに、かっとなったが、傍の三好日向守が、もっともだという顔でうなずいたので、怒りを圧えた。
「――なるほどな、そちは、大分限じゃったな、うなるほどに金銀を持っているそうだな」
「左様なことはございませぬ」
「この堺が安泰で、汝らが栄えるのも、三好家あってのことではないか」
「……」
「日向、こりゃア軍用の費用（ついえ）をずいぶんと調達してもらわねば、の」
十兵衛はこわばった笑顔で、これをさらりと受け流そうとした。
「いずれ、納屋衆、会合（えごう）いたしまして」
「そりゃならぬ」
日向守もはっとするくらい、大声で叫んでいった。
「おれは、南蛮屋、そちに命じたのだぞ。そうだ、はっきりと申しつけよう、二万貫」

「二万貫」
「そうだ、矢銭二万貫、南蛮屋に申しつける。両三日のうちに調達せい」
目尻がぴりぴりとふるえていた。この苛酷な献金を命じる方が、青くなっていたのである。二万貫といえば、堺中の納屋衆が出し合うにしても、楽ではない金額であった。堺ぜんたいへの献金命令だったとしても、相当な反撥を食うにちがいない。
それを南蛮屋ひとりへ命じたのである。
酒の上の戯れではなかった。
左京大夫義継の眼は、真っ赤に充血しているくせに、頬は紙のように蒼くなり、ぴりぴりと目尻がけいれんしていた。
「に、二万貫じゃ」
と、重ねて言った。
はじめは、その金額も、腹づもりしての要求ではなかった。
口にしてしまってから、はっとしたのである。怒りと、そして舐められたくないという名門の子の虚勢に、憎しみが加わって、破天荒の数字を言ってしまったのだ。
たとえ制裁の意味が加わったとしても、個別の上納金ならば、五百貫がせいぜいであろう。
二万貫！　と口にしてしまってから、はっとした。いくら南蛮屋が堺の納屋衆のうちでも五本の指に数えられる富豪だとしても、二万貫集めるには、竈の灰まで売らねばならぬ。
（言いすぎた）
と、思い、
（冗談じゃ、が、二百貫はたがうまいぞ）

そう言い直そうとしながら、言葉は胸につかえ、口に出来なかった。
左京大夫義継はあまりにも若かった。前言をひるがえすことには、敗北感を感じる。会話に綾（あや）を持たせることができなかった。
言いすぎたと思うと、胸がかっと熱くなって、さらにそれを重ねてしまう。
こういう血気の若さを大将に頂いたことは三好家にとって、幸福とはいえない。
（——これまでだ）
十兵衛はうつむいたまま唇を噛んでいた。
（南蛮屋もこれまでだ……が、三好家も永くはない）
はっきりとそう感じたのである。
「——三日、三日のうちでございますな」
顔をあげて、十兵衛は苦渋の笑いに唇を歪めた。
「かしこまりました、二万貫、耳をそろえて献納仕りまする」
「——で、できるか」
「これでも南蛮屋は堺の商人、この商いぶりをお目にかけまするで」
「彼奴が、彼奴が……」
腹芸でも太刀打ちはできないことを、左京大夫は、骨の髄まで感じた。
昂然と言うと、折目正しく拝揖して座を立った。
十兵衛が泣訴哀願して、願い下げにしてもらおうとしたら、義継は大様に笑って、冗談だ、で済ませたろう。
（彼奴め、意地を張るからだ）

不快だった。自分が言いだしながら、いやそれだけに、二重に不快だった。
酒も苦かった。
「そうだ、奴は、夕月を連れてきたのだな」
あの肌を思いだした。裸身の美しさと、どんな要求にも従う女の夜の妖しい魅惑。義継は立ち上った。脇息が倒れた。
「寝むぞ」
日向守へとも下野守へともなく言い捨てて、奥へ入っていった。
夕月と十兵衛がこの政所へやってきたとき、妙な影がまぎれこんだのを、かれらは知らなかった。
八丁徳と供が二人——だから五人になるはずだったが、門番の眼には六人に見えた。
見えただけである。咎めることはない。南蛮屋を取り次ぐと、あとのお供は問題ではない。供待ちで控えているからだ。
が、暫くして、供待ちのところを通りかかると、三人に減っていた。
「はてね、おめいら、お供は四人いたのやないか」
「ああ」と、八丁徳は答えた。
「女が一人で四人だ」
「いんにゃ、女入れりゃ南蛮屋どのほか四人やで」
「阿呆くさ、わいと安と吉とで三人やないか」
「そないなことあらへん、この眼で見たのや、男衆四人……」
「何いうてけつかる、幽霊見たんやないか」

幽霊——というより、影であろう。まさしく、それは伊賀の忍び名張ノ銅七の影だった。
銅七は夕月の姿を篝火の明りに見て、政所へ向かうと気づくや、
（こりゃァいかん。女はこれだからいかん、すべてを左京大夫に饒舌られたら……）
伊賀者としての生業もおしまいだ。尾行してきた。そして、一行の供のような顔をして政所へ入ってきたのである。
そして、馬屋の闇へ消えた。
夕月は、銅七に狙われているとは知らず、案内されるままに、寝所へ入って、義継のあらわれるのを待つ羽目になっていた。
（たとえ望まれても……）
もう、義継に身をまかす気持はない。死ぬのは覚悟の上だった。
ただ、城之介に悪意があってではないことを、すべてを打ち明けて、お手討ちになろう。
ひたすらにそのことだけを思っていたのである。
音もなく唐紙が開いたとき、夕月は、義継だと思い、両手をついた。
が、様子が違った。
誰かが、目の前に立った。はっとしてふり仰ぐ。頭巾を被ってはいたが、からだつきで銅七とわかった。
「夕月、死んでもらおう」
忍者特有の感情のない声が、引導を渡すように、聞こえ、次の瞬間には、冷たい刃物が、的確に夕月の心臓を貫いていた。
きわめて、事務的な態度だった。

突いたのもそうなら、その懐剣を、突っ伏した夕月の手に握らせるのも冷静な動作だった。
丁度、十兵衛が政所を退出したころである。
銅七は、これで一安心だと思った。夕月の口をふさいでしまえば弾正をおとし入れ、義継に寝返りを打たせる〝反間〟の策が闇に葬られる。
寝所から簀ノ子へ出て、庭へ降りた。そのとき、誰かが呼んだような気がした。
ふりかえった眼に夕月が立ち上ってくるのが見えた。
いまだかつて、これほどの恐怖は知らない。
隠密をむねとする忍びノ者は、刺すにも斬るにも、常に声を立てさせず、一刀で息のねをとめるワザにたけている。
夕月の心臓を刺した刃に狂いがあろうはずはなかった。
そして、四肢に断末魔のけいれんを見せて、息をひきとってゆくさまを、冷静に観察した銅七だったのである。
「げえ！　な、なんちゅうことだ」
あろうことか。
死んだはずの夕月が立ち上ってふらふらと歩いてくるではないか。
「莫迦な、そんな莫迦な……」
あり得ないことが、しかし目前で起こっているのだ。
銅七は恐怖と驚愕で逆上し、眼が霞んだ。
そのまま走れば、伊賀の地を踏むことはあるいは出来たかもしれない。
が逆上が、忍びノ者の理知を喪わせた。何やら叫ぶと、銅七は夕月に飛びかかった。

夕月はさも自害したかの如くに、胸を刺した懐剣に手を添えられている。
その刀に飛びついたのである。引き抜いた。突いた。また突いた。
夢中であった。殺したはずの人間が生き返ったと見れば、誰でも気味が悪くなる。これまでにも多くの殺傷を重ねてきた銅七である。
おのれの腕には自信がある。その自信をもろに崩されたのだ。
「妖怪！」
そう思った。
なまじ美しい夕月だけに、胸から血をしたたらせながら、よろよろと近よってくる姿に、恐怖、逆上したのも無理はない。
「くそ！　くそ！　くそ！」
何度も、何十度も、突き刺した。
その眼は、対象をはっきりととらえていない。夕月が蘇った、と見たときから、銅七の眼は曇っていた。
手ごたえも何もない。ただ恐怖を払うための刺突だった。
その行為は、冷静な眼で見れば狂気したように見えた。銅七が刺しているのは、夕月ではなく、人でもない、ただの唐紙だったことだ。
そのとき、夕月を久々に抱く期待で対面ノ間から寝所へやってきた義継は、はっと叫んだ。
「太刀！……」
ぼんやりと人の像が銅七の眼にうつっただけである。
凄い叫びをあげて、義継へ突きかかってきた。

うしろに従っていた小姓が、捧げた黄金作りの佩刀を、つと差出す。

義継はこの男には珍しく、鮮やかな胴斬りをきめている。

突くと見て、刀を抜きとると、身を翻して、座敷に片足入れざまに、横に払った。

きれいにきまった。銅七は伸びきったからだをずばっと胴斬りにされ、二つになって転がった。

夢中だった義継は、ほっとして肩で息をついた。

破れ衣をまとった異様な老人の姿を見たのはそのときである。

妖異の老人である。それは人間ではなく、影に見えた。

奥殿の庭に、ぼうっと影は浮かび上ったのだ。

銅七を斬ったあとだったが、左京大夫義継はぎょっとした。小姓に渡そうとした血刀を、とりなおして、

「奇ッ怪な……」

呻いた。

老人は、陰漠の影をゆらめかしてにやりと笑ったようである。

〈みごとじゃったな、左京大夫〉

洞穴を吹き抜けるような、無気味な声だった。

〈じゃが、高慢の性は将来を望めぬのう〉

「……」

〈三好家は、やがて滅びるな〉

老人の影はすーっと消えた。あっ、と義継は叫びかけて、あとを追おうとしたが、影は虚であった。そのあたりに、すでに老人は居ない。

狐につままれたような気持である。今しがたおのれが斬った男さえ、まぼろしではないかと思った。

義継は、銅七の死体をあらためたが、血を指ですくってみるまでは、信じられなかった。

「殿、お方さまが……」

小姓のひき吊るような叫びで、義継は夕月の死に気がついた。

夕月の死体は、胸を刺されて、懐剣の柄に手を添えている。

一見、自殺に見えるが、しかし銅七のふるまいは、そうではないことを物語っていた。

「死んだか……」

それだけである。

義継は死人に用はない。若さは現実の快楽しかもとめない。感傷を知らないのがこの武将の若さである。名門三好家の栄光と惨落の輪廻の相を具現すべき宿命を背負って生まれてきたにふさわしい。

義継は、ほかの侍妾の名を口にした。

「それから、酒だ」

昏く胸をふさいでいるのは、夕月の死ではない。妖異な老人の予言であった。

(莫迦な)

一笑に付そうとしながらも、奇妙に胸から離れない。古沼の藻に足をからまれたように、その不吉な言葉が、かれをとらえ、奈落にひきずりこもうとする。

悪い予感は畢竟、弱気からくる。老人の言葉をはねのけるだけの自信がなかった。かれは、おのれの立場がどんなものか、知らないではなかった。一族の大名たちに支えられていなければこ

の大看板を掲げることはできないのである。

松永弾正が一介の牢人から身を起こして、ともかく、三好一族と五分にわたり合うまでに伸長してきたことに比べると、いかに自分が小さいか。年齢ではない。弾正は自分と同じくらいの時でも、こうした劣等感に苦しめられることはなかったのではないか。

(おれは、なぜ、弾正を敵にまわしたのだろう?)

義継はまだ少年の域を出ていない。からだは立派な青年だが、思考力に欠けていた。三人衆の手に乗せられて弾正と訣別したのもそれなら、三好家という名門に懐疑を持たず、天下の主になれると錯覚していたのもそれである。

夕月の死と、果心居士の予言は、この少年に考えることを教えた。

夕月がなぜ来たか、そしてなぜに殺されたか、その事情はわからない。が、少なくとも、夕月は弾正のところへ運ばれたのではない、ということだった。

(弾正は夕月を奪ったのではないのか……)

誰かの策略に乗せられたのかもしれぬ。義継は漸くそこに気がついてきたようであった。

権謀術策が日常の乱世ではあったが、おのれが、こうも簡単に手にのったことは、愧ずかしくもまた、いまいましいことだった。

かれは酒をあおり、女を引き寄せた。

荒々しく女の下肢をおしひろげて没入しながら、

(おれはこれだけの男だ。三好家の名跡を継いだだけだ。滅びるのが当たり前かもしれぬ)

虚ろな笑い声をあげた。どろどろした官能の淵にのめりこむことで、忘れようとした。が、その耳に聞こえてくる三好家崩壊の響きは消しようもないことだった。

暴を以て為す者は暴に破れ、策士は策に溺れるという。

松永弾正は権謀の渦の中で生きてきた半生を隠れ家でぼんやり考えていた。

(おれは勝ったつもりでいた)

この世は、ただ勝つこと。生きてある証は、人の上に立ち、支配する権力を得ることだと、その野望の火をかきたてては、進んで来た。

挫折は、この信条に水をかけたものだった。

天下への望みは捨てたわけではないが、弾正の胸に大いなる変化が起こったのは事実である。それを促したのが、城之介とのめぐり逢いであった。いや、憎しみをむけていた若者が、実子だと知らされたことの驚愕である。

城之介が訪れてきたとき、弾正はいつになく落ち着かなかった。

ひそかに伴ってきた南蛮屋十兵衛が帰ろうとすると、茶など一服、点てようほどにと引き止めたほどである。

「いえ、せっかくながら雑用がありまんのや、それも急ぎのな」

それが南蛮屋の店をたたむことだったと気がついたのは、かれの船が堺を離れたときだった。

「ま、私のことは御心配なく水入らずで、な。つもる話もあること」

初対面ではない。が、かれには初対面のような気すらした。

「城之介、驚いたろうな」

と、弾正はくるむような眼で見た。

「わしもあまりの意外さゆえ、にわかには信じられなかった。おまえも同じだろう」

「私は……」城之介は一息ついて言った。「信じたくないのだ」

「――私のもっとも軽蔑するあなたが、実の父だなどと……そんなこと信じたくない」

城之介は弾正を睨んだ。

若いくせにおそれを知らぬ眼であり言葉だった。

権謀術策の限りを尽くしてのし上ってきた松永弾正である。その生き方は、甘い理想を持った青年にとっては、耐え難いほどの泥沼に見えたのであろう。

「そちは若い」

「それがどうだというのです」

昂然と城之介は眉をあげて、

「私は人を苦しめて、自分だけがいい思いをしたいとは思わない」

「それが甘い、というのだ城之介。この世の中は強い者が勝つ。殺すか殺されるかしかないのだ」

「いや、それは……」

「聞け。わしもそちくらいのときは、夢を持った。確かに美しい夢だったと思う。この乱れた世を平穏に治めて、人々が静かに楽しく暮らせるような世の中にしたいとな。そちの歳のころには、誰でもそう思う。もっと後まで、二十歳、いや、三十歳くらいまではそんな理想を持っていた……」

弾正は遠い眼をした。若き日を追憶する眼は、この男に似気ない和んだものだった。

「だが……現実は、それを裏切った。この世が、所詮、修羅の世であることを知ったのだ」

「見方の違いでしょう。人間を信じるか信じないか」

「そうかもしれぬ。わしも人間を信じようとしたのだ。だから人のため、世間のためになることをしようとし、そのためには、権勢を握らなければならぬと思った……。

だが、そう思って努力することが、一つ一つ裏切られた。

わしが他人のことを想うて、努めたときは他人はわしを信じようとしなかったし、裏切った。が、わしが、この世を他人のためではなく、自分のために生きようと決めたときから、他人はわしを信じるようになった」

「………」

「わしに地位を与え、わしを尊敬するようになった」

「尊敬じゃァない」

と、城之介は叫んだ。

「怖れだ、世間ではあんたを恐がっている！」

「――そうかもしれぬ。恐怖かもしれぬ。だが、こうも考えられるのだ。無知で無力な者たちは、怖れを与えるほどの力にあこがれるともな」

「………」

「宗教がそうではないか。仏の教えは、慈悲だ、が、極楽を信じこませるために、地獄を教える。釈迦ばかりではない。南蛮の吉利支丹もそうだ。ハライソ(天国)を信じよといい、信じぬ者は未来永劫浮かばれぬインヘルマ(地獄)へ落ちるという」

城之介は何か言いたげに、口を動かしかけたが、父の理論を覆すものを持たなかった。

「お秋が、そうだ。城之介、わしとお秋の仲を、そちの母との仲を裂いたのは、吉利支丹じゃ」

城之介の胸には、その洗礼名をきざんだ金の十字架が光っていた。

「――そのクルス（十字架）を見るがいい、城之介」
と、松永弾正久秀は言った。
「マダレイナお秋……そちの母だ。吉利支丹の信者となって、わしから離れた」
「母の悪口を言うな」
信仰の可否ではない。子にとって母は、美しいもの、愛しいもの、心の拠りどころだった。
城之介の記憶にある母は、画像にあるマリヤ様のような優しさと美しさがあった。
遠い記憶だ。さだかではない。美しいものに思いたい気持が作りあげた面影かもしれない。
「悪口ではない」
静かに弾正は言った。
「わしはいまでも、お秋を忘れぬ。わしにとって最初の女だった。あれからこの土地へ来、三好家に仕えて、天下への望みを抱くようになったが、以来、何人かの女を知った。妻にした女もいる……が、わしの心に残っているのは、お秋だけだ」
しみじみとした調子になっていた。
鬼畜のように恐れられ、鬼弾正、夜叉弾正とすら陰口される松永弾正久秀が、はじめて見せた人間的な表情といってよかった。
「さっき、わしは人のためではなく自分のために生きる、生きてきた、と言った」
「……」
「わしとしては、わしなりに、お秋を可愛がったつもりだ。だが、お秋には、何かが不満だったのであろう、暮らしのことや、先行きのことや……女には静かな生活というか、安心のできる生活がほしいのだ。その意味では、わしはよい夫ではなかったかもしれぬ」

弾正は伜に語るというよりも、目の前にいるのが、お秋だというような錯覚すらおこしていた。
最初、城之介を見たとき、何か他人でないものを感じたが、お秋の面影が宿っていたのだ。
「わしも、今日では、弾正忠の栄誉を得て、ともあれ三好一族を向こうにまわして、近畿阿淡紀州など十カ国ちかい国を二つにわけての戦さをするまでになったのも、わしはわしなりに生きてきたからだ」
「そんなことが、なにが偉い」
隙を待っていた猛犬のように、城之介は叫んだ。
「そんな、天下を支配する男になるのが偉いのか。そのために、母は、母は」
「城之介、そちが若いというのは、物事が半分しか見えぬからじゃ。世の中には、人には、さまざまのかたちがある。持って生まれた性格がある。百万人の人間がいれば百万の性格気質の違いがある」
「……」
「夫婦というものはの、お互いの気質が、ぴたりと合うか、どちらかが折れて合わせるか……その二つしかないのだ。それが出来ない夫婦の共暮らしは、いつか破れる。わしという男を野心家で、女に冷たい男だというなら、それでもよい。わしからそれを奪ったら、わしそのものでなくなる」
弾正の声は、むしろ悲痛だった。
「――世の中には、女に甘い男も多い」
弾正の唇には微笑がある。
激動の時代に強い意志で生き、生き抜いてきた男の理解が洩らす微笑である。

「そういう性格の男には、それなりの人生があろう。また、女もそういう男が好きなようだ、それはそれでよい。が、わしは違う。
　この乱れた世の中は、わしのような男を必要としている。天下を動かすには、わしのような力がなければ出来ぬのだ。一人の女に恋々としている者に何が出来る」
「……」
「わかるか城之介。人間には、それぞれ生まれてきた役割りというものがある。善も悪もない。おのれのやれることをやればよいのだ。評価は他人がする。おのれはおのれに忠実に生きることだ」
「――そうだ、あんたは、そのために、この戦さに負けた」
「たしかにな」
　弾正はまた微笑した。
「だが、ここを落ちて、城へ戻りさえすれば」
　自信が、その痩頬を力強くいろどっている。
「戻れない」
　城之介は言った。
「私が訴人すればそれまでだ。この町には三好衆が何万人も入っている。あんたの味方は、一人もいない。逃げ出すことは出来ないんだ」
「訴人されたらな」
　自信にあふれた弾正の顔に、緊張が走った。
「訴人するか」

「するとも。あんたは、私の母のかたきだ。そして、夕月も私も、ひどい目にあった。許せない人だ」
「訴人するか、いや、出来るか」
「――出来る」
「出来るなら、やってみることだ。城之介、実の父を訴人できるならばだ」
「……」
「おれは捕まれば斬られよう、首を梟けられよう。それを見て笑うだけの度胸があれば、やってみろ」
　強がりではなかった。
　弾正はそれきり口をつぐんだ。すでに父子の対話は切れ、城之介が、席を蹴って立ち去ってからも弾正は動かなかった。
(やれるか、奴に……)
　甘い顔をした少年に、どれだけの強さがあるか。
(おれを訴人するほどの勇気があれば、奴もこの乱世でひとかどの男になれよう)城之介の訴人で梟首されるならば、
(それでもよい……)
　かれは、血をわけた他の子供らに父子の愛情をこれまでも感じたことがなかった。それだけの子供がいなかったのだ。弾正のけたはずれの強さが、後継者を育てることがなかった。
(城之介ならば……やれるかもしれぬ)
　一代の野望がそれで潰れる。それでもよい。城之介という新しい生命が、誕生するのだ。そこ

におのれの血が甦る。

城へ帰りさえすれば——。

雌伏の期間はあっても、必ず再起する。

松永弾正久秀には、その自信があった。

（城之介は訴人するか、わしが梟首されるのを見たいのか？）

それだけの勇気が城之介にあれば、やがては天下を狙えるほどの人物になろう。

（それならそれでもよい……）

心からそう思ったのである。

城之介の足音が消えてから、南蛮屋十兵衛の言いつけで八丁徳が迎えにくるまで、一刻ほどの間があった。

その時間を弾正は静かに茶を点て、書見に過ごした。

心は平静だった。再起の自信を持っている弾正は、いまのこの時間に反撃の策を練ろうとしない。

敗北の要因を溯り、自らの欠陥を省ることが、明日の飛躍を齎すことを、かれは幾度かの苦い体験で知っていた。

梟首されるか、天下を握るか、その岐路に立って、なお、平静でいられることを、かれは嬉しく思った。

城之介が決断を下すのに、一刻あれば充分のはずである。

拱手してそれを待つことに、むしろ法悦に似た感慨があった。

見台にひろげた写本の字が、ふっと翳（かげ）った——。

〈何を待っておるのか、弾正〉

あの声がした。写本の字が声になったようであり、声を乗せた風が耳にからみつくような、奇怪な語りかけであった。

〈見損のうたわ、父子の情にひかれるとは、弾正らしゅうもない〉

「——果心か」

〈おぬしの天下を狙う野望には修羅の相があった。それを面白いと思うたのだがのう〉

「人間でなくなれというのか、居士よ」

〈天下を望むならば、だ。弱気をおこした弾正には、人を支配する資格がない〉

果心の声は、ふふふッと自嘲めいた笑いになって、

〈つまらぬ男に、望みをかけたものじゃ。わしは、おぬしが修羅となって天下を動かすのが面白いと思うたのにのう。どうせは地獄へおちる身じゃ、中途半端ではおぬしも眼をつむれまいにの〉

「そうではないぞ、居士。おれは望みは捨てぬ」

姿なき声に向かって、弾正は昂然と、言った。

「むしろ、いよいよ望みを持ったわ。城之介のことは、賭けじゃ。賭けに負くればそれまでのこと。天下を狙うのが賭けなれば、この賭けに勝てば、それだけ、わしは強くなる」

〈…………〉

「この道理がわからぬか、居士」

幻妖の外法（げほう）には、計算外のことはない。人間の交わりが人格を認めるところに発していれば幻法妖術は宙に浮くしかなかった。

〈わしの外法と、おぬしの外道と通じたものがあると思うていたのが誤りだったようじゃ〉
果心居士の評価が歪んでいたのか松永弾正が変わったのか。
ともあれ、城之介との対話が弾正の心に変化を生ぜしめたのは疑いない。
情を知らぬ弾正に望みを託した果心が失望したのもしかたがない。失望はこの老妖ともいうべきまぼろしめいた存在を、この国から放つ結果になったようである。
〈弾正、どうやら、わしは天竺が恋しゅうなったようじゃ〉
それが果心居士が残した最後の言葉である。写本の字は前にもどっていた。
八丁徳に案内されて、ひそかに小舟に乗った弾正は、城之介がとうとう訴人しなかったことに、喜びとともに、一抹の淋しささえおぼえていた。
（情の濃いやつ……奴は所詮、天下に名を馳せるほどにはなるまいが）
それもよい。
業火に灼かれるのは、わし一人でもよい。おつるという少女のことは聞いていた。それだけ女に想われていれば、それに応えてやるのも、男の生き方かもしれぬ。
堺の沖には南蛮屋の巨船が船腹をふくらませて、浮かんでいた。
「親方が政所さまと、お別れの酒を汲みたいいうて待ってまんね」
と、八丁徳は小舟をそこへ着けた。
船首に見えた字は、はっきりと〝梵天丸〟と読めた。
「和泉丸という名を削りましてん。やっぱり南蛮屋の一番船は梵天でっさかい」
南蛮屋十兵衛はしぶとい。弾正はおのれの心を見ぬいて理解してくれるのは、堺の納屋衆の中でも十兵衛以外にはいないと思った。

（奴のしぶとさは、わしに似ている）
その吃水が深く、積荷の重さが弾正を疑惑させたのは、暁闇のうすれぬうちに、八丁徳の櫓で、紀州のほうへ向けて漕ぎだしてからである。
三好左京大夫義継が南蛮屋十兵衛から、
「先日約定仕りましたる矢銭二万貫、御渡し申すべく候……」
という手紙を受け取ったのは、翌日の夕方、残照が真っ赤に空を灼いている時刻だった。
早速武将と足軽ら数十人が向かったが、南蛮屋は藻抜けの殻で、ただ一箇の唐櫃だけが、でんと据えてあるきりだった。
二万貫の矢銭に代えたごろた石が詰められていたとの報告を聞いて、烈火のように義継が怒っているころ、梵天丸はその白帆を鮮烈な真紅に染めて、堺沖を解纜（かいらん）していた。
交易品を満載して、一路南へ下っていったのである。

付記　迂愚な義継はこの後、また弾正と手を結び三人衆に対抗し、弾正の勢力は昔日以上に大となるが、やがて興った織田信長によって、滅ぼされてしまうのである。

文春文庫　230—2

権　謀（下）　定価 400円

1979年12月25日　第1刷

著　者　早乙女貢
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3　〒102
TEL 03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

阿川弘之　犬と麻ちゃん 上・下
有吉佐和子　夕陽ヵ丘三号館 上・下
有吉佐和子　断弦
池波正太郎　鬼平犯科帳 一～六
池波正太郎　蝶の戦記 上・下
池波正太郎　おれの足音 上・下
池波正太郎　火の国の城 上・下
池波正太郎　幕末新選組
池波正太郎　忍びの風 全三冊
池波正太郎　剣客群像
石川達三　花の浮草
石川達三　愉しかりし年月
石川達三　武漢作戦
石川達三　心に残る人々
石川達三　不信と不安の季節に
＊＊＊
＊＊＊

五木寛之　青年は荒野をめざす
五木寛之　蒼ざめた馬を見よ
五木寛之　樹氷
五木寛之　デラシネの旗
五木寛之　四月の海賊たち
五木寛之　深夜の自画像
五木寛之　にっぽん退屈党
五木寛之　涙の河をふり返れ
五木寛之　幻の女
五木寛之　ユニコーンの旅
五木寛之　白夜草紙
五木寛之　わが憎しみのイカロス
五木寛之　にっぽん漂流
五木寛之　凍河 上・下
五木寛之　スペインの墓標
五木寛之　深夜草紙①②
＊＊＊

伊藤桂一　螢の河
井上ひさし　青葉繁れる
井上ひさし　四十一番の少年
井上ひさし　手鎖心中
井上ひさし　イサムよりよろしく
井上ひさし　おれたちと大砲
井上ひさし　合牢者
井上ひさし・山藤章二　新東海道五十三次
井上靖　おろしや国酔夢譚
井上靖　崑崙の玉
井上靖　その人の名は言えない
井上靖　欅の木
井上靖　緑の仲間
井上靖　こんどは俺の番だ
井上靖　揺れる耳飾り
井上靖　魔の季節
井上靖　燭台

井上靖　オリーブ地帯
井上靖　白い炎
井上靖　崖 上・下
井上靖　黯い潮・霧の道
井上靖　貧血と花と爆弾
遠藤周作　それ行け狐狸庵
遠藤周作　金と銀
遠藤周作　小説身上相談
大江健三郎　青年の汚名
大江健三郎　厳粛な綱渡り 上・下
大岡昇平　幼年
海音寺潮五郎　武将列伝 全六冊
海音寺潮五郎　悪人列伝 全四冊
海音寺潮五郎　日本名城伝
海音寺潮五郎　中国英傑伝 上・下
海音寺潮五郎　新太閤記 全四冊
海音寺潮五郎　覇者の條件

開高健　青い月曜日
開高健　私の釣魚大全
開高健・小田実　世界カタコト辞典
梶山季之　罠のある季節
梶山季之　朝は死んでいた
＊＊＊
北杜夫　怪盗ジバコ
清岡卓行　海の瞳
倉橋由美子　パルタイ
黒岩重吾　肌は死なない
黒岩重吾　影の旅行者 上・下
黒岩重吾　飾られた穴
黒岩重吾　女の小箱 上・下
黒岩重吾　夜間飛行
黒岩重吾　衣裳に棲む蟲
黒岩重吾　果てしない影
＊＊＊

源氏鶏太　まだ若い 上・下
源氏鶏太　人生感あり 上・下
郷静子　れくいえむ
河野多恵子　草いきれ
小松左京　空飛ぶ窓
小松左京　夜が明けたら
小松左京　日本沈没 上・下
小松左京　流れる女
＊＊＊
＊＊＊
五味川純平　虚構の大義
五味川純平　ノモンハン 上・下
五味川純平　人間の條件 全六冊
佐野洋　折鶴の殺意
佐野洋　牧場に消える
堺屋太一　油断！
堺屋太一　破断界

文春文庫　目録

司馬遼太郎　最後の将軍
司馬遼太郎　十一番目の志士　上・下
司馬遼太郎　世に棲む日日　全四冊
司馬遼太郎　酔って候
司馬遼太郎　竜馬がゆく　全八冊
司馬遼太郎　功名が辻　全四冊
司馬遼太郎　故郷忘じがたく候
司馬遼太郎　歴史を紀行する
司馬遼太郎　幕末
司馬遼太郎　夏草の賦　上・下
司馬遼太郎　義経　上・下
司馬遼太郎　坂の上の雲　全八冊
司馬遼太郎　日本人を考える
司馬遼太郎　殉死
司馬遼太郎　余話として
柴田翔　されどわれらが日々—
柴田翔　われら戦友たち
柴田錬三郎　猿飛佐助　柴錬立川文庫1
柴田錬三郎　真田幸村　柴錬立川文庫2
柴田錬三郎　嗚呼江戸城　全三冊
柴田錬三郎　われら九人の戦鬼　全三冊
柴田錬三郎　徳川太平記　上・下
城山三郎　鼠—鈴木商店焼打ち事件
城山三郎　一歩の距離
城山三郎　緊急重役会
城山三郎　学・経・年・不問
城山三郎　当社別状なし
城山三郎　忘れ得ぬ翼
城山三郎　甘い餌
城山三郎　怒りの標的
杉本苑子　埋み火　上・下
瀬戸内晴美　輪環
瀬戸内晴美　死せる湖
瀬戸内晴美　花芯
瀬戸内晴美　夜の会話
瀬戸内晴美　みじかい旅
瀬戸内晴美　奈落
瀬戸内晴美　女優
瀬戸内晴美　朝な朝な
瀬戸内晴美　ゆきてかえらぬ
瀬戸内晴美　抱擁
瀬戸内晴美　あなたにだけ
瀬戸内晴美　女たち
曽野綾子　夜と風の結婚
曽野綾子　午後の微笑
曽野綾子　愛
曽野綾子　虚構の家
曽野綾子　人間の罠　全三冊
曽野綾子　春の飛行
曽野綾子　奇蹟
曽野綾子　残照に立つ

文春文庫　目録

曽野綾子　遠ざかる足音
高井有一　北の河
立原正秋　美しい城
立原正秋　夏の光
立原正秋　女の部屋
立原正秋　きぬた
立原正秋　果樹園への道
田辺聖子　千すじの黒髪
田辺聖子　甘い関係
田辺聖子　女の長風呂　I・II
田辺聖子　猫も杓子も
田辺聖子　イブのおくれ毛　I・II
田辺聖子　言い寄る
田辺聖子　求婚旅行　全三冊
田辺聖子　中年の眼にも涙
田辺聖子　舞え舞え蝸牛
陳舜臣　中国任侠伝
陳舜臣　炎に絵を
陳舜臣　他人の鍵
陳舜臣　青玉獅子香炉
筒井康隆　48億の妄想
綱淵謙錠　斬（ざん）
豊田穣　長良川
豊田穣　ミッドウェー戦記
永井路子　歴史をさわがせた女たち　日本篇・外国篇・庶民篇
永井路子　歴史をさわがせた夫婦たち
永井路子　炎環
永井路子　朱なる十字架
永井路子　平家物語の女性たち
永井路子　乱紋　上・下
中上健次　岬
夏樹静子　死刑台のロープウェイ
夏樹静子　喪失
夏樹静子　アリバイの彼方に
西村寿行　白骨樹林
西村寿行　魔笛が聴こえる
新田次郎　富士山頂
新田次郎　武田信玄　全四冊
新田次郎　芙蓉の人
新田次郎　永遠のためいき
新田次郎　三つの嶺
新田次郎　岩の顔
新田次郎　槍ヶ岳開山
新田次郎　昭和新山
新田次郎　霧の子孫たち
新田次郎　富士に死す
新田次郎　冬山の掟
新田次郎　ある町の高い煙突
新田次郎　雪のチングルマ
新田次郎　怒濤の中に
新田次郎　犬橇使いの神様

野坂昭如　夏わかば
野坂昭如　死屍河原水子草
野坂昭如　マリリン・モンロー・ノー・リターン
野坂昭如　エロトピア①・②
野呂邦暢　草のつるぎ
原田康子　望郷
＊＊＊
半村良　不可触領域
半村良　炎の陰画
半村良　ながめせしまに
半村良　回転扉
半村良　男あそび
半村良　雨やどり
半村良　戦士の岬
半村良　おんな舞台
平岩弓枝　女の顔　上・下
平岩弓枝　彩の女　上・下

平岩弓枝　鏨師
平岩弓枝　肝っ玉かあさん
平岩弓枝　藍の季節
平岩弓枝　御宿かわせみ
平岩弓枝　江戸の子守唄
平岩弓枝　下町の女
藤沢周平　暗殺の年輪
松本清張　象の白い脚
松本清張　日本の黒い霧　上・下
松本清張　強き蟻
松本清張　波の塔　上・下
松本清張　球形の荒野　上・下
松本清張　彩霧
松本清張　事故　別冊黒い画集1
松本清張　陸行水行　別冊黒い画集2
松本清張　花実のない森
松本清張　火と汐

松本清張　証明
松本清張　不安な演奏
松本清張　浮游昆虫
松本清張　風の視線　上・下
松本清張　高校殺人事件
松本清張　弱気の虫
松本清張　遠い接近
松本清張　ベイルート情報
松本清張　私説・日本合戦譚
松本清張　表象詩人
松本清張　告訴せず
松本清張　風の息　全三冊
松本清張　火の路　上・下
松本清張　昭和史発掘　全十三冊
松本清張　高台の家
松本清張　黒の回廊
松本清張　虚線の下絵

文春文庫　目録

丸谷才一　年の残り
丸谷才一　女性対男性
丸谷才一　大きなお世話
三浦朱門　箱庭
三浦朱門　旅は道づれ
＊＊＊
三浦哲郎　海の道
三浦哲郎　まぼろしの橋
三浦哲郎　春の舞踏　上・下
水上勉　雁の寺(全)決定版
水上勉　女の森で　上・下
水上勉　城・佐渡の埋れ火
水上勉　おきん
水上勉　古河力作の生涯
水上勉　木綿恋い記　上・下
水上勉　焚火
＊＊＊

三好徹　チェ・ゲバラ伝
三好徹　聖少女
森敦　月山・鳥海山
森村誠一　東京空港殺人事件
森村誠一　誘鬼燈
山口瞳　人殺し　上・下
山口瞳　小説・吉野秀雄先生
山田智彦　重役候補
山田風太郎　姦の忍法帖
山田風太郎　警視庁草紙　上・下
吉村昭　深海の使者
吉村昭　関東大震災
吉村昭　逃亡
吉村昭　一家の主
吉村昭　亭主の家出
李恢成　砧をうつ女
＊＊＊

渡辺淳一　光と影
渡辺淳一　富士に射つ
渡辺淳一　失われた椅子
渡辺淳一　野わけ
渡辺淳一　雪舞
渡辺淳一　夜の出帆
＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊
D・ランバート　武富義夫訳　ダイヤに最後の挨拶を
フィッツサイモンズ　真野明裕訳　早すぎた警告
J・コルトレーン　池央耿訳　雲の死角
J・グッドマン　真野明裕訳　犯人殺し
＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊